



兵庫県埋蔵文化財調査報告 第24号

朝来郡和田山町

梅田東古墳群

—播但連絡道路（5期事業）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—

2002年3月

兵庫県教育委員会

朝来郡和田山町

う め た ひ が し こ ふ ん ぐ ん
梅田東古墳群

—播但連絡道路（5期事業）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ—

2002年3月

兵庫県教育委員会



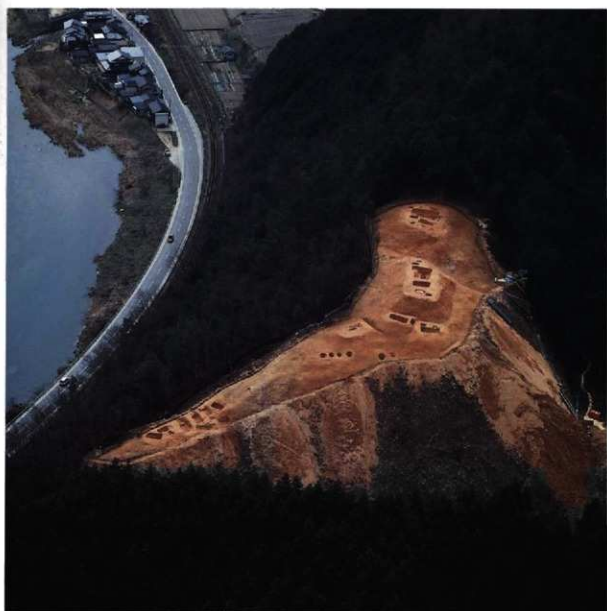
梅田東古墳群の位置



梅田東古墳群遠景 (調査前 北上空から)



梅田東古墳群近景 (調査後 北上空から)



梅田東古墳群全景（北上空から）



10号墳第1主体部 棺確認状況（北から）



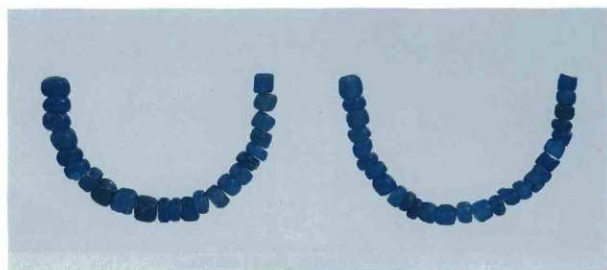
10号墳第1主体部 棺検出状況（北から）



10号墳第1主体部 全景（西から）



10号墳第1主体部 棺内（西から）



10号墳第1主体部出土ガラス玉



10号墳第2主体部 全景（西から）



10号墳第5主体部 棺検出状況（西から）



10号墳第5主体部 棺内（西から）



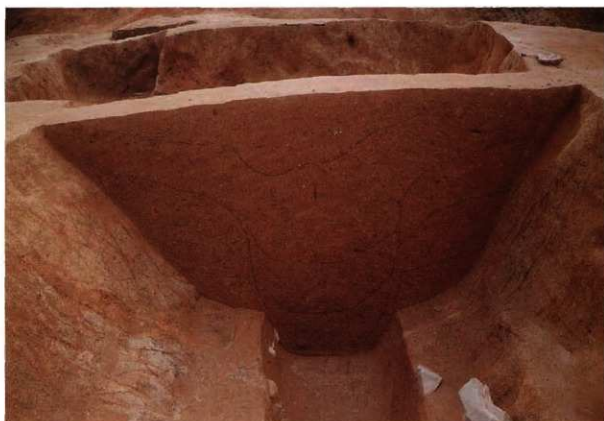
10号墳第5主体部 棺内（人骨取り上げ後）



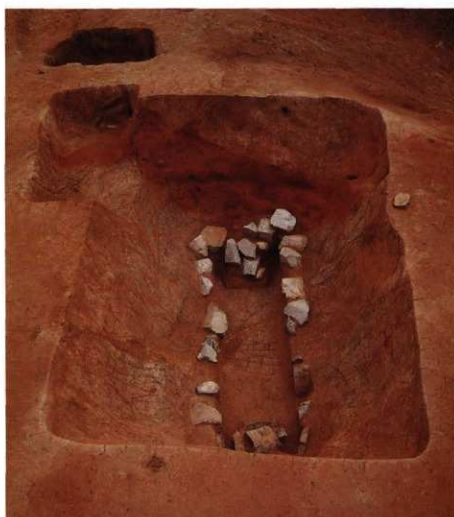
11号墳 全景 (南から)



11号墳出土土器



11号墳第1主体部 墓坑内断面（北から）



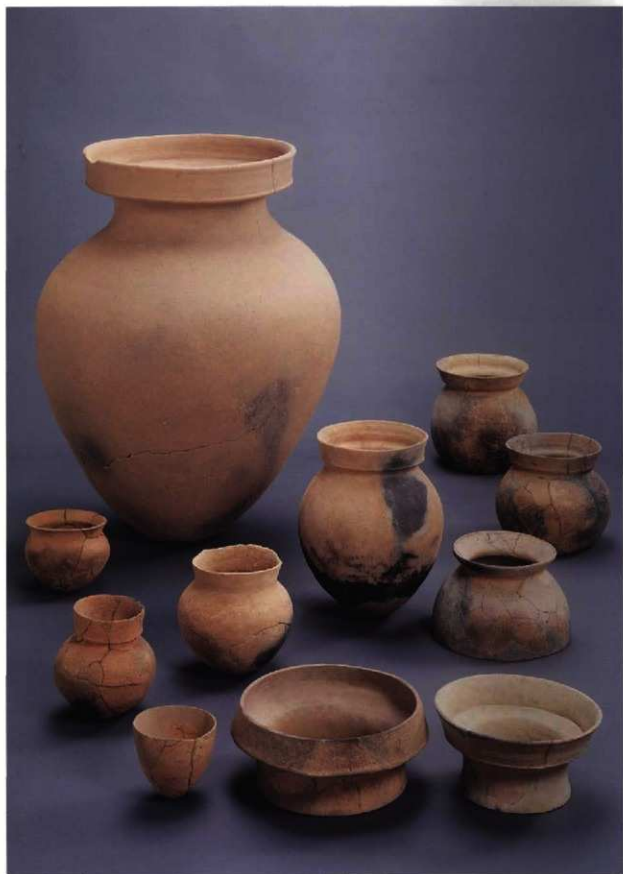
11号墳第1主体部 全景（北から）



13号墳第3主体部 検出状況（北から）



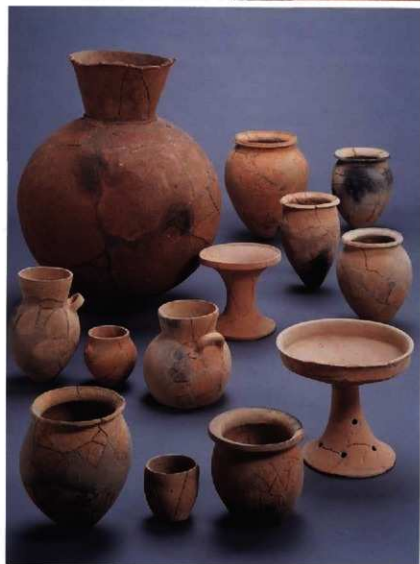
13号墳 棺用土器



墳丘墓群出土土器



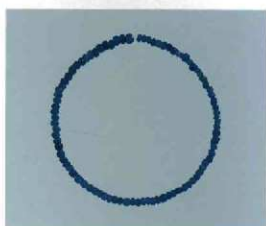
木棺墓群 全景（北東から）



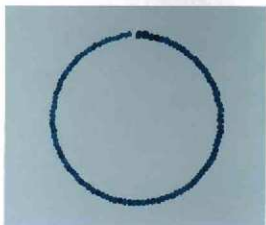
木棺墓群出土土器



木棺墓群 2号墓出土ガラス小玉



木棺墓群 5号墓出土ガラス小玉



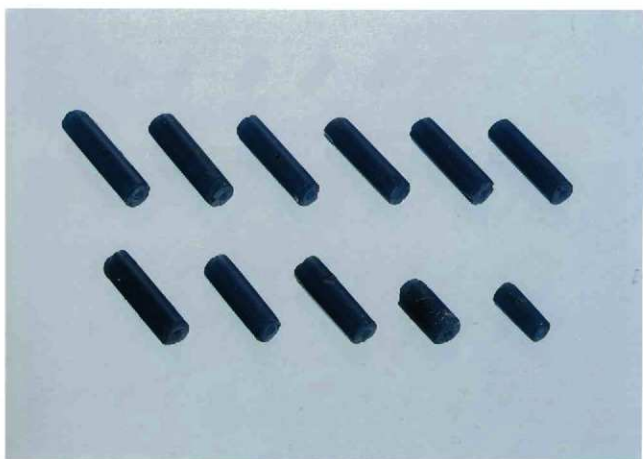
木棺墓群 12号墓出土ガラス小玉



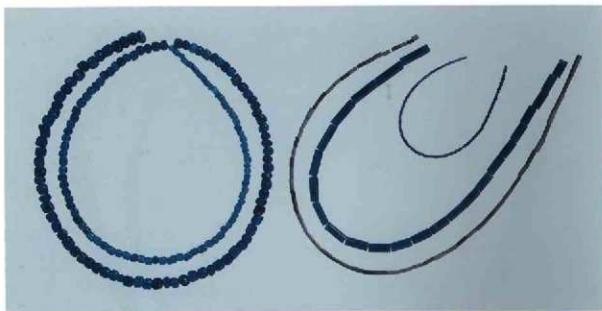
木棺墓群 6号墓出土ガラス小玉



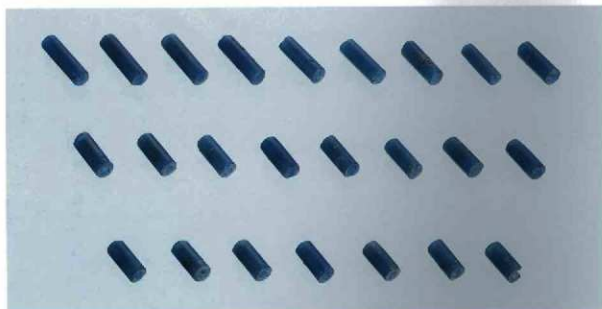
本館墓群15号墓出土ガラス玉



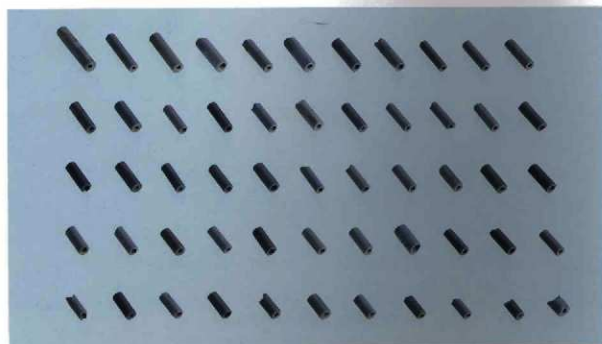
本館墓群15号墓出土ガラス管玉



木棺墓群18号墓出土玉類一括



木棺墓群18号墓出土ガラス管玉



木棺墓群18号墓出土碧玉製管玉

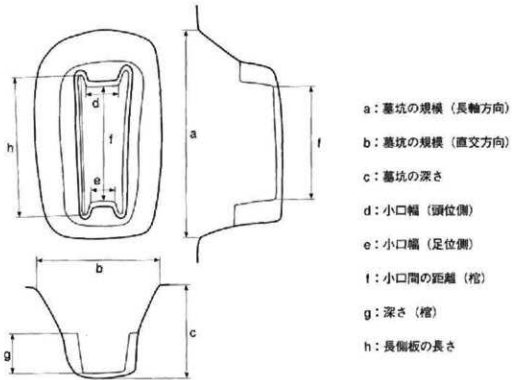
例言

1. 本書は、朝来郡和田山町久留引字梅田に所在する梅田東古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、播但連絡道路（5期）事業に先立つもので、兵庫県道路公社播但連絡道路建設事務所の委託を受け、兵庫県教育委員会が平成7年度に確認調査、平成8年度に全面調査を実施した。
確認調査は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山上雅弘・服部 寛が、全面調査は同山田清朝・國本綾子が担当した。なお、確認調査の遺跡調査番号は950272、全面調査の遺跡調査番号は960352である。
3. 調査前および調査後の空中写真の撮影・測量は、日本テクノ株式会社に委託して実施した。他の遺構の写真撮影は調査員が、実測は調査員と調査補助員が行った。
4. 整理作業は、平成11年度から兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にて実施した。
5. 遺物の接合・実測・復元・トレースについては上記事務所整理普及班で行い、遺物写真撮影については谷口フォト株式会社に委託した。
6. 埋葬施設および落とし穴内出土の脂肪酸分析については、株式会社ズコーシャ 中野寛子・清水了・門 利恵・星山賢一に、ガラス玉の分析については奈良国立文化財研究所（現独立行政法人 奈良文化財研究所）肥塚隆保に、赤色顔料の分析については同高妻洋成に、埋葬施設内出土の人骨および歯の分析については京都大学霊長類研究所教授 片山一道にそれぞれ委託し、玉槨をいただいた。また、石棺材については、元和田山町郷土資料館館長（現和田山町教育委員）工藤智己に鑑定を依頼し、玉槨をいただいた。
7. 調査は、播但連絡道路建設事務所が設置した基準点をもとに三級基準点を設置し、これを基準とした。なお、調査地は第V系に位置する。
8. 本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
9. 本書に用いた遺物番号は、本文・挿図・図版ともに統一している。
10. 本文中の第2図・第3図はカシミール3Dを使用した。
11. 本書の編集は岸野奈津子の補助を得て山田が行い、第4章を除いては、全て山田が執筆した。
12. 本報告にかかわる遺物は、兵庫県教育委員会魚住分館（明石市魚住町清水）に、写真は兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所に保管している。
13. 最後に、発掘調査および報告書の作製にあたっては、以下の方々の御援助・御指導・御教示をいただいた。記して深く感謝の意を表するものである。

小暮律子（財団法人 大阪府文化財調査研究センター） 瀬崎 誠（豊岡市教育委員会） 瀬戸谷 皓（豊岡市教育委員会） 谷本 進（八鹿町教育委員会） 田畑 基（朝来郡教育委員会） 中島雄二（朝来郡教育委員会） 肥後弘幸（京都府教育委員会） 福島孝行（財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター） 山根実生子（養父郡教育委員会）

凡 例

1. 箱形石棺の部位・組合せ等の呼称は、清家 章「畿内周辺における箱形石棺の型式と集団」『古代学 研究』152による。
2. 日字形組合せ木棺細部の呼称は、下図のとおりである。また、箱形石棺についても、これに準じるものである。



3. 玉類の細部の呼称については、附表「出土玉類一覧表」の末尾を参照されたい。

目次

第1章 梅田東古墳群		
第1節	梅田東古墳群の地理的環境	2
第2節	梅田東古墳群周辺の歴史的環境	4
第3節	梅田東古墳群	7
第2章 調査の経緯		
第1節	調査に至る経緯	8
第2節	分布調査・確認調査	11
第3節	発掘調査	12
第4節	整理作業	14
第3章 調査の成果		
第1節	調査の概要	16
第2節	10号墳	18
第3節	11号墳	51
第4節	12号墳	76
第5節	13号墳	83
第6節	14号墳	95
第7節	木棺墓群	104
第8節	落し穴群	164
第4章 自然科学分析の結果		
第1節	梅田東古墳群出土人骨について	170
第2節	梅田東古墳群18号墓出土の管玉の産地分析	175
第3節	石棺に用いられた石材の同定	195
第4節	梅田東古墳群出土赤色顔料の分析	199
第5節	梅田東古墳群出土ガラス玉の科学的調査	201
第6節	梅田東古墳群から出土した遺構に残存する脂肪の分析	205
第5章 まとめ		
第1節	土器の編年と梅田東古墳群の形成過程	223
第2節	土器の分析	233
第3節	副葬品について	245
第4節	埋葬施設について	260
第5節	墳丘墓について	269
第6節	総括	272

梅田東古墳群

10号墳

11号墳

12号墳

13号墳

14号墳

木棺墓群

落し穴群

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置 …………… 2	第35図 第4主体部 蓋石の取り上げ ……35
第2図 和田山町の位置 …………… 3	第36図 10号墳 第4主体部 ……36・37
第3図 梅田東古墳群からの眺望 …… 4	第37図 10号墳 第5主体部 ……40・41
第4図 主要周辺遺跡 …………… 5	第38図 第5主体部遺物出土位置 ……42
第5図 梅田東古墳群 …………… 7	第39図 第5主体部副葬鉄器 ……42
第6図 竣工後の梅田東古墳群(北から) …… 8	第40図 第5主体部供献土器 ……43
第7図 5期事業 …………… 9	第41図 第5主体部 人骨出土状況 ……43
第8図 5期事業と梅田東古墳群 ……10	第42図 10号墳 第6主体部 ……45
第9図 確認調査位置 ……………11	第43図 第6主体部土器供献位置 ……46
第10図 現地説明会 ……………12	第44図 第6主体部供献土器 ……46
第11図 地形測量図(調査前) ……13	出土小玉 ……47
第12図 整理作業 ……………14	第45図 10号墳 第7主体部 ……48
第13図 墳丘墓群 ……………16	第46図 10号墳 土坑 ……49
第14図 平面図 ……………17	第47図 11号墳 墳丘斜面の検出 ……51
第15図 10号墳 墳丘断面 ……………18	第48図 11号墳(調査前) ……52
第16図 10号墳 墳丘測量図 ……19	第49図 11号墳(調査後) ……53
第17図 10号墳の調査 ……………20	第50図 11号墳 第1主体部 ……54・55
第18図 第1主体部の検出 ……21	第51図 第1主体部 遺物出土位置 ……56
第19図 第1主体部 ……………22	第52図 第1主体部副葬鉄剣 ……57
第20図 舟形木棺 ……………23	第53図 第1主体部供献土器出土状況 ……57
第21図 第1主体部玉出土状況(右手首) ……24	第54図 第1主体部供献土器 ……58
第22図 右手首出土ガラス小玉 ……24	第55図 11号墳第1主体部供献土器 ……58
第23図 第1主体部玉出土状況(左手首) ……25	第56図 第1主体部墓坑内断面 ……59
第24図 左手首出土ガラス小玉 ……25	第57図 第1主体部 墓坑断面の実測 ……59
第25図 第1主体部出土ガラス小玉 ……26	第58図 11号墳 第2主体部 ……60・61
第26図 第1主体部出土ガラス小玉計測値 ……26	第59図 第2主体部鉄器副葬位置 ……62
第27図 第1主体部供献土器 ……26	第60図 第2主体部副葬鉄器 ……62
第28図 10号墳 第2主体部 ……28・29	第61図 供献土器 ……62
第29図 遺物副葬位置 ……………30	第62図 11号墳 第3主体部 ……64・65
第30図 第2主体部副葬鉄製品 ……30	第63図 第4主体部供献土器 ……66
第31図 第3主体部 棺の検出 ……31	第64図 11号墳 第4主体部 ……67
第32図 10号墳 第3主体部 ……32・33	第65図 11号墳 第5主体部 ……69
第33図 第3主体部遺物副葬位置 ……34	第66図 第6主体部 棺の検出 ……70
第34図 第3主体部副葬鉄製品 ……34	第67図 第6主体部供献土器 ……71
	第68図 11号墳 第6主体部 ……72・73

第69図	11号墳 第7主体部	74	第106図	2号墓出土ガラス小玉(1)	110
第70図	土器供献状況	75	第107図	2号墓出土ガラス小玉(2)	111
第71図	11号墳 墳頂部供献土器	75	第108図	2号墓出土ガラス小玉計測値	111
第72図	12号墳区画溝断面	76	第109図	2号墓供献土器	111
第73図	12号墳	77	第110図	3号墓全景	112
第74図	第1主体部 墓坑横断面の実測	78	第111図	3号墓	113
第75図	12号墳 第1主体部	79	第112図	出土鉄鏝	114
第76図	供献土器	80	第113図	4号墓	115
第77図	12号墳 第2主体部	82	第114図	5号墓遺物出土位置	116
第78図	13号墳区画溝断面	83	第115図	5号墓	117
第79図	13号墳の調査	83	第116図	5号墓出土ガラス小玉	118
第80図	13号墳	84	第117図	5号墓出土ガラス小玉計測値	119
第81図	区画溝出土土器	85	第118図	5号墓供献土器	119
第82図	13号墳 第1主体部	86・87	第119図	玉出土位置	120
第83図	第1主体部 土器供献位置	88	第120図	6号墓	121
第84図	第1主体部 土器供献状況	88	第121図	6号墓出土ガラス小玉出土状況	122
第85図	第1主体部供献土器	89	第122図	6号墓出土ガラス小玉	122
第86図	13号墳 第2主体部	89	第123図	6号墓出土ガラス小玉計測値	123
第87図	供献土器	90	第124図	6号墓 土器供献状況	123
第88図	第3主体部 棺の取り上げ	91	第125図	6号墓供献土器	123
第89図	13号墳 第3主体部	92	第126図	7号墓	124
第90図	13号墳 棺転用土器	93	第127図	7号墓土器供献位置	125
第91図	13号墳供献土器	94	第128図	7号墓供献土器	125
第92図	14号墳 区画溝断面	95	第129図	8号墓供献土器	126
第93図	14号墳 (調査前)	96	第130図	8号墓	127
第94図	14号墳 (調査後)	97	第131図	9号墓供献土器	128
第95図	第1主体部 土器供献位置	98	第132図	9号墓	129
第96図	14号墳 第1主体部	99	第133図	10号墓	130
第97図	出土鉄器	100	第134図	11号墓	131
第98図	第1主体部供献土器	100	第135図	北側小口	132
第99図	14号墳 第2主体部	102・103	第136図	南側小口	132
第100図	木棺墓群の調査	104	第137図	11号墓王出土位置	133
第101図	木棺墓群	105	第138図	11号墓出土ガラス小玉	133
第102図	1号墓供献土器	106	第139図	11号墓出土ガラス小玉計測値	133
第103図	1号墓	107	第140図	12号墓遺物出土位置	134
第104図	2号墓遺物出土位置	108	第141図	12号墓	135
第105図	2号墓	109	第142図	12号墓出土ガラス小玉	136

第143回	12号墓出土ガラス小玉計測値	137	第180回	18号墓	163
第144回	土器供献状況	137	第181回	落し穴の検出	164
第145回	12号墓供献土器	137	第182回	落し穴の立地	164
第146回	13号墓供献土器	138	第183回	落し穴群	165
第147回	13号墓	139	第184回	落し穴(1)	168
第148回	14号墓	141	第185回	落し穴(2)	169
第149回	14号墓遺物出土位置	142	第186回	10号墳第1主体部出土人骨	170
第150回	14号墓出土鉄製品	142	第187回	10号墳第2主体部出土人骨(1)	171
第151回	14号墓供献土器	143	第188回	10号墳第2主体部出土人骨(2)	172
第152回	14号墓土器供献状況	143	第189回	10号墳第2主体部出土人骨(3)	173
第153回	15号墓	144	第190回	10号墳第4主体部出土人骨	173
第154回	15号墓玉出土位置	145	第191回	10号墳第5主体部出土人骨	174
第155回	15号墓出土ガラス管玉	146	第192回	花仙山産碧玉原石の 蛍光X線スペクトル	176
第156回	15号墓ガラス管玉計測値	146	第193回	原産地不明碧玉製管玉および 玉材の使用圏と産地特定できた 碧玉製玉類使用遺跡	177
第157回	15号墓出土ガラス小玉	147	第194回	梅田東古墳群出土管玉J575 (75064) の蛍光X線スペクトル	181
第158回	15号墓出土ガラス小玉計測値	147	第195回	梅田東古墳群出土管玉J576 (75065) の蛍光X線スペクトル	181
第159回	15号墓供献土器	148	第196回	梅田東古墳群出土管玉J577 (75066) の蛍光X線スペクトル	182
第160回	15号墓 土器出土状況	148	第197回	梅田東古墳群出土管玉J578 (75067) の蛍光X線スペクトル	182
第161回	16号墓 棺の検出	149	第198回	梅田東古墳群出土管玉J579 (75068) の蛍光X線スペクトル	182
第162回	16号墓 棺内精査	149	第199回	梅田東古墳群出土管玉J580 (75069) の蛍光X線スペクトル	183
第163回	16号墓	150	第200回	梅田東古墳群出土管玉J581 (75070) の蛍光X線スペクトル	183
第164回	16号墓 棺転用土器	151	第201回	梅田東古墳群出土管玉J582 (75071) の蛍光X線スペクトル	183
第165回	17号墓の検出	152	第202回	梅田東古墳群出土管玉J583 (75072) の蛍光X線スペクトル	184
第166回	17号墓	153	第203回	梅田東古墳群出土管玉J584 (75073) の蛍光X線スペクトル	184
第167回	17号墓 土器供献位置	154			
第168回	17号墓供献土器	154			
第169回	18号墓 玉の取り上げ	155			
第170回	18号墓 遺物出土位置	156			
第171回	18号墓 玉出土状況	157			
第172回	18号墓出土ガラス小玉(1)	158			
第173回	18号墓出土ガラス小玉(2)	159			
第174回	18号墓出土ガラス小玉計測値	159			
第175回	18号墓出土碧玉製管玉	160			
第176回	18号墓出土ガラス管玉	161			
第177回	18号墓出土管玉計測値	161			
第178回	18号墓供献土器	162			
第179回	18号墓副葬鉄製品	162			

第204図	碧玉産地のESRスペクトル (花仙山・玉谷・猿八・土岐) …187	脂肪のステロール組成(1) ……211
第205図	碧玉原石の信号(Ⅲ)の ESRスペクトル …188	第228図 試料中に残存する 脂肪のステロール組成(2) ……212
第206図	碧玉原石の信号(Ⅲ)の ESRスペクトル …189	第229図 試料中に残存する 脂肪のステロール組成(3) ……213
第207図	碧玉原石の信号(Ⅲ)の ESRスペクトル …190	第230図 試料中に残存する 脂肪の脂肪酸組成樹状構造図 …215
第208図	碧玉原石の信号(Ⅲ)の ESRスペクトル …191	第231図 試料中に残存する 脂肪の脂肪酸組成樹状構造図 …216
第209図	梅田東古墳群出土管玉の信号(Ⅲ)の ESRスペクトル …192	第232図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成 による種特異性相関(1) …217
第210図	円山川河川敷 (和田山町久世田付近) …195	第233図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成 による種特異性相関(2) …218
第211図	№2採取露頭 ……196	第234図 土器出土位置 ……222
第212図	露頭位置図 ……196	第235図 壺形土器の分類 ……224
第213図	№1顕微鏡写真(単ニコル) ……197	第236図 甕形土器の分類 ……225
第214図	№1顕微鏡写真(クロスニコル) ……197	第237図 鉢形土器の分類 ……226
第215図	№2顕微鏡写真(単ニコル) ……198	第238図 高坏形土器の分類 ……226
第216図	№2顕微鏡写真(クロスニコル) ……198	第239図 器台形土器の分類 ……227
第217図	赤色顔料のラマンスペクトル ……200	第240図 木棺墓群の形成過程 ……229
第218図	水銀朱(標準試料)の ラマンスペクトル ……200	第241図 木棺墓群供献土器(1) ……234
第219図	ベンガラ(標準試料)の ラマンスペクトル ……200	第242図 木棺墓群供献土器(2) ……235
第220図	小玉の顕微鏡写真(透過光) ……204	第243図 墳丘墓群供献土器(1) ……236・237
第221図	18号墓出土のカリガラス製管玉の CR画像(穿孔されている) ……204	第244図 墳丘墓群供献土器(2) ……238・239
第222図	青紺色カリガラス製の 微小小玉のCR画像 ……204	第245図 玉厨葬埋葬施設 ……246
第223図	土壌試料採取地点(1) ……206	第246図 ガラス小玉計測値 ……247
第224図	土壌試料採取地点(2) ……207	第247図 ガラス小玉の分布 ……248
第225図	試料中に残存する 脂肪の脂肪酸組成(1) ……209	第248図 栗玉計測値 ……249
第226図	試料中に残存する 脂肪の脂肪酸組成(2) ……210	第249図 碧玉製管玉の穿孔 ……249
第227図	試料中に残存する	第250図 鉄製品副葬埋葬施設 ……252
		第251図 鉄器副葬位置(1) ……254
		第252図 鉄器副葬位置(2) ……255
		第253図 棺の規模 ……262
		第254図 墓坑の規模 ……263
		第255図 棺の頭位方向(1) ……266
		第256図 棺の頭位方向(2) ……267

表目次

第1表	梅田東古墳群出土小管玉の 出土地区一大きさ ……175	第9表	ガラス遺物の化学組成 (wt%) ……203
第2表	各碧玉の原産地における原石群の 元素比の平均値と標準偏差値 ……178	第10表	土壌試料の残存脂肪抽出量 ……207
第3表	各原産地不明碧玉類、玉材の 遺物群の元素比の平均値と 標準偏差値 ……179	第11表	試料中に分布する ステロールの割合 ……214
第4表	梅田東古墳群出土小管玉の 分析結果 ……185	第12表	10号墳埋葬順 ……230
第5表	梅田東古墳群出土小管玉の 分析結果 ……185	第13表	11号墳埋葬順 ……230
第6表	梅田東古墳群出土小管玉の 地推定結果 ……186	第14表	13号墳埋葬順 ……231
第7表	梅田東古墳群出土赤色顔料一覧 ……199	第15表	木棺墓群・墳丘墓群の形成過程 ……231
第8表	分析試料 ……201	第16表	供献土器器種構成 ……241
		第17表	棺側部土器供献位置 ……242
		第18表	出土玉類一覧表 ……245
		第19表	玉出土状況 ……250
		第20表	腕飾りの規模 ……251
		第21表	副葬・施朱の認められた埋葬施設 ……258
		第22表	定形タイプの方形台状墓 ……269

巻頭図版

巻頭図版1	梅田東古墳群の位置	巻頭図版8	10号墳第5主体部 棺検出状況(西から)
巻頭図版2	梅田東古墳群遠景(調査前 北上空から) 梅田東古墳群近景(調査後 北上空から)	10号墳第5主体部 棺内(西から)	10号墳第5主体部 棺内(人骨取り上げ後)
巻頭図版3	梅田東古墳群全景(北上空から)	巻頭図版9	11号墳 全景(南から)
巻頭図版4	10号墳第1主体部 棺確認状況(北から) 10号墳第1主体部 棺検出状況(北から)	11号墳出土土器	巻頭図版10
巻頭図版5	10号墳第1主体部 全景(西から)	11号墳第1主体部 墓坑内断面(北から)	11号墳第1主体部 全景(北から)
巻頭図版6	10号墳第1主体部 棺内(西から) 10号墳第1主体部出土ガラス玉	巻頭図版11	13号墳第3主体部 検出状況(北から)
巻頭図版7	10号墳第2主体部 全景(西から)	13号墳 棺転用土器	巻頭図版12
		墳丘墓群出土土器	

巻頭図版13

木棺墓群 全景（北東から）
木棺墓群出土土器

巻頭図版14

木棺墓群 2号墓出土ガラス小玉
木棺墓群 5号墓出土ガラス小玉
木棺墓群 12号墓出土ガラス小玉
木棺墓群 6号墓出土ガラス小玉

巻頭図版15

木棺墓群15号墓出土ガラス玉
木棺墓群15号墓出土ガラス管玉

巻頭図版16

木棺墓群18号墓出土土類一括
木棺墓群18号墓出土ガラス管玉
木棺墓群18号墓出土碧玉製管玉

写真図版目次

図版1 遠景

北東から 西から

図版2 近景

北東から 北から 北西から

図版3 眺望

東方向 北東方向

図版4 全景

北西上空から

図版5 墳丘墓群

北西上空から

図版6 墳丘

調査前 墳丘側面（北から）

調査前 墳頂部（北から）

調査前 北側カット部（西から）

図版7 墳丘

表土掘削作業（北西から）

墳頂部全景（北から） 墳丘断面（東から）

図版8 第1主体部

全景（北から） 全景（北東から）

全景（北西から）

図版9 第1主体部

墓坑横断面（西から） 棺内横断面（西から）

棺底横断面（西から）

図版10 第1主体部

棺頭位側（西から） 棺足位側（東から）

墓坑全景（北から）

図版11 第1主体部

棺底縦断面 頭位側（南から）

棺底縦断面 足位側（北から）

墓坑断面（東から）

図版12 第2主体部

蓋石検出状況（北から）

蓋石検出状況（北から）

石室検出状況（北から）

図版13 第2主体部

蓋石検出状況（東から）

蓋石検出状況（西から）

人骨出土状況（西から）

石室検出状況（西から）

図版14 第2主体部

南側長側石 全景（北から）

南側長側石 頭位側（北から）

南側長側石 足位側（北から）

図版15 第2主体部

北側長側石 全景（南から）

北側長側石 頭位側（南から）

北側長側石 足位側（南から）

図版16 第2主体部

頭位側小口（西から）

足位側小口（東から）

石室横断面（東から）

- 墓坑全景（北から） 墓坑縦断面（東から）
- 図版38 第2主体部
全景（東から）
- 図版39 第2主体部
頭位側小口（西から） 足位側小口（東から）
墓坑全景（東から） 墓坑内断面（東から）
鉄製品（F6・F7）出土状況
- 図版40 第3主体部
蓋石検出状況（北から）
棺検出状況（北から）
石棺全景（西から）
- 図版41 第5主体部
棺確認状況（南から）
棺検出状況（南から）
墓坑内縦断面（南から）
- 図版42 第6主体部
蓋石検出状況（東から）
棺検出状況（東から） 石棺全景（北から）
- 図版43 第4・7主体部
第7主体部全景（西から）
第4主体部全景（北から）
- 図版44 遺物
11号墳出土土器
第1主体部出土土器（6-9）
第2主体部出土土器（12）
第4主体部出土土器（13）
- 図版45 遺物
第6主体部出土土器（14・15）
第1主体部出土鉄器（F5）
第2主体部出土鉄器（F6・F7）
F6付着布痕
- 図版46 墳丘・遺物
墳頂部全景（南から） 区画溝断面（東から）
第2主体部全景（北から）
第1主体部出土土器（16）
- 図版47 第1主体部
墓坑断面（西から） 棺確認状況（東から）
- 図版48 第1主体部
棺全景（東から） 棺全景（南から）
- 図版49 第1主体部
足位側小口（西から） 頭位側小口（東から）
墓坑内断面（東から）
- 図版50 墳丘
墳頂部全景（西から）
墳頂部全景（南から）
- 図版51 第2主体部他
全景（北から） 墓坑縦断面（北から）
第4主体部（東から）
区画溝断面（北から）
- 図版52 第1主体部
全景（西から）
- 図版53 第1主体部
棺全景（北から） 頭位側小口（西から）
足位側小口（東から）
- 図版54 第3主体部
全景（北から） 墓坑断面（北から）
棺蓋（西から）
- 図版55 遺物
区画溝出土土器（17-20）
第1主体部出土土器（21・22）
第2主体部出土土器（23）
墳頂部出土土器（26）
- 図版56 墳丘
区画溝断面（北西から）
区画溝全景（北西から）
- 図版57 墳丘
墳頂部全景（北東から）
墳丘側面（南西から）
墳丘側面（北西から）
- 図版58 第1主体部
全景（北東から）
破砕供献土器出土状況（南東から）
鉄器出土状況（F8）

- 図版17 第2主体部
墓坑横断(東から) 墓坑横断(東から)
墓坑横断(東から)
- 図版18 第3主体部
蓋石検出状況(西から)
蓋石検出状況(東から)
石棺検出状況(東から)
- 図版19 第4主体部
蓋石検出状況(南から)
蓋石検出状況(南から)
墓坑底部(南から)
石棺検出状況(南から)
- 図版20 第4主体部
石棺全景(南から) 石棺全景(東から)
- 図版21 第4主体部
足位側小口(北から)
頭位側小口(南から)
東側長側石(西から)
西側長側石(東から)
- 図版22 第5主体部
蓋石検出状況(西から)
蓋石検出状況(西から) 蓋石(北から)
- 図版23 第5主体部
南側長側石(北から)
北側長側石(南から) 墓坑断面(東から)
- 図版24 第6主体部
蓋石検出状況(西から)
蓋石検出状況(南から)
蓋石検出状況(北から)
蓋石上破砕土器供獻(南から)
蓋石上破砕土器供獻(東から)
- 図版25 第6主体部
棺外破砕土器供獻(北から)
棺外破砕土器供獻(北から)
- 図版26 第6主体部
石棺全景(西から) 石棺全景(北から)
- 図版27 第6主体部
西側長側石(東から)
東側長側石(西から) 墓坑断面(南から)
- 図版28 第7主体部
蓋石検出状況(西から)
蓋石検出状況(東から)
蓋石検出状況(西から)
石棺検出状況(東から) 墓坑内断面(東から)
- 図版29 遺物
第1主体部出土ガラス小玉(上段から右腕・左腕・他)
- 図版30 遺物
第1主体部出土土器(1)
第5主体部出土土器(2)
第6主体部出土土器(3)
第2主体部出土鉄器(F1)
- 図版31 遺物
第3主体部出土鉄器(F2)
第5主体部出土鉄器(F3・F4)
- 図版32 墳丘
調査前 墳丘暫面(北東から)
調査前 墳頂部(南から)
表土掘削作業(南から)
- 図版33 墳丘
墳頂部全景(南から)
- 図版34 墳丘
北側斜面(西から) 西側斜面(南から)
東側斜面(南東から)
- 図版35 墳丘
北側斜面(東から) 東側斜面(南から)
墳丘断面(南東から)
- 図版36 第1主体部
全景(北から) 頭位側小口(北から)
足位側小口(南から) 墓坑内断面(北から)
短剣(F5)出土状況
- 図版37 第1主体部
墓坑北東隅(南西から)

- 図版59 第1主体部
 足位側小口(北東から)
 頭位側小口(南西から)
 墓坑内断面(南西から)
- 図版60 第2主体部
 蓋石検出状況(南東から)
 南東側長側石(北西から)
 北西側長側石(南東から)
- 図版61 第2主体部
 全景(北東から) 全景(南西から)
 第1主体部出土鉄器(F8)
 第1主体部出土土器(27)
- 図版62 全景
 北東上空から
- 図版63 全景
 南西から 北から 北西から
- 図版64 1号墓・2号墓
 1号墓 全景(北東から)
 2号墓 全景(北西から)
- 図版65 6号墓・8号墓
 8号墓 全景(北から)
 6号墓 全景(北西から)
- 図版66 4号墓・5号墓
 4号墓 全景(北東から)
 4号墓 鉄器出土状況(F9)
 4号墓 破砕供獻土器出土状況
 5号墓 全景(東から)
- 図版67 7号墓・9号墓
 7号墓 破砕供獻土器出土状況(南から)
 7号墓 全景(南から)
 9号墓 全景(北から)
- 図版68 11号墓・12号墓
 11号墓 全景(東から)
 11号墓 小口穴(東から)
 12号墓 全景(北から)
- 図版69 14号墓
 墓坑断面(北西から) 全景(南東から)
- 図版70 15号墓
 全景(南東から) 棺全景(南西から)
- 図版71 16号墓
 全景(北西から) 墓坑断面(北西から)
- 図版72 13号墓・17号墓
 13号墓 全景(北東から)
 17号墓 全景(東から)
- 図版73 18号墓
 全景(西から)
 破砕供獻土器出土状況
 破砕供獻土器出土状況
 ガラス小玉出土状況 管玉出土状況
- 図版74 遺物
 1号墓出土土器(28・29)
 2号墓出土土器(30・31)
 5号墓出土土器(32・33)
- 図版75 遺物
 6号墓出土土器(34)
 7号墓出土土器(35)
 8号墓出土土器(36)
 9号墓出土土器(37)
 12号墓出土土器(38)
 13号墓出土土器(39)
- 図版76 遺物
 14号墓出土土器(40~42)
 15号墓出土土器(43)
 16号墓出土土器(45)
- 図版77 遺物
 17号墓出土土器(46・47)
 18号墓出土土器(48~51)
- 図版78 遺物
 14号墓出土鉄器(F10)
- 図版79 遺物
 4号墓出土鉄器(F9)
 14号墓出土鉄器(F11)
 18号墓出土鉄器(F12~F14)

図版80 遺物
2号墓出土ガラス小玉
図版81 遺物
5号墓出土ガラス小玉
図版82 遺物
11号墓出土ガラス小玉
6号墓出土ガラス小玉
図版83 遺物
12号墓出土ガラス小玉
図版84 遺物
15号墓出土ガラス小玉
図版85 遺物
15号墓出土ガラス管玉

図版86 遺物
18号墓出土ガラス小玉
図版87 遺物
18号墓出土ガラス粟玉
図版88 遺物
18号墓出土ガラス管玉
図版89 遺物
18号墓出土碧玉製管玉
図版90 全景
東から
図版91 全景
S K 03 (北から) S K 05 (北から)
S K 06 (北から)

第1章 梅田東古墳群

第1節 梅田東古墳群の地理的環境

和田山町

梅田東古墳群が所在する兵庫県朝来郡和田山町は、兵庫県の北部に位置する。兵庫県北部は、律令期以降、但馬国に属していた地域で、和田山町はその南部（南但馬）に位置する。朝来郡朝来町の北、同山東町の西、養父郡養父町の東から南東、出石郡出石町の南側にあたる。そして、和田山町東部の一部は、京都府との県境に接している。その面積は、111.61km²を測る。

和田山町の人口は約17000人で、南但馬（南但）の中心をなし、但馬のなかでも城崎郡日高町とともに豊岡市に次ぐ規模を誇る。これは、当地が交通の要衝に位置していることに大いに起因する。つまり、京都と山陰を結ぶJR山陰本線と姫路から北上してきたJR播但線が接続するとともに、これら

とほぼ平行する国道9号線と国道312号線も合流している。畿内中心部と山陰、瀬戸内と日本海側を結ぶ交通の要衝としての役割を担ってきた。

円山川

和田山町域の大半は山地からなる。しかし、和田山町のほぼ中心部を円山川が流れ、この川とそのいくつかの支流を中心に谷底平野が形成されている。円山川は、生野町円山を源とする延長約68kmにおよぶ河川で、但馬最大の流域面積を誇る。朝来町を北上し、和田山町和田山で大きく北西方向に流れを変え、養父町・八鹿町を経て日本海へと流れていく。この流れを大きく変える地点で、東側から与布土川が合流する。そして、この合流地点から南側の和田山町加都付近にかけての1帯が盆地状に大きく開けている（以下、加都盆地と呼称）その規模は、北東—南西方向で約3.5km、その直交方向で約1kmである。

加都向山

この大きく開けた地域の南西端にあたる地区に独立する山塊が、梅田東古墳群が立地する加都向山である。加都向山は、標高227.6mと、当地域では小規模な山である。当山の頂を中心にいくつかの尾根が張り出しており、その最も北東側の円山川に向かって張り出している尾根上に梅田東古墳群が立地している。この尾根の延長上には、上記の小盆地を南西側から北東方向を中心に望むことができる。

ちなみに、当山の南側には、円山川の支流である安井川を中心とした東西方向にひろがる小規模な谷底平野がある。この谷底平野の形成は新層に起因するもので、この新層地形



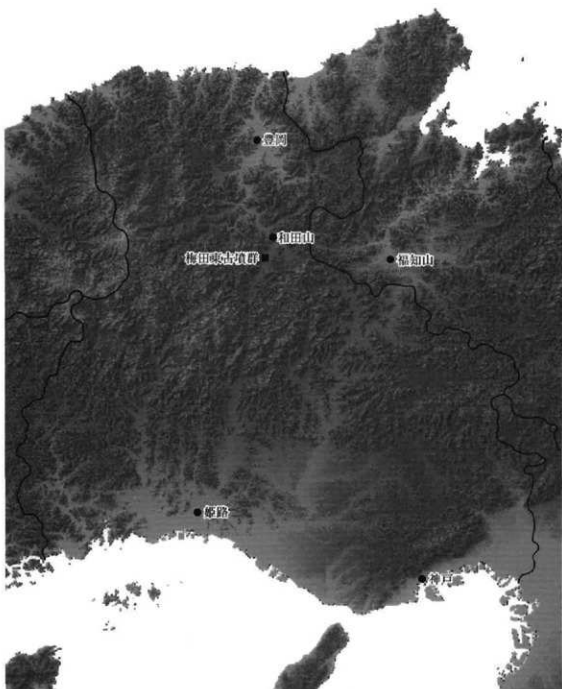
第1図 遺跡の位置

第1節 梅田東古墳群の地理的環境

(ケルンコロン)は、円山川を挟んだ東側の筒江を経て、山東町まで続いている。そしてこの断層が、当小盆地の南限をなしている。

交通の変化

ところが、近年、近畿圏と山陰を結ぶ智頭急行線の開通にともない、鉄道交通の状況に変化がみられる。さらに、道路交通網においても、高速道路網整備の進行にともない、状況が大きく変わりつつある。今回の調査の契機となったのも、この高速道路網の整備に伴うものである。



第2図 和田山町の位置

第2節 梅田東古墳群周辺の歴史的環境

はじめに 梅田東古墳群は、後述するように、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて形成された埋葬遺跡である。そこで、当該期の遺跡を中心に見ていく。地域的な対象についても、当古墳群が望んでいる加部盆地を中心とした地域に限定する。

1. 弥生時代後期前半

筒江中山古墳群¹⁾・大盛山遺跡²⁾・加部遺跡³⁾・岡田遺跡⁴⁾などが調査によって明らかにされている。

筒江中山古墳群¹⁾ 加部盆地南東隅に位置する丘陵上に立地する遺跡である。片引遺跡の南東に位置する。土器植墓が1基検出されている。

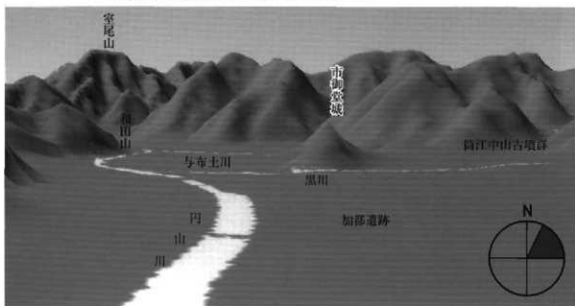
大盛山遺跡³⁾ 但馬地域においては数少ない高地性集落である。加えて、調査によって全容が明らかとなった点でも重要な遺跡である。山頂部を中心に2重に環濠遺構がめぐり、その内外から5棟の竪穴住居跡が検出されている。

加部遺跡⁴⁾ 焼餅堂地区において、谷状地形に堆積した遺物包含層から、後期前半の土器が出土している。ただし、当該期の明確な遺構は明らかとはなっていない。

岡田遺跡²⁾ 弥生時代中期から後期にかけての土器が出土している。

2. 弥生時代後期末～古墳時代初頭

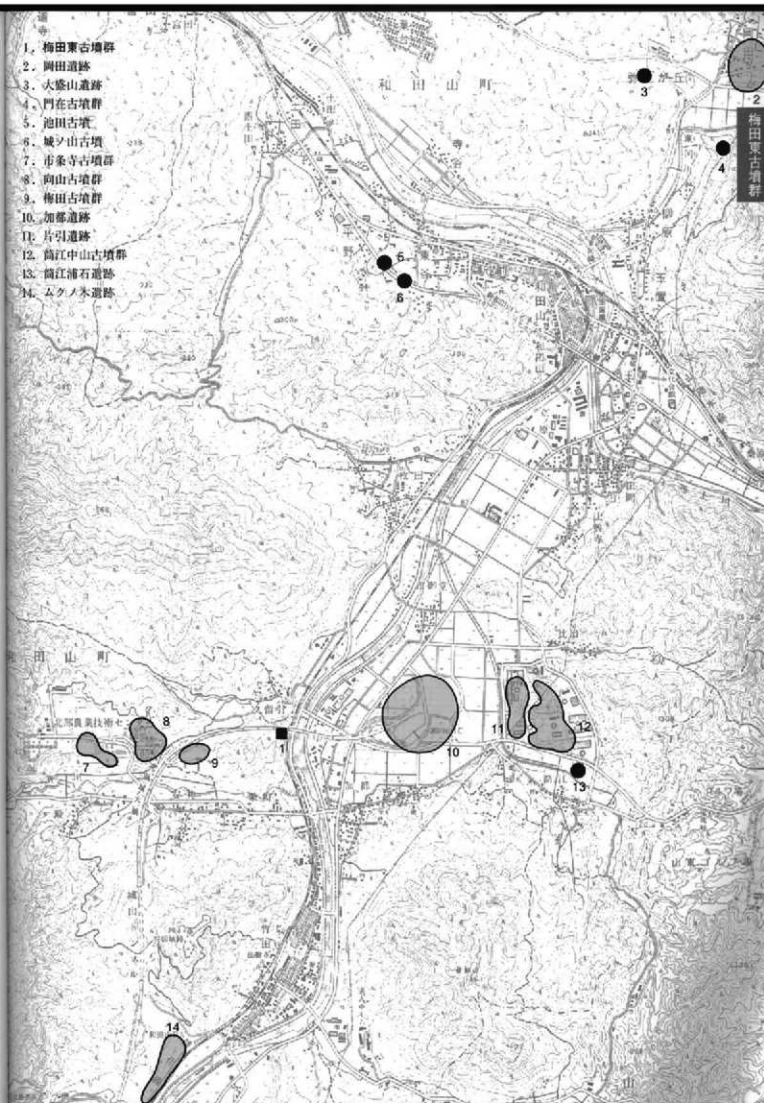
向山遺跡⁵⁾・片引遺跡⁶⁾・梅田古墳群⁷⁾・ムクノ木遺跡⁸⁾・筒江浦石遺跡⁹⁾・加部遺跡³⁾・大盛山遺跡²⁾などが調査によって明らかにされている。



第3図 梅田東古墳群からの眺望

1. 梅田東古墳群
2. 岡田遺跡
3. 大盛山遺跡
4. 門在古墳群
5. 池田古墳
6. 城ノ山古墳
7. 市条寺古墳群
8. 向山古墳群
9. 梅田古墳群
10. 加藤遺跡
11. 片引遺跡
12. 筒江中山古墳群
13. 筒江浦石遺跡
14. ムクノ木遺跡

梅田東古墳群



第4図 主要周辺遺跡

- 向山古墳群(8) 梅田東古墳群の西側に位置する。加都盆地より安井川に沿って約1.5km西側に入った丘陵部に立地し、加都盆地を直接望むことは困難である。弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけての、墳墓が検出されている。
- 片引遺跡(11) 加都盆地の南東側に位置する。浅い谷状遺構内から、当該期の土器が多量に出土している。鉢形器台など、山陰系の土器が少なからず出土している。
- 梅田古墳群(9) 尾根筋は異なるが、梅田東古墳群と同一丘陵上に立地する遺跡である。布留式土器を伴う木棺墓が2基検出されている。
- ムクノ木遺跡(14) 竹田城跡の南側、円山川左岸に形成された低位段丘面上に立地する遺跡である。溝状遺構・田河道内から当該期の土器がまとまって出土している。
- 筒江浦石遺跡(19) 筒江中山古墳群の南東部、黒川に臨む低位段丘面上に立地する遺跡である。粘土採掘坑が182基検出され、そのいくつかの採掘坑内から当該期の土器・木製品などがまとまって出土している。
- 加都遺跡(20) 伊豫田地区において弥生時代後期から終末期にかけての土器を包含する溝が、宮ヶ田A地区において古墳時代前期の堅穴住居跡が検出されている。
- 大盛山遺跡(3) 先述した高地性集落の中心にあたる山頂部で大盛山3号墳が検出されている。埋葬施設は3基検出され、2基は箱形石棺墓を、1基は土壘墓を埋葬施設とする。報告者は布留式段階に位置付けているが、庄内併行期まで遡らせる意見もある¹⁹⁾。梅田東古墳群で検出した箱形石棺と時期的に近接し、その系譜を考える上で重要な遺構である。

〔参考文献〕

- (1) 渡辺 昇他「筒江片引遺跡群1—和山山工業団地建設に伴う発掘調査報告書—」(兵庫県文化財調査報告 第31冊) 兵庫県教育委員会 1985
- (2) 田畑 基「大盛山遺跡」(和田山町文化財調査報告書 第7集) 和田山町教育委員会 1995
- (3) 吉識雅仁他「加都遺跡」[平成9年度 年報] 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1998
- (4) 岡崎正雄「岡田2号墳」(兵庫県文化財調査報告書 第68冊) 兵庫県教育委員会 1989
- (5) 中村 弘他「向山古墳群 市桑寺古墳群 一乗寺経塚 矢別遺跡—県立北部農業技術センター整備に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—」(兵庫県文化財調査報告 第191冊) 兵庫県教育委員会 1999
- (6) 岡田章一他「梅田古墳群」[平成8年度 年報] 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1997
吉識雅仁他「梅田古墳群(第2・3・4次調査)」[平成9年度 年報] 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1998
- (7) 田畑 基「ムクノ木遺跡」(和田山町文化財調査報告書 第5集) 和田山町教育委員会 1992
- (8) 荒木幸治「古墳時代初頭における粘土採掘坑とそれに伴う具体的活動—兵庫県朝来郡和田山町筒江浦石遺跡の調査—」[兵庫県埋蔵文化財研究紀要 創刊号] 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2001
- (9) 谷本 進「但馬における庄内併行期の土器の様相」[北近畿の考古学] 岡丹考古学研究会・但馬考古学研究会 2001

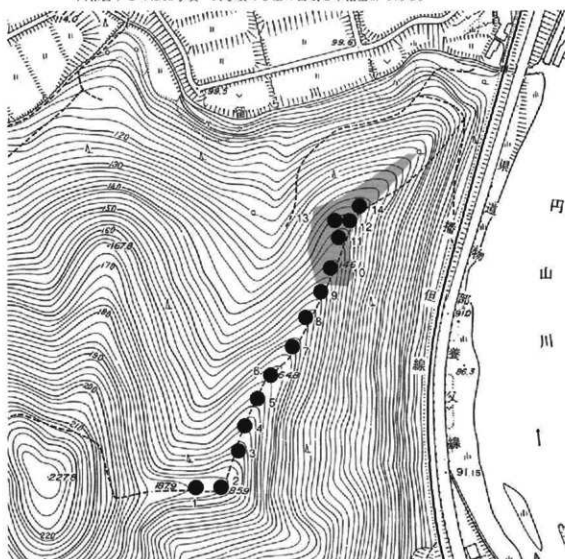
第3節 梅田東古墳群

遺跡の名称 梅田東古墳群は、播但連絡道路（5期）建設に伴う確認調査を実施する以前から古墳群として周知されていた。そして、和田山町の文化財台帳にも、1基ごとに登録されていた。さらに、当事業に伴い実施した確認調査（第2章第2節）で新たにみつかった古墳についても、10号墳～13号墳と台帳に追加してきた。

ところが、後述するように、調査の結果は、当古墳群は墳丘墓として理解されるべきものであり、本来は「○号墓」と称するべきものである。しかし、今回の調査対象外となった未調査のものについては、古墳である可能性が残されており、また町の台帳との混乱を避けるため、従来通り「○号墳」と呼称することにした。

さらに、確認調査で追加した11号墳と12号墳の間に新たに2基みつかったこと、13号墳とされたところは古墳ではなく木棺墓群であることが明らかとなった。

調査 以上の状況のもと、12号墳以下の番号を付け直し、14号墳まで追加した。この結果、今回報告するのは10号墳～14号墳の5基の古墳と木棺墓群である。



第5図 梅田東古墳群

第2章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

高速交通網 兵庫県は、県内高速交通網の整備を進めている。このなかで、南北交通の中心軸をなすのが播但連絡道である。播但連絡道は、瀬戸内側の国道2号線（姫路バイパス：姫路市）と但馬南部の北近畿豊岡自動車道（和田山町）を結ぶ高速道である。国道は播磨四城（瀬戸内側）と但馬四城（日本海側）を結ぶもので、兵庫県がめざす県内1時間高速交通圏の確立が図られるものである。全延長約65kmの高速道路で、昭和45年の事業開始に始まり、南側から5期にわけて工事を進めてきた。

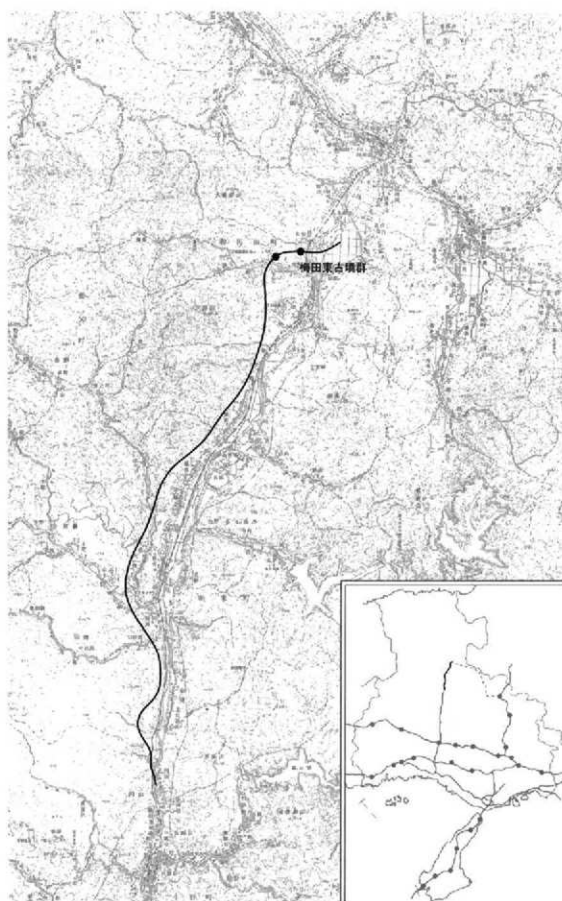
5期事業 今回調査の契機となったのは、最後の5期事業に伴うものである。5期事業は、生野北インターチェンジ（朝来郡生野町円山）から、北近畿豊岡自動車道と合流する和田山ジャンクション（同和田山町加都）を結ぶ約17.2kmの区間である。

5期事業の計画に基づき、兵庫県教育委員会では、平成7年度から分布調査・確認調査を実施してきた。そして、本道路の調査が、当該事業に伴う最初の全面調査にあたるものである。

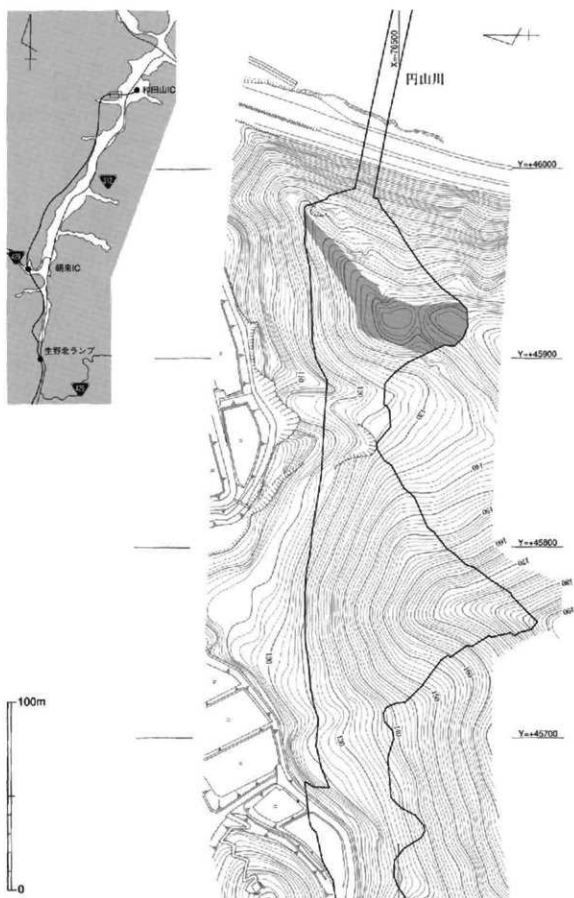
梅田東古墳群 上記5期事業のなかで、梅田東古墳群は、播但道の北端部にあたる和田山インターチェンジの手前約2kmの地点に位置する。姫路方面から北上してきた播但道が、竹田城跡の西側を通り、和田山第2橋を渡ったあたりから加都盆地に向かって、東側へ大きくカーブを描く。このカーブが曲がりきった、円山川橋の手前の尾根が梅田東古墳群である。工事は、この尾根をオープンカットするもので、このカット部分が調査対象となった。



第6図 竣工後の梅田東古墳群（北から）



第7図 5期事業



第8図 5期事業と梅田東古墳群

第2節 分布調査・確認調査

概要

梅田東古墳群の立地する尾根は、加都向山から派生する幾筋かの尾根の一つである。同山頂を中心とした一帯は中世の山城である安井城として周知されている。このため、当初は山城に関連する遺構の存在も考えられた。

分布調査

以上の状況のもと、当事業の計画に先立ち、平成7年度に分布調査を行った。この結果、尾根筋においても、①階段状の平坦面が曲輪、②全面調査で10号墳と11号墳を限るカット部分が堀割と、それぞれ安井城に関連する遺構の存在が考えられた。以上から、確認調査を実施することとなった。

なお、分布調査においては、遺物は全く採集されなかった。

確認調査

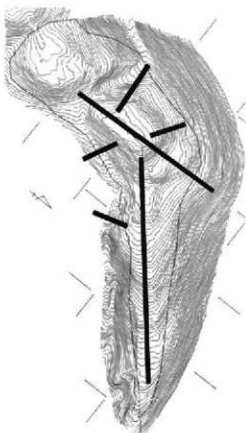
平成7年10月11日から10月24日にかけての9日間行われた。本書で報告する円山川に平行して南北方向にのびる今回の調査地が立地する尾根筋のほか、この尾根の一筋西側に位置する同じく南北方向にのびる尾根筋と合わせて実施した。

調査は、尾根筋を中心に幅1mのトレンチを設定し、埋蔵文化財の有無を確認していった。この結果、西側の尾根については遺構・遺物は全く見つからず、埋蔵文化財を確認することはできなかった。

今回の調査対象となった尾根については、平坦地4箇所において墓坑を確認し、これらの平坦部を古墳と判断した。また、この尾根筋の北端部においても弥生土器の小片が出土し、付近に埋葬施設が存在する可能性が考えられた。

以上の結果から、当尾根筋の工事対象地内には計4基の古墳が存在するとの結論に至り、上から10号墳・11号墳・12号墳・13号墳として周知されることとなった。同時に、当尾根の工事対象範囲内は全て調査が必要と判断されるにいたった。

なお、確認調査で新たに周知化された古墳については、全面調査後に一部名称を変更している(第1章第3節)。



第9図 確認調査位置

第3節 発掘調査

調査手順 調査は、調査対象地の伐木が終了した平成8年12月1日から平成9年3月31日までの4ヶ月間で行った。

すべて人力により掘削していった。具体的には、尾根上部にあたる10号墳から尾根下方に向かって表土を掘削していった。表土掘削が終了した墳丘から、特に墳頂部を中心に、埋葬遺構の確認・検出作業を進めていった。

また、検出遺構が埋葬遺構であることから、玉類などの微細な遺物の出土が予想された。このため、棺内埋土については全て取り上げ、現場もしくは調査事務所にて埋土の精査を行った。特に、木棺墓群18号墓棺内から出土したガラス粟玉は、すべてこの精査によるものである。

サンプリング また、検出した遺構が埋葬遺構であることから、脂肪酸分析を行うためのサンプリングを行った。ただし、全ての埋葬施設においてサンプリングを行ったのではなく、木棺墓・土器棺墓を中心に、遺存状況が良好な埋葬施設に対して行った。さらに、棺内において、赤色顔料が認められたものについては、そのサンプリングも行った。

空中写真測量 調査対象地の伐木終了後とすべての遺構検出後に、空中写真測量を行い、調査の効率化を図った。

現地説明会 また、墳丘墓群の調査が一段落した平成9年3月1日に、市民を対象とした現地説明会を開催し、調査成果の公開を行った。約80名の参加を得た。

調査体制 全面調査時の調査体制は以下のとおりである。

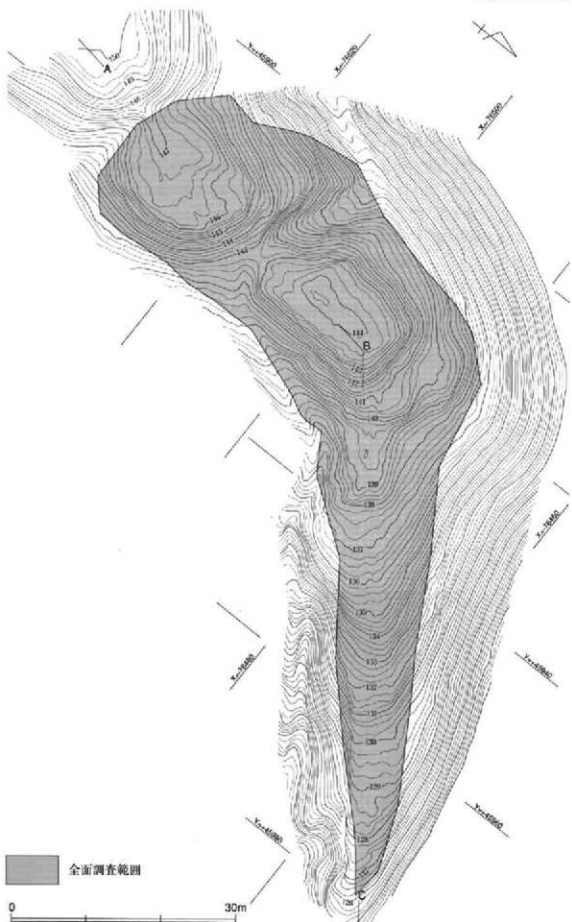
調査主体 兵庫県教育委員会

調査員 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 山田清朝・國本綾子

調査補助員 山本陽子・中塚克浩・中谷裕史



第10図 現地説明会



第11図 地形測量図 (調査前)

第4節 整理作業

整理作業は、一部調査と平行して行ったが、本格的な整理作業は、平成11年度以降の兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所にての整理作業に始まる。以下、年度ごとにその概要をまとめていく。

平成8年度 調査と平行して、現地の調査事務所内にて行った。出土土器の水洗・棺内埋土の精査を行った。埋土の精査により、多くの玉を検出することができた。

整理作業 調査補助員 山本陽子・中塚克浩・中谷悟史
室内作業員 柴原陽子・藤原憲子・吉田美佐子・山本こいと・小谷なつの・柴原重野
西垣まさ子・吉田いと

平成11年度 整理作業と保存処理作業を行った。

整理作業 出土土器のネーミング作業および接合作業を行った。
保存処理 出土鉄製品を対象に、脱塩処理→錆取り→樹脂含浸→接合整形の手順で行った。
整理体制 整理普及班 主任 長濱誠司

嘱託員 香川フジ子・石野照代・柴木恵美子・西野淳子・飯田章子
喜多山好子・宮野正子・岡井とし子・岡田祥子・蓬萊洋子

平成12年度 整理作業のみを実施した。

整理作業 出土土器・鉄器・玉類の実測を行った。また、これらの実測終了後、遺物の写真撮影のための土器の復元・着色作業を行った。これと平行して、出土遺物および遺構図の整因作業、そしてこれらのトレースを行った。

なお、玉類の実測にあたっては、微細な玉が多く、玉そのものの直接的な計測は困難であった。このため、X線透視フィルムを利用して間接的な計測を行った。その手順は以下のとおりである。



第12図 整理作業

第4節 整理作業

- ①原寸大での玉の正面および側面の2面のX線透過撮影を実施。なお、この作業のみ、兵庫県教育委員会魚住分館にて行った。
- ②X線透過撮影フィルムにトレーシングペーパーを掛け、玉の外形線と穴の形状を鉛筆でトレース。ただし、管玉については、側面のX線透過撮影ができなかったため、穴の形状については、遺物そのものを直接計測した。
- ③上記鉛筆トレース図を200%に拡大し、これをトレースし、2倍版とした。

整理体制 整理普及班 主任 深江英憲

嘱託員 岸野奈津子・香川フジ子・木村淑子・前田千栄子・鈴木まき子
今村聡美・八木富美子・川上智晴・早川有紀・藤井光代
岡田祥子・友久伸子・三島重美

平成13年度 整理作業のみを行った。

整理内容 昨年度に引き続き、遺構図・遺物実測図のトレースを行った。これと平行して、原稿の執筆・編集作業を行った。

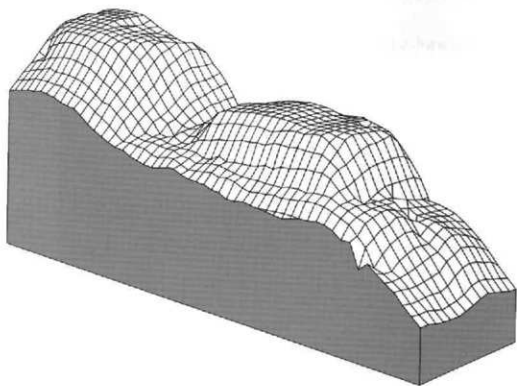
整理体制 整理普及班 主任 深江英憲

嘱託員 岸野奈津子

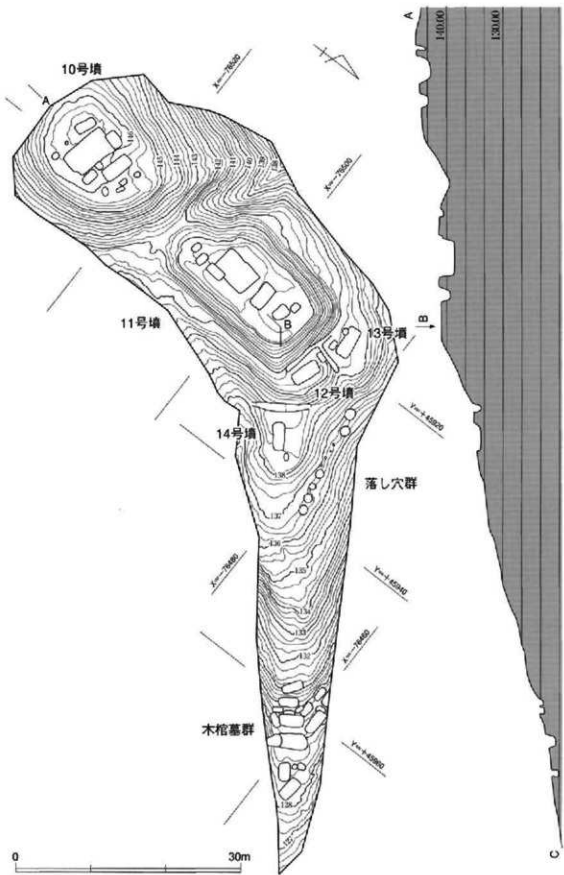
第3章 調査の成果

第1節 調査の概要

- はじめに 調査の結果、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての埋葬遺構、および落とし穴群を検出した。埋葬遺構については、大きく、木棺墓群と墳丘墓群とからなる。
- 墳丘墓群 当初古墳として調査を実施した地区である。調査の結果、10号墳から14号墳の5基の墳丘墓が明らかとなった。いずれの墳丘墓とも、複数の埋葬施設を有する。埋葬施設は、木棺墓・箱形石棺墓・土器棺墓とバリエーションを持つ。これらの墳丘墓群の時期は、いずれも庄内併行期～布留式前半に位置付けられる。
- 木棺墓群 調査区の北側、尾根筋の下側に集中して検出された。これらのなかには、1基の土器棺墓も含まれる。この土器棺墓と17基の木棺墓を検出したが、いずれも、弥生時代後期前半～中葉に位置付けられる。
- 落とし穴群 14号墳の北側尾根斜面で6穴検出している。また、落とし穴群に伴うと考えられる杭列も検出している。ただし、これらの遺構に伴う遺物は全く出土しておらず、時期を特定できない。



第13図 墳丘墓群



第14図 平面図

第2節 10号墳

1. 墳丘 (図版6・7)

検出状況

調査区の南端部、つまり調査区内では尾根筋の最高所に位置する。墳丘中央部における地表面における標高は147.00mを測る。当墳は調査前までは山林であったため、西側・東側および墳頂部については大きな削平等は受けていなかった。

調査対象外の9号墳との間には緩やかな周溝状の落ち込みが認められた。ただし、調査前の地表面観察では、調査対象範囲はわずかにその中央部まで及んでいない。このため、10号墳については、山側の墳丘裾部を完全に検出することはできなかった。調査区南端部における墳頂部と周溝底との比高は20cmとわずかである。ただし、調査区南端部の状況から判断すると、周溝中央部においても、上記の比高については大きくかわるものではないと考えられる。

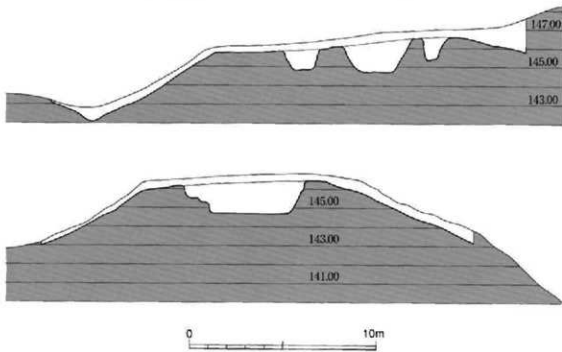
北側に位置する11号墳とは、尾根筋に対してほぼ直交する明確なカットによって境をなしている。ただし、このカット部分については、後世に掘削を受け、調査を実施する前までは、里道として利用されていた。

規模

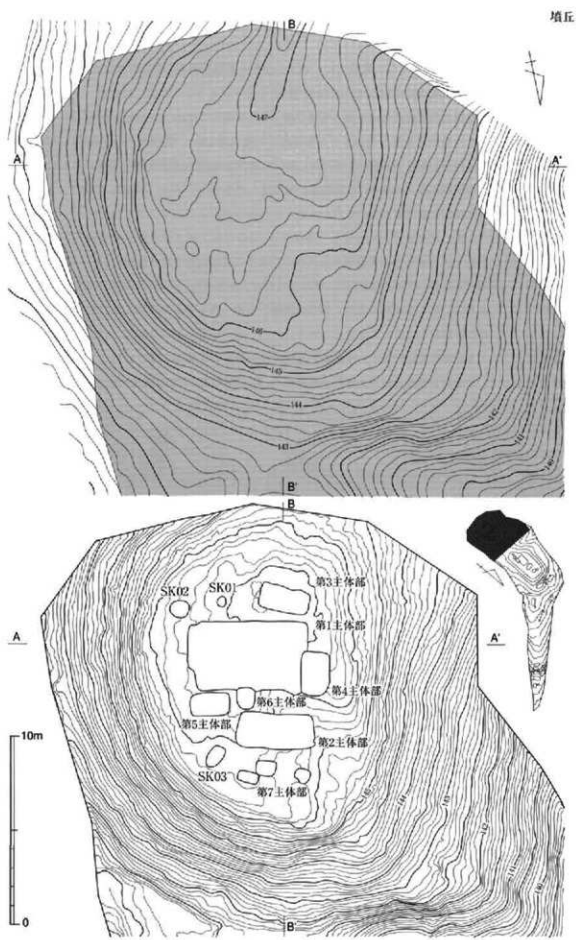
墳丘の形状は長方形を志向するが、明確ではない。特に、後述する11号墳と比較すると、その特徴が顕著である。

主軸方向（南北方向）については、南側は調査区南端と、北側は11号墳との境をなすカット部における傾斜変換点との距離は23.0mを測る。なお、先述したように、南側については、9号墳とのカット部の中央部まで検出できていない。この未検出部分を考慮に入ると、主軸方向における距離は約24mとなる。

主軸方向との直交方向については、11号墳とのカット部分における傾斜変換点にあたる



第15図 10号墳 墳丘断面



第16図 10号墳 墳丘測量図

標高143mのラインの延長上に、わずかながら傾斜変換点を見出すことができる。この両側傾斜変換点間の距離は、16.5mを測る。

墳頂部の規模については、長軸方向（南北方向）で14m、その直交方向で10.5mを測る。また、墳頂部北端と北側カット部底部との比高は3.6m、墳頂部南端と調査区南端との比高は75cmを測る。主軸と直交方向における墳頂部東側と、東側裾部との比高は2.9mを測る。

墳丘の構築

当墳丘墓は、基本的には尾根筋を削り込んで造られている。ただし、墳頂部の北側には、最大30cmの盛土層が認められた。

埋葬施設

7基の埋葬施設を検出した（第16図）。このうち、第1主体部が木棺を、第2主体部が小堅穴式石室を埋葬施設とする以外は、すべて箱形石棺を埋葬施設としている。いずれの埋葬施設も、その主軸方向は、概ね当墳丘の主軸方向もしくはその直交方向を示している。また、これらの埋葬施設間に切合い関係が認められることから、7基の埋葬施設間には微妙な時期差があるものと考えられる。

その他

上記埋葬施設の他に、土坑状の遺構を3基検出している。

時期

後述する各埋葬施設の時期の検討から、弥生時代後期末から古墳時代初頭と考えられる。



第17図 10号墳の調査

第1主体部

2. 第1主体部(図版8~11)

検出状況

墳頂部中央よりやや南側で検出した。第4主体部の東側、第6主体部の南側に位置する。当墓坑は基本的にはほぼ完存するが、墓坑北辺中央部を第4主体部に、墓坑北西隅を第6主体部に、それぞれ一部を切られている。

墓坑

平面形は長方形を基本とする。ただし、東辺の南側がわずかに突出している。また、南辺が直線的であるのに対して、北辺はやや歪んでいる。墓坑の主軸方向は、墳丘墓主軸方向とはほぼ直交する。検出面における規模は、主軸方向で6.40m、その直交方向で3.75mを測る。

墓坑は大きく2段に掘り込まれている。上段部は、南辺は2段に、東辺は3段に、西側の一部は2段にそれぞれ掘りこまれている。また、北西隅においても、階段状の段が認められた。横断面はU字形をなし、墓坑最深部における検出面からの深さは、2.15mを測る。また、縦断面は逆台形をなす。

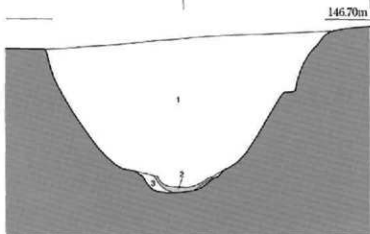
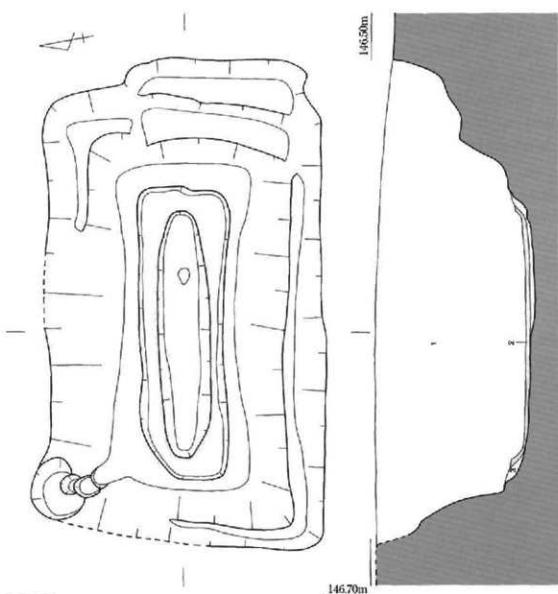
下段は木棺を埋設するためのもので、下段上面の平面形は3.75m×1.15mの長方形をなす。棺中央部における下段上面からの深さは、20cmを測る。横断面はU字形、縦断面は逆台形をなす。

埋葬施設

舟形木棺が埋置されていた。墓坑検出面から1.75m掘り下げたレベルで棺を確認することができた。棺材そのものは遺存していなかったが、棺の痕跡と考えられる幅5cmの淡黄白色細砂~中砂が長楕円形に一箇する(巻頭図版4)とともに、この層が横断・縦断ともに皿状に落ち込むことから、舟形木棺と判断した。



第18図 第1主体部の検出

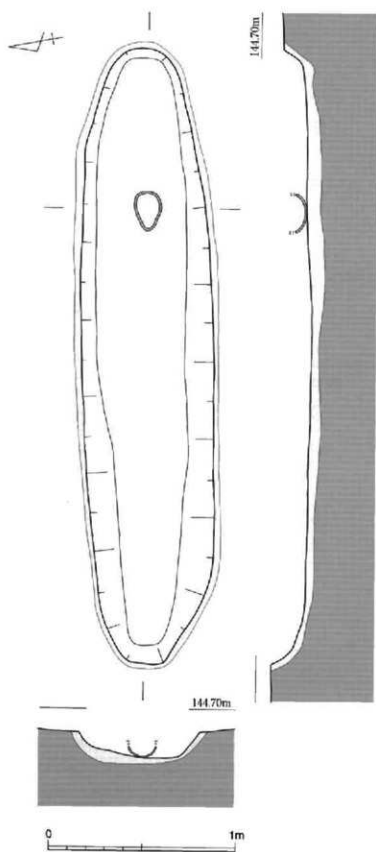


- 1. 淡茶褐色 中砂～粗砂
- 2. 淡黄白色 細砂～中砂 (棺痕)
- 3. 淡橙色 中砂～粗砂

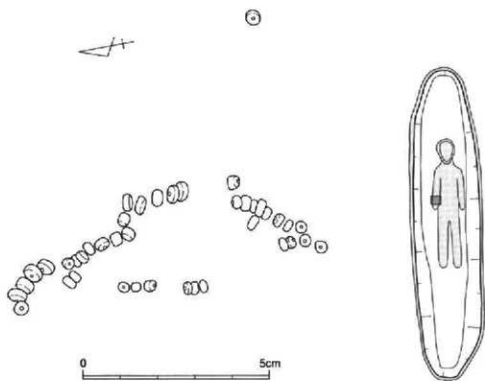


第19図 第1主体部

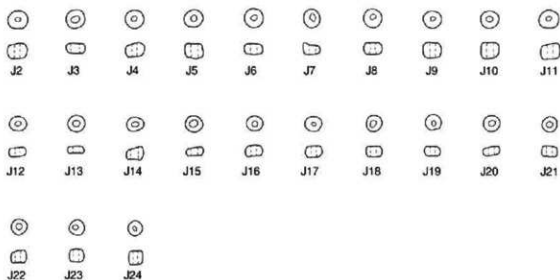
第1主体部



第20回 舟形木棺



第21図 第1主体部玉出土状況（右手首）



第22図 右手首出土ガラス小玉

棺検出面における規模は、主軸方向で3.25m、その直交方向で70cmを測る。棺内東側に遺存する頭骨の位置から、東側に頭位を求めることができる。この主軸ライン上での頭位方向は、N100° 30' Eを示す。横断面は皿形を呈し、最深部における棺検出面からの深さは15cmである。なお、縦断面については、頭位側と足位側とでは立ちあがりの角度がわずかに異なり、足位側の方が急になっている。

施朱

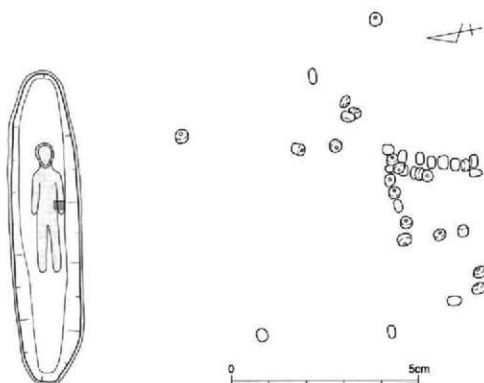
頭蓋骨の周囲には朱が残存しており、被葬者の頭部に施朱されたものと考えられる。

副葬品

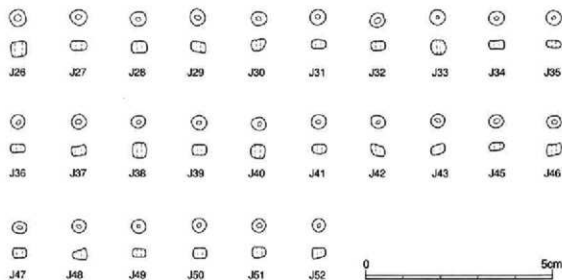
棺内からガラス小玉が出土している。頭骨より40cm西側で2箇所に集中して出土してい

10号墳

第1主体部



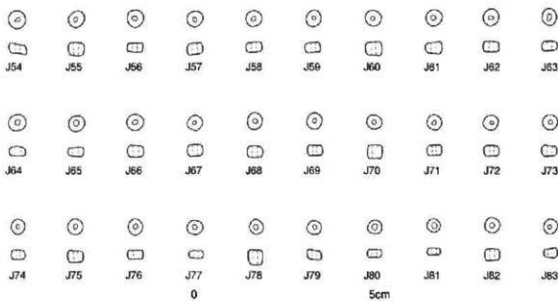
第23図 第1主体部玉出土状況(左手首)



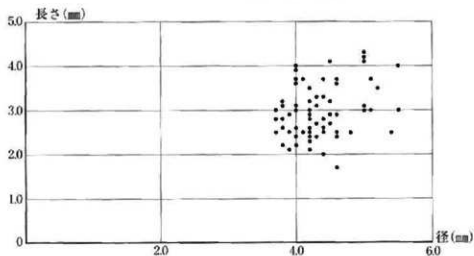
第24図 左手首出土ガラス小玉

る。これらの玉は、その出土状況から判断して、基本的には原位置が保たれているものと考えられ、平面的にも立面的にも弧状をなすように出土している。部分的ではあるが、左右両側とも連珠の状態出土している(第21図・第23図)。このような出土状況から判断して、腕輪として着装されていたものと考えられる。

計85点出土している。いずれもガラス製小玉である。右腕側で28個、左腕側で25個出土している(第22図・第24図)。この他、2箇所の玉出土集中部を中心に、出土地点をおさえることのできなかった玉が32点(第25図)出土している。これらの玉については、左右い



第25図 第1主体部出土ガラス小玉



第26図 第1主体部出土ガラス小玉計測値

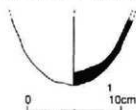
どれかの腕輪の一部であったものと考えられる。

出土したガラス小玉85点の長さの最小値・最大値・平均値は、それぞれ1.7mm・4.3mm・2.9mmを測り、その連結長は24.3cmに及ぶ。また、径の最大値・最小値・平均値は、それぞれ5.5mm・3.7mm・4.3mmを測る。

破砕供獻土器 1の1点のみが、棺の南東部、棺検出面上で出土している。口縁部を欠くが、小型鉢の底部と考えられる。内外面ともユビオサエとナデ調整により仕上げられている(第27図)。

被葬者 先述したように、頭蓋骨と歯が遺存していた。詳細は第4章第1節にゆずるが、骨と歯の分析から、20~30代の成年との鑑定結果が得られている。

時期 時期を検討できるのは、1の土器のみである。しかし、残存状況が良好ではないため、時期の特定は困難である。底部の形態から判断して、庄内併行期以降と考えられる。

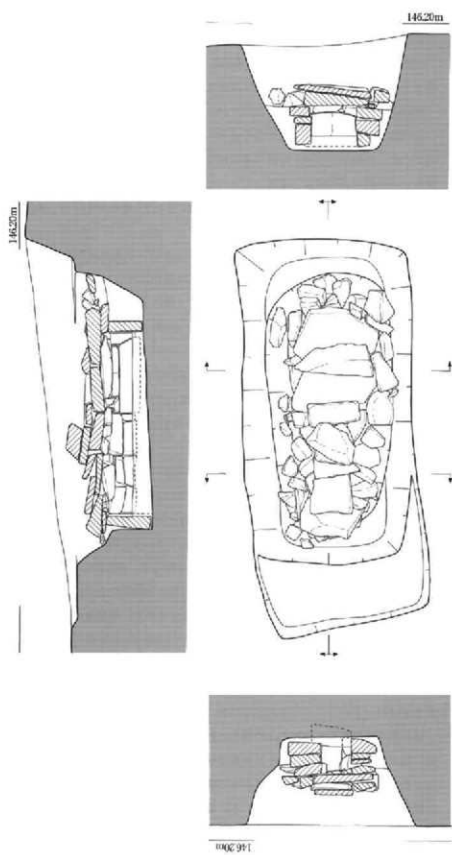


第27図第1主体部供獻土器

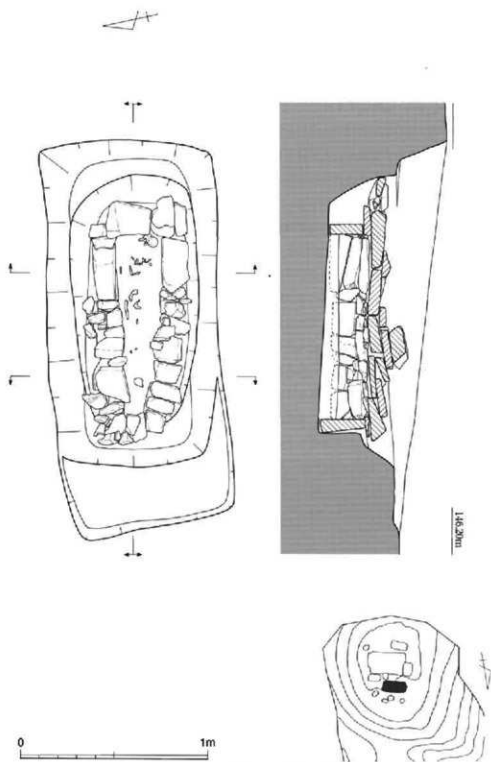
第2主体部

2. 第2主体部 (図版12~17)

- 検出状況** 墳頂部中央、墳丘主軸上のやや北側で検出した。第1主体部の北側、第7主体部の南側に位置するが、いずれの墓坑との切り合い関係も認められず、完存する。
- 墓坑** 平面形は長方形を基本とするが、西辺を中心にわずかに歪んでいる。墓坑の主軸方向は、第1主体部同様、墳丘主軸方向とはほぼ直交する。
- 検出面における規模は、主軸方向で2.05m、その直交方向で90cmを測る。
- 墓坑は、西側と東側は2段に掘り込まれている。西側の段は検出面からわずか5cmである。しかし、墓坑のプランは他の墓坑検出面より深く掘り下げたレベルで確認されたことから、この段は当初はより深かったものと考えられる。東側の段は、東側検出面から25cmのレベルで検出されている。横断・縦断の断面形はとも逆台形を呈し、墓坑最深部における東側検出面からの深さは、65cmを測る。
- 底部はほぼ水平な平坦面をなす。主軸方向で1.20m、その直交方向で50cmを測る。
- 埋葬施設** いわゆる小竪穴式石室を埋葬施設とする。墓坑検出面から10~25cm掘り下げたレベルで、棺の蓋石を検出することができた。
- 頭位** 石室内東側に人骨が遺存していたことから、東側に頭位を求めることができる。
- 規模** 底部を除く、小口・側壁・蓋の5面が石材を用いて石室が組まれていた。石室内面底部における平面形は、頭位側の幅が広い台形を呈する。内法の規模は、頭位側小口で25cm、足位側小口で10cmを測り、主軸ライン上での両小口間の距離は98cmである。そして、その頭位方向はN102°30'Eを指向する。また、蓋石下面から石室底部までの深さは16cm~20cmである。
- 側石** 蓋石よりやや厚み(5~15cm)のある石材が用いられていた。側石の下端は墓坑底とはほぼ一致する。北側壁は、3段に石が積まれていた。石材の長軸を石室主軸方向にし、その側面を石室側面を形成し、その面は直立する面をなす。基底石は4石からなる。頭位側の1石の壁面側の幅は40cmと大きく、他の3石はほぼ15cmと揃えられている。
- 南側壁は、3段に積まれている箇所も認められたが、基本的には2段に積まれていた。頭位側が3段に積まれており、この箇所のみ北側壁と同様に石材の長軸を石室主軸方向と一致させ、幅30cm×5cmの面をもつ板石が積まれていた。逆に足位側は石材の長軸を石室主軸に直交する方向にし、その小口側を内側にして積まれていた。南側壁は、各石相互の間隙が目立ち、北側ほど側面は揃えられていない。
- 石材については、南側長側壁に1石の川原石が用いられている以外は、全て山石が用いられていた。
- 小口石** 頭位側は基本的に30cm×20cmの板状の石材1石を直立させている。ただし、この石の上側に幅4cmの板石を、小口石とは直交させるように水平に、しかも石室内にあたる面が直立する小口石の内側の面とそろそろように積まれていた。これは、蓋石を架けるにあたっての間隙を埋めるための石と考えられる。足位側についても小規模な石材ではあるが、頭位側と同様の積み方が認められた。なお、小口石の下端は、墓坑底とはほぼ一致する。
- また、石材はすべて山石が用いられていた。
- 蓋石** 石材の長軸が石室主軸に直交するように側壁上面に架けられていた。基本的に、幅25~



第2主体部



第28图 10号墳 第2主体部

30cmの石材が5石で石室を覆っている。一部これら蓋石の隙間を覆うように2段に積まれていた。また、これらの蓋石の周囲を取り囲むように、人頭大の角礫が置かれていた。

石材は、蓋石については山石が用いられていたが、蓋石を取り囲む石のなかに川原石が敷石用いられていた。

棺底

棺底は、小口石・長側石を設置する際に約10cm整地された面で、礎・敷石等は認められなかった。棺底はほぼ水平で、平坦面をなす。

石室の構築

小石室の積み上げは、墓坑を掘りくぼめ石を据えるのではなく、石を組む作業と埋め戻す作業を平行しておこなわれている。

施朱

肉眼では観察できなかった。

副葬品

1点(F1)が、棺内底部胸骨付近から出土している(第29図)。刃部を東側小口方向に向け、側石に近接し、このラインとはほぼ平行するように棺底に置かれていた。

下部部を欠くが、ほぼ完形に近い。先端部が例の鋒状に尖るタイプと考えられるが、一部でわずかに鋸状を呈する傾向も認められる。刃部表面中央には錆が認められ、裏面には裏すきが認められるが、その範囲は刃部に限られる。また、刃部下部付近には、細かな布目が若干遺存していた(図版30)。

10.4cm残存し、先端部を除く断面は幅7.5mm、厚さ3mmの長方形を呈する。また、先端部の断面形は三日月状を呈し、中央部の厚さは2mmを測る。

供献土器

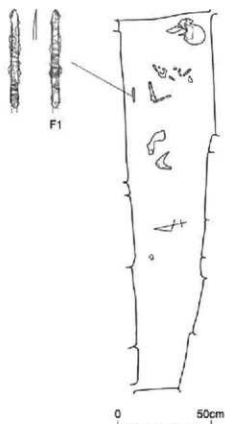
認められなかった。

被葬者

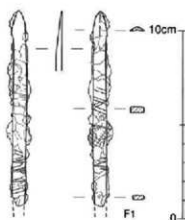
人骨が遺存していたが、状況はよくない。頭骨の一部と、胸部の骨がわずかに残存していた。詳細については、第4章第1節にて報告する。

時期

当埋葬施設に伴う土器が出土していないため、時期を特定することは困難である。



第29図 遺物副葬位置



第30図 第2主体部副葬鉄製品

3. 第3主体部 (図版18)

検出状況 墳頂部の南西部で検出した。第1主体部の南西側に位置する。他の墓坑との切り合い関係は認められず、完存する。

墓坑 平面形は隅門長方形を呈する。その主軸方向は、基本的には第1主体部と同方向であるが、わずかに異なる。

検出面における規模は、長軸方向で2.76m、その直交方向で1.35mを測る。

墓坑の掘削は、縦断方向については西側が2段に掘り込まれている。検出面から6cm掘り下げたレベルで段となっている。断面形は2段とも逆台形状を呈する。横断面については、1段の掘削により掘り込まれ、その断面形は逆台形をなす。墓坑中央部における検出面からの深さは1.20mを測る。

墓坑底は、基本的には平坦面をなす。ただし、墓坑中央部には石棺が埋置されており、小口石および長側石を据える箇所が溝状に墓坑底より1段掘り込まれていた。墓坑底からの深さは、約7cmである。この落ち込みを含めた、墓坑底部の規模は、長軸方向で1.05m、その直交方向で54cmを測る。

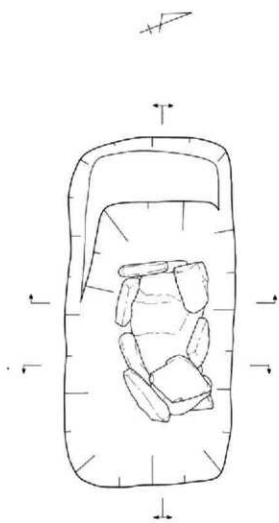
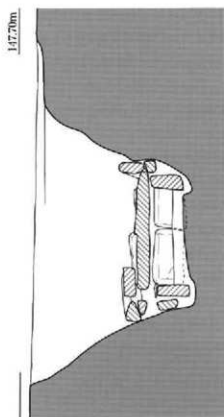
埋葬施設 組合せ式箱形石棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から70~80cm掘り下げたレベルで蓋石を検出した。

石棺 蓋・側壁・小口の3面を板状の石材を用いて石棺が組まれていた。長側石が小口石を挟むように棺が組まれており、棺内底部の平面形は台形を呈する。底部における規模は、西側小口で36cm、東側小口で24cmを測り、西側に頭位が求められる。また、主軸ライン上における小口間の距離は76cmを測り、その頭位方向はN69°00'Wを示す。

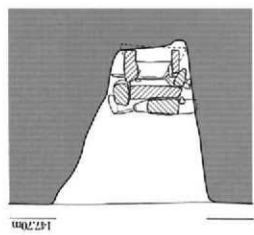
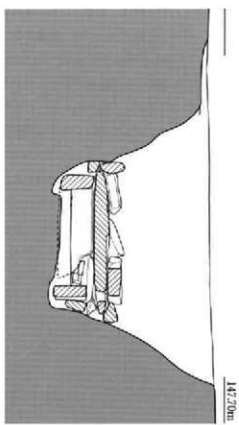
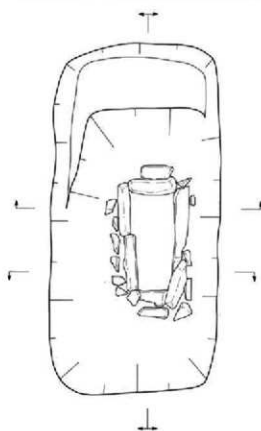
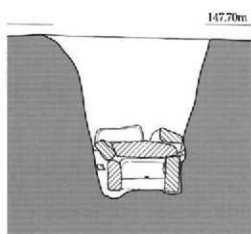
長側石 両側とも2石からなり、石材の長軸を横方向に設置している。また、両側石とも、石材の摩ぎ方は平磨ぎタイプに分類されるものである。ただし、南側はほぼ同規模の石材が用いられているのに対して、北側は頭位側が大きく足位側が小さな石材が用いられている。北側長側石の頭位側の1石が山石を使用している以外は、用原石が用いられていた。



第31図 第3主体部 棺の検出



第32图 10号墳 第3主体部



小口 両側とも1石からなり、石材の長軸を横方向に設置している。両側の石材とも、川原石が用いられていた。

蓋石 板状の山石1石からなる。その規模は93cm×40cmを測り、厚さは10cmである。蓋石の長軸と石棺の主軸方向は一致し、小口石および長側石上面にはほぼ水平に架橋させている。そして、この蓋石を囲むように40cm大の石が置かれていた。蓋石と小口石・長側石の間隙を置ようような置き方である。

石材は、川原石が用いられていた。

棺底 棺底は、小口石・長側石を設置する際に約30cm整地された面で、ほぼ水平な平坦面をなす。底部には、礎敷き・板石などは認められなかった。蓋石下面から棺底までの深さは12cm～16cmを測る。

また、石棺の組み立てにあたっては、一部墓坑を掘りくぼめ石を据えてはいるが、基本的には石棺を組み立てる作業と棺底部の整地が平行しておこなわれている。

施朱 認められなかった。

副葬品 南側長側石の継ぎ目付近の棺内底部から鉤が1点(F2)出土している(第33図)。刃部が頭部小口側に向けられて出土している。棺の主軸方向とは完全には一致しないが、この方向を意識して置かれたものと考えられる。

F2(第34図)は完存せず、基部を欠く。刃部は剣の鋒状に突るタイプで、刃部の上に裏すきを有する。また、刃部には部分的に布目が認められる(図版31)ことから、布に包まれて副葬されていたものと考えられる。断面形は扁平な長方形を呈し、幅は7.5mm、厚さは2.5～3mmを測る。残存長は10.1cmを測る。

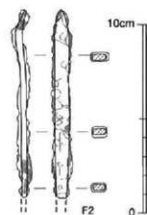
供献土器 出土していない。

被葬者 被葬者を特定する人骨等は遺存していなかった。

時期 時期を特定できる遺物が出土していないため、時期を明確にすることはできない。



第33図 第3主体部遺物副葬位置



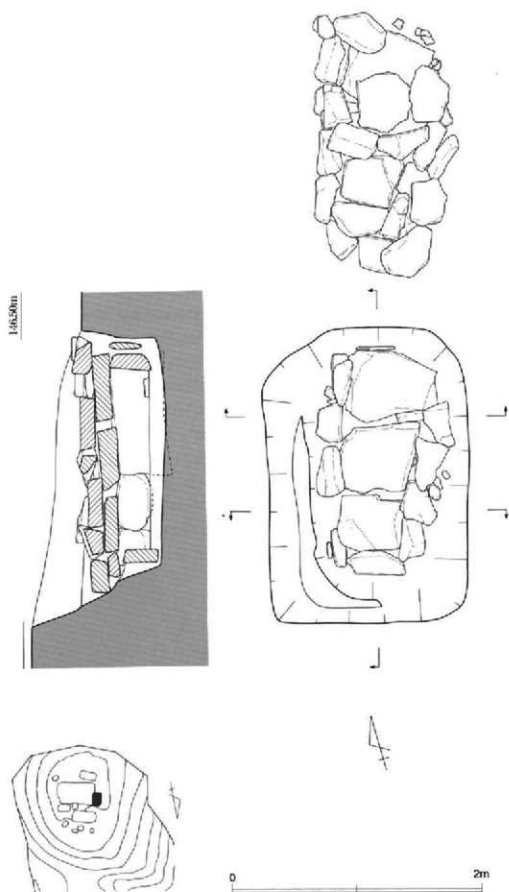
第34図第3主体部副葬鉄製品

4. 第4主体部（図版19～21）

- 検出状況** 墳頂部中央西側で検出した。第1主体部とは切り合い関係にあり、第1主体部を切っている。このため、当墓坑は完存する。当墓は墳頂部上で検出されたものであるが、墳丘斜面への変換点に位置する。このため、検出面のレベルに差が認められた。
- 墓坑** 平面形は隅門長方形を呈し、その主軸方向は当墳丘の主軸方向とはほぼ一致する。検出面における規模は、主軸方向で2.35m、その直交方向で1.60mを測る。墓坑の西側から南側にかけては、検出面から25cm掘り下げたレベルで明瞭な段が認められ、2段の掘削により掘り込まれている。上段・下段の縦断・横断の断面形はいずれも逆台形を指向し、下段は箱形に近い傾向が認められる。墓坑底部中央における検出面からの深さは、南側検出面を基準とすると1.07m、北側検出面を基準とすると66cmを測る。墓坑底はほぼ平坦であるが、長側石を据える箇所については、その石材の大きさに合わせて溝状に掘り込まれている。その深さは、墓坑底部中央から6～15cmを測る。墓坑底部の規模は、長軸方向で1.80m、その直交方向で85cmを測る。
- 埋葬施設** 組合せ式箱形石棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から約20cm掘り下げたレベルで蓋石を検出した。
- 石棺** 蓋・長側壁・小口の5面に石材を用いて石棺が組まれていた。棺底部における平面形は台形を呈する。棺内底部における小口幅は、北側で50cm、南側で32cmを測り、北側に頭位が求められる。また、棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は1.42mを測り、その頭位方向はN15°30'Eを示す。
- 長側石** 西側が3石、東側が2石からなる。いずれも、石材の長軸を横方向に設置し、平継ぎにより組み合わされている。西側は、頭部側に長さ95cmの石材を用い、足位側に45cm・30cmと小規模な石材が用いられていた。東側は、頭部側に1.4m大の石材が、足位側に30cm大の石材が用いられていた。

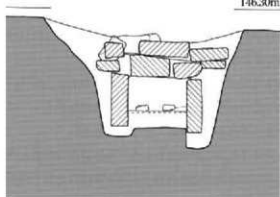


第35図 第4主体部 蓋石の取り上げ

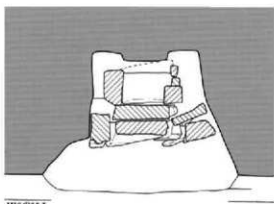
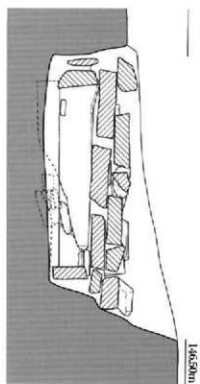


第36回 10号墳 第4主体部

146.30m



146.50m

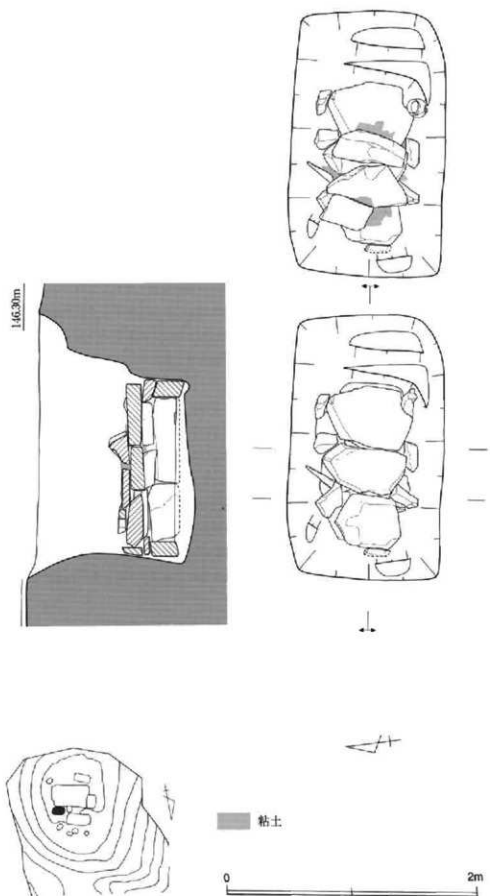


146.90m

- 石材は、両側とも足位側の1石が川原石を用いられていた。他の石材は、山石が用いられていた。
- 小口石** それぞれ1石からなり、両側とも長側石に挟まれている。石材の長軸を横方向に設置している。石材は、両側とも山石が用いられていた。
- 蓋石** 長側石と小口石を覆うように蓋石は2段に架構されていた。下段の蓋石は、板状の石材3石からなる。40cm×50cmから60cm×75cmの板材の長軸を石棺の主軸に直交させ、ほぼ水平に架構させている。下段の3石の蓋石下面は揃えられていた。
- 一方、上段は、下段より小規模な板材または柱状の石材が用いられ、下段の蓋石間の隙間を覆うように置かれていた。そして、第3主体部と同様、これらの蓋石を取り囲むように40cm大の柱状の石材が置かれていた。
- 石材は、全て山石が用いられていた。
- 棺底** 棺底は、小口石・長側石を設置する際に整地された面で、ほぼ水平な平坦面をなす。整地は平均して9～13cm施されていた。底部には、雑敷き・板石などは認められなかった。蓋石下面から棺底までの深さは、頭位側で31cm、足位側で25cmを測る。
- また、頭位側には、2石の平面方形の板石が、頭部と推定される位置に置かれていた。その規模は10cm×10cmと8cm×8cmである。石材は川原石が用いられていた。
- この他、石棺の構築は、一部墓坑を掘りくぼめ石材を据えているが、基本的には石を組む作業・棺底の整地・棺周囲の埋め戻し作業が平行しておこなわれている。
- 施朱** 認められない。
- 副葬品** 全く出土していない。
- 供献土器** 全く出土していない。
- 被葬者** 被葬者を特定できる人骨等は出土していない。
- 時期** 時期を特定できる遺物が全く出土していないため、明確にできない。第1主体部との切り合い関係から、それより新しいことは明らかである。

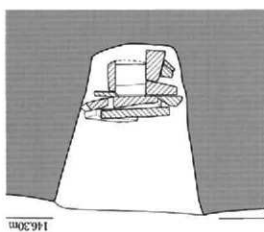
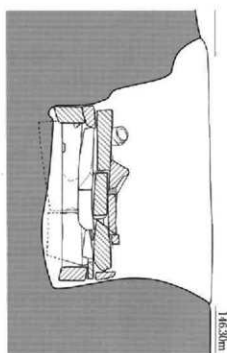
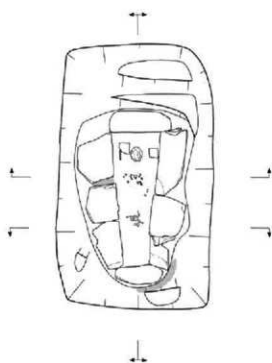
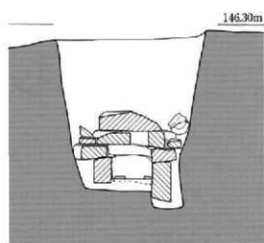
5. 第5主体部 (図版22・23)

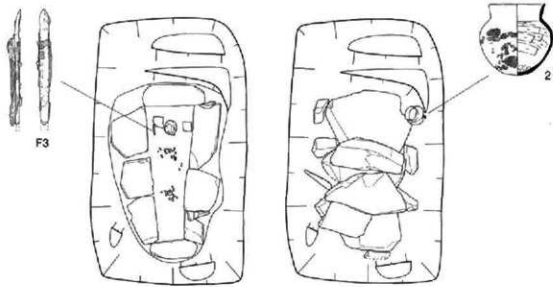
- 検出状況** 墳頂部北東部で検出した。第1主体部の北側、第6主体部の東側に位置する。第1主体部と墓坑掘り方を接するが、明確な切り合い関係は認められず、完存する。
- 墓坑** 平面形は隅田長方形を呈する。検出面における規模は、主軸方向で2.11m、その直交方向で1.24mを測る。その主軸方向は墳丘の主軸方向に直交し、第1主体部とはほぼ平行する。墓坑の掘削は、縦断面東側は3段、西側の1部は2段に掘り込まれていた。東側では、検出面からの深さ22cmと72cmのレベルで段が認められた。西側の段は、検出面から約52cmの深さで認められた。縦断の断面形は、検出面付近で逆台形、底部付近では箱形を呈する。横断面については段は認められず、逆台形を呈する。墓坑底部中央における検出面からの深さは、1.34mを測る。墓坑底は、ほぼ平坦面をなす。ただし、南側長側石を据える箇所については、溝状に掘り込まれている。その規模は、墓坑底部で幅25cm、墓坑底からの深さ13cmを測る。墓坑底部の規模は、主軸方向で1.45m、その直交方向で70cmを測る。
- 埋葬施設** 組合せ式箱形石棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から65cm掘り下げたレベルで、蓋石を確認することができた。
- 石棺** 蓋・長側壁・小口の5面を石材を用いて石棺が組まれていた。
- 規模** 棺内底部における平面形は逆台形を呈し、長側石と小口石の組合せは、各石の間どうしが接する、もしくは小口石が長側石を挟んでいる。棺底部における小口幅は、東側で40cm、西側で20cmを測り、東側に頭位を求めることができる。また、棺底部における主軸ライン上での小口石同士の距離は1.05mを測り、その頭位方向はN97°45'Eを示す。
- 長側石** 両面とも上下2段に積まれていた。下段は、両面とも2石からなり、板石の長軸を横方向にして置かれていた。また、頭位側の石材の方が大きくその長さは70cmを測る。いずれも平置きにより組み合わされている。長側石の下端は墓坑底に5～15cmの整地後、据えられている。上段は、板状の石材を水平にし、その小口面を下段の側面と合わせて一面となるように積まれていた。上段の石は両面とも3石からなり、頭位側ほど大きな石材が用いられていた。いずれの石材も、山石が用いられていた。
- 小口石** 長側石と同様、2段に積まれていた。ただし、上下各1石からなる。その積み方は、長側石と全く同じである。加えて、上段の石の上面は、長側石の上面とはほぼ一致し、小口・側壁各2面の上面はほぼ同レベルとなっている。また、小口石は、墓坑底に2～3cmの整地後据えられていた。特に頭位側小口は墓坑底を溝状に掘り込んで据えられていた。両小口石とも、川原石が用いられていた。
- 棺底** 底部には、礫敷き・敷石等は認められなかった。また、棺底は墓坑底に約7～16cmの整地面を利用している。蓋石下面から底部までの深さは25～28cmである。棺底部には、枕石と施朱が認められた。
- 枕石** 頭骨を取り上げた段階で、頭部の両側に板状の石が置かれていた(巻首図版8)。平面



第37图 10号墳 第5主体部

第5主体部





第38図 第5主体部遺物出土位置

が7~8cmの方形の板石である。足部にはこれに対応する石が認められなかった。石材は2石とも山石である。

蓋石 板材3石からなり、その長軸を石棺の主軸方向に直交させ、ほぼ水平に架橋させている。頭部側の石材ほど大きく、足位側の石材が50cm×40cmに対して、頭位側は70cm×50cmを測る。

また、3石の蓋石間には2ヶ所の継ぎ目があるが、この継ぎ目を中心とした位置の上側に柱状の石材が、その隙間を覆うように置かれていた。さらに、3石の周囲の隙間を覆うように、20cm大の角礎が置かれていた。

いずれの石材も山石が用いられていた。

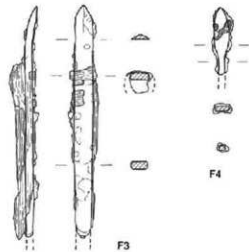
目張り 以上のような石組み後、石材相互の隙間を埋めるように粘土で目張りが施されていた(巻首四版8・図版22)。

棺の構築 以上から、棺底の整地と長側石と小口石の1段目の設置・石棺周囲の埋戻しがほぼ平行して行われ、その蓋石を架橋させている。

施朱 頭部を除く遺体が置かれていた位置で、施朱が認められた。頭部付近については、朱の分布状況から、本来は頭部のあたりにも塗布されていたものが、頭部の腐敗にともない朱が肉眼で認識できなくなったものと考えたい。

副葬品 棺内から鍬(F3)と鉄鍬(F4)の鉄製品のみが出土している。

F3は、頭部北側の枕石の北西隅で刃部



第39図 第5主体部副葬鉄器

第5主体部

を頭側小口方向に向け、北側長側石の基底部のラインと平行して出土している(第38図)。

基部を欠くが、12.4cm残存する。切先は剣の峰状を呈し、平面形は明瞭な三角形をなし、中央部における厚さは3.5mmを測る。

刃部の上に裏すきが認められ、表面中央部には明瞭な錆が認められる。身部は、断面1cm×4mmの長方形をなし、表面には木質が遺存していた(図版31)。また、基部付近には朱の付着も認められた。



第40図 第5主体部供献土器

F4は、その平面的な出土位置を記録することができなかった。棺底から出土していることは明らかである。基部を欠き、残存長は3.6cmを測る。刃部は柳葉形をなし、その長さは2.4cm、最大幅は1cmを測る。刃部の断面は長方形を呈し、明確な刃部を形成していない。その厚さは5.5mmである。基部の断面形は、楕円形に近い。その規模は5mm×6.5mmを測る。

供献土器

墓坑南東隅の蓋石上から、完存する壺(2)が置かれた状態で出土している(巻頭図版8・図版22)。その平面的な位置は頭位左側にあたる。蓋石の日張り後に供献されたものと考えられる。

2(第40図)は、ほぼ球形の体部にやや斜方向に直立する口縁部がつく。体部内面は右方向のヘラ削り、外面はハケ調整が施され、その後口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。また、底部内面はユビおさえにより仕上げられており、指頭圧痕が顕著に認められる。

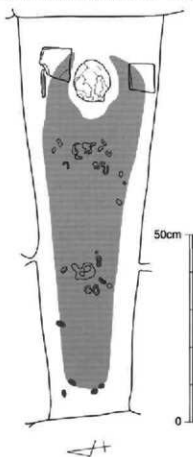
被葬者

棺内には人骨が遺存していた(第41図・巻頭図版8)。しかし、その遺存状況は良好ではなく、前頭骨と歯が遺存するのみであった。また、棺中央部には骨盤らしきものも認められたが、ほとんど腐敗しており、形態をとどめてはなかった。

棺内に遺存していた歯から、3～6歳の小児との鑑定結果が得られている(詳細は第4章第1節)。

時期

供献土器から判断して、庄内併行期と考えられる。

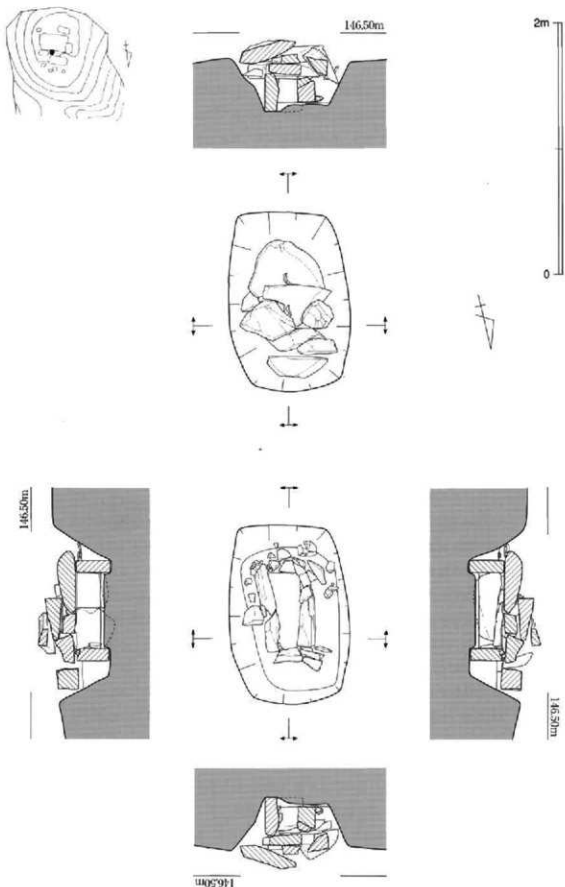


第41図 第5主体部 人骨出土状況

6. 第6主体部 (図版24~27)

- 検出状況** 墳頂部中央で検出した。第1主体部と切り合い関係にあり、第1主体部を切っている。このため、ほぼ完存する状態で検出されている。また、主体部の検出にあたっては、墓坑のプランが墳丘盛土層を掘り下げたレベルで確認されたため、この段階ですでに石棺の蓋石が露出していた。
- 墓坑** 平面形は隅丸長方形を呈し、その主軸方向は、第1主体部に対してほぼ直交する。検出面における規模は、主軸方向で1.43m、その直交方向で96cmを測る。墓坑の掘削は1段で、縦断・横断ともその断面形は逆台形を呈する。墓坑底部中央における検出面からの深さは、40cmを測る。墓坑底部はほぼ平坦面をなすが、西側長側石を除いた3面の設置箇所は、長側石・小口石を据えるため、溝状に1段掘り込まれていた。その断面は逆台形を呈し、墓坑底からの深さは5cmとわずかである。墓坑底部の規模は、長軸方向で90cm、その直交方向で52cmを測る。
- 埋葬施設** 組合せ式箱形石棺を埋葬施設とする。墓坑を検出した面で、すでに石棺の蓋石が露出していた。底部を除く小口・側壁・蓋の5面が石材を用いて棺が組まれていた。長側石と小口石とは基本的には、各石材の隅が接するように組み合わせられていたが、南東隅のみ長側石が小口石を挟むように組まれていた。棺内底部の平面形は、逆台形を呈する。棺内底部での小口幅は、北側で15cm、南側で26cmを測り、南側に頭位を定めることができる。また、棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は60cmを測り、その頭位方向はN167°20'Wを示す。
- 長側石** 西側が1石、東側が2石からなる。両面とも、石材の長軸を横方向に設置している。西側の1石は、幅55cmを測るが、北側小口との間に隙間が目立つ。東側長側石は平継ぎにより組まれていた。頭位側の石の幅は40cmと、足位側の石の30cmよりやや大きめである。いずれの石材も山石が用いられていた。
- 小口** 頭位側・足位側ともに1石からなる。両側ともに、25cm大の方形の板石が用いられていた。両側とも、山石が石材として用いられていた。
- 蓋石** 3段に積み重ねられていた。最下段は3石の板石からなる。板石の長軸を棺の主軸に直交させるように架橋させていた。頭位側の石が最も大きく、棺の約半分を覆っていた。約50cm×60cmの規模である。他の2石は、板石というより柱状を呈する。中段の石は、1石からなるが、下段の足位側の2石よりも大きく、下段の3石間にある2箇所の隙間を覆うように置かれていた。上段の石も1石であるが、中段と下段の隙間を覆うように置かれていた。この他、数石の石が、蓋石と小口石・長側石との隙間を覆うように置かれていた。なお、下段の蓋石下面は揃えられていた。いずれの石材も、山石が用いられていた。
- 棺底** 棺底は水平で、平坦面をなす。底部には、礫敷き・敷石等は認められなかった。蓋石下面から棺底までの深さは、20cmである。

第6主体部



第42图 10号墳 第6主体部

施朱 認められなかった。

副葬品 棺内からは副葬された遺物は出土していない。

破砕土器供献 頭位側の下段蓋石上面および中段蓋石上面から、甕の口縁部の一部が置かれた状態で出土している。特に下段蓋石上面から出土した土器の位置は、ほぼ頭位の真上にあたる。また、蓋石をとり上げた際、小口石・長側石上面とほぼ同じレベルの、頭位側小口を中心とした位置から、頭位を囲むように破砕された甕の破片が出土している(第43図)。いずれも意識的に置かれたものと考えられ、土器の内面を上側にして置かれていた(図版25)。

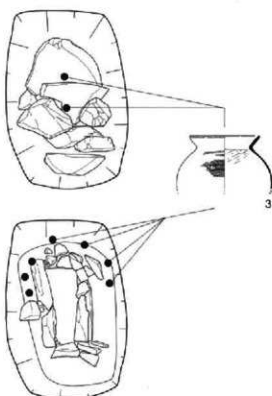
以上の土器は、全て接合関係にあり、1個体の甕(3)に復元することができた(第44図)。ただし、底部を中心とした下半部を欠く。口縁部は、横ナデ調整によりわずかにつまみ上げられている。体部外面は、目の細かいハケ調整、内面は右上がり方向のヘラ削りにより仕上げられている。

以上の特徴から、この土器は布留式傾向甕と判断される。なお、体部中位外面には煤の付着がわずかに認められる。

被葬者 被葬者を特定できる人骨等は遺存していなかった。

ただし、棺の規模から判断して、幼児と考えられる。

時期 棺外出土土器から判断して、布留式初頭と判断される。



第43図 第6主体部土器供献位置

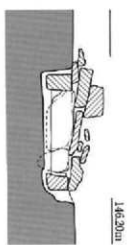
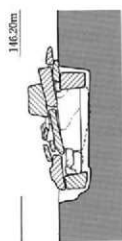
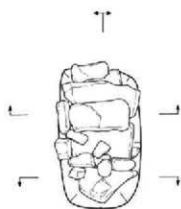
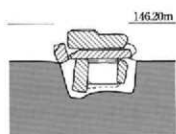
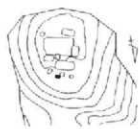


第44図 第6主体部供献土器

7. 第7主体部 (図版28)

検出状況	墳頂部北側で検出した。当墳丘の主軸上にあたる。他の墓坑との切り合い関係は認められず、完存する。
墓坑	平面形は隅門長方形を呈し、その主軸方向は当墳丘の主軸方向とほぼ直交する。 検出面における規模は、主軸方向で1.10m、その直交方向で65cmを測る。墓坑は、基本的に一段の掘削により、横断・縦断の断面形は逆台形状を呈する。わずかに南東隅に段が認められる。墓坑底部中央における検出面からの深さは24cmを測る。 墓坑底はほぼ平直であるが、小口石・長側石を据えるため、西側小口を除いては、墓坑底からわずかに溝状に掘り込まれていた。その深さは、墓坑底からわずかに5cmである。墓坑底部における規模は、主軸方向で93cm、その直交方向で53cmを測る。
埋葬施設	組合せ式箱形石棺を埋葬施設とする。墓坑を検出した面ですでに石棺の蓋石が露出していた。底部を除く、小口・側壁・蓋の5面が石材を用いて棺が組まれていた。石材は、すべて川原石が用いられていた。
規模	棺内底部の平面形は、逆台形を呈する。その小口幅は、西側で23cm、東側で13cmを測り、西側に頭位を定めることができる。西側小口石は長側石とコーナーを接するように、東側は長側石を挟むように組まれていた。また、棺底における主軸ライン上での小口間の距離は、主軸方向で67cmを測り、その頭位方向はN64°45'Wを示す。
長側石	両辺とも1段からなり、それぞれ2石からなる。例外的に、南側長側石の足位側が2段に積まれていた。長側石は両側とも頭位側の石が大きく、石材の長軸を横方向にして置かれていた。他方、北側足位の石は、石材の長軸を縦方向にして置かれていた。頭位側の石材は、45cmから50cmを測る。
小口石	両側とも1石からなる。両側とも、石材の長軸を横方向にして置かれていた。
蓋石	2段に架構されていた。下段は板状の石材3石からなる。幅40cmの石を棺の主軸に直交させるように架構させていた。蓋石の下面は揃えられているが、頭位側の蓋石と小口石の間に厚さ5cmの板石が噛まされており、蓋石の下面は頭位から足位側へと傾斜している。 上段の蓋石は、下段頭位側2石の間隙を覆うように置かれていた。厚さ15cm、幅25cm、長さ45cmと柱状の石材が用いられていた。一方、足位側2石の間隙には、10~20cm程度の垂角礫が敷石置かれていた。他に、蓋石と長側石の間隙にも同様の垂角礫が置かれていた。
棺底	小口石・長側石を設置する際に約6cm整地された面で、ほぼ水平な平面面をなす。蓋石下面から棺底部までの深さは、頭位側で20cm、足位側で15cmを測る。棺底には、礫敷き・敷石等は認められなかった。
施朱	認められなかった。
副葬品	棺内からガラス小玉が1点(J86)出土している(第45図)。棺内埋土中から出土したもので、その正確な出土地点を記録することはできなかった。また、棺内埋土を精査したが、他に出土は認められなかった。
被葬者	人骨等が出土していないため、被葬者を特定できない。棺の規模から判断して、幼児用と考えられる。
時期	時期を特定できる遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。





第46图 10号墳 第7主体部

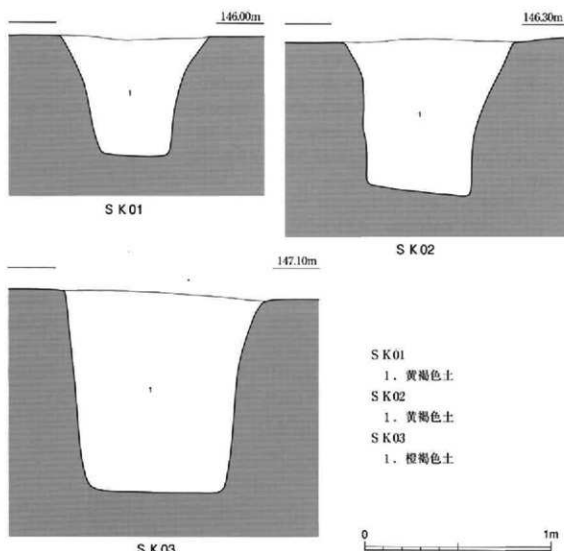
10号墳

8. 土坑

概要

10号墳頂部において、埋葬施設以外に土坑状の遺構を3基（SK01～SK03）検出している。当初、その平面形から土器棺蓋もしくは土坑墓の可能性が高いものと考え、調査を進めていった。しかし、土器は全く出土せず、平面規模と比較してかなり深いことから、埋葬施設の可能性は少ないとの結論に至った。しかし、埋土が他の埋葬施設の埋土と同じであることから、10号墳に伴う遺構と判断し、本項でその概要を報告しておく。ただし、土器が出土していないことから時期を特定することは困難で、他の埋葬施設との具体的な関係については結論付けることはできない。

なお、これらの遺構については、その平面形および断面形から判断して、柱穴の可能性も考えられる。しかし、平面および断面の観察において柱痕は認められず、3基間に明確な規則性が認められないことから、本項では土坑として報告する。



第47図 10号墳 土坑

(1) SK01

- 検出状況** SK02の西側、第1主体部の南側、第3主体部の東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。
- 形状・規模** 平面形は円形に近い楕円形を呈する。長軸方向で80cm、その直交方向で50cmを測る。主軸方向は、西南西—東南東方向を示し、他の埋葬施設の主軸方向とは全く一致しない。断面形は逆台形を呈し、底部は平坦面をなす。検出面からの深さは60cmを測る。
- 埋没状況** 黄褐色土1層からなる。土層観察では、人為的に埋められたのかどうかについては判断できなかった。礫・炭などの混入は認められなかった。
- 出土遺物** 全く出土していない。

(2) SK02

- 検出状況** SK01の東側、第1主体部南東隅の南東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。
- 形状・規模** 平面形は円形に近い楕円形を呈する。長軸方向で1m、その直交方向で90cmを測る。主軸方向は、北北西—南南東方向を示し、他の埋葬施設の主軸方向とは全く一致しない。断面形は箱形に近い逆台形を呈し、底部は平坦面をなす。検出面からの深さは80cmを測る。
- 埋没状況** 黄褐色土1層からなる。土層観察では、人為的に埋められたのかどうかについては判断できなかった。礫・炭などの混入は認められなかった。
- 出土遺物** 全く出土していない。

(3) SK03

- 検出状況** 第2主体部北東隅の北東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。
- 形状・規模** 平面形は楕円形を呈する。長軸方向で1.35m、その直交方向で1.15mを測る。主軸方向は、北東—南西方向を示し、他の埋葬施設の主軸方向とは全く一致しない。断面形は箱形に近い逆台形を呈し、底部は平坦面をなす。検出面からの深さは1.05mを測る。
- 埋没状況** 橙黄色土1層からなる。土層観察では、人為的に埋められたのかどうかについては判断できなかった。礫・炭などの混入は認められなかった。
- 出土遺物** 全く出土していない。

第3節 11号墳

1. 墳丘（図版32～35）

検出状況 10号墳の北側、12号墳・13号墳の南側に位置する。10号墳とは尾根筋に直交するカット部分を、12号墳・13号墳とは幅50cmの区画溝を境としている。墳丘の平面形は長方形を呈すると考えられるが、南西隅については大きく抉られた形となっている。これは、10号墳との境が里道として利用されていたことにも起因すると考えられる。

規模 墳丘の平面形は、南西隅を除くと、精美な長方形を呈する。これは、墳丘裾部がていねいに整形されており、墳裾のラインが明確で、南辺を除く3辺は直線的なことによるものである。特に西側・東側の墳裾は、幅80cmの犬走り状の平坦面をなし、墳裾のラインが明確になっている。この平坦面は水平ではなく、東側・西側ともに、南北方向に約3°の傾斜が認められる。この傾斜は西側・東側ともに同様で、墳裾のレベルも墳丘主軸を中心に両側とも対称的で、同レベルとなっている。以上から、当墳丘は、尾根筋を中心に均等に整形されているものと理解できる。

墳丘の横断面・縦断面は整台形をなす。北斜面・東斜面・西斜面・南斜面の傾斜角は、それぞれ46°、45°、44°、22°を測る。墳丘中央部における標高は143.55mを測り、北側墳裾部との比高は2.30mである。また、墳丘南東隅を通る墳丘主軸と平行するライン上での墳頂部における規模は、長軸方向で18.00mを測り、その直交方向は8.35mを測る。

長軸方向については、南側及び北側の墳裾部の標高がそれぞれ142.10m・140.70mを測り、1.40mの比高差が認められる。

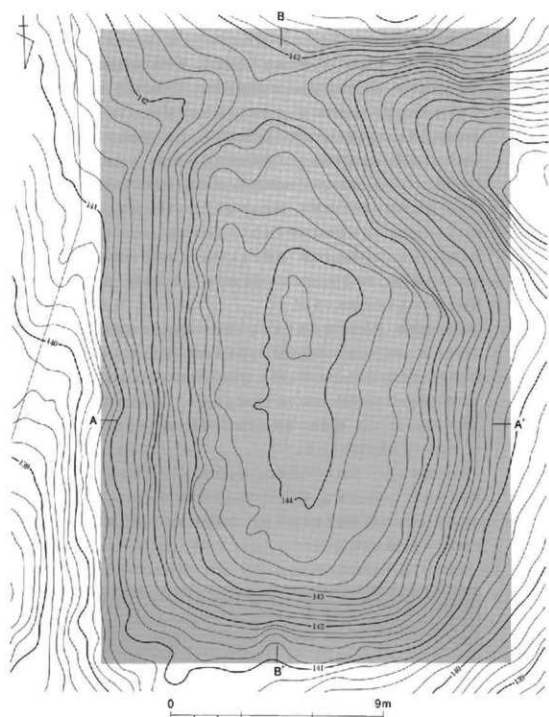
墳裾を基準とした、長軸方向の距離は、最も良好に残存する南東隅付近を通るラインを基準とすると、24.00mを測る。また、その直交方向は14.00mである。

墳丘の構築 墳丘は基本的には尾根筋を削り出すことにより整形されている。調査においては、墳丘北側でわずかに盛土を確認できたにとどまる。その厚さは最大で約30cmを測る。

埋葬施設 墳頂部で7基の埋葬施設を検出した。第1主体部・第2主体部・第4主体部・第5主体



第48図 11号墳 墳丘斜面の検出



第49図 11号墳（調査前）

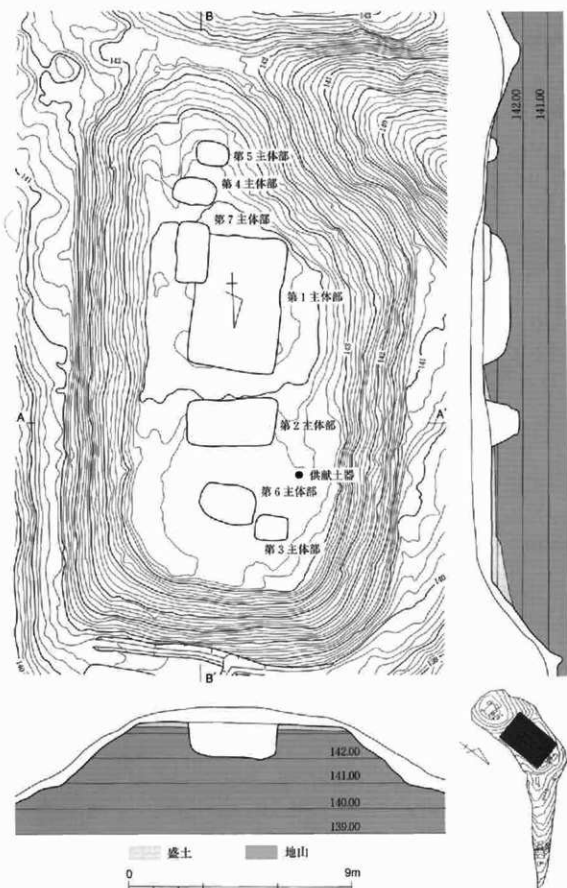
部・第6主体部・第7主体部が木棺を、第3主体部が組合せ式箱形石棺を、それぞれ埋葬施設とする。いずれの埋葬施設とも、その主軸方向は、概ね墳丘の主軸方向と一致もしくは直交する。第1主体部と第7主体部の間には切り合い関係が認められたことから、7基の埋葬施設は同時期のものでないことは明らかである。

なお、墳丘裾部等では埋葬施設は検出されなかった。

時期

各埋葬施設の時期から、庄内平行期から古墳時代初頭に位置付けられる。

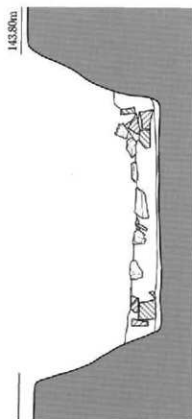
墳丘



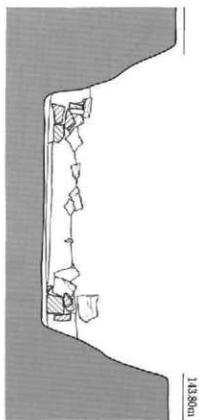
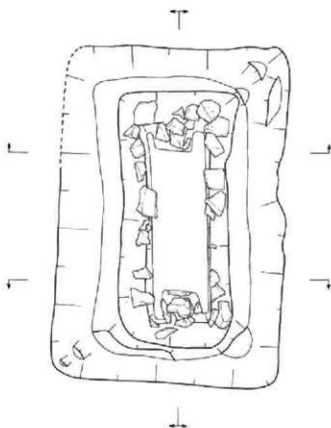
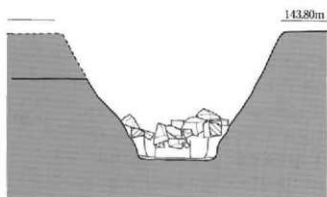
第50図 11号墳 (調査後)

11号墳

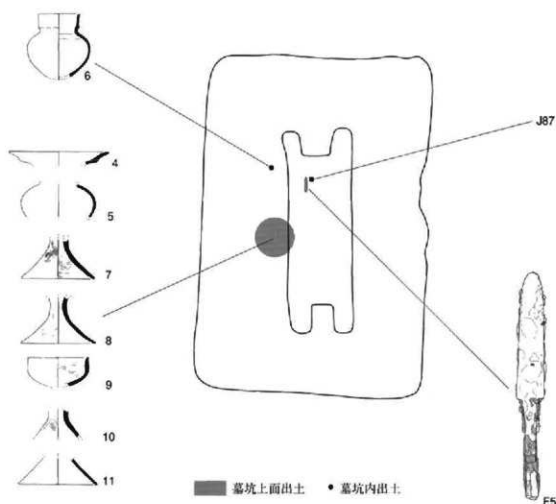
2. 第1主体部 (図版36・37)
- 検出状況** 墳丘中央部やや南よりに位置する。第7主体部と切り合い関係にあり、第7主体部に切られている。この切り合い部分を除いては、完存する。
- 墓坑** 平面形は隅円長方形を呈し、その主軸方向は墳丘の主軸方向とはほぼ一致する。
検出面における規模は、主軸方向で5.30m、その直交方向で3.65mを測る。
墓坑の掘削は、基本的には、1段の掘削により行われている。ただし、北東隅・南西隅において、それぞれ3段・2段の階段状の平坦部が認められた(図版37)。また、北西隅においても平坦部が1段認められた。これらの段は、後述するように、墓坑の深さからみて、ステップとしての機能したものと考えられる。縦断・横断ともその断面形は逆台形を呈する。墓坑底付近では、より垂直に近く掘削され、箱形に近い断面形をなす。また、墓坑底部中央における検出面からの深さは、2.05mを測る。
墓坑底はほぼ水平に近い平坦面をなす。その規模は、主軸方向で3.60m、その直交方向で1.26mを測る。
- 埋葬施設** 木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から平均1.5m掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから、いわゆる「日字形組合せ木棺」と考えられる。
- 小口板** 棺底部における長側板に挟まれた小口板の幅は、南側で60cm、北側で54cmを測り、南側に頭位を求めることができる。また、棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は2.22mを測り、この頭位方位はN173°05'Wを示す。
- 長側板** また、西長側板の長さは2.90m、東長側板の長さは2.95mを測る。小口板との組合せ箇所の外側で検出された長側板底部の幅は、東側で10cm、西側で14cmを測り、この幅が棺材そのものの厚みを示すものと考えられる。
- 棺底** 墓坑底にわずかに4~6cmの整地した面である。



第1主体部



第51图 11号墳 第1主体部



第52図 第1主体部 遺物出土位置

棺底部は平坦で、棺内横断面は箱形を呈する。棺検出面からの深さは40cmであるが、墓坑内土層断面から復元される棺の深さは約62cmである。なお、いわゆる小口穴は認められなかった。よって、底板上に小口板をのせていたものと考えられる。

また、棺の周囲には人頭大の石が置かれていた。棺を組み立てた後、棺を固定するために置かれたものと考えられる。

施朱

認められなかった。

副葬品

棺内底部から玉1点と鉄製品が1点出土している。

玉

ガラス小玉1点(J87)が出土している。短剣の6cm西側の棺底で出土している(第52図)。その出土位置は、頭部の位置にあたる。なお、棺内埋土の精査をおこなったが、ガラス小玉はJ87の1点のみであった。

鉄製品

ほぼ完存する短剣(F5)が出土している。棺底部、棺内北東部で刃先を頭位側小口方向に向け、棺主軸方向とはほぼ平行させて出土している(図版36)。その出土位置から判断して、頭部の横に置かれていたものと考えられる。

F5は長茎式に分類されるもので、全長24.2cmを測る。刃先は弧状をなし、横断面はレンズ状を呈する。剣身長は13.7cmを測り、剣身部中央における幅2.55cmを測る。剣身部中央には鍔は認められず、その断面形はレンズ状を呈する。剣身中央部における厚さは6mm

第1主体部

を測る。また、側身の一部には布の付着が認められた。

胴は直角円であり、胴幅2.9cmを測る。茎は、厚さ3.5mm～3mmの断面長方形をなし、茎尻における幅1.3cm、胴部付近の幅1.9cmを測る。長さは10.5cmを測る。また、木質の遺存により肉眼では観察されなかったが、X線透過写真による観察の結果、径3.5mmの目釘穴が2箇所認められた。なお茎にも、部分的ではあるが、木質の付着が顕著に認められた。

破砕供献土器

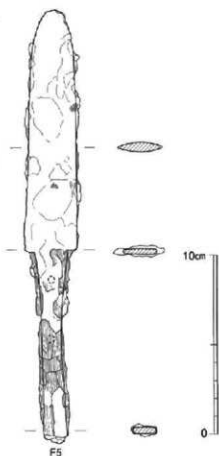
壺・高坏・器台の8個体が出土している。6を除いては、表土層中から出土したものである。その出土位置が、当墓坑の位置と平面的に一致するため、当墓坑に伴うと判断した。その平面的位置は、頭部付近の東側長側板の上にあたる(第52図)。

また、これらの土器の出土状況を見ると、7と8の器台が正立の状態で出土している(第54図)。この出土状況から、これらの土器は、墓坑上面に供献されていたものと判断される。

6については、墓坑内から出土している。

壺

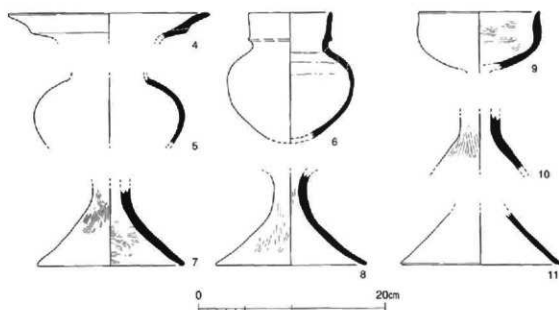
4～6の3個体である。4は、複合口縁壺の口縁部と考えられる。内外面とも、摩滅の



第53図 第1主体部副葬鉄剣



第54図 第1主体部供献土器出土状況



第55図 11号墳 第1主体部供献土器

ため調整方法は観察できない。2.5mm以下の砂粒を多く含む土器である。

5は、体部片である。頸部付近内面はユビオサエにより仕上げられているが、他については摩滅のため観察できない。

6は、小形直口壺である。口縁部は複合口縁をなし、山陰地方の土器の特徴を示す。内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。体部外面は摩滅のため観察できない。内面底部付近には板ナデ調整の痕跡が観察される。底部は残存しないが、丸底をなすものと考えられる。

高坏

9・10の2個体である。9は、坏部がカップ形を呈するもので、口縁部は内外面の横ナデ調整により外反する。坏部内面は横方向のヘラ磨きにより仕上げられている。外面については、摩滅が著しいため良好に観察できないが、わずかにヘラナデ調整の痕跡が認められる。ヘラ磨きの可能性も考えられる。

10は脚部のみ残存する。形態的特徴から判断して、9と同一個体の可能性が考えられる。外面は縦方向のヘラ磨き、内面はナデ調整により仕上げられている。

器台

7・8・11の3個体である。いずれも脚部のみ残存する。ただし、7と11については、その形態から高坏の可能性も否定できない。

7は、外面をヘラ磨き、内面をハケ調整により仕上げられている。8も、外面はヘラ磨きにより仕上げられている。11については、摩滅のため内外面とも調整は観察できない。

埋没状況

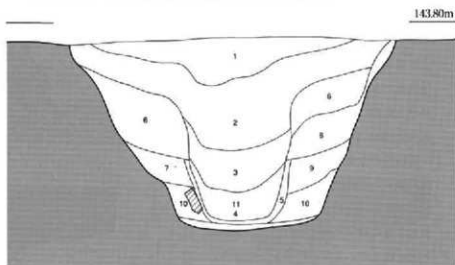
当主体部の調査に際しては、棺内を完掘する段階まで、墓坑内の土層断面を残した状態で調査を行った。このため、当主体部の埋没過程を土層断面を通して観察することができた(第56図)。その過程は以下のとおりである。

①棺を据えるため墓坑底に約6cmの整地を行う(11層)。②棺の設置と平行して、その周囲を土と石によって棺を固定する(7・9・10層)。③棺の周囲に破砕土器供献を行う。④墓坑内を埋めもどす(2~6・8層)。⑤墓坑上に土器を供献する。⑥棺蓋の崩落とともに棺内に土砂が落ち込み、棺の位置を中心に上層の土が落ち込む(第2~4層)。この段

第1主体部

被葬者
時期

階で、③の土器が墓坑内に若干落ち込む（第1層）。
棺内には被葬者を特定できるものは、何も遺存していなかった。
供献土器から判断して、庄内併行期に位置付けられる。



- | | |
|----------------------|----------------------|
| 1. 淡茶褐色土 | 7. 茶褐色土 |
| 2. 茶褐色土 | 8. 茶褐色土(真砂・赤茶岩塊多く含む) |
| 3. 暗茶褐色土 | 9. 暗茶褐色土(赤茶岩塊多く含む) |
| 4. 暗茶褐色土 | 10. 灰色砂(真砂・赤茶岩塊多く含む) |
| 5. 淡茶褐色土(棺痕跡) | 11. 暗茶灰色土(真砂多く含む) |
| 6. 淡褐色土(真砂・赤茶岩塊多く含む) | |

第56図 第1主体部墓坑内断面



第57図 第1主体部 墓坑断面の實測

検出状況

3. 第2主体部 (図版38・39)

墳丘中央部やや北よりに位置する。第1主体部の北、第6主体部の南側に位置する。これらの墓坑との切り合い関係は認められず、完存する。

墓坑

平面形は隅円長方形を呈し、その主軸方向は墳丘の主軸方向とほぼ直交する。検出面における規模は、主軸方向で3.60m、その直交方向で1.88mを測る。

墓坑壁の北側と南側に帯状の段が認められた。両側の段のレベルは異なり、北側の段は検出面から45cmの深さで、南側の段は検出面から1mの深さで検出された。以上から、基本的には2段の掘削によるが、部分的に3段の掘削が行われている。上段・中段の横断面は逆台形を呈し、下段の横断面は箱形に近い。縦断面は逆台形を呈する。

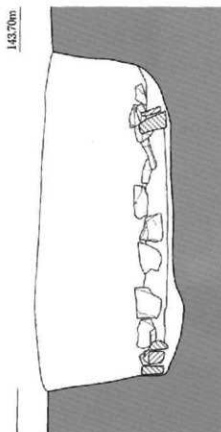
墓坑底はほぼ水平に近く、東側の一部を除いて、平坦面をなす。東側の一部は、浅く土坑状に落ち込んでいる。西側の墓坑底からの深さは約10cmである。墓坑中央部における検出面からの深さは1.20mを測る。また、墓坑底部における規模は、主軸方向で3.00m、その直交方向で1.00mを測る。

埋葬施設

組合せ木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から90cm掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから、いわゆる「H字形組合せ木棺」と考えられる。棺底部における、小口板と長側板の組み合部での小口幅は、西側で50cm、東側で48cmを測り、西側に頭位を定めることができる。また、棺底部における主軸ライン上での小口幅の距離は、2.18mを測り、その頭位方位はN87°30'Wを示す。

長側板

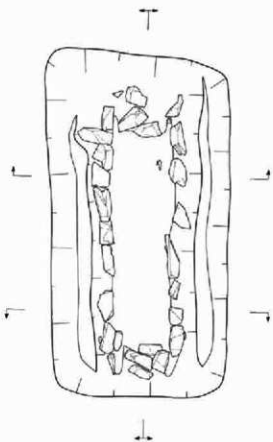
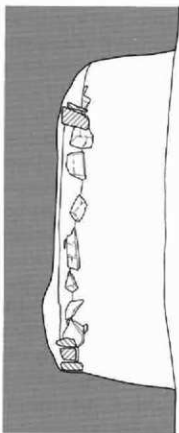
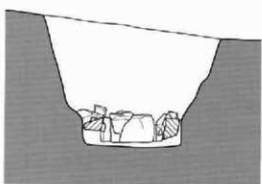
ほぼ平行するが、わずかに西側に開く傾向にある。北側長側板の長さは2.73m、南側長側板の長さは2.74mを測る。小口板の外側で



第58図 11号墳 第2主体部

第2主体部

143.70m



検出された長銅板底部の幅は、北側で5cm、南側で6cmを測り、この幅が棺材の厚さを示すものと考えられる。

棺底

平坦で、いわゆる小口穴は認められなかった。よって、底板上に小口板をのせていたものと考えられる。また、底板を置くにあたっては、墓坑底に約5cmの整地が行われている。

なお、小口板および長銅板の外側には、人頭大の礫が小口板・長銅板のラインに沿うように検出された。棺を組み立てるにあたって、棺材を固定する機能を果たしたものと考えられる。石材は全て山石が用いられていた。

施朱

認められなかった。

副葬品

棺内底部頭位側から鉄族(F6)と鉈(F7)が出土している(第59図・図版39)。

F6は、被葬者頭部の左側で、刃部を頭位側小口に向け、棺の主軸方向とほぼ平行して出土している。有茎式に分類されるもので、身の部分は完存するが、茎部は一部のみ残存する。身と茎の間に環が認められ、茎に対して斜行する。身の平面形は柳葉形を長くしたタイプで短剣に近い。身の全長は8.2cmを測る。また身部は平坦で、中央部には鐮は認められず、断面形は平坦なレンズ状を呈する。中心部における厚さは5.3mmを測る。また、刃部の一部に布の付着が認められる。茎部は2.9cm残存し、周囲には木質の付着が認められる(図版45)。断面は径5.5mmの円形を呈する。

F7は、柄部のみ残存する。残存長7.5cmを測る。断面は、幅9.5mm~8.0mm、厚さ3mmの長方形を呈する。一部に布の付着が認められる。

破碎供獻土器

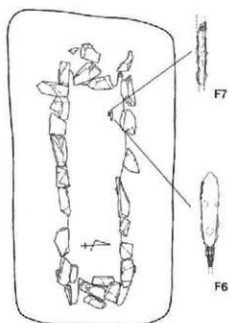
鉢の底部と考えられる1点(12)が出土している(第61図)。内外面ともエビオサエとナデ調整により仕上げられている。棺検出面の棺プラン内で出土していることから、棺に蓋をした際に、棺上に供獻されたものと考えられる。

被葬者

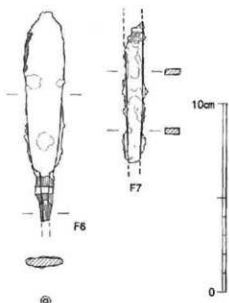
棺内からは、被葬者を特定できるものは遺存していなかった。

時期

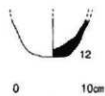
土器が出土しているが、この土器からは、時期を明確にできない。



第59図 第2主体部鉄器副葬位置

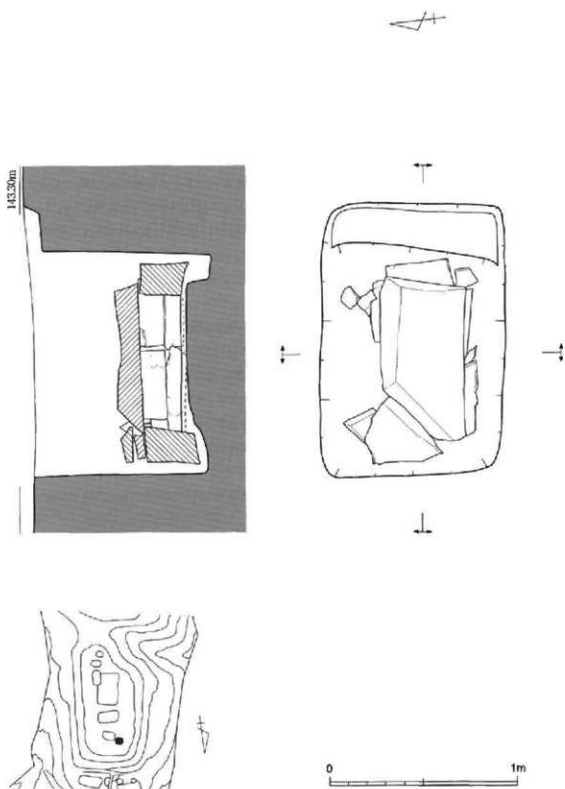


第60図 第2主体部副葬鉄器



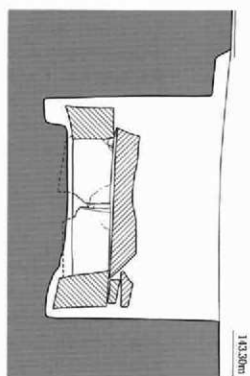
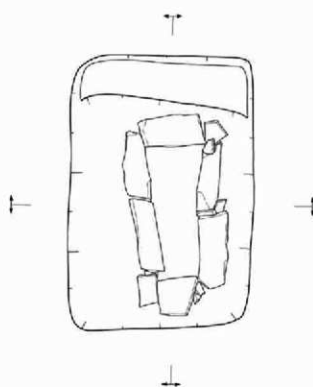
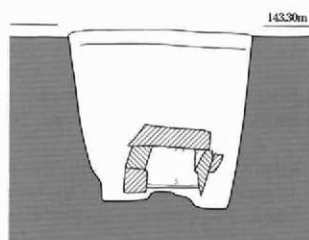
第61図 供獻土器

	4. 第3主体部 (図版40)
検出状況	墳頂部北西隅で検出した。第6主体部の北西に位置する。第6主体部と墓坑を接するが、明確な切り合い関係は認められず、完存する。
墓坑	平面形は隅丸長方形を呈し、各辺とも直線的である。主軸方向は墳丘主軸方向とはほぼ直交する。検出面における規模は、主軸方向で1.44m、その直交方向で1.00mを測る。 墓坑の掘削は、東壁部において2段に掘り込まれている以外は、1段で掘り込まれている。東壁部においては、検出面から8cmのレベルで段が認められた。墓坑の縦断面は箱形、横断面は箱形に近い逆台形を呈し、墓坑中央部における検出面からの深さは、84cmを測る。 墓坑底は、長側石・小口石を据える箇所が溝状に掘り込まれていた。墓坑底部からの深さは5cm~12cmを測り、その横断面は箱形に近い。墓坑底部の規模は、主軸方向で1.16m、その直交方向で66cmを測る。
埋葬施設	箱形石棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から50cm掘り下げたレベルで蓋石が確認できた。底部を除く5面が石材により棺が組まれていた。棺材はすべて山石が用いられていた。
規模	小口石は、頭位側・足位側とも、長側石に挟まれるように組まれており、棺内底部の平面形は逆台形を呈する。棺内底部における小口幅は、東側で33cm、西側で22cmを測り、東側に頭位を求めることができる。また、棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は、72cmを測り、その頭位方向はN84°Eを示す。
長側石	北側は3石、南側は2石の板状の石材からなる。いずれも平縁ぎにより組まれていた。北側長側石は他の2石と比較して小型の石材で、足位側の1石の内面は足位側の小口石と大平を接する。このため、北側長側石も実質的には2石からなる。頭位側の2石は、石材の長軸を横方向にし、2石の内側の面が揃うように置かれていた。南側長側石も石材の長軸を横方向にして置かれ、2石の内側の面が揃うように置かれていた。 なお、他の箱形石棺とは異なり、頭位側に用いられた石材が最も大型ではない点が、一つの特徴として指摘できる。
小口石	東側・西側ともに1石からなる。長側石とは異なり、厚さ16~18cmの柱状に近い石材が用いられていた。
蓋石	基本的には、板状の石材1石からなる。この蓋石の下面は、ほぼ同レベルで水平な面をなす。4辺の上面に架かるように置かれていた。80cm×44cm、厚さ10~12cmと、当石棺のなかでは最も大きな石材である。ただし、この石材は棺の平面形と一致しないため、それを補うように、北西部に板材が置かれていた。
棺底	棺底は、墓坑内に若干(3cm)の整地をした面で、ほぼ水平な平坦面である。蓋石下面から棺底部までの深さは頭位側が23cm、足位側が20cmを測る。棺底部には、礫敷き・敷き石等は認められなかった。
施朱	認められなかった。
副葬品	全く出土していない。その他、棺外・棺上からも遺物は全く出土していない。
土器供献	全く出土していない。
被葬者	石棺内からは、被葬者を特定できるようなものは全く出土していない。
時期	遺物が出土せず、他の墓坑との切り合いも認められないため、時期の特定は困難である。



第62図 11号墳 第3主体部

第3主体部



5. 第4主体部 (図版43)

検出状況 墳丘南東部、第7主体部の南、第5主体部の北側に位置する。これらの墓坑との切り合い関係は認められず、完存する。

墓坑 基本的には隅丸長方形を呈するが、東辺・北辺は弧状をなしている。墓坑の主軸方向は、墳丘主軸方向とはほぼ直交する。検出面における墓坑の規模は、長軸方向で1.80m、その直交方向で1.07mを測る。

墓坑の掘削は1段で、横断面・縦断面ともに逆台形をなす。ただし、南壁・北壁・東壁の一部は抉られており、袋状をなす。墓坑中央部における検出面からの深さは、83cmを測る。墓坑底部は平坦面をなし、その規模は、長軸方向で1.43m、その直交方向で約70cmを測る。

埋葬施設 箱形木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から55cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺底部における小口幅は、東側で30cm、西側で35cmを測る。小口幅のみからは頭位を明確にすることは困難である。棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は、98cmである。その主軸方向は、N101°30'Eを示す。

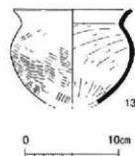
棺底部は平坦面をなし、墓坑底部をそのまま利用している。ただし、棺にあたる箇所の墓坑底部には、わずかながら起伏が認められ、部分的に整地がなされていたものと考えられる。棺内横断面は箱形を呈し、棺中央部における棺検出面から棺底までの深さは、26cmを測る。

施朱 認められなかった。

副葬品 全く出土していない。

破碎土器供献 棺南東部の棺外を中心に出土している(第64図・図版43)。このほか、棺の北西部・南西部からも若干の上器片が出土している。これらの土器が出土したレベルは、棺のプランを確認したレベル(3層上面:第64図)と一致することから、3層上面まで棺を埋めた段階で、破碎土器供献が行われたものと考えられる。

供献された土器は、13(第63図・図版44)の甕1個体である。底部を除いてほぼ完形に復元できる。体部外面はタケキ整形、内面はヘラ削り調整により仕上げられている。内面のヘラ削りは、下半を下から上方向、上半を左から右方向に施されている。体部整形後、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。肩部外面には、わずかに煤の付着が認められる。

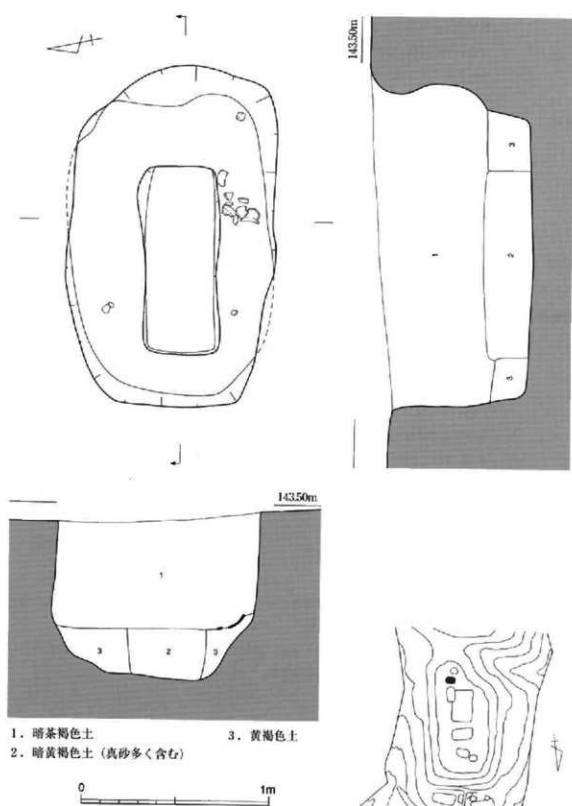


第63図第4主体部供献土器

被葬者 棺内からは、被葬者を特定できるような遺物等は全く出土していない。このため、被葬者の特定は困難である。

時期 供献された土器から判断して、庄内併行期と考えられる。

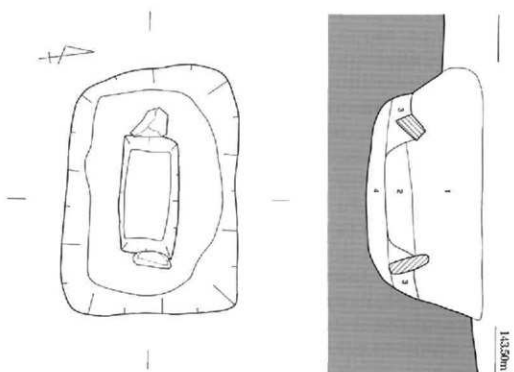
第4主体部



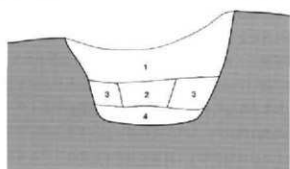
第64图 11号墳 第4主体部

6. 第5主体部 (図版41)	
検出状況	墳丘南東部、第4主体部の南側に位置する。当墳丘の南側は先述したように後世の土地利用により大きく形状を損ねている。当主体部についても、上記の影響を受け、結果として墳丘斜面で検出されている。本来は、他の埋葬施設同様、墳頂部平坦面から掘り込まれていたものと考えられる。ただし、他の埋葬施設との切り合い関係は認められず、平面的には完存する。
墓坑	<p>平面形は隅円長方形を呈するが、一部北西隅が大きく膨れた形状を示している。墓坑の主軸方向は、墳丘の主軸方向に対してほぼ直交する。</p> <p>検出面における墓坑の規模は、主軸方向で1.30m、その直交方向で90cmを測る。墓坑の掘削は1段で、横断・縦断ともにその断面形は逆台形を呈する。墓坑中央部における検出面からの深さは43cmを測る。ただし、北側から南側への傾斜地で検出されたため、北側検出面を基準とすると、墓坑底までの深さは62cmに及ぶ。</p> <p>墓坑底は水平に近い平坦面をなし、その規模は主軸方向で80cm、その直交方向で55cmを測る。</p>
埋葬施設	<p>組合せ木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から約30cm掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。棺底部における小口幅は、西側で21cm、東側で19cmを測り、西側に頭位を求めることができる。また、棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は、46cmを測り、その頭位方向は、$N82^{\circ}30'W$を示す。</p> <p>棺内横断面は逆台形を呈し、棺検出面から棺底部までの深さは13cmを測る。棺底部はほぼ水平な平坦面をなし、墓坑底部を約10cmの整地後(第65図 4層)、棺が埋置されている。また、両小口側には、それぞれ1石の石が小口板に接するように置かれていた。頭位側の石は、整地面から浮いた状態で出土していることから、棺を組み立てるにあたって、小口板を固定したものと考えられる。頭位側は山石が、足位側は川原石が用いられていた。</p>
施朱	全く認められなかった。
副葬品	棺内からは全く出土していない。
土器供獻	全く認められない。
被葬者	被葬者を特定できるような遺物等は全く出土していない。このため、被葬者を特定することは困難である。
時期	当埋葬施設に伴う遺物が皆無な上に、他の埋葬施設との切り合い関係も認められないことから、時期を特定することはできない。

第5主体部



143.50m



1. 黄褐色土 3. 暗茶褐色土
2. 暗黄褐色土(棺内埋土) 4. 茶褐色土

0 1m



第65区 11号墳 第5主体部

7. 第6主体部 (図版42)

検出状況 墳丘北部、主軸ライン上で検出された。第3主体部の南東側に位置するが、墓坑相互の切り合い関係は認められなかった。このため、当埋葬施設も完存する。

墓坑 平面形は長方形を指向するが、北辺・東辺が弧状をなし、かなり歪んだ形状を呈している。墓坑の主軸方向は墳丘主軸方向とほぼ直交する。検出面における規模は、主軸方向で2.24m、その直交方向で最大1.63mを測る。

墓坑の掘削は、北壁が2段掘りの傾向にあるが、縦断・横断とも基本的には1段である。その断面形はいずれも箱形に近い逆台形をなす。墓坑中央部における検出面からの深さは、52cmである。

墓坑底は、ほぼ水平に近い平坦面をなす。その規模は、主軸方向で2.12m、その直交方向で1.07mを測る。

埋葬施設 組合せ木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から7~15cm掘り下げたレベルで蓋石を確認することができた。一見したところは箱形石棺のようであるが、後述するように、蓋石の架構方法・長側石と小口の関係から、組合せ木棺と判断した。

規模 棺内底部の平面形は逆台形を呈する。棺底部における小口幅は、西側で46cm、東側で45cmを測り、小口幅のみからは頭位を判断することはできない。ただし、墓坑の平面形から判断すると、西小口側の幅が広いので、西側が頭位の可能性が高い。

また、底部における小口間の距離は1.37mを測り、その頭位方向はN77°30'Wを示す。

長側石 南側は4石、北側は3石からなる。両側とも、基本的には平縦ぎにより組まれていた。ただし、北側の一部には、側石間に大きな隙間が認められた。

南側長側石は、最も西側の石材を除いては、石材の長軸を横方向にして置かれていた。ただし、これらの石材の大きさが不揃いで、その下端は揃わず、下端のレベルは1石をのぞいては、棺底のレベルより高い位置にあった。また、内側の面も不揃いであった。

北側長側石も、3石とも石材の長軸を横方向にして置かれていた。南側長側石同様、各石材の規模は不揃いであった。また、石材の下端も一定しておらず、そのレベルも棺底のレベルには達していなかった。



第66図 第6主体部 棺の検出

なお、両側の長側石の西側は、西側小口のラインより西側に及んでおり、木棺墓の小口板を側板が挟むタイプと同様の特徴を示している。

また、石材については、北側の西端の1石が川原石である以外は、全て山石が用いられていた。

小口石

東側小口には、5石の石材が置かれていた。棺の内側に接するのは1石のみで、他の石は、その控えのように置かれていた。しかし、棺内に接する1石も15cm×20cmと小規模な石で、小口幅の約1/3程度である。下端は棺底のレベルとほぼ一致するが、上端部は蓋石の下端のレベルには達していない。

西側小口に関しては、塊状の石が3石置かれており、棺内面に接するのは1石のみであった。この石の下端は棺底のレベルには及ばず、蓋石下端のレベルにも達していない。

東側の1石が川原石を用いている以外は、全て山石が用いられていた。

蓋石

6石からなる。いずれも板状の石材を、その長軸が棺の主軸方向に直交するように置かれていたが、他の石棺とは異なり、両長側石に架橋されているのは、西部の1石のみである。最も東側の1石は、小口に架かるように置かれていた。中央部の4石は、2石がセットで、それぞれ片側の長側石にかかるように置かれていた。そして、検出した段階では、これら4石は棺内に落ち込むような状況であった(図版42)。

なお、石材は全て山石が用いられていた。

棺底

棺底は、墓坑底にわずかな整地(1.5~4cm)した面である。棺底は平坦面をなし、東側にわずかに傾斜している。蓋石下端からの深さは頭位側が27cm、足位側が20cmを測る。

木棺

以上のような、小口・側石・蓋石の状況から判断して、当埋葬施設を箱形石棺とは考えがたい。特に、小口石・側石については、組合せ木棺の控えの役割として機能していたものと考えられる。加えて、両側小口部の長側石と小口石の間に隙間が認められる。および、東側の同様の位置にも隙間が認められる。以上の状況から判断して、調査では明らかにすることはできなかったが、「H字形組合せ木棺」の可能性が高い。また、蓋石についても、その置き方から判断して、木棺の蓋の上に置かれていたものと考えられる。

施朱

全く認められなかった。

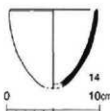
副葬品

棺内からは全く出土していない。

破碎供献土器

棺内と棺外から土器が出土している。両者は接合関係にあり(第67図 14)、棺内から出土した破片については、木棺が朽ちた際に棺内に落ち込んだものと考えられる。したがって、棺の蓋の上に置かれていたものと考えられる。

14は小型の鉢で、底部を欠くが、尖り底に近い形態をなすものと考えられる。内外面ともナデ調整により仕上げられている。第67図第6主体部供献土器

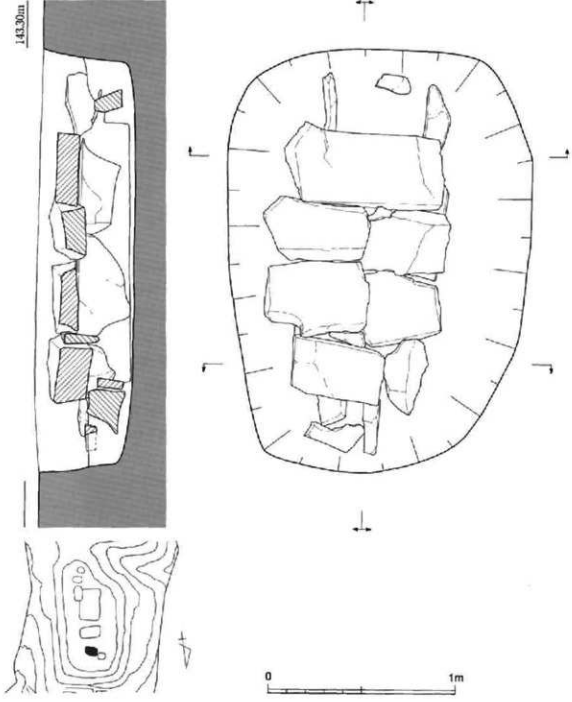


被葬者

棺内からは、被葬者を特定できるようなものは全く出土していない。

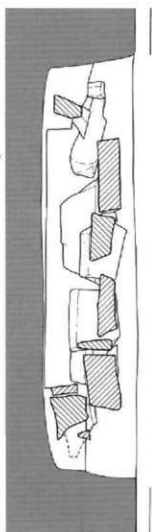
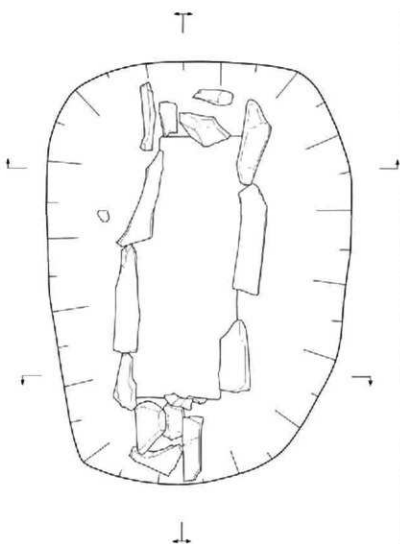
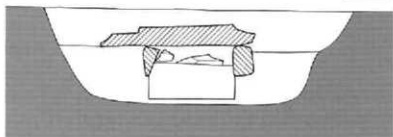
時期

出土土器から判断して、庄内平行期もしくはその直後の時期と考えられる。

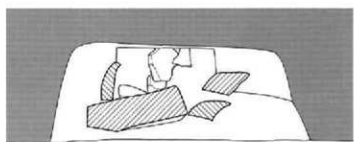


第68图 11号墳 第6主体部

143.30m

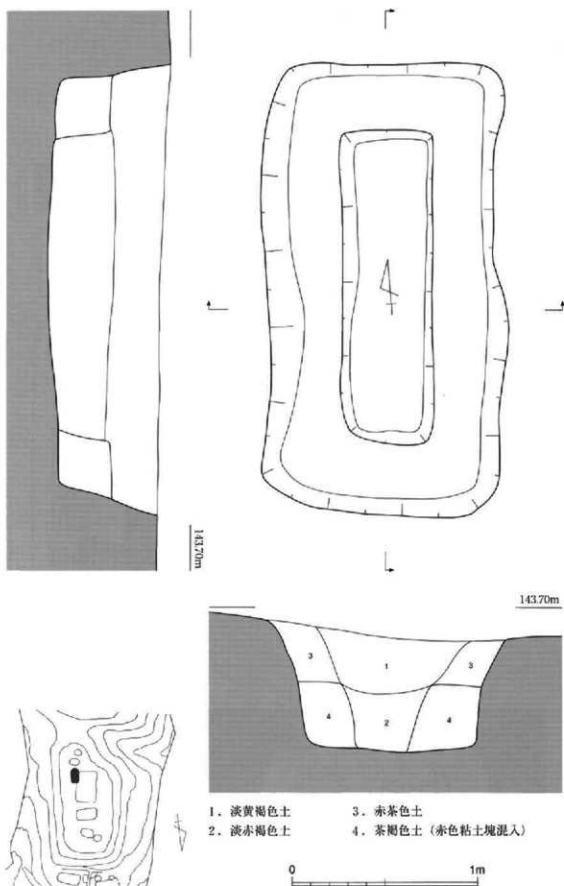


143.30m



143.30m

11号墳



第69图 11号墳 第7主体部

8. 第7主体部 (図版43)

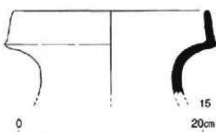
検出状況	当墳丘南東部で検出した。第1主体部と切り合い関係にあり、第1主体部の墓坑を切っている。このため、当墓坑は完存する。
墓坑	平面形は隅円長方形を呈するが、東西の長辺は全体的に歪んだ傾向にある。墓坑の主軸方向は、墳丘の主軸方向とはほぼ一致する。検出面における規模は、長軸方向で2.40m、その直交方向で1.18mを測る。 墓坑は、縦断・横断ともに1段の掘削により、その断面形は逆台形を呈する。ただし、縦断・横断とも、底部に近いほどその断面形は箱形に近い傾向にある。墓坑底部中央における検出面からの深さは60cmを測る。また、墓坑底部は平坦で、その規模は、長軸方向で2.15m、その直交方向で90cmを測る。
埋葬施設	組合せ木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から30cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺の平面形は長方形を呈する。棺底部における小口幅は、北側で78cm、南側で32cmを測り、北側に頭位を求めることができる。また、棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は、1.55mを測り、その頭位方向はN5°Eを示す。棺底部は墓坑底部と一致し、棺中央部における棺検出面からの深さは、35cmを測る。
施朱	全く認められなかった。
副葬品	全く出土していない。
土器供献	全く認められなかった。
被葬者	棺内には被葬者を特定できるものは全く遺存していなかった。
時期	遺物が全く伴わないが、第1主体部との切り合い関係から庄内併行期以降と考えられる。

9. その他

検出状況	第2主体部の北西、第3主体部の南西部の墳頂部において、土器1個体(15)が潰れた状態で出土している(第70図)。この土器は明確な遺構に伴うものではない。土器棺の可能性も考えられるが、本章第5節で報告する13号墳第3主体部の土器棺の検出状況から判断すると、墳頂部に供献された土器の可能性が高いと考えられる。その当否は後に譲るとして、ここではその土器を報告しておく。
出土土器	15の壺(第71図)は、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。特に口縁部の屈曲部外面は、横ナデ調整によりかなりシャープに仕上げられている。頸部内外面については摩滅のため観察できない。
時期	供献土器から判断して、庄内併行期と考えられる。



第70図 土器供献状況



第71図 11号墳 墳頂部供献土器

第4節 12号墳

1. 墳丘 (図版46)

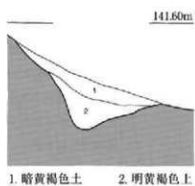
検出状況

11号墳の北側、13号墳の東側、14号墳の南西側に位置する。梅田東古墳群の立地する尾根筋が、南北方向から南西—北東方向に屈曲する位置にあたる。調査開始時点においては、当墳については周知されておらず、調査前の地形観察においても明確ではなかった。

周囲の3基の墳丘墓とは、溝によって区画されている。墳丘は、後世の掘削等は受けておらず、ほぼ完存する。

区画溝

11号墳との境は、ほぼ直線的な溝によって区画されている(第73図)。東端は自然に収束し、西端は13号墳を区画する溝に切られている。11号墳は他に同様の溝を伴わないことから、当溝は11号墳に伴うものではなく、12号墳の構築にあたって掘削されたものと考えられる。加えて、当溝は明らかに11号墳の墳形を意識して掘削されたもので、このことから当墳は11号墳に後続するものであることは明らかである。検出面における幅12mを測り、横断面は緩やかなU字形をなす。溝中央部における検出面からの深さは30cmである。



1. 暗黄褐色土 2. 明黄褐色土

0 1m

第72図 12号墳区画溝断面

なお、13号墳・14号墳との境をなす区画溝については、後述するように(第3章第5節・第6節)、当墳丘墓に直接伴うものではない。

墳丘の構築

墳丘の形状は、11号墳と比較して、明瞭な形状を示さない。これは、①当墳丘の構築にあたっては、自然地形を利用したもので、顕著な削り出し等の整形作業が行われていない、②南側についても、墳丘の整形がなされておらず、明確な墳裾部もしくは傾斜変化点が認められない状況であった、ことによるものと考えられる。

以上の特徴から、当墳丘は、11号墳構築により形成された平坦部と尾根屈曲部にあたる自然地形を最大限に利用して造られたものと考えられる。

規模

当墳丘の平面形は、墳頂部の平面形を考慮に入れると、ほぼ長方形を指向していたものと考えられる。墳頂部における規模は、東西方向で約7.5m、南北方向で3.4mを測る。また、墳丘中央部における標高は140.6mで、11号墳墳頂部北端との比高は2.7mである。

さらに、11号墳・13号墳との区画溝、墳丘北側および東側のわずかな傾斜変化点をもとに墳丘の規模を測ると、東西方向で9.20m、南北方向で6.00mとなる。

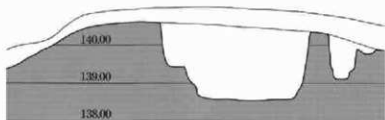
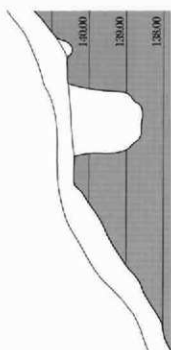
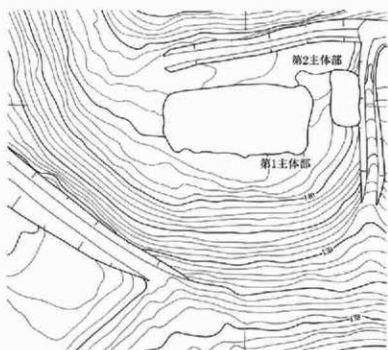
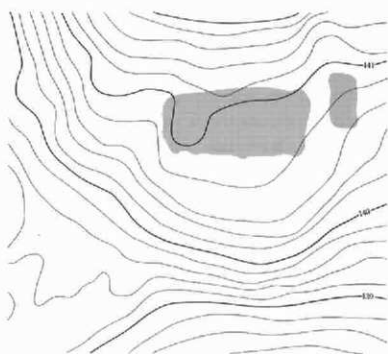
埋葬施設

当墳丘に伴う埋葬施設は2基である(第1主体部・第2主体部)。2基ともに木棺を埋葬施設とする。これらの埋葬施設の主軸方向は、第1主体部は墳丘の主軸方向と一致し、第2主体部は直交する。

時期

当墳丘に伴う土器はわずかである。11号墳・13号墳・14号墳との構築順序から判断して、庄内併行期以降と考えられる。

墳丘



第73图 12号墳

2. 第1主体部(図版47~49)

検出状況 墳丘のほぼ中央部で検出した。第2主体部の東側に位置するが、第2主体部との切り合い関係は認められず、完存する。

墓坑 平面形は隅円長方形を呈する。ただし、東辺については、弧状を呈しやや歪んでいる。また、西辺についても、主軸方向に対して斜行している。墓坑の主軸方向は、墳丘の主軸方向とはほぼ一致する。その規模は、主軸方向で3.90m、その直交方向で1.85mを測る。

墓坑の掘削は、東辺のみ2段に掘削されている。東側検出面から1.10mのレベルで幅45cmの段が削り出されている。その他、墓坑底部は棺を据える位置を中心に、1段深く掘り込まれている。

以上から、横断面は、墓坑底部の掘り込みを除くと、U字形を呈する。また底部の掘り込みの横断面は、逆台形を呈する。縦断面については、箱形に近い逆台形をなす。墓坑底部中央における検出面からの深さは、2mである。

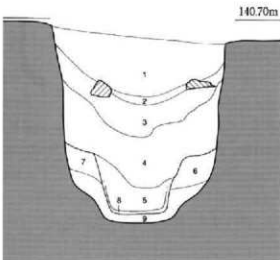
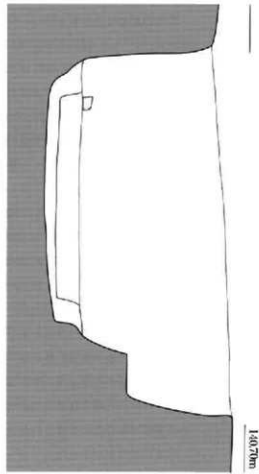
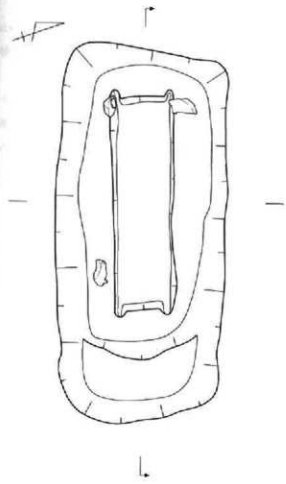
墓坑底部は、ほぼ水平な平坦面をなすが、横断のラインはわずかに弧状を呈している。その規模は、主軸方向で2.60m、その直交方向で70cmを測る。

埋葬施設 組合せ木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から1.5m掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組み合わせから、いわゆる「日字形組合せ木棺」と判断することができる。

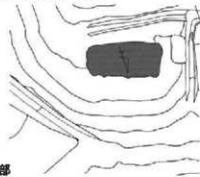
長側板と小口板の組み合わせ部における、棺底部での小口幅は、西側で47cm、東側で41cmを測り、西側に頭位を求めることができる。これを裏付けるように、棺内の西側に歯が出土している。また、棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は、2.10mを測り、その頭位方向はN73°10'Wを示す。



第74図 第1主体部 墓坑横断面の実測



1. 黄褐色土
2. 黄褐色土 (真砂多く含む)
3. 暗黄褐色土
4. 茶褐色土 (真砂多く含む)
5. 黄褐色土 (真砂多く含む：棺内埋土)
6. 黄褐色土 (真砂多く含む)
7. 黄褐色土
8. 淡黄褐色極細砂 (柏痕跡)
9. 暗黄褐色土 (真砂多く含む)



第75図 12号墳 第1主体部

棺の横断面は逆台形を呈し、棺検出面から棺底部までの深さは、棺中央部において25cmを測る。ただし、棺底部のレベルは微妙に傾斜しており、頭位側はわずかに高くなっている。さらに、土層断面の観察（後述）では、棺の深さは少なくとも60cmには及ぶ。

また、南側長側板および北側長側板の長さともに2.40mである。そして、土層断面から復元される棺材の厚みは3cmである。

埋没状況

墓坑内は、棺を設置した際に埋められた層（Ⅰ層：6・7・9層—第75図）、棺を埋める際に埋めた層（Ⅱ層：2～5層—第75図）、棺内埋没後の堆積層（Ⅲ層：1層—第75図）の大きく3層からなる。

また、平面的には検出できなかったが、墓坑内の土層観察では、Ⅰ層とⅡ層の境で棺の痕跡を確認することができた（第75図 8層）。これによると、棺の深さは60cmと復元できる。この深さは、Ⅲ層最深部の深さと一致する。このため、2層についてはⅡ層の一部と判断した。したがって、埋葬直後は、2層と3層の一部が地表面をなしていたものと考えられる。このため、3層上面で出土した2つの石については、棺側部の上方にあたることから、墓標としての機能を果たしていたものと考えられる。さらには、この2石を固定するために2層が整地されたものと考えられる。

なお、Ⅰ層の観察結果から、墓坑底部に9層を整地後、棺を設置していることが理解できる。さらにⅡ層を埋めるにあたっては、頭位側の小口板と長側板の組み合わせ部に数石の石が認められた。これらの石によって棺を固定したものと考えられる。

施朱

全く認められなかった。

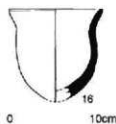
副葬品

棺内に副葬された遺物は認められなかった。

破砕土器供献

棺外から鉢1点（16）が出土している（第76図）。この土器は、墓坑内の棺より上のレベルから出土した破片と、当墓坑を検出する段階の表土層中から出土した破片との接合資料である。両者の接合関係から判断して、この土器は、棺に蓋をし墓坑内を埋めた段階で、墓坑上面に供献されたものと考えられる。

16は、底部を欠く個体で、体部は内外面ともナデ調整により仕上げられている。この後、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。



第76図 供献土器

被葬者

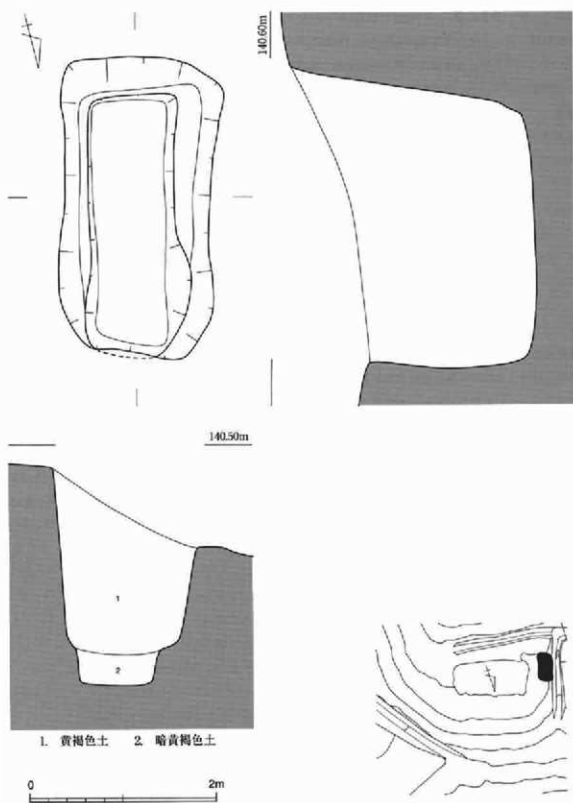
棺内底部よりわずかに上のレベルで歯が9本出土している。これらの歯の分析から、被葬者は壮年との鑑定結果が得られている（第4章第1節）。ただし、性別については特定できなかった。

時期

墓坑上面に供献された土器から判断して、庄内併行期から布留式初期にかけての時期と考えられる。

3. 第2主体部 (図版46)

- 検出状況** 墳丘西端部に位置する。当墳丘の西側斜面で検出した。第1主体部の西側に位置するが、第1主体部との切り合い関係は認められない。ただし、13号墳を区画する溝とは接している。墓坑をそのものは、ほぼ完存する。
- 墓坑** 平面形は隅田長方形を呈するが、全体的に各辺ともに直線的ではなく、歪んだ形態をなす。主軸方向は、第1主体部とはほぼ直交する。検出面における規模は、主軸方向で1.56m、その直交方向で78cmを測る。
- 墓坑の掘削は、横断は2段で、縦断は1段で行われている。横断については、東側検出面から95cm、西側検出面から53cmのレベルで段が認められるが、明瞭な平坦面は認められなかった。棺の規模に合わせて掘り込まれたものと考えられる。縦断・横断とも、その断面形は箱形を呈する。特に北壁は、わずかに傾斜する傾向が認められる。墓坑中央部における東側検出面からの深さは、1.16mを測る。
- 墓坑底部はほぼ水平な平坦面をなし、その平面形は長方形をなす。主軸方向で1.27m、その直交方向で37cmを測る。
- 埋葬施設** 棺材そのものはもちろんのこと、棺の痕跡も確認できなかった。しかし、墓坑の下段が棺の規模に近いものと考えられ、その断面形が箱形を呈する。さらに、墓坑底部が平坦であることから、木棺墓と判断した。したがって、棺材の組み合わせ方法までは明確にできないが、箱形木棺の可能性が高い。いわゆる「H字形組合せ木棺」でないことは明らかである。
- 墓坑下段底部の規模が棺の規模を表すものと考えられる。したがって、北側小口・南側小口の幅がそれぞれ37cm・40cmを測ることから、南側が頭位の可能性が考えられる。また、小口間の距離は1.27mを測り、その頭位方向はN14°Eを示す。さらに、墓坑下段の深さが16cmを測ることから、棺の深さは少なくとも16cm以上と考えられる。
- 施朱** 全く認められなかった。
- 副葬品** 棺内はもとより、墓坑内からも全く出土していない。
- 土器供献** 認められなかった。
- 被葬者** 被葬者を特定できるようなものは全く出土しなかった。
- 時期** 当埋葬施設に伴う遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。



第77图 12号墳 第2主体部

第5節 13号墳

1. 墳丘 (図版50・51)

検出状況

11号墳の北、12号墳の西側に位置する。両墳とは鍵形に屈曲する溝により境をなしている。当墳の北側・西側については、明確な整形の痕跡は認められず、尾根斜面をそのまま利用している。このため、当墳の墳形は明確な形状をなさず、わずかに南側と東側にその範囲を捉えられるにすぎない。

区画溝

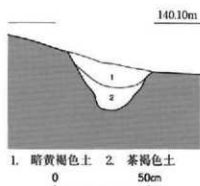
当墳の東側から南側にかけて、南北方向と東西方向に鍵形に屈曲する溝である。東辺をなす溝は、12号墳の区画溝を切る形で掘削されている。この溝の北端部は、屈曲部から約4.5mのあたりで小規模な谷状の窪地となり、不明瞭となっている。

東西方向についても、屈曲部から西側へ約2mの地点までしか溝の北側肩部は確認できず、その延長上では、屈曲部から4mの地点まで溝の南側肩部が確認できるとどまる。

横断面は、南北・東西両方向とも皿形もしくは逆台形を呈し(第78図・図版51)、検出面における幅は45cmを測る。また、最深部における検出面からの深さは、25cmである。

規模

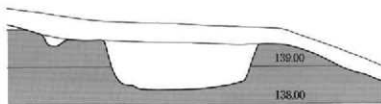
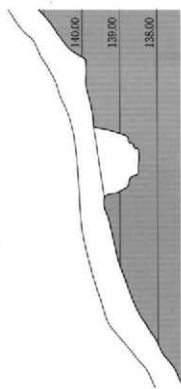
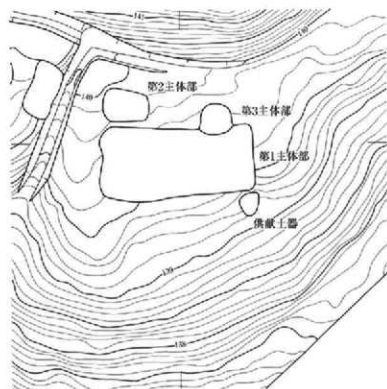
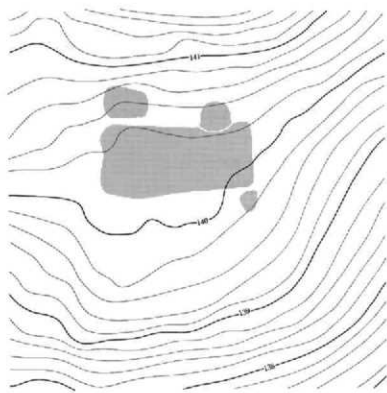
上述したように、墳丘形態が不明確なため、その規模・平面形については明確にしがたない。平面形については、東側と南側が直線的な溝で区画されていることから、方形もしくは長方形を指向していたものと考えられる。



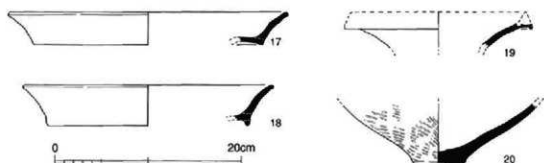
1. 暗黄褐色土 2. 茶褐色土
第78図 13号墳区画溝断面



第79図 13号墳の調査



第90図 13号墳



第81図 区画溝出土土器

区画溝をもとに墳頂部の規模を復元すると、南北方向で約5.5m、東西方向で約6mを測る。検出面での墳丘中央部南側における墳頂部の標高は139.90mで、11号墳墳頂部北端との比高は3.4mを測る。また、12号墳頂部の標高と比較すると、約70cm低くなっている。

埋葬施設

3基の埋葬施設を検出した(第1主体部～第3主体部)。第1主体部と第2主体部は組合せ木棺を、第3主体部は土器棺を埋葬施設としている。このなかで、第1主体部と第3主体部との間に切り合い関係が認められた。

この他、第1主体部の北西側の北側で、土器1個体分が出土している。本項では、墳頂部への供献土器として報告する。

出土遺物

12号墳との境をなす区画溝およびその北側の谷部から若干の土器が出土している。墓坑上に供献された土器の可能性が考えられるが、どの墓坑に伴うのかについては明確にできない。さらには、墳頂部に供献された土器の可能性も考えられる。ただし、その出土位置から判断して、当墳に伴うことは明らかである。よって当節で報告することにする。

図化できたのは4個体であるが(第81図・図版55)、19を除いては壺形土器と考えられる。17と18は複合口縁壺の口縁部で、両個体とも内外面を横ナデ調整により仕上げられている。20は底部から体部にかけての個体である。外面はタタキ整形後部分的にナデ調整により仕上げられている。内面については、摩滅のため観察できない。

19については、壺の可能性も否定できないが、本報告では器台として報告する。外面はナデ調整により仕上げられているが、内面は摩滅のため調整は観察できない。

時期

土器棺および第1主体部北西隅付近から出土した土器、および墳頂部への供献土器などから判断して、庄内併行期～布留式前半と考えられる。

2. 第1主体部 (図版52・53)

検出状況 墳丘のはほぼ中央部に位置する。第3主体部と切り合い関係にあり、これに切られている。このため、当主体部南西部の墓坑の一部を欠く。また、当主体部は墳丘のはほぼ中央部に位置するが、検出面は北側へ傾斜している。

墓坑 平面形は隅円長方形を指向するが、南辺を中心にながみ顕著である。一方、北辺および東西両辺の北側はほぼ直線的である。墓坑の主軸方向は、墳丘主軸方向とほぼ一致する。検出面における規模は、主軸方向で4.00m、その直交方向で1.80mを測る。

墓坑の掘削は、棺を埋置する位置を中心に2段に掘り込まれている。ただし、北辺の一部には段が認められず、掘削は1段で行われている。段は、墓坑南側検出面から95cmのレベルで検出されたが、その幅は10cm~15cmとわずかである。

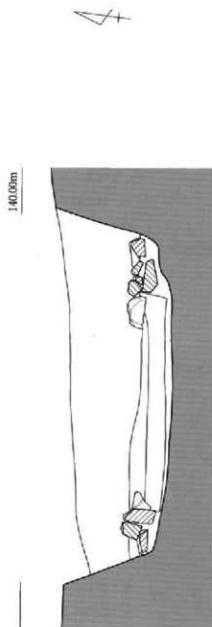
縦断・横断の上段・下段ともその断面形は逆台形をなす。また、墓坑中央部における南側検出面を基準とした深さは、1.25mを測る。

墓坑底部は、わずかな凹凸は認められるものの、基本的には平坦に掘削されている。墓坑底部の規模は、長軸方向で3.20m、その直交方向で85cmを測る。

埋葬施設 組合せ木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から75~90cm掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから、いわゆる「日字形組合せ木棺」と判断される。

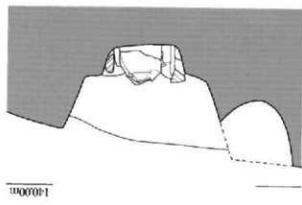
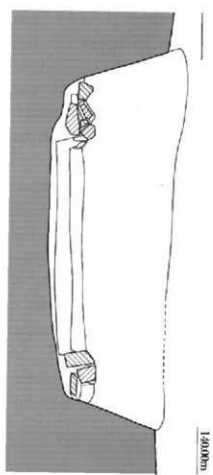
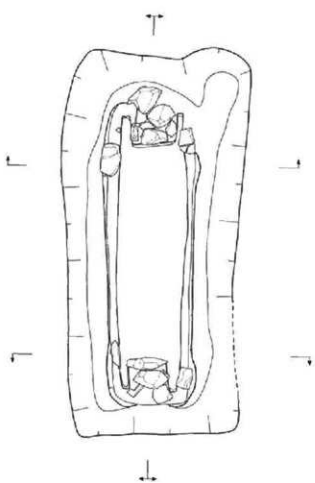
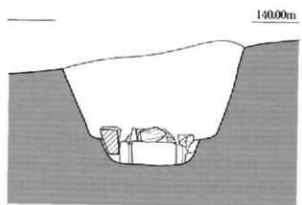
棺底部における小口幅は、東側で43cm、西側で40cmを測り、東側に頭位を求めることができる。また、棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は、2.25mを測り、その頭位方向はN82°40'Eを示す。さらに、小口より外側の長側板の底部幅から、棺材の幅は5cm~8cmと復元される。

なお、長側板の長さは、その底部を基準として、北側で2.85m、南側で2.88mを測る。また、



0 2m

第82図 13号墳 第1主体部



長側板が小口板より外側の長さは、北側長側板の頭位側で30cm、足位側で27cm、南側長側板の頭位側で25cm、足位側で30cmを測る。棺内横断面は箱形を呈し、棺検出面から棺底までの深さは、棺中央部で30cmを測る。なお、棺を検出したレベルは、墓坑の段のレベルとほぼ一致する。

棺底は平坦で、頭位側と足位側とは、明確なレベル差は認められなかった。

棺の埋置

棺底は、墓坑底とは一致せず、墓坑底を約4～8cmの整地後、棺が置かれている。また、両小口部の棺の外側にあたる位置には、20cm大の角礫が数石ずつ置かれていた。また、これよりひと回り小規模な角礫が、長側板が小口板を挟み込む位置で1石ずつ検出されている。これらの石は、棺を組み合わせるにあたって、棺の外側から棺材を固定させるために使われたものと考えられる。

施朱

全く認められなかった。

副葬品

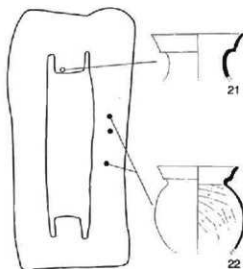
全く出土していない。

破砕土器供献

棺南側の棺検出面で破砕された土器(22)が出土している(第84図)。このほか、北側小口付近の墓坑上面で21の壺が出土している(第83図)。

22は、山陰系の影響を受けた甕で、底部を欠く。体部内面をヘラ削り(下→上)により仕上げられている。体部外面については、体部中位にハケ調整が観察できるが、上半は摩滅のため確認できない。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。また、体部外面には煤の付着が認められる。

なお22は、胎土の特徴から判断して、山陰地方から搬入品された土器ではない。



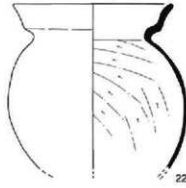
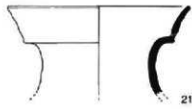
● 墓坑内 ○ 墓坑上

第83図 第1主体部 土器供献位置



第84図 第1主体部 土器供献状況

21は、表土掘削中に出土した土器であるが、その出土位置から判断して、当墓坑上に供献された土器と判断したものである。複合口縁壺に分類されるもので、口頸部のみ残存する。頸部内面はヘラナデ調整、外面はナデ調整により仕上げられている。口縁部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。



第85図 第1主体部供献土器

埋葬儀礼

これまでの状況から、以下の順に埋葬儀礼が行われたものと復元できる。

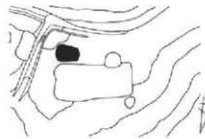
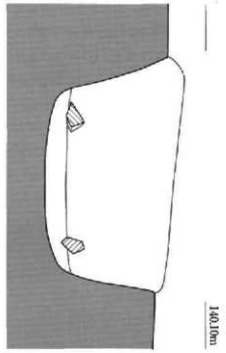
①墓坑底部の整地、②棺の組み立て（設置）、③棺を角礫により固定するとともに土砂により棺が埋まりきらない程度に埋める、④棺の周囲に土器を破碎供献、⑤棺を完全に埋める、⑥墓上に土器を供献。

被葬者

棺内からは、被葬者を特定できるものは全く確認できなかった。

時期

供献土器の特徴から判断して、庄内併行期と考えられる。



第86図 13号墳 第2主体部

3. 第2主体部(図版51)

検出状況 墳丘南東部で検出した。第1主体部の南東に位置するが、両墓坑間には切り合い関係は認められない。このため、当墓坑は定存する。

墓坑 平面形は隅田長方形を基本形とするが、南東隅を中心に大きく膨れている。一方、西辺と北辺は歪みが認められない。主軸方向は、当墳丘とはほぼ一致し、第1主体部とも一致する。検出面における規模は、主軸方向で1.24m、その直交方向で最大95cmを測る。

墓坑の掘削は、縦断・横断ともに1段で掘削されている。縦断面・横断面ともに逆台形を呈し、墓坑底部中央における検出面からの深さは63cmを測る。

墓坑底部はほぼ水平な平面をなす。その規模は、主軸方向で90cm、その直交方向で55cmを測る。

埋葬施設 墓坑検出面から40cm掘り下げたレベルで2石の瓜状の石を検出した。2石の長軸方向の規模は、東側が95cm、西側が25cmである。2石とも、その主軸方向を墓坑の主軸に対してほぼ直交させて置かれていた。墓坑主軸ライン上における、2石間の距離は58cmを測る。この2石の間に被葬者が埋葬されていたものと考えられ、この2石が小口を表しているものと考えられる。ただし、平面および断面においても、これらの石以外に棺の痕跡を確認することはできなかった。

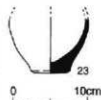
以上から、当主体部の埋葬施設については、以下の可能性が考えられる。①平面的には確認できなかったが、11号墳第7主体部同様の木棺墓、②小口板のみの木棺墓、③長調板が小口石を挟みこむ、いわゆる日字形組合せ木棺墓、④2石を小口石とした土坑墓。しかし、現段階ではいずれであるのかについては明確にできないが、後述する土器の出土位置から判断して、④の可能性が高いのではないかと考えられる。

なお、埋葬形態は明確にできないものの、小口を表すと考えられた2石の規模から判断して、東側に頭位を求めることができる。また、小口石の中心間を結ぶラインを基準とした主軸方向は、 $N83^{\circ}30'E$ を示す。

施朱 認められなかった。

副葬品 全く出土していない。

供献土器 甕1個体(23)が、東側小口石の北隅上とそのわずかに西側から、小口石を検出したほぼ同レベルで、破砕された状態で出土している。口縁部を欠く個体で、小型甕もしくは鉢の可能性も否定できない。内面はユビオサエと板ナデ調整、外面はナデ調整により仕上げられている。また、底部外面には木の葉文が認められる。



第87図供献土器

被葬者 被葬者を特定できるものは全く見つかっていないが、2石間の規模から判断して、小児の可能性が考えられる。

時期 出土土器から判断して、庄内併行期と考えられる。

4. 第3主体部 (図版54)

検出状況

第1主体部の北西隅付近で検出した。第1主体部とは切り合い関係にあり、第1主体部を切っている。

墓坑

平面形は楕円形を呈し、その主軸方向は第1主体部・第2主体部とはほぼ一致する。検出面における規模は、長軸方向で89cm、その直交方向で70cmを測る。

墓坑の掘削は1段で、横断・縦断ともにその断面形は、U字形に近い逆台形を呈する。墓坑中央部における検出面からの深さは55cmを測る。墓坑底部は皿状を呈する。墓坑底部における規模は、長軸方向で65cm、その直交方向で50cmを測る。

埋葬施設

土器棺を埋葬施設とする。蓋を棺身、甕を蓋に転用し、身は横位に置かれ、蓋とは入り口に合わされていた。棺は墓坑底に直接置かれるのではなく、約8cmほど整地された後、置かれていた。棺の主軸方向は、N169° 10' Wを示す。

甕(25)は、ほぼ完存する複合口縁甕である。口縁部の一部が意識的に打ち欠かれている(巻頭図版11)。体部内面は、下半を縦方向(下→上)の、中位から上半を横方向(右→左)のヘラ削りにより仕上げられている。体部から頸部にかけての外表面は、タタキ整形後、下半を縦方向、上半を横方向を主体とした細筋のハケ調整により仕上げられている。その後、口頸部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。なお、タタキ目については、下半部にわずかに観察できるに過ぎない。

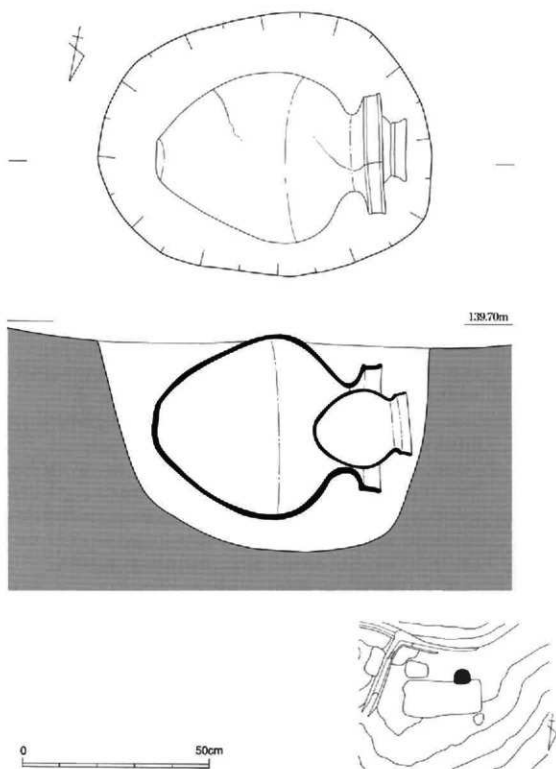
なお、この土器については、当地域に一般的な土器ではなく、胎土・色調は他の土器と特徴を大きく異にする。

甕(24)も完存する複合口縁甕である。体部内面下半はユビオサエ、中位は縦方向のヘラ削り(下→上)、上半は斜方向から横方向(左→右)のヘラ削りにより、それぞれ仕上げられている。体部外面は、目の細かなハケ調整により仕上げられ、その後肩部には5条の目の粗い波状文が施されている。体部内外面の調整後、口頸部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。また、体部外面下半には、煤の付着が顕著に認められる。

なお、この土器については、形態的にいわゆる山陰系の特徴を示しているが、胎土から



第88図 第3主体部 棺の取り上げ

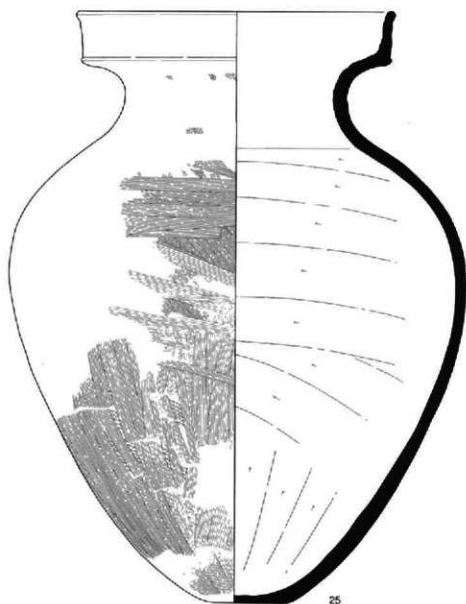
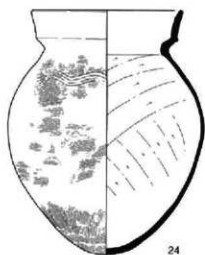


第89図 13号墳 第3主体部

みて、搬入品の可能性は低いものと考えられる。

被葬者 棺内には人骨等は全く遺存していなかった。棺内の土の脂肪酸分析を行ったが、被葬者を特定できる分析結果を得ることはできなかった（第4章第6節）。

時期 棺および蓋に転用された土器から判断して、布留式前半と考えられる。



0 20cm

第90图 13号墳 棺転用土器

13号墳

5. その他 (図版 51)

検出状況

第1主体部の北西隅付近で、土器1個体分が押しつぶされた状態で出土した。この土器は、不整形な皿状の落ち込み内から出土したものである。

以上の状況から、土器棺墓の可能性も考えられるが、11号墳墳頂部出土土器(第71図15)同様、墳頂部への供献土器の可能性が高い。よって、本項では供献土器として報告する。なお、この落ち込みは、第1主体部の墓坑との切り合い関係は認められない。

落ち込み

平面形は60cm×50cmの歪な円形を呈する。断面形は皿状を呈し、検出面からの深さはわずか5cmである。なお、墓坑の平面形のみからはその主軸方向を明確にすることは困難である。

出土土器

土器はかなり押しつぶされた状態で出土している(図版51)。完形に復元できないこともあり、当初から完形の状態で供献されたのかどうかについては明確にできない。

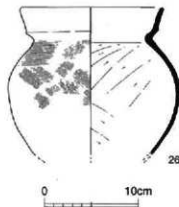
甕(26)は、複合口縁甕で、底部を欠く。体部内面は、下半を左上がり方向、上半を右上がり方向のヘラ削りにより仕上げられている。体部外面は、細かな原体によるハケ調整が施されている。体部の仕上げ後、口頸部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。

また、体部中位外面には煤の付着が認められる。

なお、この土器は、形態的特徴からいわゆる山陰系の土器と考えられるが、胎土の特徴から判断して、搬入品とは考えられない。

時期

出土した土器から判断して、庄内群行期～布留式初頭と考えられる。



第91図 13号墳供献土器

第6節 14号墳

1. 墳丘 (図版56・57)

検出状況

12号墳の北東に位置する。当古墳群が立地する尾根が、南北方向から南西-北東方向に屈曲する地点に位置する。当墳の北東側は、木棺墓群を検出した地点とは斜距離にして約30mの間、空白地帯となっている。当墳については、後世の削平などは全く受けていなかった。

区画溝

12号墳との境は、尾根筋方向に直交する溝により明確に区画されている。この溝は、平面的には直線的に掘削されており、その長さは底部で8.5mを測る。横断面はV字形に近い逆台形をなし、検出面における幅1.70m、底部における幅50cm、検出面からの深さ1.50mを測る(第92図)。この底部の標高は137.94mで、第1主体部の墓坑底の標高138.10mより約16cm深くになっている。

この区画溝は、周囲から流れ込んだ土砂により埋没している(第92図)。この区画溝からは遺物は全く出土していない。

規模

墳丘の平面形は、南西-北東方向を主軸とする長方形を基本形とする。この主軸方向は、尾根筋の方向と一致するもので、墳頂部も南西側から北東側にかけて傾斜した状態で検出されている。

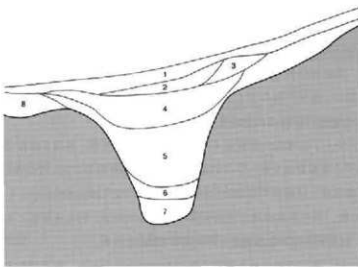
平面形

平面形については、12号墳との区画溝が直線的であるのに対して、対になる北東側のラインが大きく歪んでいるため、11号墳ほど精美ではない。また、尾根筋を利用しているため、北西辺と南東辺のラインは、直線的ではあるが、北東辺にむかって狭まる傾向にある。つまり、裾部のラインでみた平面形は台形に近い。

墳頂部の規模は、長軸方向で7.35mを測る。この直交方向については、墳頂部南西端の区画溝河部のラインで4.20m、墳丘中央部で3.80mを測る。

墳丘の規模については、長軸方向は、北東側に認められる傾斜変換点を裾部とし、南西

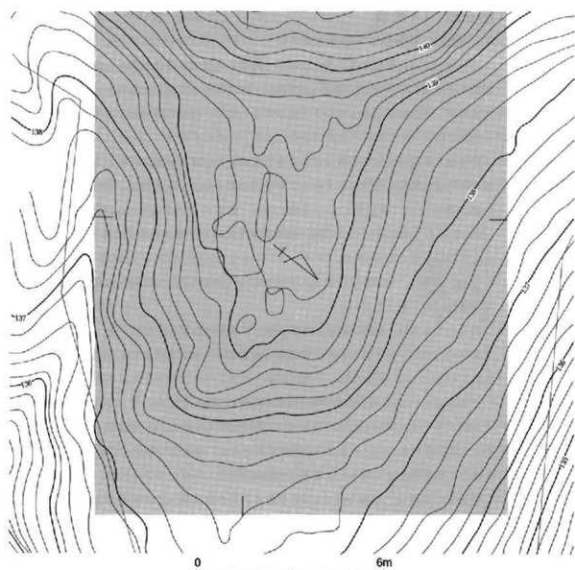
140.50m



1. 表土
2. 明黄褐色土
3. 黄褐色土
4. 淡黄灰色土 (土壌化)
5. 茶褐色土
6. 淡茶褐色土 (真砂含む)
7. 茶褐色土
8. 黄褐色土 (墳丘臺土)

0 2m

第92図 14号墳 区画溝断面



第93図 14号墳（調査前）

側を区画溝の底部北東側を基準とすると、9.80mを測る。

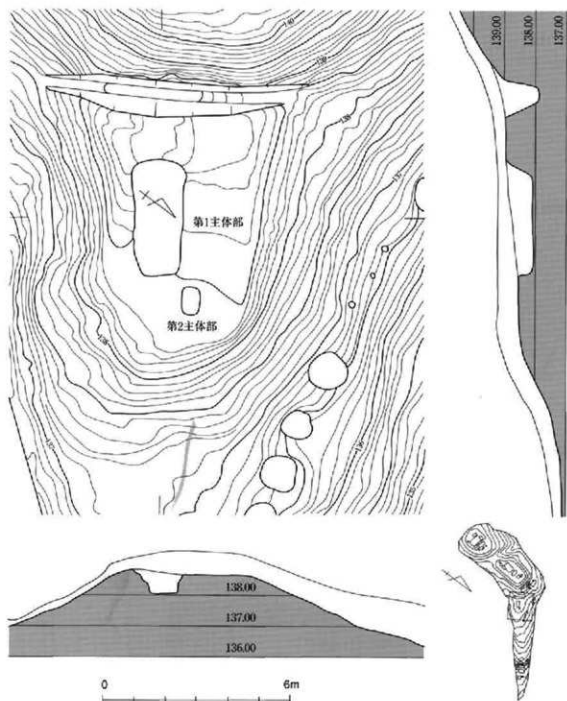
この直交方向の規模については（第94図）、北西側は、137.00mのラインに明確な傾斜変換点を認めることができ、北西側墳裾として認識できる。南東辺についても、区画溝の南東端を基準に、区画溝に対して直交方向のライン上にわずかに変換点を求めることができる。以上から、当ラインの規模は9.50mと復元できる。

立面形

以上の墳丘基底部の復元から、当墳丘の横断面・縦断面は台形状をなす。各墳丘斜面の傾斜角は、南西斜面で65°、北東斜面で25°、北西斜面で26°、南東斜面で30°をなす。また、検出した墳頂部の標高は、区画溝の屑部で138.00mを測り、南西側区画溝底部との比高は1.10mを測る。この他、墳頂部北東端と北東裾部との比高は90cm、同北西端部と北西裾部との比高は1.60m、同北東端部と北東裾部との比高は1.25mを測る。

墳丘の構築

当墳丘の検出にあたっては、明確な盛土層を確認することはできなかった。南西辺が大規模な区画溝により造り出されている以外は、尾根斜面を削り出して整形されているものと考えられる。特に、北西斜面・南東斜面については、自然地形をわずかに削り出した



第94図 14号墳 (調査後)

程度のものと考えられる。

埋葬施設

2基の埋葬施設を検出した。第1主体部は木棺を、第2主体部は箱形石棺を埋葬施設としている。両者の主軸方向はほぼ一致し、墳丘主軸方向とはほぼ一致する。なお、墓坑相互の切り合い関係は認められない。

時期

第1主体部に破砕供献された土器から判断して、布留式初頭と考えられる。

2. 第1主体部 (図版58・59)

検出状況

墳丘中央部やや南東側で検出した。第2主体部とは切り合い関係がなく、完存する。平面形は、隅門長方形を基本形とするが、北西辺・南東辺を中心に歪みが認められる。墓坑の主軸方向は墳丘主軸方向とはほぼ一致し、検出面における規模は、長軸方向で370mを測る。その直交方向では、最大幅173mを測る。

埋葬施設

墓坑の掘削は、縦断・横断ともに1段で、断面形はともに逆台形を呈する。墓坑中央部における墓坑南西側検出面から墓坑底部までの深さは、76cmを測る。

墓坑底部はほぼ水平な平坦面をなし、長軸方向で30m、その直交方向で85cmを測る。組合せ木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から45~80cm掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから「H字形組合せ木棺」と判断できる。

これによると、棺底部における小口幅は、北東側で60cm、南西側で43cmを測り、北東側に頭位を求めることができる。また、棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は206mを測り、その頭位方向はN49°50'Eを示す。さらに、小口より外側の長側板の底部幅から、棺材の幅は5cm~8cmと復元される。なお、長側板の長さは、その底部を基準として、北側で2.85m、南側で2.88mを測る。

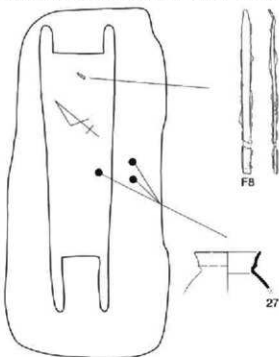
棺の埋置

棺内横断面は箱形を呈し、棺検出面から棺底までの深さは、棺中央部で20cmを測る。棺底は平坦で、頭位側と足位側とは2~3cmのレベル差が認められる程度である。

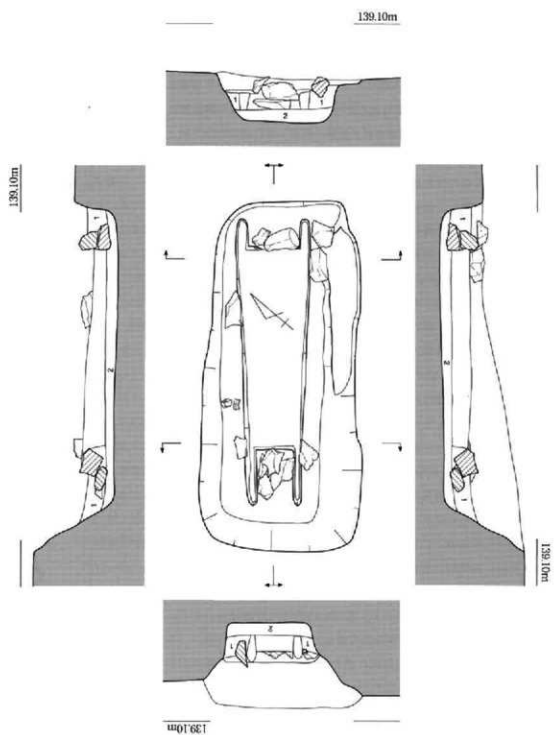
棺底は、墓坑底とは一致せず、墓坑底に約10cm前後の整地後、棺が置かれている。また、両小口の棺の外側にあたる位置には、20cm~30cm大の角礫が数石ずつ置かれていた。特に、頭位側においては、2石が棺側の面を揃えるように積まれていた。また、これらとはほぼ同規模の石を、頭位側東部の長側板が小口板を挟み込む位置で1石確認された。さらに同規模の石が、頭位側北部の長側板が小口板を挟み込む位置のやや足位側でも、長側板に沿うように検出された。

このほか、足位側の長側板が小口板を挟み込む位置で、一回り小規模な角礫が検出されている。

これらの石は、棺を組み合わせるにあたって、棺の外側から棺材を固定させるために使われたものと考えられる。また、これらの石上部のレベルが一致していないことから、蓋材はより高いレベルに設置されたものと考えられる。したがって、最も高いレベルにある石の上部を基準とすると、棺の深



第95図 第1主体部 土器供献位置

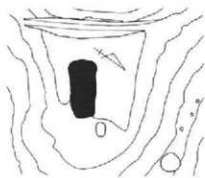


- 1. 濃茶褐色土 (真砂多く含む)
- 2. 濃茶褐色土

0 2m

第96図 14号墳 第1主体部

14号墳



さは少なくとも40cmはあったものと復元できる。

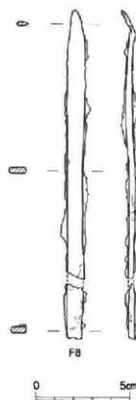
施朱

認められなかった。

副葬品

棺内底部、頭位側小口付近のはは主軸ライン上で、鉈(F8)が1点主軸ラインに対し斜行する状態で、刃部を南東側長足板に向けて出土している(第95図・図版58)。2片からなり、両者は直接接合しないが、その形状・出土位置から同一個体と判断したものである。そして、両片をもとに復元した図が、ほぼ当初の規模に近いものと考えられる。これによると、大片の長さ14.2cm、小片の長さ2.9cmを測り、両者を合わせて全長17.4cmと復元できる。

刃部は剣先状を呈し、刃部の上に裏すきを有する。その長さは2.6cm、最大幅1cmを測る。刃部表面には錆は認められない。断面は厚さ2mmのレンズ状を呈する。身部は、幅9mm、厚さ2mm~4mmの断面長方形を呈し、身部の一部に布状の痕跡がわずかに認められた。



第97図 出土鉄器

破碎土器供献

棺検出面の頭位側西部の長側板と小口板の組合せ部のやや頭位側棺外と、棺内には中央部南東側壁近くの棺底から壺が出土している。棺底から出土した土器は、上からの圧迫により棺底部に押しつぶされた状態で出土している(図版58)。両者は接合関係にあることから、棺上から棺周囲に破砕供献されたものと考えられる。個体として認識できたのは、27(第98図)の1個体のみである。なお、西部の棺外からも出土しているが、27との接合関係は認められなかった。

27は、口縁部から肩部にかけて残存する個体で、全体的に器表面は摩滅が顕著である。このため、体部については、内面にわずかにヘラ削りの痕跡を確認することができる。また、口頭部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。

形態的には山陰系の壺と考えられるが、胎土等の特徴から、搬入品でないことは明確である。



第98図 第1主体部供献土器

被葬者

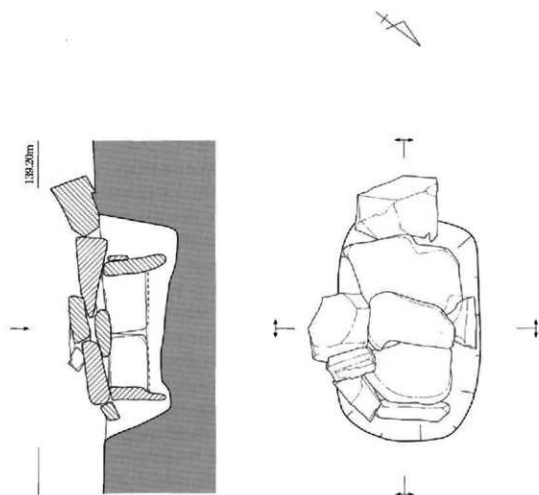
棺内からは、被葬者を特定できるものは全く出土していない。また、脂肪酸分析の結果(第4章第6節)からも、良好な結果を得ることはできなかった。

時期

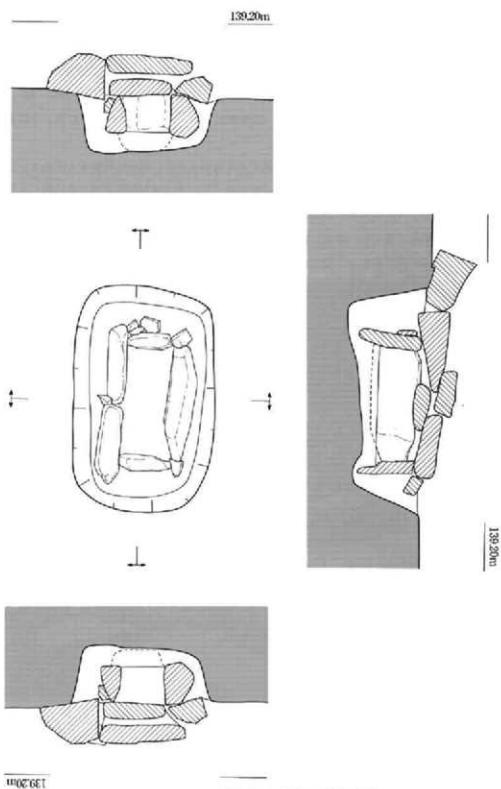
破砕供献された土器から判断して、布留式初頭と考えられる。

3. 第2主体部 (図版60・61)

- 検出状況** 14号墳頂部北東隅で検出された。第1主体部北隅の北側に位置する。第1主体部墓坑との切り合い関係は認められず、完存する。
- 墓坑** 平面形は隅円長方形を呈し、その主軸方向は墳丘の主軸方向とほぼ一致する。検出面における規模は、長軸方向で1.20m、その直交方向で75cmを測る。
- 墓坑の掘削は、検出した限りでは、縦断・横断ともに1段階掘削により行われている。両方向の断面形は、いずれも逆台形をなし、墓坑底部中央における検出面からの深さは、30cmを測る。しかし、後述するように、蓋石をとり囲む石が墓坑掘り方のラインより外側までかかり、蓋石を含めて墓坑検出面より上の面で検出されている。このため、当初は2段に掘り込まれていた可能性が高く、より深かったものと考えられる。
- 墓坑底部は、小口石を据える箇所が他より深く掘り込まれている。その深さは、墓坑底から約5cmほどである。底部の規模は、長軸方向で95cm、その直交方向で60cmを測る。
- 埋葬施設** 箱形石棺を埋葬施設とする。墓坑を検出した面において、すでに蓋石が10~25cm露出していた(図版60)。
- 蓋・側壁・小口に石材を用いて棺が組まれていた。底部には、礎石・敷石等は認められなかった。長側石と小口石の組合せは、長側石が小口石を挟み込んでいる。石材は、蓋石北東隅の1石と蓋石を囲む石は川原石が用いられ、他は全て山石が用いられていた。
- 規模** 棺内底部における平面形は長方形を指向するが、長側壁のラインが直線的ではなく、鼓形を呈する。棺底部における小口幅は、北東側で25cm、南西側で27cmを測り、小口幅のみからは頭位を判断することは困難である。棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は60cmを測り、その方位はN127°45'Eを示す。また、棺底部における最もくびれた箇所は23cmを測る。
- 小口石** 両側とも1石からなる。いずれも板状の石材が用いられ、その長軸を縦方向にして置かれている。なお、南西側の小口石は直立するのに対して、北東側の小口石は内側に内傾している。北東側小口石の外側には、10cm以下の石が敷石、裏込めとして置かれていた。
- 長側石** 両側とも1段からなる。ただし、南東側長側石は1石からなるのに対して、北西側長側石は2石からなる。この2石は、平継ぎにより組み合わされている。いずれの石材も、板状の石材の長軸を横方向にして置かれていた。
- 蓋石** 基本的には1段であるが、部分的に3段に架構されていた。これらの蓋石の架構にあたっては、3段階の工程が復元できる。①棺中央部、北西側長側石の継目の位置に、比較的小規模な蓋石を架構させる。②この石と両小口の隅を覆うように、2石のより大きな石を架構させる。このため、2石は水平ではなく、棺中央部を頂点に両小口側に傾斜している。③上記2石の隙間を覆うように、①の石材と同規模の石を架構させる。
- 全ての石は、石材の長軸方向を棺の主軸方向に直交させるように置かれていた。なかでも、北東小口側の1石は40cm×60cmと他の蓋石より一回り大きな石材が用いられていた。
- なお、これらの蓋石架構後、蓋石の北東側、南西側から西側、および南東側に、蓋石を囲むように数個の石が置かれていた。特に、北東側・南西側の石は、検出した墓坑の掘り方のラインの外側で検出されている。



- 棺底** 小口石および長側石を設置する際に約49cm整地された面を棺底とし、ほぼ水平な平坦面をなす。棺中央部における蓋石下面から棺底部までの深さは20cmを測る。
- 頭位** 小口幅を中心とした棺の平面形からの頭位の推定は困難であった。しかし、当墳丘墓群内で検出された同様の施設をみると、頭位側の石材が大きなものが用いられている傾向が



第99図 14号墳 第2主体部

強い。この傾向から判断すると、北東側が頭位の可能性が高い。

副葬品

棺内および棺外からも全く出土していない。

被葬者

人骨等が全く出土していないため、被葬者を特定することは困難である。

時期

遺物が全く出土していないため、時期の特定は困難である。

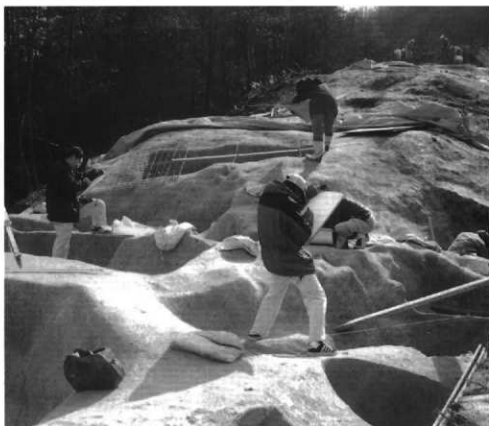
第7節 木棺墓群

1. 概要 (図版62・63)

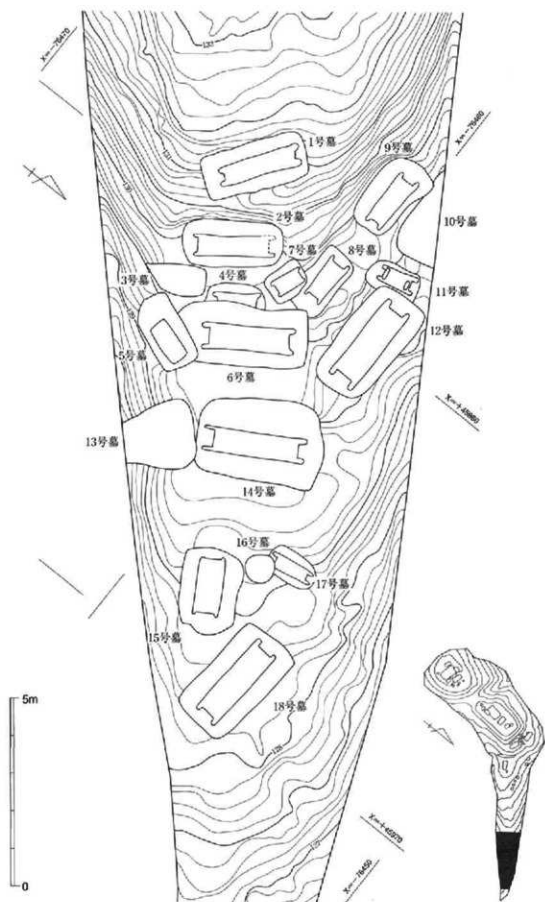
検出状況

墳丘墓群を検出した尾根は、14号墳を境に南東方向に屈曲する。この屈曲した地点から、斜距離にして約30m尾根筋を下った地点で、当木棺墓群を検出した (図版62・63)。その範囲は16m×9mの約144㎡に及び、18基検出した。ただし、このなかには、土器棺墓1基 (16号墓) も含まれる。

これらの墓は、尾根上に直接掘り込まれたものであり、周囲に区画する溝あるいは墳丘等を伴わない。棺の主軸方向には統一性は認められず、尾根斜面の等高線に平行もしくは直交するように造られている。また、これらの木棺墓群は、土器からみると弥生時代後期前半～中葉と限られた時期に築かれている。墓坑間に切り合い関係が認められることから、わずかな時間差をもって順次築かれていったものと考えられる。



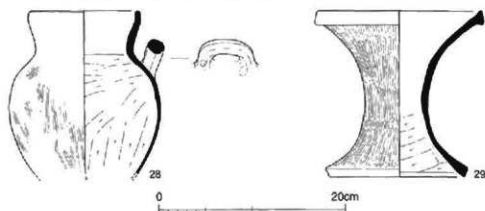
第100図 木棺墓群の調査



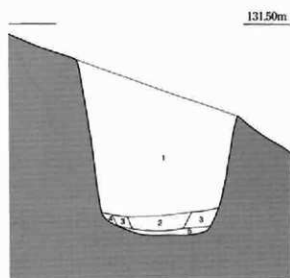
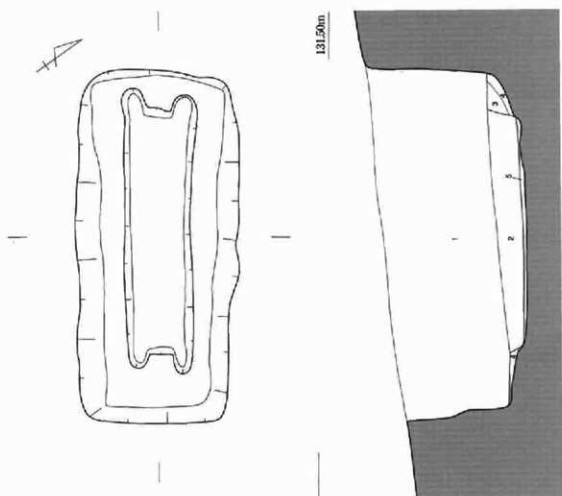
第101图 木棺墓群

2. 1号墓(図版64)

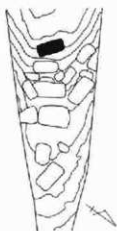
検出状況	木棺墓群の最高所に位置する。他の木棺墓との切り合い関係はなく、完存する。
墓坑	平面形は隅田長方形を呈する。主軸方向は、尾根筋に対してほぼ直交し、等高線にはほぼ平行する。検出面における規模は、長軸方向で2.80m、その直交方向で1.30mを測る。 墓坑の掘削は、縦断・横断とも1段で行われている。両断面とも箱形を呈する。墓坑底部中央における検出面からの深さは、山側検出面を基準とすると1.41mを測る。 墓坑底部は、ほぼ水平な平坦面をなす。ただし、縦断面・横断面ともわずかに皿状を呈する傾向が認められる。底部の規模は、長軸方向で2.60m、その直交方向で85cmを測る。
埋葬施設	組合せ木棺を埋葬施設とする。山側検出面を基準とすると、1.25m掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから、いわゆる「H字形組合せ木棺」と判断される。 棺底部における小口幅は、北西側で23cm、南東側で20cmを測る。そして、長側板のラインが北西側に開く傾向にあることから、北西側に頭位を定めることができる。棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は1.80mを測り、その頭位方向は、N35°00'Wを示す。また、底部における長側板の規模は、北東側で2.13m、南西側で2.12mを測る。 棺内横断面は逆台形を呈し、棺底部はほぼ水平な平坦面をなす。底部中央における棺検出面からの深さは22cmを測る。
施朱	認められなかった。
副葬品	全く出土していない。
破砕土器供献	墓坑上面から、壺(28)と器台(29)が破砕された状態で出土している。 28は水芯形甕で、肩部に半環状の把手が付く。体部内面は、下半を縦方向(下→上)の、上半を横方向(左→右)のヘラ削り、外面は縦方向を主体としたヘラ磨きにより仕上げられている。口頸部は、内外面の横ナデ調整後、頸部外面に縦方向のヘラ磨きが施されている。 29は、口縁部から脚部にかけての外面は丁寧な縦方向のヘラ磨き、内面は脚部から筒部にかけて右から左方向のヘラ削りを施した後、筒部をナデ調整、受部はヘラナデ調整により仕上げられている。口縁部は横ナデ調整により仕上げられ、明瞭な外端面を有する。
被葬者	棺内からは、被葬者を特定できるようなものは全く出土していない。
時期	出土土器から判断して、弥生時代後期中葉と判断される。



第102図 1号墓供献土器



1. 黄褐色土
2. 暗黄褐色土
3. 暗黄褐色土 (真砂土含む)
4. 黄褐色土 (真砂土)
5. 真砂層



第103图 1号墓

3. 2号墓 (図版64)

検出状況

1号墓の北東側、3号墓の西側、4号墓の南西側、7号墓の南側に位置する。3号墓の墓坑と近接する以外は、どの墓坑とも切り合い関係は認められず、完存する。南西方向からのびる尾根筋が傾斜を緩める傾斜変換点に位置するため、検出面は比較的平坦である。

墓坑

墓坑の平面形は隅門長方形を呈するが、両短辺は弧状をなす。墓坑の主軸方向は尾根筋に直交し、尾根頂部の等高線とはほぼ平行する。検出面における規模は、長軸方向で2.65m、その直交方向で1.20mを測る。

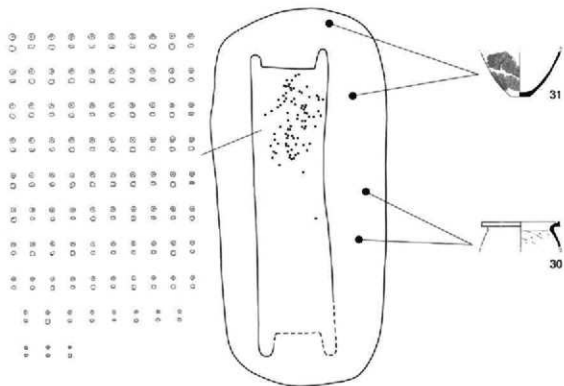
墓坑の掘削は、縦断・横断とも2段に掘り込まれている。縦断については、検出面から45cm～50cmのレベルで段が認められ、墓坑底との比高差約10cmを測る。上段・下段の断面形は逆台形をなす。横断も縦断と同レベルで段が認められ、その断面形は、上段は箱形に近い逆台形、下段は皿状を呈する。

墓坑底部は、棺を埋置したあたりが舟底状に掘り盛められていたが、基本的にはほぼ水平である。その規模は、長軸方向で2.25m、その直交方向で95cmを測る。また、墓坑中央部における検出面からの深さは、55cmを測る。

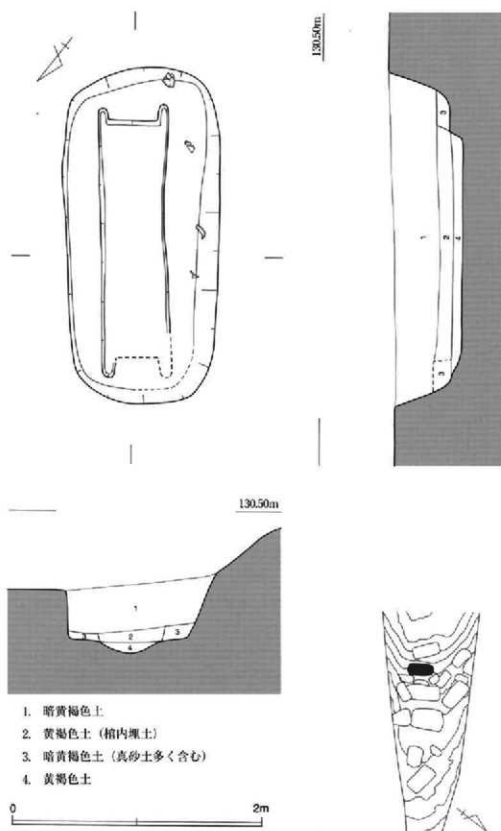
埋葬施設

組合せ木棺を埋葬施設とする。検出面から35cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから、いわゆる「H字形組合せ木棺」と判断される。ただし、棺北西隅については、狸穴による擾乱を受け、棺の痕跡を検出することはできなかった。

棺底部における長側板に挟まれた小口幅は、南東側で44cmを測り、北西側については40cm以下と推定される。よって、南東側に頭位を求めることができる。また、棺底部におけ



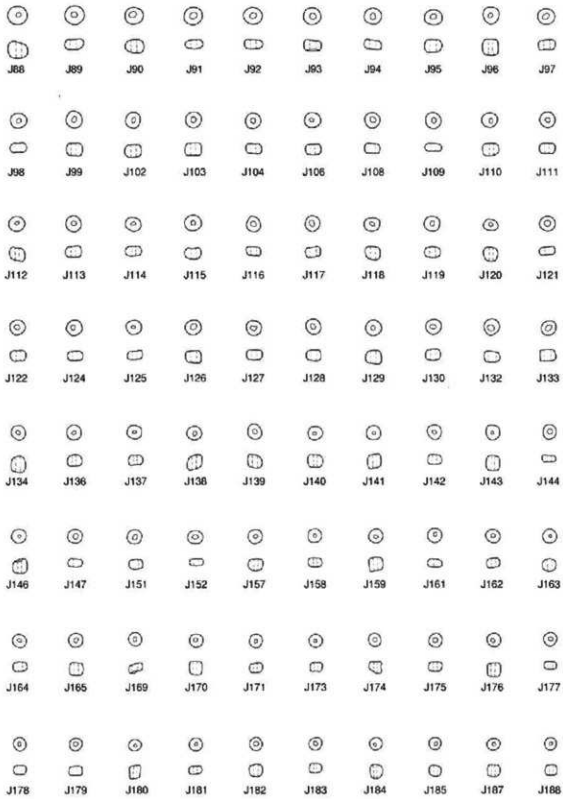
第104図 2号墓遺物出土位置



第105図 2号墓

る主軸ライン上での小口間の距離は1.80mと推定され、その頭位方向は、 $N141^{\circ}15'E$ を示す。長割板の規模は、北東側で2.07mを測り、南西側で2.10mと推定される。

棺内横断面は箱形に近い造台形をなし、棺検出面からの深さは10cmである。棺は、墓坑

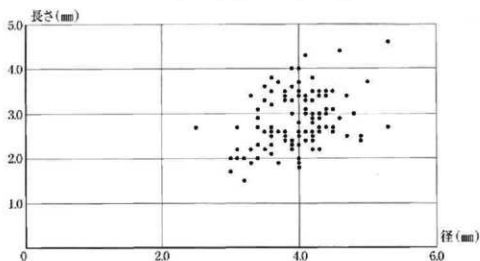


第106図 2号墓出土ガラス小玉(1)

底に約7・8cmの整地を行った後埋置されており、棺底部はほぼ平坦である。



第107図 2号墓出土ガラス小玉(2)



第108図 2号墓出土ガラス小玉計測値

施朱

認められなかった。

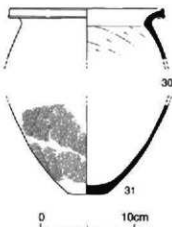
副葬品

頭部から胸部にかけて123点のガラス小玉(巻頭図版14)が出土している(第104図・図版64)。出土位置を確認できたガラス小玉の大半が、棺底もしくはその上層1cmのレベルで出土している。ガラス小玉の長さの最大値・最小値・平均値は、それぞれ4.6mm・1.5mm・2.9mmで、その連結長は32.2cmに及ぶ。径の最大値・最小値・平均値は、それぞれ5.3mm・2.4mm・4.0mmを測る。

破碎土器供献

棺南西側の棺検出面で甕が破碎された状態で出土している(図版64)。口縁部(30)と底部(31)を図化した。

両者は接合しないが、同一個体の可能性が高い。



第109図 2号墓供献土器

30は、体部内面が左上がり方向のヘラ削り、外面がナデ調整により仕上げられている。体部の調整後、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。31は、体部内面をヘラ削り後ナデ調整、外面を目の細かいハケ調整により仕上げられている。底部外面もハケ調整により仕上げられている。また、外面の一部に煤の付着が認められる。

被葬者

直接被葬者を特定できるようなものは認められない。

時期

出土土器から判断して、弥生時代後期中葉と考えられる。

4. 3号墓

- 検出状況** 2号墓の東、4号墓の南東、5号墓の南西に位置する(第101図)。これら3基とは墓坑を接するが、明確な切り合い関係は認められない。ただし、当墓坑の南東部は尾根斜面にあたり、この斜面の崩落とともに崩れ落ちていた。このため、墓坑の南東部を欠く。
- 墓坑** 墓坑の平面形は、南東部を欠くが、隅田長方形を呈していたと考えられる。主軸方向は、2号墓とはほぼ平行し、等高線ともほぼ平行する。その方向はN35°00'Wを示す。検出面における墓坑の規模は、最もよく残存する南西辺で1.65m残存し、その直交方向は最大で84cmを測る。
- 墓坑の掘削は、横断・縦断ともに1段で行われている。横断・縦断ともにその断面形は箱形を呈し、墓坑中央部における検出面からの深さは35cmを測る。
- 墓坑底部はほぼ水平な平坦面をなす。その規模は、南東辺を基準とした長軸方向で1.58m、その直交方向で70cmを測る。
- 埋葬施設** 当墓坑については、棺の痕跡を確認することができなかった。単なる土坑墓の可能性も考えられるが、墓坑が箱形に掘削されていることから判断して、木棺が埋葬されていたものと考えられる。
- 施朱** 確認できなかった。
- 副葬品** 全く出土しない。



第110図 3号墓全景

土器供献

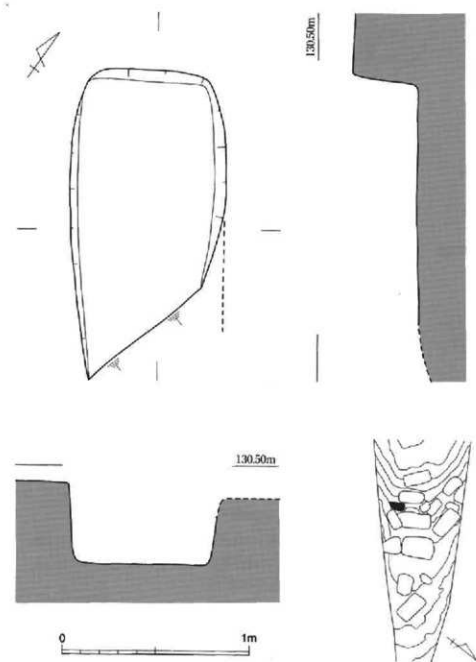
認められない。

被葬者

被葬者を特定できるようなものは全く出土していないため、不明である。

時期

遺物が全く出土していないが、2号墓との関係（後述 第5章第1節）から、後期中葉と考えられる。



第111図 3号墓

木棺墓群

5. 4号墓 (図版66)

検出状況

2号墓の北東側、3号墓の北側、6号墓の南西側に位置する(第101図)。6号墓とは明確な切り合い関係にあり、6号墓に切られている。このため、残存するのは全体の約1/2程度である。このほか、3号墓とも墓坑を接するが、明確な切り合い関係は認められない。

墓坑

平面形は、隅丸長方形を基本形とする。ただし、北西辺から西隅にかけては連続する弧を描き、明確なコーナーは認められない。また、南東辺も歪んだ形状をなしている。検出面上における規模は、長軸方向で1.60mを測り、その直交方向は60cm残存する。直交方向については、墓坑の残存状況から判断して、1m強はあったものと復元される。

墓坑の掘削は縦断・横断ともに1段で行われている。ただし、墓坑中央部を中心にわずかに皿状に掘削されている。その深さはわずか数cm程度である。縦断面は逆台形を呈し、墓坑中央部における検出面からの深さは56cmを測る。横断面についても、その断面形は逆台形を呈するものと考えられる。

墓坑底部は、先述したように、中央部がわずかに窪むが、基本的には水平な平坦面をなす。その規模は、長軸方向で1.28mを測り、その直交方向で43cm残存する。

埋葬施設

組合せ木棺を埋葬施設とする。棺検出面から40cmのレベルで棺の痕跡を確認することができた。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから、いわゆる「H字形組合せ木棺」と考えられる。ただし、墓坑そのものが約1/2残存するのみで、棺の残存状況も良好ではなく、南西側長側板と両小口の約1/2を検出できたに過ぎない。

棺底部における長側板の長さは1.20mを測る。小口幅は、北西側で30cm、南東側で23cm、それぞれ残存する。そして、長側板の方向および小口幅から、北西側に頭位を求めることができる。主軸ライン上での棺底部における両小口間の距離は94cmを測り、その頭位方向はN43°30'Wを示す。

棺内横断面は箱形に近い逆台形をなす。棺底部は平坦面をなし、棺検出面からの深さは8cmを測る。なお、頭位側から足位側にかけてはわずかに傾斜が認められ、その比高は4cmを測る。また、棺底部の一部(足位側)は墓坑底に接しており、頭位側のみ整地後に棺が埋置されている。整地は最大で4cmである。

施朱

頭位側小口から足位側へ20cmのあたりを北西端として、棺の主軸方向に35cm、その直交方向に25cmの範囲で施朱が認められた(第113図)。厚みは概ねわずかである。

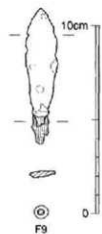
副葬品

棺底において鉄鏃1点(F9)が出土している。

鉄鏃

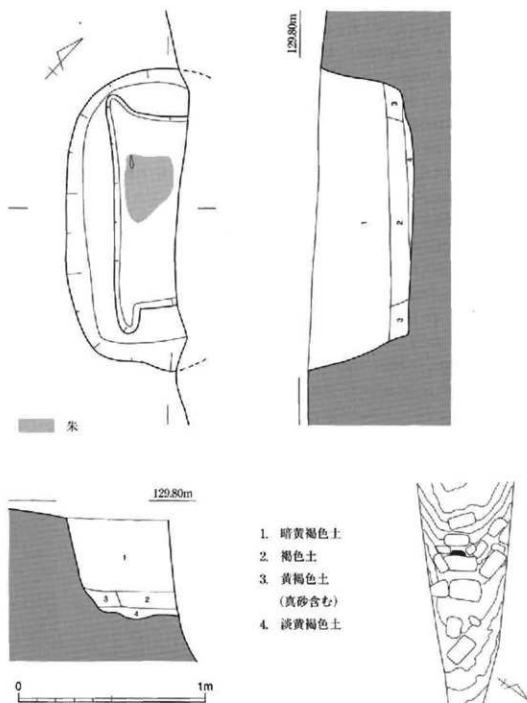
頭位側、南西側長側板の内側に当たる位置で、刃部を足位方向に向けた状態で出土している(図版66)。その方向は、棺の主軸方向とはほぼ一致する。

F9は、葉部の一部を除いては完存する。全長7.2cm残存し、鏃身長は5.3cmを測る。鏃身が柳葉形を呈するタイプで、中心部に鏃がわずかに認められる。断面はレンズ状を呈し、最大幅1.8cm、鏃部での厚さ4mmを測る。葉は断面円形を呈し、その径は7mmを測る。なお、葉部には木質の付着が認められた。



第112図 出土鉄鏃

- 破砕土器供献 認められない。
 被葬者 被葬者を特定できるようなものは全く出土していない。
 時期 遺物が全く出土していないため、時期を特定することはできない。



第113図 4号墓

6. 5号墓 (図版66)

検出状況

3号墓の北東側、6号墓の東側に位置する(第101図)。3号墓と6号墓の墓坑と接するが、明確な切り合い関係は認められなかった。ただし、墓坑南隅は斜面の崩落とともに崩れていた。

墓坑

平面形は長方形を呈するものと考えられるが、南隅を欠く。残存する墓坑のラインは各辺ともほぼ直線的で、当初は比較的整った平面形をなしていたものと考えられる。なお、当墓は尾根斜面に立地するため、検出面のレベルにおいて顕著な差が認められる。検出面における規模は、長軸方向で2.00m、その直交方向で1.03mを測る。

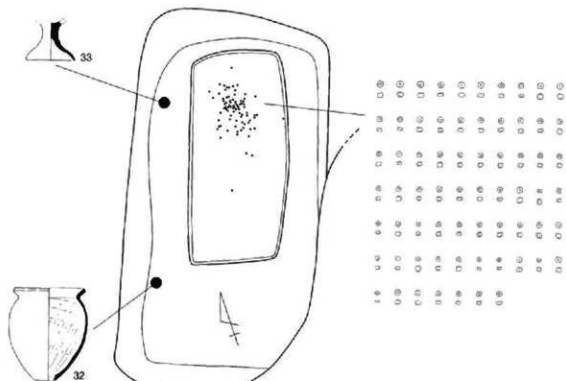
墓坑の掘削は、残存する範囲では1段で行われ、横断・縦断ともにその断面形は箱形に近い逆台形を呈する。墓坑底部中央における西側検出面からの深さは、86cmを測る。

墓坑底部はほぼ水平に近い平面をなし、その規模は、長軸方向で1.70m、その直交方向で90cmを測る。

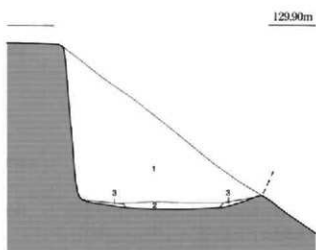
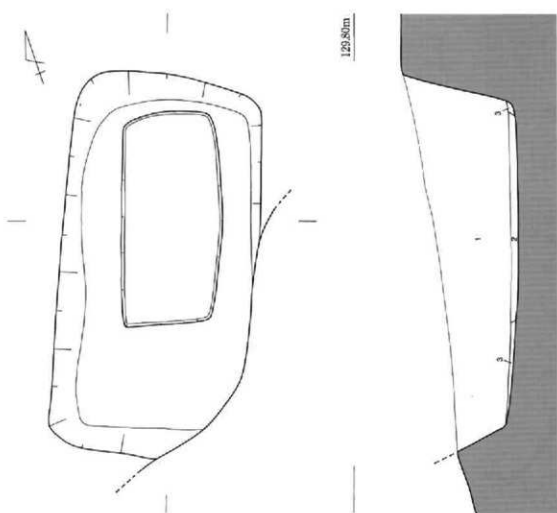
埋葬施設

組合せ木棺を埋葬施設とする。山側検出面から55cm掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。墓坑中央部より北側にずれた位置で検出されている。このため、墓坑の掘り形は南隅を欠くに対して、棺自体は完存する。

棺の平面形は基本的には長方形を呈するが、南東辺から北東辺にかけて、若干の歪みが認められる。棺底部における小口幅は、北東側で45cm、南西側で42cmを測り、北東側に頭位を求めることができる。また、棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は1.10mを測り、その頭位方向はN19°30'Eを示す。棺内横断面は逆台形を呈し、棺検出面からの深さは、5cmとわずかである。



第114図 5号墓遺物出土位置

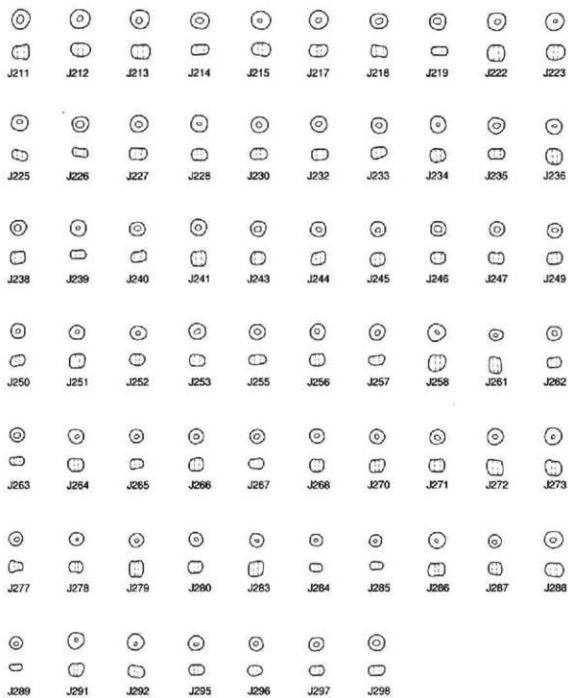


1. 暗黄褐色土
2. 黄褐色土 (棺内粗土)
3. 黄褐色土 (真砂土含む)



第115图 5号墓





0 5cm

第116図 5号墓出土ガラス小玉

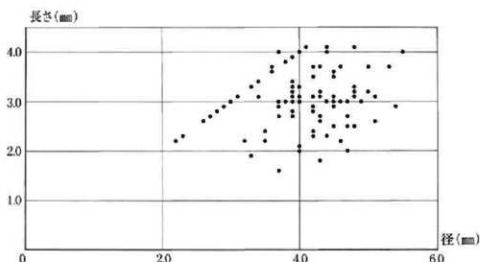
棺底は、墓坑底部と一致し、ほぼ水平な平坦面をなす。

認められなかった。

施朱

副葬品

棺底からガラス小玉93点が出土している（第116図）。その出土位置（第114図）は、頭位側に集中するが、棺の規模から判断して、頭部から胸部にあたるものと判断される。ただし、その出土状況（図版66）をみると装着されたのではなく、頭部から胸部を中心にばらまかれたものと考えられる。

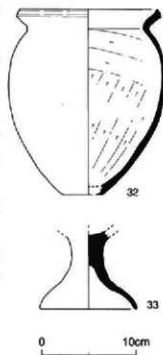


第117図 5号墓出土ガラス小玉計測値

ガラス小玉の長さの最大値・最小値・平均値は、それぞれ4.1mm・1.6mm・3.0mmを測り、その総連結長は26.7cmに及ぶ。また、径の最大値・最小値・平均値は、それぞれ5.5mm・2.2mm・4.1mmである。

破砕土器供獻 棺外北西から南西側にかけての、棺検出面で、甕(32)と脚部(33)が各1点出土している(第114図)。他に、小片のため固化できなかったが、甕の体部片も出土している。32の甕は、図上ではほぼ完形に復元できたが、残存するのは底部から口縁部にかけて1/2~1/4程度である。体部内面は、下半を縦方向(下→上)、上半を横方向(右→左)のヘラ削りにより仕上げられている。体部の調整後、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。なお、体部外面の調整については、摩滅のため観察できない。また、口縁端部には2条の擬凹線が施されている。

33は、高環の脚部と考えられる。内外面とも摩滅のため、調整方法は観察できない。



第118図 5号墓供獻土器

被葬者 人骨等が遺存していなかったため、被葬者を特定することは困難である。棺の規模から判断して、成人ではなく、未成年者の可能性が考えられる。

時期 破砕供獻された土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。

7. 6号墓 (図版65)

検出状況

4号墓の北東側、5号墓の北西側、8号墓の東側、12号墓の南東側に位置する(第101図)。墓坑の主軸方向は、2号墓・4号墓とほぼ一致し、この方向は当墓が立地する等高線とほぼ平行する。

4号墓・5号墓・8号墓と切り合い関係にあり、4号墓と8号墓を切っている。逆に、5号墓に墓坑の一部が切られている。このため、当墓は一部を除いてはほぼ完存する。

墓坑

南東辺を欠くが、平面形は長方形を呈していたものと考えられる。北東辺と北西辺は直線的で、精美な形状をなす。一方、南西辺はかなり歪みが目立つ。検出面における墓坑の規模は、長軸方向で3.54mと復元され、その直交方向は、最も幅の広い箇所では1.68mを測る。

墓坑の掘削は、基本的に1段であるが、底部にわずかに皿状の窪みが認められる。墓坑の横断面はU字形に近い逆台形、縦断面は逆台形をなし、墓坑底部中央における南西側検出面からの深さは1.03mを測る。また、北東側検出面からの深さは86cmである。

墓坑底部は、先述したように、棺の位置を中心に皿状に落ち込んでいる。その段差は3・4cmとわずかである。墓坑底部における規模は、長軸方向で2.60m、その直交方向で1.00mを測る。

埋葬施設

組合せ木棺を埋葬施設とする。北東側墓坑検出面から70cm掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。棺は墓坑のほぼ中央に据えられていたが、5号墓の影響を受けることなく、全体を検出することができた。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから、いわゆる「H字形組合せ木棺」と考えられる。

棺底部における小口幅は、南東側で47cm、北西側で41cmを測り、南東側に頭位を求めることができる。棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は2.06mを測り、その頭位方向はN14°15'Eを示す。長側板の長さは、南西側で2.40m、北東側で2.38mを測る。

棺内横断面は基本的に逆台形を呈し、棺中央部における棺検出面からの深さは9cmを測る。棺は、墓坑底に5cmの整地を行った後、埋置されている。棺底部はほぼ水平な平坦面をなすが、横断面はわずかに皿状を呈する。頭位側と足位側とは明確なレベル差は認められない。

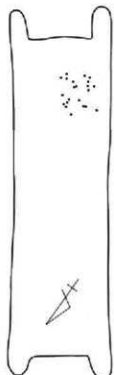
認められなかった。

施朱

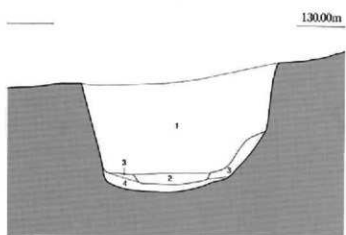
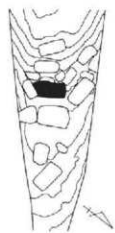
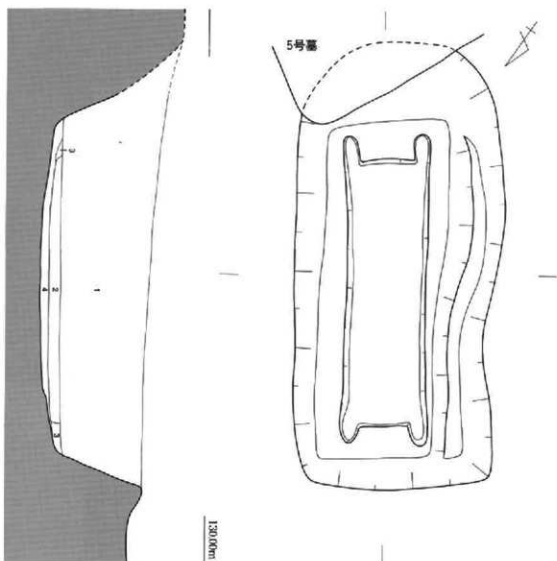
副葬品

棺内底部頭位側、特に主軸ラインより南西側(左側)において、ガラス小玉30点が出土している(第119図)。これらガラス小玉の出土位置は、棺の規模から判断して、頭部を中心とした位置と判断される。数珠状の状態で副葬されたのではなく、頭部を中心にとばまかれたものと考えられる。

ガラス小玉30点(第122図)の長さの最大値・最小値・平均値は、それぞれ6.7mm・2.6mm・5.0mmを測り、その総連結長は12.8cmに及ぶ。また、径の最大値・最小値・平均値は、7.8mm・5.8mm・6.8mmを測り、他のガラス小玉より明らかに大型である。



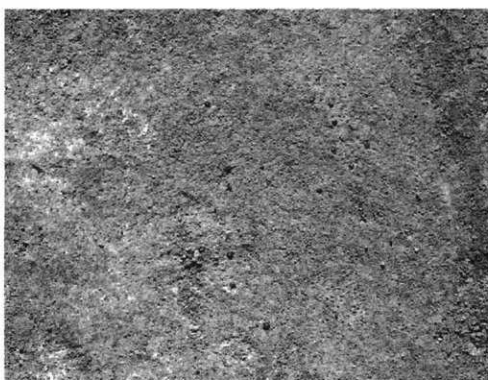
第119図 玉出土位置



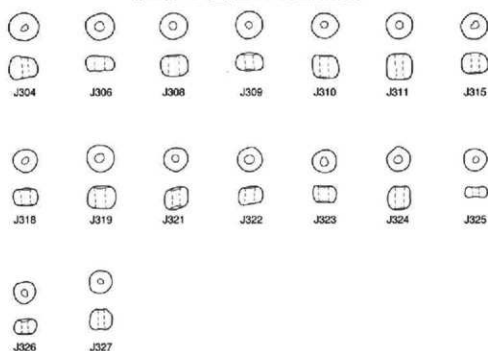
- | | |
|----------|------------------|
| 1. 暗黄褐色土 | 3. 暗黄褐色土 (真砂土含む) |
| 2. 暗褐色土 | 4. 黄褐色土 |

0 ————— 2m

第120图 6号墓



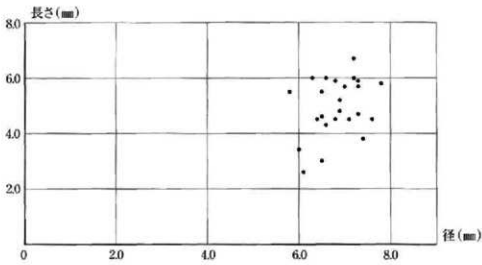
第121図 6号墓出土ガラス小玉出土状況



第122図 6号墓出土ガラス小玉

また、色調も青色と他の空色とは明らかに異なる。

破砕土器供献 棺の内外から壺が出土している（第124図）。同地点出土の壺相互には、接合関係は認められない。しかし、土器の胎土・色調等の特徴から、同一個体の可能性が高い。このため、本報告では同一個体として報告する（第125図）。



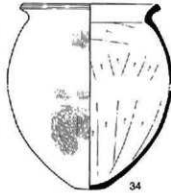
第123図 6号墓出土ガラス小玉計測値



第124図 6号墓 土器供献状況

体部内面は下半～中位を縦方向（下→上）の、上半を横方向（右→左）のヘラ削り、体部外面は全面をハケ調整により仕上げられている。体部の調整後、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。口縁部外端面には2条の腰凹線が施されている。

なお、この甕の体部下外面には、煤の付着が認められる。



0 10cm

第125図 6号墓供献土器

被葬者
時期

被葬者を特定できるのは出土していない。
出上土器から、弥生時代後期前半と考えられる。

8. 7号墓 (図版67)

検出状況

2号墓の北側、4号墓の北西側、6号墓の西側、8号墓の南東側に位置する(第101図)。8号墓とは切り合い関係にあり、8号墓を切る。このため、当墓は完存する。墓坑の主軸方向は、8号墓とはほぼ一致し、これは7号墓が立地する等高線と平行するものである。

墓坑

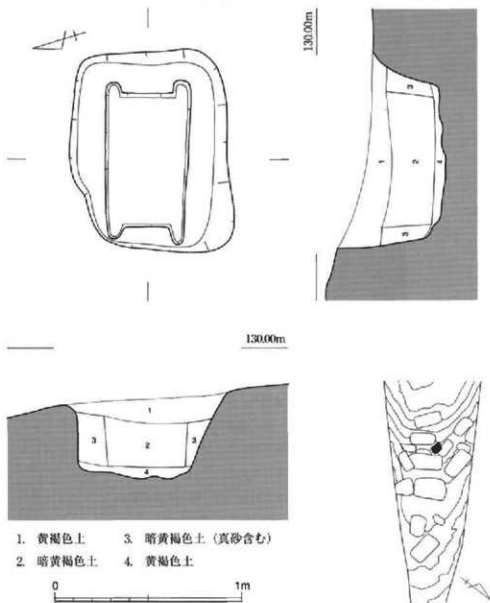
平面形は長方形を呈するが、北辺に若干の歪みが認められる。尾根斜面上に立地するため、墓坑検出面のレベルに顕著な差が認められる。墓坑の規模は、長軸方向で1.05m、その直交方向で85cmを測り、比較的方形に近い平面形をなす。

墓坑の掘削は縦断・横断ともに1段で行われ、その断面形は縦断・横断ともに箱形に近い逆台形を呈する。墓坑底部中央における検出面からの深さは、42cmを測る。

墓坑底部は、若干の凹凸は認められるものの、ほぼ水平に近い平坦面をなす。底部の規模は、主軸方向で80cm、その直交方向で58cmを測る。

埋葬施設

組合せ木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から12cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認

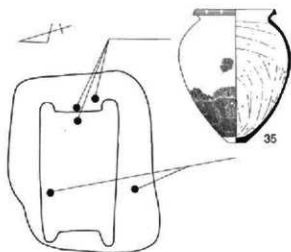


第126図 7号墓

することができた。棺は墓坑の中央部ではなく、西側墓坑壁に接する位置で検出されている。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから、いわゆる「H字形組合せ木棺」と判断される。

棺底部における小口幅は、東側で30cm、西側で25cmを測り、東側に頭位を求めることができる。棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は、68cmを測り、その頭位方向はN106°30'Eを示す。また、長側板の長さは、北側で80cm、南側で83cmを測る。

棺内横断面は箱形を呈し、棺中央部における棺検出面からの深さは、25cmを測る。棺は、墓坑底に約5cmの整地を行った後、埋置されている。



第127図 7号墓土器供献位置

施朱

認められなかった。

副葬品

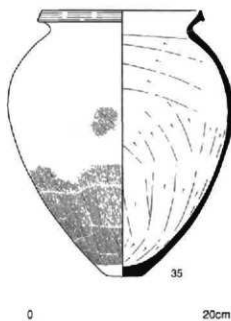
全く出土していない。

破砕土器供献

棺内と棺外から瓦の破片が出土している(第127図)。これらの土器は接合関係にある(35)ことから、棺埋置後に供献されたものと考えられる。

35(第128図)は、図上で完形に復元できる、当本館蔵出土のなかでは比較的大型の甕である。体部内面は、下半～中位を縦方向(下→上)の、上半を横方向(右→左)のヘラ削りにより仕上げられている。体部外面は、全面にきめの細かなハケ調整により仕上げられている。体部の調整後、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。口縁部は上下方向に拡張され、外端面には3条の擬門線が施されている。

また、この甕の体部中位～下半外面には、煤の付着が認められる。



第128図 7号墓供献土器

被葬者

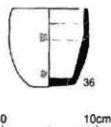
棺内からは、被葬者を特定できるような遺物は全く出土していない。ただし、棺の規模から判断して、未成年者の可能性が考えられる。

時期

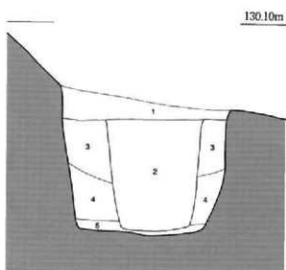
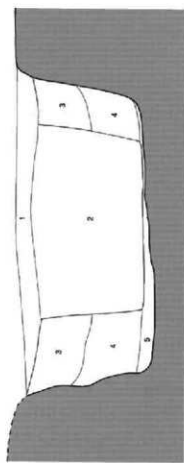
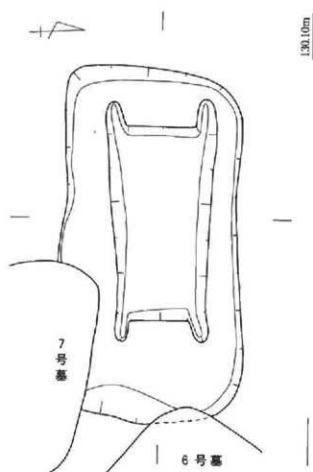
供献土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。

9. 8号墓(図版65)

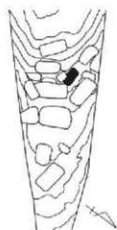
- 検出状況** 6号墓の西側、7号墓の北西側、12号墓の南側に位置する(第101図)。6号墓と7号墓と切り合い関係にあり、両墓に切られている。このため、南東部と北東部の一部を欠く。尾根斜面の傾斜変換点に立地する。
- 墓坑** 平面形は、一部を欠くが、隅丸長方形をなすものと考えられる。検出面における規模は、長軸方向で1.86m、その直交方向で91cmを測る。
- 墓坑の掘削は、縦断・横断ともに1段で行われている。縦断・横断ともにその断面形は箱形に近い逆台形を呈する。特に横断面については、箱形に近い。墓坑底部中央における検出面からの深さは、70cmを測る。
- 墓坑底部は、東側が約6cmほど落ち込むが、基本的には平坦面をなす。墓坑底部の規模は、長軸方向で1.40m、その直交方向で65cmを測る。
- 埋葬施設** 組合せ木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から10cm掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから、いわゆる「日字形組合せ木棺」と判断される。棺は墓坑の中央部ではなく、若干西側に偏った位置で検出されている。
- 棺底部における小口幅は、西側で40cm、東側で32cmを測り、西側に頭位を求めることができる。棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は、88cmを測り、その頭位方向はN87°00' Wを示す。また、長側板の痕跡は、直線的ではなく、小口板との組み合わせ部を境に若干屈曲傾向にある。底部における長側板の長さは、北側で1.22m、南側で1.23mを測る。
- 棺内横断面は箱形に近い逆台形を呈し、棺底部中央における棺検出面からの深さは、59cmを測る。また、棺は墓坑底に約3cm～6cmの整地を行った後、埋置されている。
- 施床** 全く認められない。
- 副葬品** 全く出土していない。
- 破砕土器供献** 棺外から鉢(36)が出土している(第129図)。36は小型の鉢で、手握ねを中心に整形されている。外面に、わずかにハケ調整の痕跡が認められる。
- 被葬者** 棺内からは、被葬者を特定できるようなものは全く出土していない。ただし、棺の規模から判断して、未成年者の可能性が考えられる。
- 時期** 破砕供献された土器、および6号墓・7号墓との切り合い関係から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。



第129図 8号墓供献土器



1. 暗黄褐色土 4. 茶褐色土 (真砂土含む)
 2. 黄褐色土 5. 淡黄褐色土 (真砂土含む)
 3. 淡茶褐色土



第130图 8号墓

10. 9号墓 (図版67)

検出状況

8号墓の西側、10号墓の南側に位置する(第101図)。10号墓とは墓坑を近接するが、明確な切り合い関係は認められない。このため、当墓は完存する。比較的急峻な尾根斜面に立地するため、墓坑検出面には顕著なレベル差が認められる。その差は、墓坑の北側と南側とでは35cmを測る。

墓坑

平面形は、隅丸長方形を基本形とするが、北東隅を中心に大きく突出し、西辺から南辺にかけて大きく弧状をなしている。これは、当墓の掘削に際し、尾根斜面を大きくカットしていることによるものと考えられる。検出面における規模は、主軸方向で2.16m、その直交方向で1.15mを測る。

墓坑の掘削は、南側および西側斜面を大きくカットした後、縦断・横断ともに1段で行われ、その断面形は逆台形を呈する。ただし、墓坑下半の掘削は、縦断・横断ともその断面形は箱形に近い。墓坑底部中央における検出面からの深さは、南側検出面を基準とすると96cm、北側検出面を基準とすると58cmを測る。

墓坑底部は、ほぼ水平な平面をなすが、西側から東側にかけて若干の傾斜が認められる。その差は約10cmである。墓坑底部の規模は、長軸方向で1.60m、その直交方向で65cmを測る。

埋葬施設

組合せ木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から30cm掘り下げたレベルで棺の痕跡を確認できた。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから、「H字形組合せ木棺」と判断される。棺は、墓坑中央部より若干西側に偏った位置で検出されている。

棺底部における小口幅は、西側で36cm、東側で25cmを測り、西側に頭位を定めることができる。また、棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は、1.25mを測り、その頭位方向はN91°30'Wを示す。棺底部における長側板の長さは、北側で1.55m、南側で1.47mを測る。

棺内横断面は箱形を呈し、棺底部中央における棺検出面からの深さは、40cmを測る。また、棺は墓坑底に約5cmの整地を行った後、埋置されている。

施朱

認められなかった。

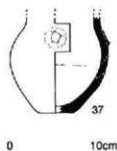
副葬品

全く出土していない。

破砕土器供献

棺外から壺(37)が出土している。この土器の出土したレベルは、棺検出面下約20cm(第3層:第130図)であることから、棺埋置後第4層まで埋めた段階で、破砕土器供献が行われたものと考えられる。

37(第131図・図版75)は、把手そのものは残存していなかったが、その貼り付け痕が認められ、把手付壺と考えられる。内外面とも器表面が摩滅傾向にあるため、調整法を明確に観察することはできないが、内外面ともナデ調整を中心に仕上げられているものと考えられる。また、把手貼り付け箇所の内面には、顕著なエビ押しえ痕が観察される。



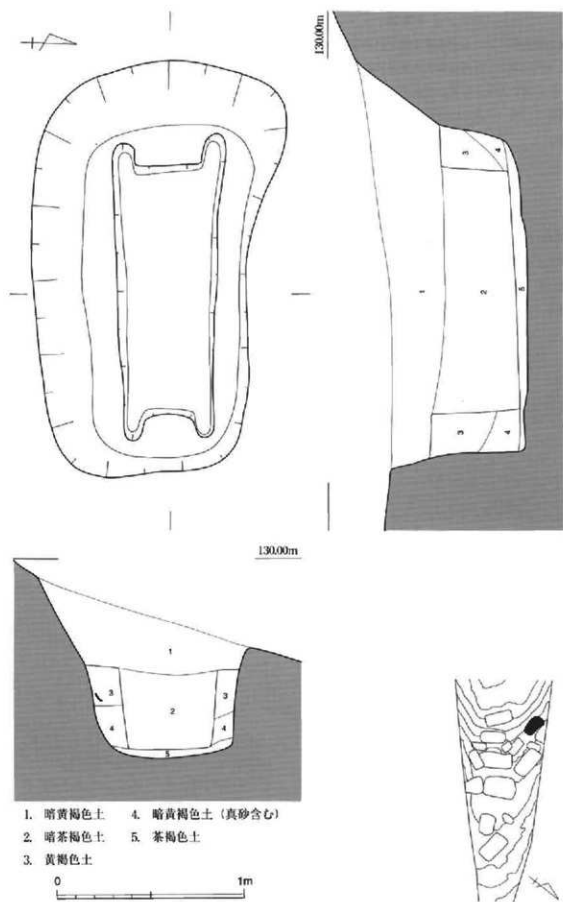
第131図 9号墓供献土器

被葬者

棺内からは、被葬者を特定できるようなものは全く出土していない。

時期

出土土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。



1. 暗黄褐色土 4. 暗黄褐色土 (真砂含む)
 2. 暗茶褐色土 5. 茶褐色土
 3. 黄褐色土

0 ————— 1m

第132图 9号墓

11. 10号墓

検出状況

9号墓の北側、11号墓の西側に位置する(第101図)が、両墓との切り合い関係は認められない。ただし、全体の約2/3は調査区外へ広がるため、全体を検出することはできなかった。尾根斜面に立地し、調査区外はより傾斜が急になることから、5号墓同様、崩落している可能性が高い。

墓坑

平面形は隅丸長方形を呈していたものと考えられる。その規模は、長軸方向で2.50m、その直交方向で1.30m残存する。墓坑の長軸方向は、尾根斜面の等高線とほぼ平行し、その方向は $N85^{\circ}30'E$ を示す。墓坑は、検出した限りでは1段の掘削により掘り込まれている。横断・縦断ともその断面形は逆台形を呈するものと考えられる。

埋葬施設

組合せ木棺と考えられるが、棺の痕跡を確認することはできなかった。

破砕土器供献

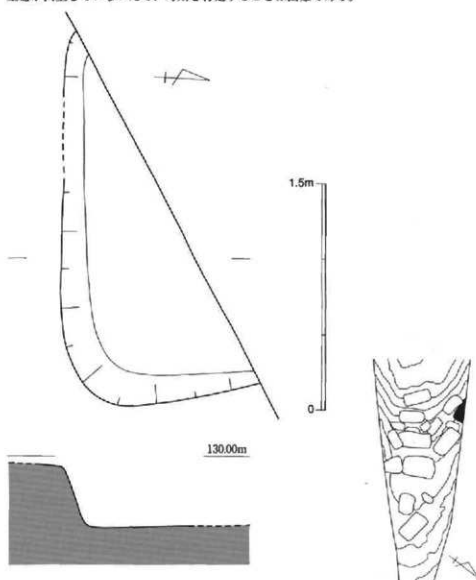
全く出土していない。

被葬者

明らかにすることはできない。

時期

土器が出土していないため、時期を特定することは困難である。

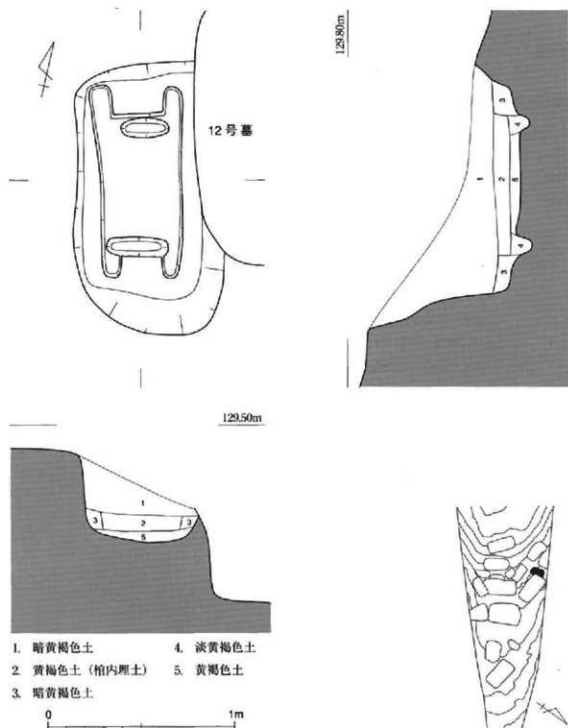


第133図 10号墓

12. 11号墓 (図版68)

検出状況

8号墓の北西側、10号墓の東側、12号墓の西側に位置する(第101図)。12号墓と切り合い関係にあり、12号墓に切られている。このため、墓坑東辺の大半を欠く。尾根斜面に立地するため、墓坑検出面のレベルには顕著な差が認められた。その差は、最大で57cmを測る。墓坑の主軸方向は、当墓が立地する尾根斜面の等高線と直交傾向にあり、他の埋葬施



第134図 11号墓

設と特徴を異にする。

墓坑 平面形は、隅丸長方形を呈していたものと考えられる。全体的に歪んだ形状をなす。墓坑の規模は、長軸方向で1.40mを測り、その直交方向で80cmを測る。

墓坑の傾斜は1段で行われ、縦断面は逆台形、横断面は箱形を呈する。墓坑中央部における検出面からの深さは、山側斜面にあたる南側検出面を基準とすると、82cmを測る。

墓坑底部は、ほぼ水平な平坦面をなす。墓坑底部において、小口穴が2穴検出されている。底部における規模は、主軸方向で1.05m、その直交方向で63cmを測る。

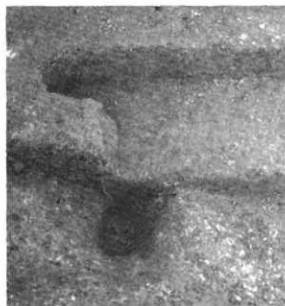
埋葬施設 組合せ木棺を埋葬施設とする。南側検出面から70cm掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。墓坑は完存しないが、棺は墓坑の北西隅に位置するため、完存する。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の痕跡から、いわゆる「H字形組合せ木棺」と判断される。

棺底部における小口幅は、北側で29cm、南側で21cmを測り、北側に頭位を求めることができる。

小口穴 ところで、棺底部において小口穴を検出した。棺底部における規模は、北側で26cm×11cmの長楕円形を呈し、棺底からの深さは11cmを測る。南側は、34cm×11cmの長楕円形を呈し、棺底からの深さは11cmである。なお、調査においては、小口穴は墓坑底部で検出された。しかし、土層断面の観察（第135図・第136図）によると、墓坑底部に約6cmの登乗後、この面から小口穴が掘られている。

なお、上記小口穴の規模は、棺材の組合せから求められた小口幅とは一致しない。ここでは、検出した小口穴は、小口板を埋めるための掘り形と理解する。よって、検出した小口穴そのものは小口幅を直接的には反映していないものと考えたい。

また、主軸ライン上における小口穴中心部（主軸ライン）を基準とした小口間の距離は70cmを測り、頭位方向はN13°00'Wを示す。長側板の規模は、両側とも97cmを測る。



第135図 北側小口



第136図 南側小口

棺内横断面は箱形を呈し、棺底部はほぼ水平な平らな面をなす。また、棺底部中央における棺検出面からの深さは10cmを測る。

蓋木
副葬品

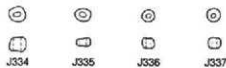
認められなかった。

棺底からガラス小玉5点が出土している(第138図・図版82)。頭部左側と体部側から出しており(第137図・図版68)、集中傾向は認められない。

ガラス小玉5点の長さの最大値・最小値・平均値は、それぞれ4.2mm・2.2mm・3.1mmを測り、その総連結長は1.5cmにすぎない。また径の最大値・最小値・平均値は、それぞれ4.9mm・3.6mm・3.1mmである。なお、1点(J338)については、完存せず計測できなかった。



第137図11号墓五出土位置



破砕土器供献
被葬者

全く認められない。

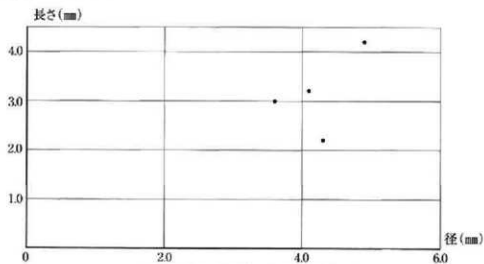
被葬者を特定できるような遺物は出土していない。棺の規模から判断して、未成年者の可能性が考えられる。



第138図 11号墓出土ガラス小玉

時期

土器は出土していないが、後述する12号墓との切り合い関係から、弥生時代後期前半と考えられる。



第139図 11号墓出土ガラス小玉計測値

13. 12号墓 (図版68)

検出状況 6号墓の北西側、8号墓の北側、11号墓の東側に位置する(第101図)。11号墓と切り合い関係にあり、11号墓を切っている。このため、当墓は完存する。尾根斜面に立地するため、墓坑検出面のレベル差は顕著である。最大のレベル差は55cmに及ぶ。また、主軸方向は、当墓が立地する斜面の等高線にはほぼ平行する。

墓坑 平面形は隅丸長方形を呈する。全体的に整った平面形をなす。検出面における規模は、長軸方向で3.07m、その直交方向で1.60mを測る。

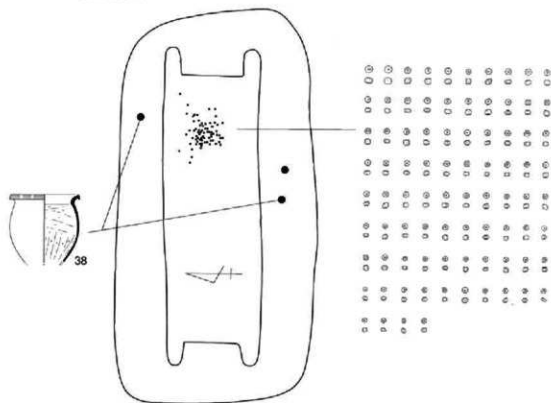
墓坑の掘削は、縦断・横断ともに1段で行われている。縦断・横断の断面形は、いずれも逆台形を呈し、墓坑中央部における南側検出面からの深さは85cmを測る。また、北側検出面からの深さは30cmである。

墓坑底部は、基本的には水平な平坦面をなすが、10cm前後の凹凸が目立つ。墓坑底部における規模は、長軸方向で2.63m、その直交方向で1.13mを測る。

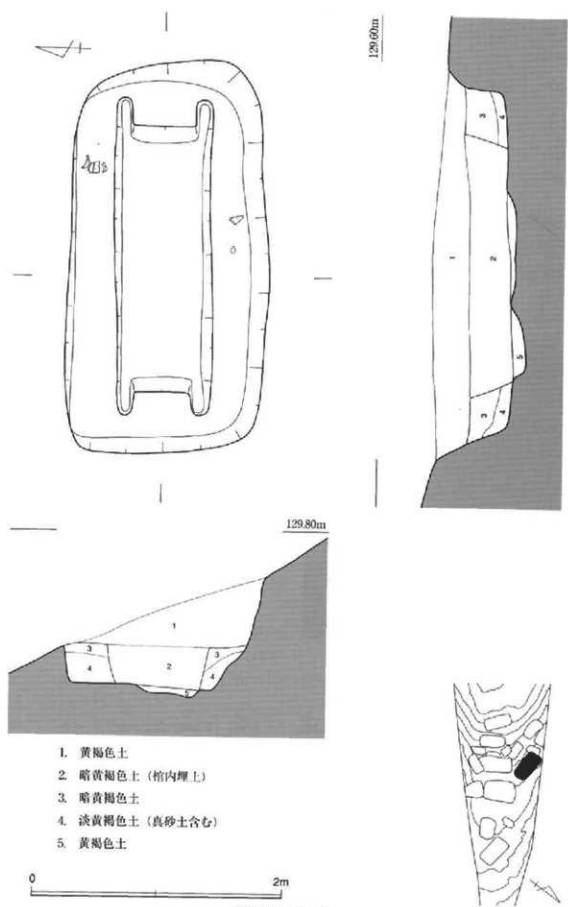
埋葬施設 組合せ木棺を埋葬施設とする。南側検出面から約55cm掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。このレベルは、北側墓坑検出面のレベルと一致する。棺材は遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから、「H字形組合せ木棺」と判断される。

棺底部における小口幅は、東側で55cm、西側で48cmを測り、東側に測位を求めることができる。棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は1.84mを測り、その頭位方向はN88°30'Eを示す。棺底部における長側板の長さは、北側・南側ともに2.45mを測る。

棺内横断面は逆台形を呈し、棺底部は平坦面をなす。棺検出面から棺底部までの深さは、35cmを測る。



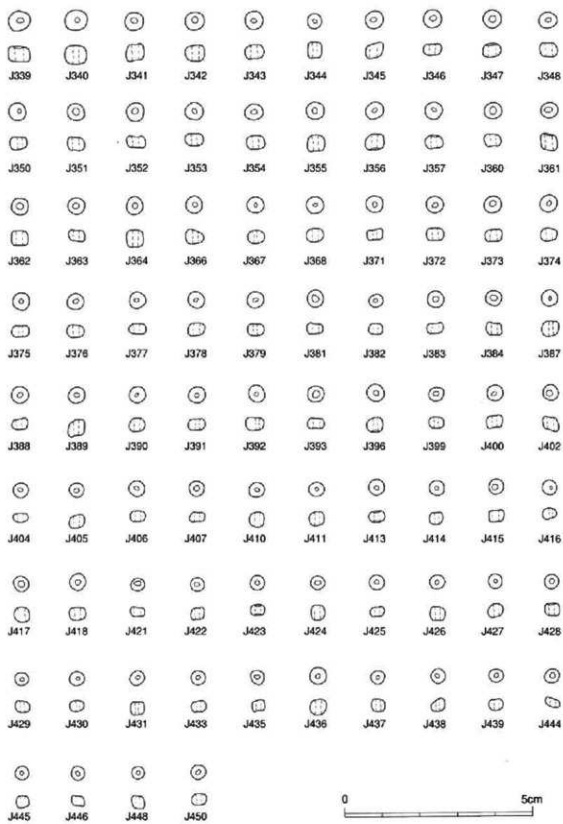
第140図 12号墓遺物出土位置



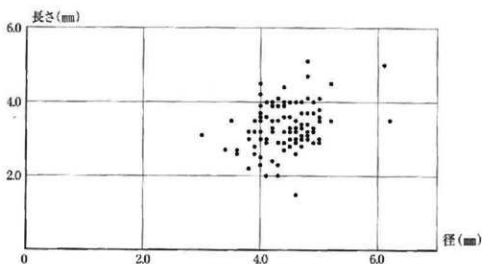
1. 黄褐色土
2. 暗黄褐色土 (棺内埋土)
3. 暗黄褐色土
4. 淡黄褐色土 (真砂土含砂)
5. 黄褐色土

0 2m

第141图 12号墓



第142図 12号墓出土ガラス小玉



第143図 12号墓出土ガラス小玉計測値

棺底は、基本的には墓坑底部と一致する。一部窪地部分については整地がなされている。

施朱

認められなかった。

副葬品

棺底部、頭部付近に集中してガラス小玉が116点（巻頭図版14）出土している（第140図）。116点のガラス小玉の長さの最大値・最小値・平均値は、それぞれ5.1mm・1.5mm・3.3mmを測り、その総連結長は37.6cmに及ぶ。また、径の最大値・最小値・平均値は、それぞれ6.2mm・3.0mm・4.4mmを測る。

破砕土器供献

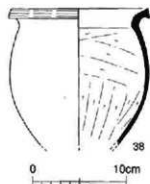
頭部の北側と胸部の南側の棺外から壺の破片が出土している（第140図）。



第144図 土器供献状況

両者は一部を除いて接合関係にあるが、完形には復元できない。

接合された壺（38）は、底部を欠く。体部内面は、下半を縦方向（下→上）、上半を斜方向（右→左）のヘラ削りにより仕上げられている。この後、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。口縁部はわずかに拡張され外端面をもち、3条の擬凹線が施されている。体部外面については摩滅が著しく、調整方法は観察できない。



被葬者

被葬者を特定できるような遺物は出土していない。棺の規模から判断して、成年の可能性が考えられる。

第145図 12号墓供献土器

時期

供献土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。

14. 13号墓 (図版72)

検出状況

5号墓の北東側、6号墓の東側、14号墓の南東側に位置し、14号墓を切っている(第101図)。当墓の検出にあたっては、当初、14号墓との切り合い関係、つまり14号墓との前後関係が不明瞭であった。このため、検出面から約1m掘り下げたレベルでようやく南西辺のプランを確認することができた。また、当墓の南東側は調査区外にあたり、全体を検出することはできなかった。ただし、調査区のラインを境に、尾根斜面が崩落していることから、このラインが墓坑の残存ラインとはほぼ一致するものと考えられる。

当墓は、尾根筋から尾根斜面への変換点に立地しているが、墓坑の長軸方向は、等高線とはほぼ直交する。

墓坑

南東部が崩落しているため、検出後の平面形は台形状を呈するが、本来は長方形を呈していたものと考えられる。先述した検出状況から、墓坑を最も良好に検出できたのは、南西辺と北東辺の一部に限られる。この箇所を中心に見ると、墓坑の掘削は1段で行われ、その横断面はU字形に近い逆台形を呈する。最大幅は1.80mを測り、墓坑底部中央における南西側検出面からの深さは1.10mを測る。また、長軸方向については、1.87m残存し、その方向はN128°45'Wを示す。

墓坑底部は、中央部がわずかに皿状に落ち込んでいるが、全体的には平面長方形の平坦面をなす。その規模は、長軸方向で1.80m残存し、その直交方向で93cmを測る。このプランが、墓坑の本来の平面形に近いものと考えられる。

埋葬施設

墓坑内においては全く検出できなかった。おそらく組合せ式の水棺墓であったと考えられる。

副葬品

全く出土していない。

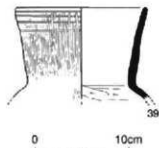
施朱

全く認められなかった。

破砕土器供献

墓坑上面から、遊の口縁部(39)が出土している。39が出土した時点では、当墓に伴うものとは認識できなかったが、この土器の出土位置と平面図を重ね合わせたところ、当墓に伴うことが明らかとなった。

39は、水差し形に分類されるものである。体部内面はヘラ削り、外面はヘラ磨きにより仕上げられている。口縁部は、内外面を横ナデ調整後、外面に4条の弱い凹線が施されている。その後、口縁部から頸部にかけての外面を、縦方向のヘラ磨きにより仕上げられている。この際、ヘラ磨きにより凹線の一部が消されている。口縁部内面はナデ調整により仕上げられている。

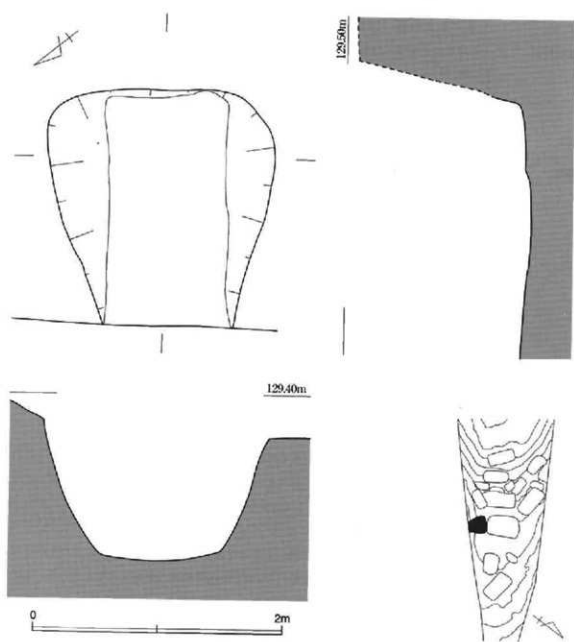


第146図 13号墓供献土器

被葬者を特定できるものは全く出土していない。供献土器から判断して、弥生時代後期初頭と考えられる。

被葬者

時期



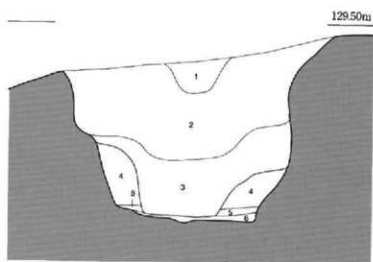
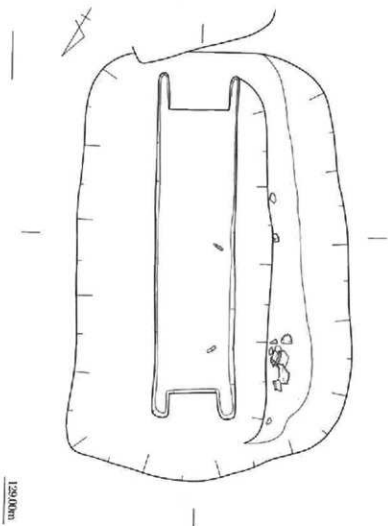
第147图 13号墓

15. 14号墓 (図版69)

- 検出状況** 6号墓の北東側、12号墓の東側、13号墓の北西側に位置する(第101図)。13号墓と切り合い関係にあり、13号墓に切られている。当墓は尾根筋に立地するが、尾根筋の傾斜がゆるくなる比較的平坦な場所に立地している。13号墓の検出状況の項でも述べたが、検出面から1mほど掘り下げたレベルで、当墓を認識することができた。墓坑の主軸方向は、基本的には等高線と平行する。
- 墓坑** 平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられるが、検出面のレベル差が著しいため、精美な形状をなさない。特に南東辺の一部は13号墓に切られている。墓坑の規模は、長軸方向で3.42m、その直交方向で2.17mを測る。
- 墓坑の掘削は、基本的に1段で行われているが、北東辺の一部については2段に掘り込まれている。縦断・横断の断面形は、基本的には逆台形を呈するが、南西辺の一部は切られている。墓坑底部中央における検出面からの深さは、1.25mを測る。
- 墓坑底部はわずかな凹凸が認められるが、基本的には水平な平ら面をなす。墓坑底部における規模は、長軸方向で2.96m、その直交方向で1.10mを測る。
- 埋葬施設** 組合せ木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から1.10m~1.20m掘り下げたレベルで、木棺の痕跡を確認することができた。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから、いわゆる「H字形組合せ木棺」と考えられる。墓坑の一部は13号墓に切られているが、棺については平面的に完存する。
- 棺底部における小口幅は、北西側で42cm、南東側で48cmを測り、南東側に頭位を定めることができる。棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は、2.20mを測り、この頭位方向はN150°00'Eを示す。また、長側板の規模は、北西側で2.65m、南東側で2.70mを測る。
- 棺内横断面は逆台形を呈し、棺検出面からの深さはわずか5cmである。ただし、土層断面の観察によると、4層(第148図)についても棺埋置後の埋め土と考えられる。したがって、4層上面から棺底までが棺の深さを示すものと考えられ、その深さは55cmを測る。棺底部は墓坑底部に約2・3cmの整地後、埋置されている。
- 施朱** 認められなかった。
- 埋没状況** 墓坑内横断方向の土層断面から、当墓の埋没過程を復元することができる(第148図)。これによると、6層による整地後棺を埋置し、4層・5層をもって棺を組み合せると同時に棺の上面まで埋めている。その後、2層・3層をもって墓坑を完全に埋めている。その後、棺の腐敗とともに棺内に墓坑内の埋土が落ち込むが、この影響が2層・3層に認められ、両層の中央部が大きく落ち込む。この落ち込みに1層が堆積し、当墓坑は完全に埋没する。
- 副葬品** 棺底部から、鉄製品2点(F10・F11)が出土している(第149図・図版69)。
- F10は、棺底部西隅付近から出土している。鉄剣の茎と考えられるが、刃部は出土していない。下端部は舌状を呈し、2穴の目釘穴があげられている。2穴ともその径は3mmを測る。茎部の断面形は薄い板状を呈し、幅1.1cm、厚さ3mmを測る。また、残存長は8.3cmで



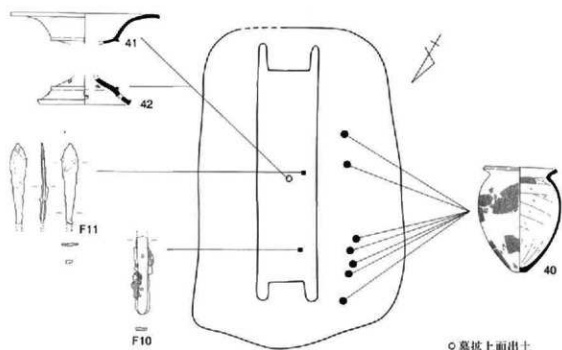
129.00m



- | | |
|----------|-----------------|
| 1. 黑褐色土 | 4. 黄灰色土 (真砂含む) |
| 2. 黄褐色土 | 5. 暗黄褐色土 (真砂含む) |
| 3. 明黄褐色土 | 6. 黄褐色土 |

0 2m

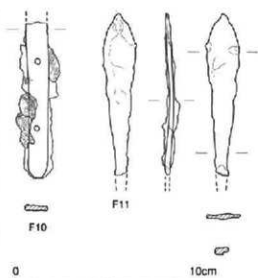
第146图 14号墓



第149図 14号墓遺物出土位置

ある。なお、部分的に木質の付着が認められた(図版78)。

F11は、棺中央部南西側長銅板付近で、刃部を西側へ向けて出土している。刃部が柳葉形を呈する鉄剣で、根部は不明瞭である。茎部は残存していなかった。刃部の断面形は扁平な板状を呈し、表裏両面とも錆は認められない。最大幅1.8cmを測り、中央部における厚さは2.5mm~3.5mmを測る。残存長は8.1cmを測る。茎部付近に木質が認められるとともに、刃部の数箇所に布痕が認められた。

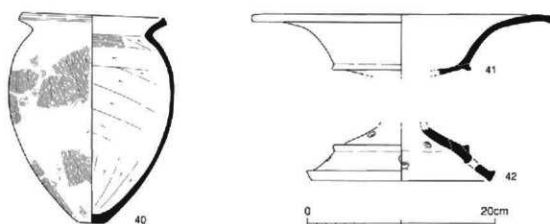


第150図 14号墓出土鉄製品

破砕土器供献 棺検出面と墓坑上面から出土している。

棺検出面では、棺の南西側7箇所から小片が出土している(第149図・第152図)。これらの土器は接合関係にあり、甕(40)に復元された。体部内面は、下半を縦方向(下→上)、上半を横方向(右→左)のヘラ削りにより仕上げられている。体部外面は、縦方向を主体とした目の細かいハケ調整により仕上げられている。体部調整後、口縁部内外面は横ナデ調整により仕上げられている。口縁端部は横ナデ調整により端面をもち、この面に2条の擬凹線が施されている。なお、体部中位外面には、煤の付着が認められる。

墓坑上面出土土器は、厳密には1層中から出土したものである。しかし、先述したような当墓の埋没状況から、当初は墓坑上面に供献されていたものと判断される。墓坑のほぼ中央部から出土している(第149図)。41と42の2個体出土しているが、いずれも高坏であ



第151図 14号墓供献土器

る。接合関係が認められないため別個体として報告するが、色調・胎土等の特徴から、両者は同一個体の可能性が高い。

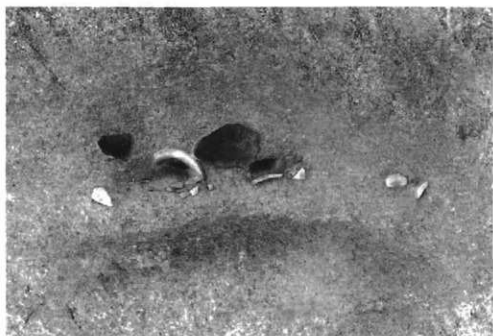
41は坏部で、坏部全体の約3/8残存する。体部と口縁部の境外面には、断面三角形の突帯が貼り付けられている。摩滅が著しいため、内外面の調整は観察できない。42は、脚部ではは完存する。脚端部を上方に拡張し、断面三角形の突帯状を呈する。また、脚部中位には断面三角形を呈する突帯が貼り付けられている。この突帯を挟んだ上側と下側には、それぞれ4穴の透孔が穿たれている。透孔の規模はいずれも径1cmを測る。脚端部を横ナテ調整、脚端部と突帯の間の外面と脚部内面はナテ調整により仕上げられている。また、突帯より上側外面には、ヘラ磨きの痕跡が認められる。

被葬者

棺内からは、被葬者を特定できるようなものは全く出土していない。棺の規模から判断して、成年の可能性が高い。

時期

供献土器から判断して、弥生時代後期前半と考えられる。



第152図 14号墓土器供献状況

16. 15号墓 (図版70)

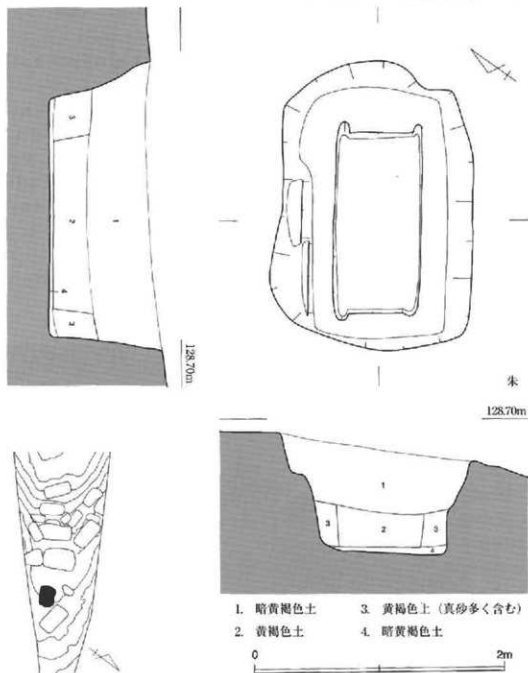
検出状況

14号墓の北東側、16号墓の東側、18号墓の南側に位置する(第101図)。16号墓・18号墓とは墓坑を近接させるが、いずれの墓坑とも切り合い関係は認められず、完存する。また、16号墓～18号墓の3基とともに、尾根筋に立地するが平坦地に近く、他の木棺墓群とは若干の空間を挟んで存在する。なお、墓坑の長軸方向は、等高線とはほぼ直交する。

墓坑

平面形は長方形を指向するが、南東辺を除いては、そのラインは大きく歪んでいる。検出面における規模は、長軸方向で2.30m、その直交方向で1.50mを測る。

墓坑の割削は、北西側の墓坑壁に段が認められることから、2段で行われたものと考えられる。この段は、墓坑検出面から33cm掘り下げたレベルで検出されたもので、幅10cm、



第153図 15号墓

長さ55cmと部分的なものである。このほか、この段の南西側においても、より小規模な段が検出されている。縦断・横断の断面形は逆台形を呈し、墓坑中央部における検出面からの深さは、82cmを測る。

墓坑底部はほぼ水平な平坦面をなし、底部における規模は、長軸方向で1.87m、その直交方向で1.00mを測る。

埋葬施設

組合せ木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から50cm掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから、いわゆる「H字形組合せ木棺」と考えられる。

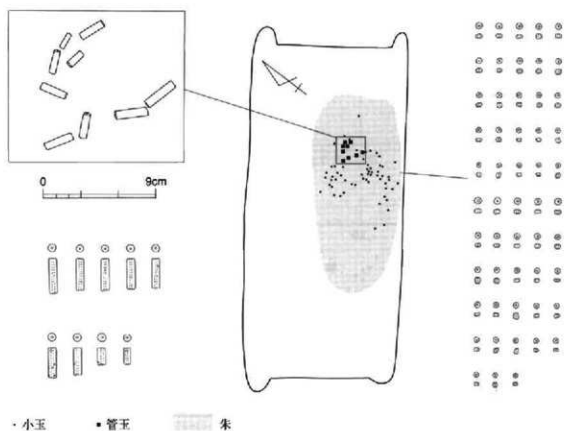
棺底部における小口幅は、北東側で53cm、南西側で45cmを測り、北東側に頭位を求めることができる。また、棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は、1.32mを測り、その頭位方向はN54°20'Eを示す。

棺底部における長側板の規模は、北西側で1.43m、南東側で1.40mを測る。他の同タイプの本棺墓と比較して、小口板と長側板の組み合せ部からの長側板の突出がわずかである点が、特徴的である。

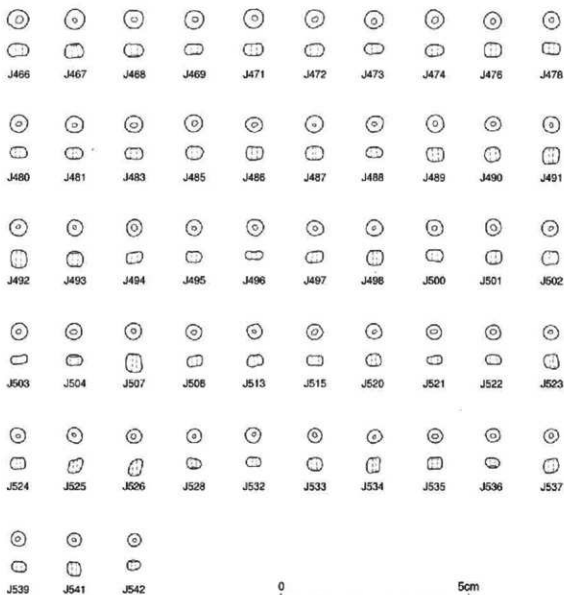
棺内横断面は箱形を呈し、棺検出面からの深さは27cmを測る。棺底部は、ほぼ水平な平坦面をなす。棺の設置は、墓坑底に約4cmの整地後に行われている。

施朱

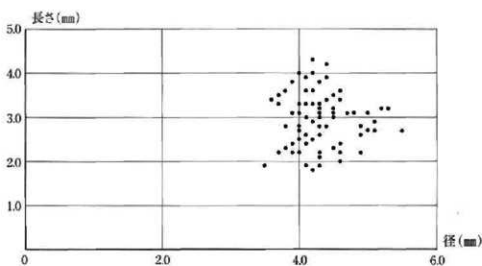
棺底部主軸ラインより若干南東側の頭位側では、85cm×40cmの範囲で、施朱が認められた。



第154図 15号墓玉出土位置



第157図 15号墓出土ガラス小玉



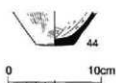
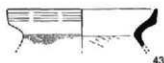
第158図 15号墓出土ガラス小玉計測値

ラス小玉に関しても、より頭位側に集中する傾向は認められる。しかし、数珠状ではなく、散在した状態で出土している。

ガラス小玉は83点出土している（第157図）。83点のガラス小玉の長さの最大値・最小値・平均値は、それぞれ4.3mm・1.8mm・3.0mmを測り、その総連長は22.8cmに及ぶ。また、長さの最大値・最小値・平均値は、それぞれ5.5mm・3.5mm・4.3mmである（第158図）。

破砕土器供献

棺外から甕の口縁部片（43）と底部片（44）が出土している。一部は棺内頭位側小口部に落ち込んだ状態で出土している（第160図）。これらの土器は、棺上に供献されたものと考えられる。



第159図 15号墓供献土器

43は、体部内面をヘラ削り、外面をハケ調整により仕上げられている。その後、口縁部を横ナデ調整により上方に拡張し、外端面には4条の縦凹線が施されている。

44は、わずかに平底の形態をとどめる底部片で、内面を縦方向のヘラ削り、外面を縦方向のハケ調整により仕上げられている。

被葬者

被葬者を直接特定できるようなものは出土していない。

時期

供献された土器から判断して、弥生時代後期中葉と考えられる。



第160図 15号墓 土器出土状況

17. 16号墓 (図版71)

検出状況 15号墓の北西側、17号墓の南東側に位置する(第101図)。17号墓と切り合い関係にあり、17号墓を切っている。このため、当墓は完存する。

墓坑 平面形は不定形で、隅丸方形と楕円形の中間形態をなす。検出面における規模は、主軸方向・その直交方向ともに75cmを測る。墓坑の掘削は1段で行われ、その断面形はU字形を呈する。墓坑中央部における検出面からの深さは、65cmを測る。

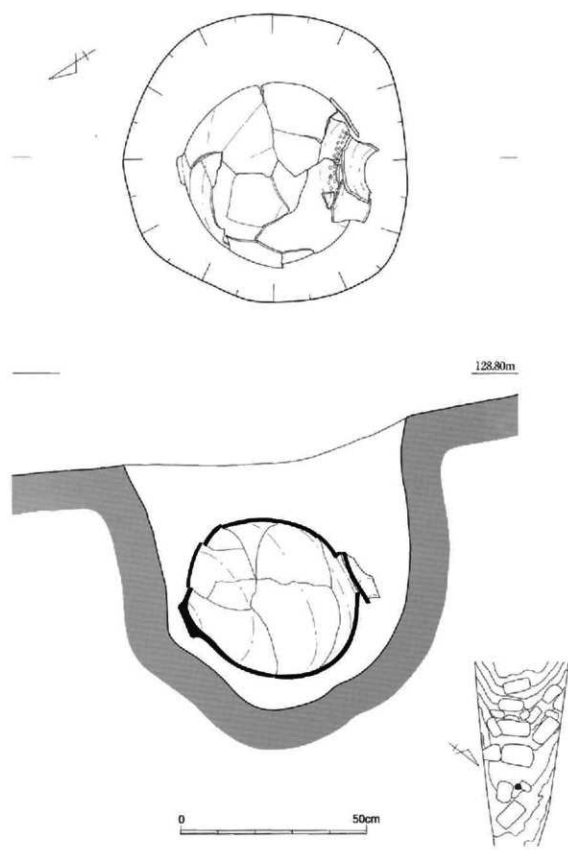
埋葬施設 土器棺を埋葬施設とする。壺を棺身、同じ壺の頸部を蓋に転用して埋葬施設としている。棺は、墓坑内を約8cm前後の整地後、横位に置かれている。棺の主軸方向はN122°00'Wを示す。蓋は、壺の体部から打ち欠かれた約1/3の頸部片が、蓋に転用されていた。また、他の頸部片は、蓋と棺の隙間を覆うように置かれていた。



第161図 16号墓 棺の検出

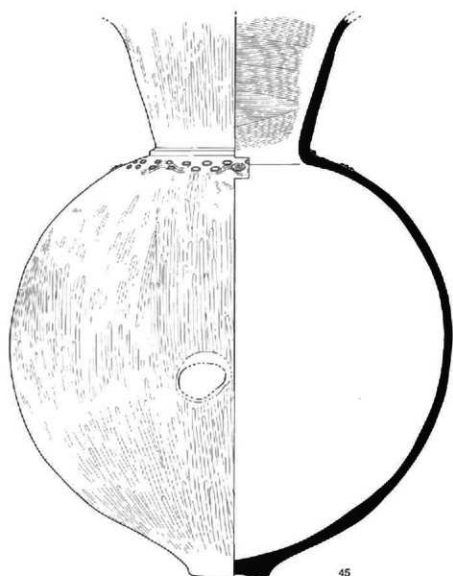


第162図 16号墓 棺内精査



第163图 16号墓

木棺墓群



0 20cm

第164図 16号墓 棺転用土器

棺に転用された壺(45 図版76)は、口縁部を欠く。体部内面はユビオサエとナデ調整、外面はヘラ磨きにより仕上げられている。肩部外面には、3条を1単位とする波状文を施した後、竹管文を2段に施し、一部竹管文の位置に円形浮文が貼り付けられている。円形浮文は2箇所残存する。また、体部中位には、5.0cm×3.7cmの規模の穿孔が、焼成後に施されている。頸部は、内面を横方向のハケ調整、外面を縦方向のヘラ磨きにより仕上げられている。また、頸部と体部の境外面には、断面三角形を呈する突帯が貼り付けられている。

なおこの土器は、胎土中に雲母・角閃石を多く含み、色調が明赤褐色を呈することから、生駒西麓産の可能性が高い。

被葬者

棺内には人骨等は遺存していなかった。

時期

棺に転用された土器から判断して、弥生時代後期中葉と考えられる。

18. 17号墓 (図版72)

検出状況

16号墓の北西側に位置し、16号墓に切られている(第101図)。このため、墓坑の南東隅を欠く。尾根筋から尾根斜面への変換点に位置するため、墓坑検出面にはレベル差が認められる。また、墓坑の主軸方向は、等高線にはほぼ直交する。

墓坑

平面形は隅丸長方形を呈するが、北辺および南辺の残存部分は弧状をなし、楕円形に近い。墓坑の主軸方向は、等高線とはほぼ直交方向を示す。検出面における墓坑の規模は、長軸方向で1.32m残存し、その直交方向は80cmを測る。長軸方向の規模については、当初は1.37mあったものと復元される。

墓坑の掘削は、縦断・横断とも、基本的には1段で行われている。縦断・横断の断面形は逆台形をなし、墓坑中央部における検出面からの深さは、45cmを測る。

墓坑底部は、ほぼ水平な平坦面を意識して掘削されているが、凹凸が顕著である。5cm~10cmのレベル差が認められる。墓坑底部の規模は、長軸方向で1.27m、その直交方向で56cmを測る。

埋葬施設

組合せ木棺を埋葬施設とする。墓坑西側検出面から約30cm掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから、いわゆる「H字形組合せ木棺」と判断される。墓坑同様、16号墓に切られているため、南東側長側板の一部は検出されなかった。

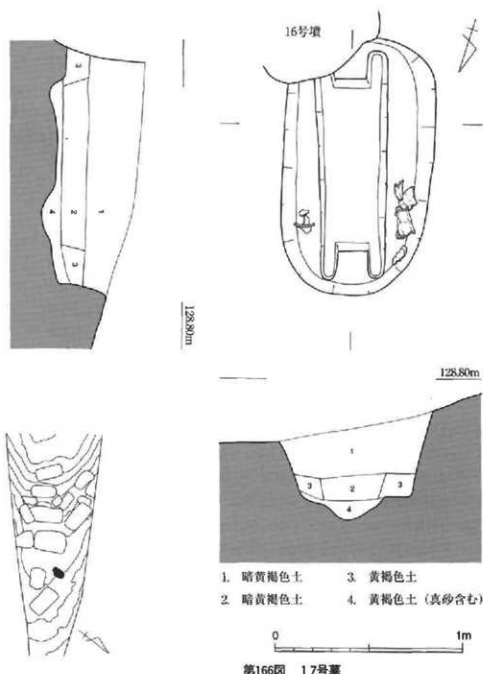
棺底部における小口幅は、南側で21cm、北側で18cmを測り、南側に頭位を求めることができる。棺底部主軸ライン上における小口間の距離は、81cmを測り、この頭位方向はN162°30'Eを示す。

2辺の長側板は平行ではなく、頭部側にわずかに開く傾向にある。また、棺底部における長側板の規模は、西側で1.17mを測り、東側では1.06m残存する。

棺内横断面は逆台形を呈し、棺検出面からの深さは13cmを測る。棺底部は墓坑底部に3~10cmの整地後設置されたもので、ほぼ水平な平坦面をなす。



第165図 17号墓の検出



第166図 17号墓

施朱

認められない。

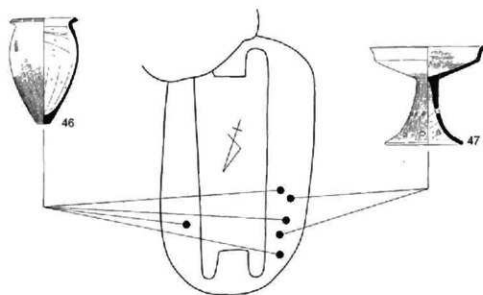
副葬品

全く出土していない。

破碎土器供献

棺検出面上、棺外足位側の両側から、甕と高坏が出土している（第167図・図版72）。

甕(46)は、棺の両側から出土した破片が接合関係にあるもので、体部の一部を除いてほぼ完存する。体部内面は、下半を縦方向(下→上)、上半を横方向(右→左)のヘラ削りにより仕上げられている。体部外面は、下半についてはハケ調整により仕上げられている。上半については、摩滅のため良好に観察できないが、わずかにハケ調整の痕跡が観察される。体部の調整後、口縁部内外面を横ナデ調整により仕上げられている。また口縁端部は、下方を中心にわずかに拡張が認められ、外端面を有する。端面には3条の擬凹線が施されている。また、底部はわずかに平底を呈する。



第167図 17号墓 土器供献位置

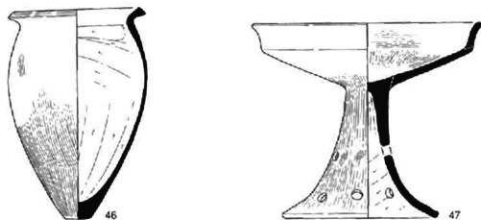
高坏(47)は、足位の西側で数箇所に破砕された状態で出土している。図上では定形に復元できた(第168図)が、口縁部は1/4、底部は2/3残存するのみである。坏部は、口縁部内外面を横ナデ調整後、内外面をヘラ磨きにより仕上げられている。脚部外面についても、ヘラ磨きにより仕上げられている。内面については、下半を横方向(右→左)のヘラ削りにより仕上げられている。また、脚部には円形の透孔が上下2段に施されている。焼成前の穿孔である。上段が2箇所、下段が6箇所に施され、その規模は上下段とも径1cm前後である。

被葬者

被葬者を特定できるようなものは全く出土していない。

時期

破砕供献された土器から判断して、弥生時代後期中葉と考えられる。



第168図 17号墓供献土器

19. 18号墓 (図版73)

検出状況

当木棺墓群の最北東部、尾根筋の最も低い位置にあたる(第101図)。尾根筋上に立地するが、当木棺墓群のなかでは最も平坦な位置にあたる。このため、墓坑検出面のレベルはほぼ一定している。また、15号墓の北側に位置するが、15号墓との切り合い関係は認められず、当墓は完存する。

墓坑

平面形は隅丸長方形を呈する。4辺とも直線的で、精美な平面形をなす。墓坑の主軸方向は、等高線とほぼ一致する。検出面における規模は、長軸方向で3.04m、その直交方向で1.63mを測る。

墓坑の掘削は、縦断・横断ともに1段で、その断面形は逆台形を呈する。ただし、横断面については、底部を中心にU字形に近い傾向が認められる。墓坑底部中央における検出面からの深さは95cmを測る。

墓坑底部は他の浅い木棺墓のような平坦面をなさず、浅い皿状を呈している。また、主軸ラインを中心に凹凸が認められ、そのレベル差は最大で5cmである。墓坑底部における規模は、長軸方向で2.60m、その直交方向で1.20mを測る。

埋葬施設

組合せ木棺を埋葬施設とする。墓坑検出面から70cm掘り下げたレベルで、棺の痕跡を確認することができた。木棺は、墓坑のほぼ中央部に位置する。棺材そのものは遺存していなかったが、小口板と長側板の組合せから、いわゆる「H字形組合せ木棺」と判断される。

棺底部における小口幅は、東側・西側ともに46cmを測り、小口幅のみからは頭位を求めることはできない。ただし、後述するように、玉の出土位置から判断して、東側に頭位を求めることができる。また、棺底部における主軸ライン上での小口間の距離は、2.02mを測り、その頭位方向はN95°00'Eを示す。南北両側の長側板はほぼ平行し、その規模は両側とも2.40mである。

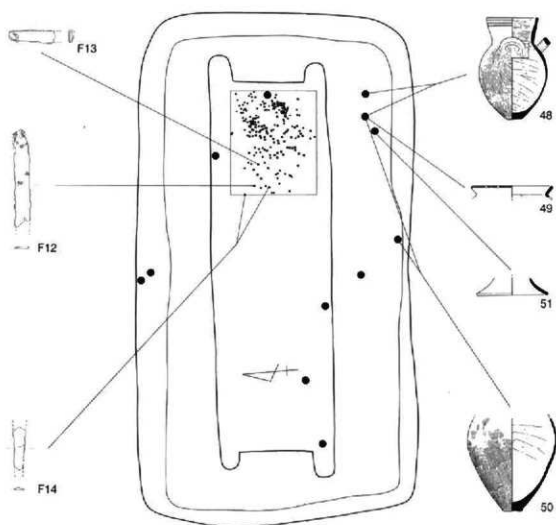
棺内横断面は箱形に近い逆台形を呈し、棺検出面からの深さは25cmを測る。棺底部は平坦で、基本的には墓坑底と一致する。一部、墓坑底部の凹部については、約5~10cmの整地が行われている。

施朱

棺内東部、頭位付近にわずかに朱の付着が認められた。



第169図 18号墓 玉の取り上げ



・鉄器 ・小玉 ・管玉

第170図 18号墓 遺物出土位置

副葬品

棺底部から玉と鉄製品が出土している。

玉

棺底部頭位付近で、計442点の玉が集中して出土している（第170図・図版73）。当木棺墓群中最も多量の出土である。出土した玉のレベル差は、1cmの範囲内に限られる。また、平面的な出土位置は、上述した朱の分布範囲とはほぼ一致する。玉の分布状況（第171図）を詳細に検討すると、これらの分布域のなかでも、ガラス小玉・ガラス管玉・碧玉製管玉（第171図 小型の管玉）それぞれの分布の中心が異なっている。

出土した玉の種類は、当木棺墓群の中では最もバリエーションに富み、ガラス小玉・ガラス管玉・ガラス粟玉、碧玉製管玉が出土している（巻頭図版16）。

小玉

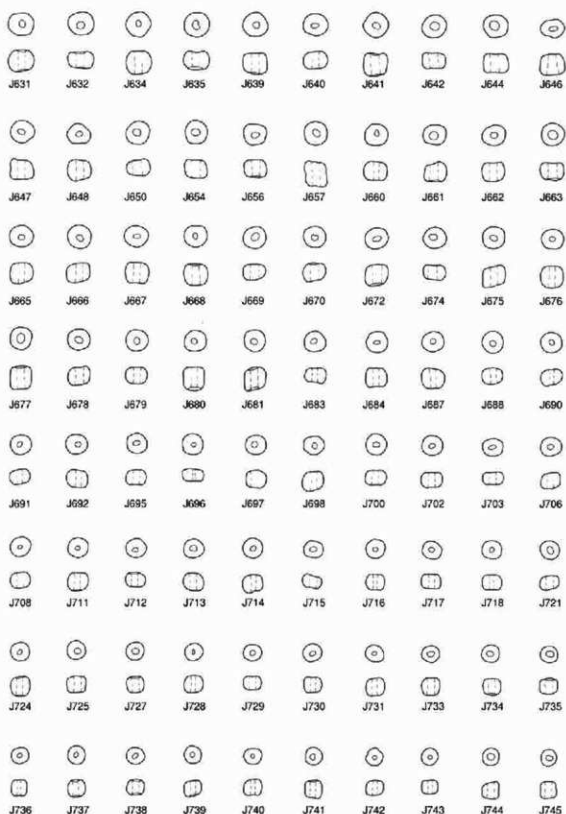
ガラス小玉は182点（J 630～J 811）出土している（第172図・第173図・図版86）。182点のガラス小玉の長さの最大値・最小値・平均値は、それぞれ7.7mm・1.5mm・4.2mmを測り、その総連結長は72.9cmに及ぶ。また、径の最大値・最小値・平均値は、それぞれ7.7mm・3.3mm・5.2mmを測る。

粟玉

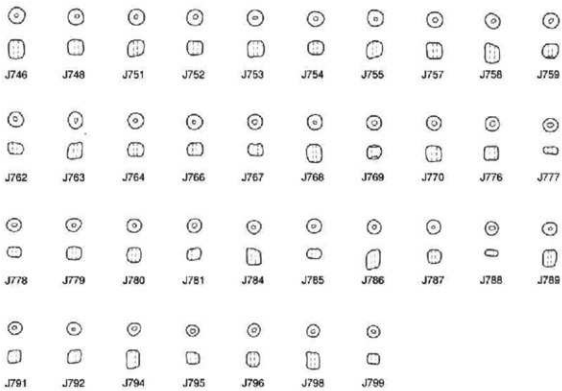
ガラス粟玉は179点（J 812～J 990）出土している（図版87）。179点のガラス粟玉の



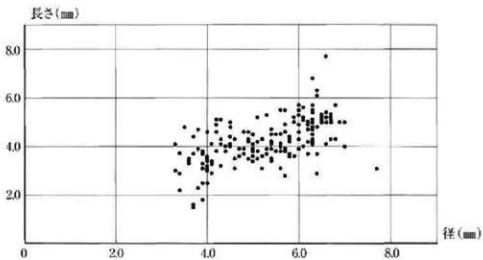
第171图 18号墓 玉出土状况



第172図 18号墓出土ガラス小玉 (1)



0 5cm
第173図 18号墓出土ガラス小玉 (2)

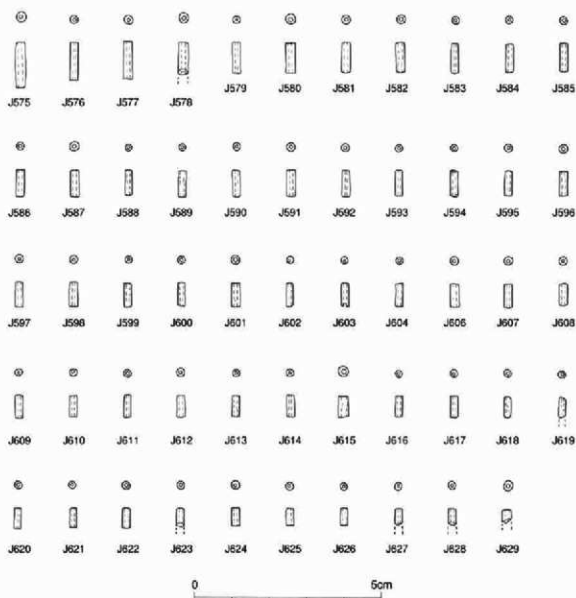


第174図 18号墓出土ガラス小玉計測値

長さの最大値・最小値・平均値は、それぞれ1.5mm・0.4mm・0.8mmを測り、その総連結長は14.9cmに及ぶ。また径の最大値・最小値・平均値は、それぞれ2.1mm・1.1mm・1.6mmである。色調は、紺色が一般的で、ガラス小玉とは明らかに異なる(巻頭図版16)。

管玉

ガラス管玉は26点(J549~J574)出土している(第176図・巻頭図版16・図版88)。26点の長さの最大値・最小値・平均値は、それぞれ16.7mm・9.7mm・12.3mmを測り、その総連結長は29.5cmに及ぶ。また、径の最大値・最小値・平均値はそれぞれ4.8mm・3.8mm・4.6mm



第175図 18号墓出土碧玉製管玉

を測る。穿孔は両側からなされている（図版88）。

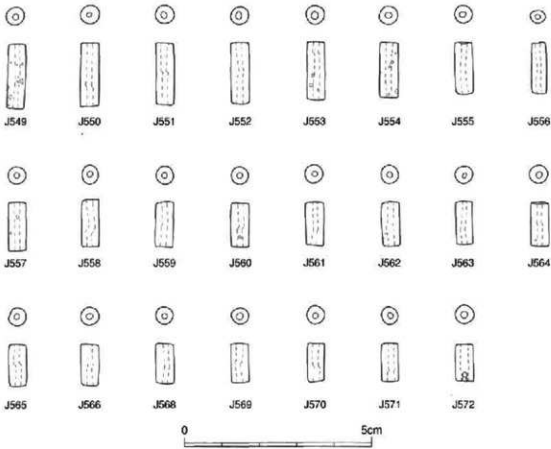
碧玉製管玉は55点（J575～J629）出土している（第175図・巻頭図版16・図版89）。55点の長さの最大値・最小値・平均値はそれぞれ11.9mm・3.0mm・6.3mmを測り、その総連続長は34.6cmに及ぶ。また径の最大値・最小値・平均値は2.7mm・1.7mm・2.1mmである。長さ・径ともにガラス管玉より明らかに小型である。ガラス管玉同様、穿孔は両側からなされている。

鉄製品

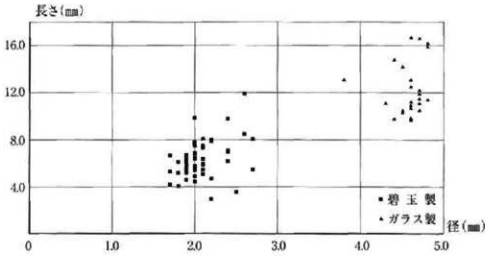
3点（F12～F14）出土している（第179図・図版79）。いずれも棺底部、頭位側から出土している（第170図）。また、これらの出土位置は、玉類の出土範囲内北西部にあたる。

F12は、刀子の刃部と考えられる。刃部のみ残存し、その残存長は10.4cmと大型の刀子である。刃部は片刃で、断面形は鋭角三角形をなす。その幅1.5cmを測り、根部の厚さは2.8mmを測る。刃部の数箇所には布の付着痕が認められる。

F13についても、刀子と考えられる。刃部のみ残存し、その残存長は5.0cmを測る。断



第176図 18号墓出土ガラス管玉



第177図 18号墓出土管玉計測値

面は鋭角三角形をなし、明確な棟部をもつ。刃部の幅は1.2cm、棟部の幅7mmを測る。刃部先端部付近で布の付着痕が認められる。

F14は、鉈の一部、刃部から身部への変換点を中心とした小片と考えられる。断面は鈍角三角形を呈し、幅1.1cm、中央部における厚さ2.5mmを測る。残存長は4.6cmを測る。

破碎土器供献 棺検出面棺側部において壺・甕・脚部が破碎された状態で出土している（図版73）。一

部、棺内埋土からも出土しているが、棺上に供
 献された土器が、棺蓋の陥落とともに落ち込ん
 だものと考えられる。なお、図化した土器は、
 全て頭位左側の棺外から出土している。

壺 48の1個体である。体部は長胴形をなし、内
 面は斜方向から横方向（右→左）の強いヘラ削
 りにより仕上げられている。肩部には、コ字形
 に近い半環状把手が1箇所に認められる。把手
 の装着は、体部に把手を貫通させ、周囲を粘土
 で補強している。この後、体部外面には、把手
 差込部周辺を含めて、全面に縦方向のヘラ磨き
 が施されている。口頸部を横ナデ調整後、口縁
 部外面には3条のヘラ描沈線が施されている。
 また、口頸部内面は、横方向のヘラ磨きにより
 仕上げられている。体部を除く口縁部・底部は
 定存する。

甕 49と50の2個体図化した。両個体は、出土位
 置・胎土等の特徴から同一個体の可能性も考え
 られるが、直接的な接合が認められなかったこ
 とから、本書では別個体として報告する。

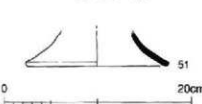
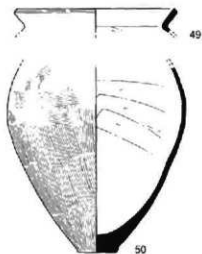
49は口縁部だけの小片で、内外面を横ナデ調
 整により仕上げられている。また、口縁端部は
 強い横ナデ調整により端面をもち、2条の擬凹
 線が施されている。わずかに残存する体部内面
 には、ヘラ削り痕が観察される。

50は口縁部を欠く。体部外面は、下半を
 縦方向、上半は縦方向の後横方向のハケ調
 整により仕上げられている。内面は、下半
 をヘラ削り後ナデ調整、上半を横方向（右
 →左）のヘラ削りにより仕上げられている。

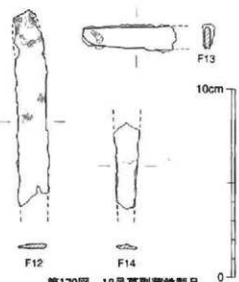
脚部 51の1点であるが、器種を特定できない。
 内外面とも摩滅が著しく、調整は観察でき
 ない。脚端部は横ナデ調整により仕上げら
 れている。

被葬者 直接被葬者を特定できるものは全く出土
 していない。棺の規模から判断して、成人
 の可能性が考えられる。

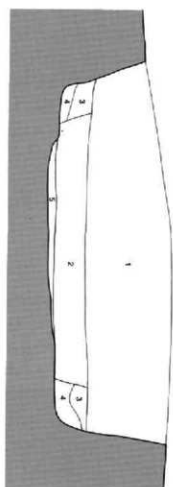
時期 弥生時代後期前半と考えられる。



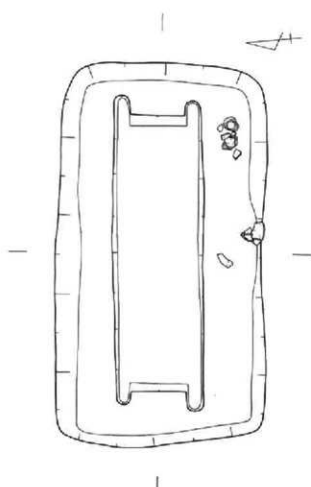
第178図 18号墓供献土器



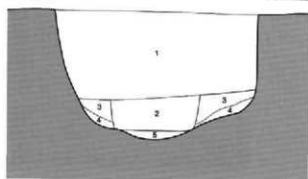
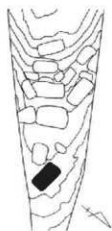
第179図 18号墓割碎状製品



128.50m



128.50m



- | | |
|---------------|----------|
| 1. 暗黄褐色土 | 3. 暗黄褐色土 |
| 2. 黄褐色土 | 4. 暗茶褐色土 |
| 3. 黄褐色土(真砂含む) | |

0 2m

第180图 18号墓

第8節 落し穴群

はじめに

概要 14号墳の北側斜面で、6穴の落し穴群（SK01～SK06）と、これに関連すると考えられる3穴からなる杭列を検出した。これらの落し穴群は、東西方向にはほぼ一直線上に並んでおり、これらの6穴の立地する標高はほぼ一致する。つまり、落し穴群のラインは、同一等高線上で検出されている。また、6穴の落し穴は、一直線上で検出されたが、2穴（SK01・SK02）と他の3穴がセットとなり、この間に杭列が検出されている。

杭列 SK02とSK03の間に位置し、3穴からなる。3穴とも径は20cmと同規模で、検出面からの深さは5cm～10cmを測る。杭相互の距離は、西側から80cmと1mを測る。

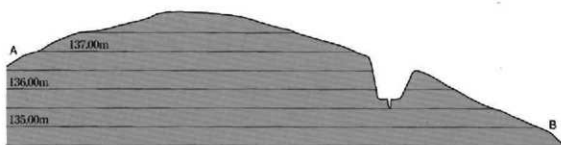
SK01（第184図）

検出状況 落し穴群の西端に位置する（第183図）。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

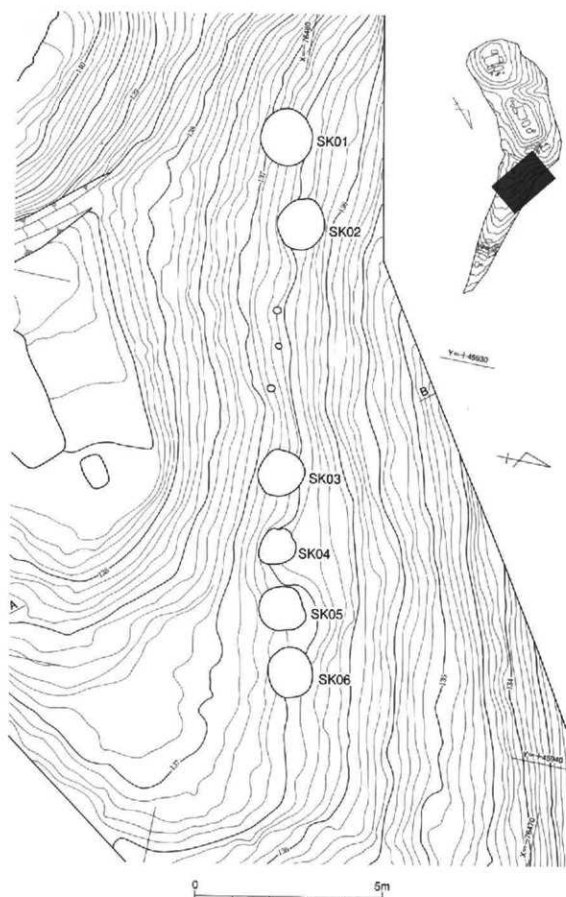
規模 検出面における平面形は精美な円形を呈し、その径は130mを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは90cmを測る。底部の平面形もほぼ円形を呈し、その規模は85



第184図 落し穴の検出



第182図 落し穴の立地



第183図 落し穴群

落し穴群

cm×90cmである。

杭痕 底部中心部よりわずかに南東側にずれた位置で、1穴検出されている。落し穴底部における規模は、径14cmを測る。横断面は逆三角形をなし、落し穴底部からの深さは21cmである。

埋没状況 黄褐色土2層からなるが、下層には5mm大の炭片が多く含まれていた。2層とも自然に堆積したものと考えられる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 遺物が出土していないため、時期を特定できない。

SK02 (第185図)

検出状況 SK01の東側に位置する。SK01肩部との距離は95cmを測る。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

規模 検出面における平面形は、SK01同様精美な円形を呈し、その規模は1.40m×1.50mを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは1.25mを測る。底部の平面形もほぼ円形を呈し、その規模は85cm×85cmである。

杭痕 底部のほぼ中心部で1穴検出されている。落し穴底部における規模は、径25cmを測る。横断面は逆三角形をなし、落し穴底部からの深さは42cmである。

埋没状況 黄褐色土3層からなるが、最下層には5mm大の炭片が多く含まれていた。3層とも自然に堆積したものと考えられる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 遺物が出土していないため、時期を特定できない。

SK03 (第185図)

検出状況 杭列の東側、SK04の西側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

規模 検出面における平面形はほぼ円形を呈し、その径は1.25mを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは1.25mを測る。底部の平面形もほぼ円形を呈し、その規模は75cm×73cmである。

杭痕 底部のほぼ中心部で1穴検出されている。落し穴底部における規模は、径20cmを測る。横断面は逆三角形をなし、落し穴底部からの深さは25cmである。

埋没状況 黄褐色土2層からなるが、下層には5mm大の炭片が多く含まれていた。2層とも自然に埋没したものと考えられる。

出土遺物 全く出土していない。

時期 遺物が出土していないため、時期を特定できない。

SK04 (第184図)

検出状況 SK03の東側に位置する。SK03肩部との距離は86cmを測る。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。

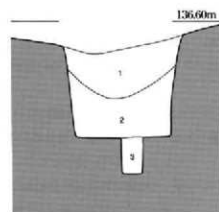
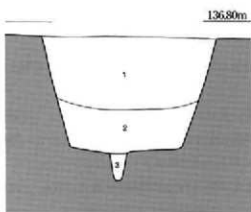
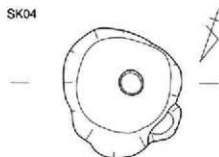
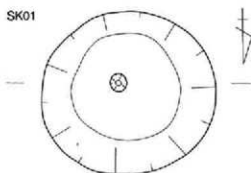
- 規模** 検出面における平面形は、円形を基本形とするが、他の落し穴と比べてかなり歪みが著しい。検出面における規模は、1.06m×95cmを測る。横断面は箱形を呈し、検出面からの深さは70cmを測る。底部の平面形は、検出面における平面形よりもより円形に近く、その規模は75cm×75cmである。
- 杭痕** 底部のほぼ中心部よりわずかに西側にずれた位置で、1穴検出されている。落し穴底部における規模は、径17cmを測る。横断面は長方形をなし、落し穴底部からの深さは30cmである。
- 埋没状況** 明黄褐色土2層からなるが、下層には5mm大の炭片が多く含まれていた。2層とも自然に堆積したものと考えられる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 遺物が出土していないため、時期を特定できない

SK05 (第184図)

- 検出状況** SK04の東側に位置する。SK04肩部との距離は62cmを測る。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。
- 規模** 検出面における平面形は、円形を基本形とするが、わずかに楕円形の傾向が認められる。検出面における規模は、1.20m×1.26mを測る。横断面は箱形を呈し、検出面からの深さは80cmを測る。底部の平面形はほぼ円形で、その規模は85cm×88cmである。
- 杭痕** 底部のほぼ中心部よりわずかに西側にずれた位置で、1穴検出されている。落し穴底部における規模は、径17cmを測る。横断面はU字形をなし、落し穴底部からの深さは31cmである。
- 埋没状況** 黄褐色土3層からなるが、第2層には5mm大の炭片が多く含まれていた。3層とも自然に堆積したものと考えられる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 遺物が出土していないため、時期を特定できない。

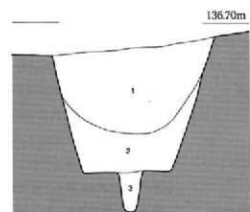
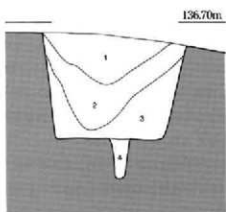
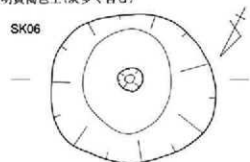
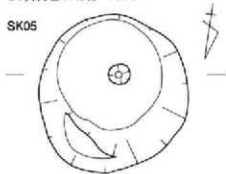
SK06 (第184図)

- 検出状況** SK05の東側、落し穴群の最東端に位置する。SK05肩部との距離は47cmを測る。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。
- 規模** 検出面における平面形は、ほぼ円形を呈する。検出面における規模は、1.20m×1.30mを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは1.00mを測る。底部の平面形は楕円形を呈し、その規模は70cm×84cmである。
- 杭痕** 底部のほぼ中心部よりわずかに西側にずれた位置で1穴検出されている。底部における規模は、径20cmを測る。横断面はU字形をなし、落し穴底部からの深さは31cmである。
- 埋没状況** 明黄褐色土3層からなるが、下層には5mm大の炭片が含まれていた。ただし、その量は、他の落し穴ほど多くはない。2層とも自然に堆積したものと考えられる。
- 出土遺物** 全く出土していない。
- 時期** 遺物が出土していないため、時期を特定できない。



1. 黄褐色土
2. 黄褐色土(炭多く含む)
3. 淡黄褐色土

1. 黄褐色土
2. 明黄褐色土(炭多く含む)
3. 淡黄褐色土(枕痕)

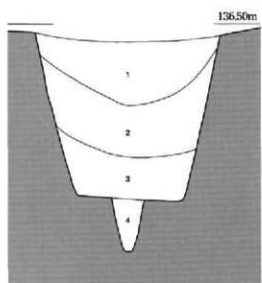
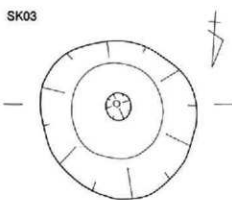
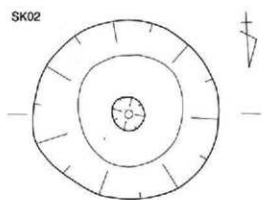


1. 黄褐色土
2. 黄褐色土(炭多く含む)
3. 茶褐色土
4. 淡黄褐色土(枕痕)

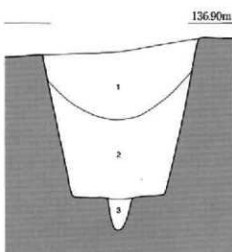
1. 明黄褐色土
2. 明黄褐色土(炭含む)
3. 淡青灰色土(枕痕)

0 2m

第184図 落し穴 (1)



- 1. 明黄褐色土
- 2. 明黄褐色土(炭若干含む)
- 3. 黄褐色土(炭多く含む)
- 4. 淡青灰色土(枕状)



- 1. 黄褐色土
- 2. 明黄褐色土(炭含む)
- 3. 淡青灰色土(枕状)



第185図 落し穴(2)

小結

時期

これらの落し穴群の時期についてであるが、これらの遺構からは土器が1片も出土していない。このため、時期を特定することはできない。当初、埋土中に多量に含まれていた炭片を¹⁴C年代測定を試みる予定であった。ただし、予算の関係でできなかった。

しかし、特に炭片を含む層については、弥生時代後期以降の埋葬遺構の埋土よりもしまっていた。また、他の同形態の落し穴遺構の時期を考慮に入れると、縄文時代まで遡る可能性を考えたい。

機能

6穴の落し穴と、3基の枕列は、その位置関係から判断して、一体のものとして機能していたものと考えられる。つまり、尾根上部から動物を落し穴群に向かって追い込んでいったものと考えられる。

第4章 自然科学分析の結果

第1節 梅田東古墳群出土人骨について

京都大学霊長類研究所
片山一道

10号墳第1主体部・同第2主体部・同第4主体部・同第5主体部・12号墳第1主体部で人骨・歯が遺存していた。

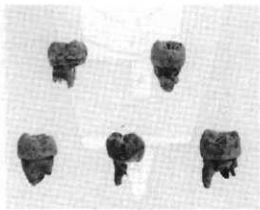
(1) 10号墳 第1主体部

骨と歯が出土している。保存状態はきわめて悪い。人骨の出土状態から、仰向けに埋葬されていたものとみられる。

骨は、後頭骨の底部と鱗部の内板、左側頭骨の錐体部、右側頭骨の錐体部などの破片、第一頸椎と第二頸椎のみが確認できる。

歯は、5本出土している。これらは上顎の左右の第3大臼歯と第2大臼歯、下顎の第2大臼歯と第3大臼歯である。これらの歯には、虫歯の痕跡は認められないが、下顎の第2大臼歯に歯石（プラーク）が認められる。

死亡年齢は、第3大臼歯が萌出直後であることから、青年から壮年前半、20から30才前後と推定可能である。性別は不明である。



第186図 10号墳第1主体部出土人骨

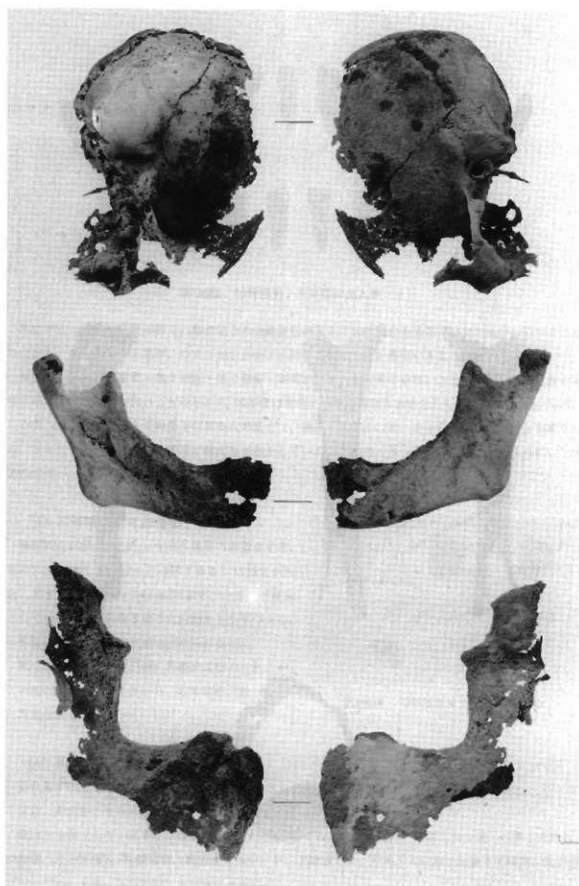
(2) 10号墳 第2主体部

骨と歯が出土している。

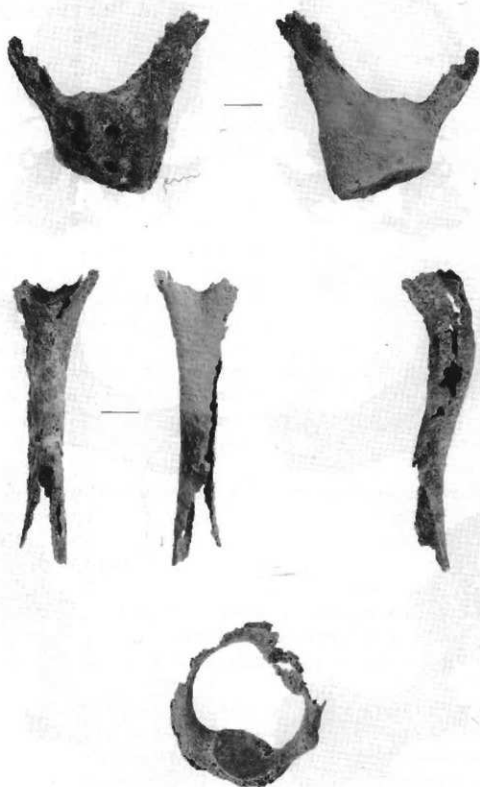
骨は、頭蓋骨の右側頭骨の錐体部の破片、下顎骨の左半分、左鎖骨の骨体、椎骨の破片、左上腕骨の骨体の下部、左腕骨の腕骨と座骨部分、右腕骨の恥骨結合部分、肩甲骨の下角付近（左右不明）、第1頸椎、第2頸椎がある。第1頸椎と第2頸椎は、交差した状態で出土たらしい。これらの骨については、病変らしきものは認められない。

歯は、上顎歯では、左の中切歯と左犬歯と左第2小臼歯と左第1大臼歯が、下顎歯では、右側の切歯と右犬歯と右第1小臼歯と右第2小臼歯と右第1大臼歯が残っている。下顎骨の歯槽の大臼歯部分は強く吸収されており、ほとんどの大臼歯は生前に離脱していたと考えられる。このため、上顎の大臼歯のすり減りが弱いであろう。上顎の中切歯には、シャベル切痕が強い。虫歯の痕跡は認められない。

性別は、腰骨で大坐骨切痕が大きく、恥骨下枝が開き、軽微ながらも出産痕が認められること、頭骨で乳様突起が丸く小さめであること、などから女性の骨格と判別できる。



第187図 10号墳第2主体部出土人骨(1)



第188図 10号墳第2主体部出土人骨(2)



第189図 10号墳第2主体部出土人骨(3)

死亡年齢は、歯の磨耗が強く、恥骨結合の加齢変化が進み、矢状縫合の後部が完全に癒合していることなどから、熟年後半から老年、つまり40から60才あたりで死亡したと推定できる。

体格は、上腕骨・脛骨・第1頸椎・第2頸椎・頭骨がいずれも非常に小さいこと、下顎骨は筋突起が非常に小さく咬筋粗面が弱いことなどから、被葬者は非常に小柄で華奢な体格をしていたものと推定できる。

なお、棺内における人骨の出土位置から判断して、遺体は頭部小口側へ寄せられていたものと判断される。さらに、頭骨が横向き、脛骨が後向きで出土していることから、うつ伏せの状態で埋葬されていた可能性が高い。

(3) 10号墳 第4主体部

歯が5本出土している。いずれも歯冠のみ遺存する。

歯は、上顎歯としては、右の第1あるいは第2小臼歯、第1大臼歯、第2大臼歯が1本ずつある。下顎歯としては、第1大臼歯と第2大臼歯が1本ずつある。いずれの歯にも虫歯の痕跡は認められない。

死亡年齢は、第1大臼歯に特徴的に認められるが、どの歯の磨耗も弱いことから、壮年前半(20~30才)と推定される。



第190図 10号墳第4主体部出土人骨

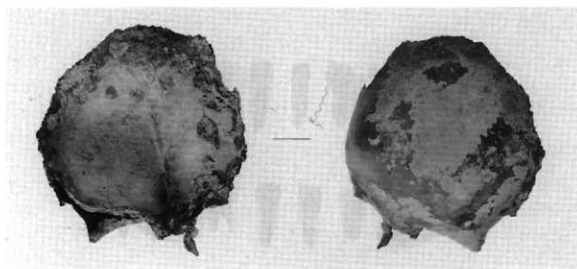
(4) 10号墳 第5主体部

骨と歯が出土している。

骨は、前頭骨とそれに接続する左頭骨の一部のみである。

歯は9本出土しているが、いずれも歯冠のみが遺存する。上顎歯では、左第1大臼歯、右第1大臼歯、中切歯(左右不明)、右側切歯、乳臼歯(m1)が、下顎歯では、左第1大臼歯、右第1大臼歯、側切歯(左右不明)、犬歯(左右不明)が判別できる。

第1大臼歯は、いずれも萌出歯のものである。また、乳臼歯には咬合痕が認められる。



第191図 10号墳第5主体部出土人骨

死亡年齢は、上下左右の第1大白歯が萌出前であること、乳臼歯に萌出によるすり減りが大分あることから、3～6歳の小児期であったと推定できる。性別は、不明である。

この他、前頭骨に病変も損傷等も認められない。また、虫歯も認められない。また、人骨の出土状況から判断して、被葬者は仰向けに埋葬されていたと考えられる。さらに、被葬者の死亡年齢から想定できる身長(90cm～1m前後)と棺の大きさは一致する。

(5) 12号墳 第1主体部

歯が9本出土している。

歯は、上顎歯としては、犬歯、第1小白歯、第2小白歯、第1大白歯、第2大白歯、第3大白歯が出土している。下顎歯としては、第1大白歯、第2大白歯、第3大白歯が出土している。上下顎歯ともに左側の歯のみが遺存する。また、いずれの歯にも、虫歯は認められない。

性別は、歯しか残っていないので不明。死亡年齢は、壮年(20～40才)の頃であったと推定される。

この他、下顎歯の第2大白歯、上顎歯の第1大白歯、第1小白歯などに歯垢が認められる。また、第3大白歯は退化型を示す。

第2節 梅田東古墳群18号墓出土の管玉の産地分析

高村哲男

(京都大学原子炉実験所)

はじめに

今回分析を行った玉類は勾玉、管玉などで、玉類の原材料としては滑石、軟玉(角閃石)、蛇紋岩、結晶片岩、碧玉、メノウなどが推測される。一般的には肉眼観察で岩石の種類を決定し、それが真実のように思われているのが実態である。これら玉材については岩石の命名定義に従って岩石名を決定するが、非破壊で命名定義を求めるには限度があり、若干の傷を覚悟して硬度、光沢感、比重、結晶性、主成分組成を求めるなどくらいであり、非破壊で命名の主定義の結晶構造、屈折率などを正確には求められない。また原石名が決定されたのみでは考古学の資料としては不完全で、どこか産地原石が使用されているかの産地分析が行われて初めて、考古学に寄与できる資料となるのである。遺跡から出土する大珠、勾玉、管玉の産地分析というのは、玉類の製品が何処の玉造遺跡で加工されたということを調査するのではなく、何ヶ所かあるヒスイ(硬玉、軟玉)や碧玉の原産地うち、どこかの原産地の原石を使用したかを明らかにするのが、玉類の原産地推定である。玉類の原産地を明らかにすることは考古学上重要な意味も持っている。糸魚川市でヒスイが発見されるまでは、中国、雲南、ビルマ説であったが、発見後は、専ら国内説で、岩石学的方法¹⁾および貴重な考古遺物を非破壊で産地分析を行った蛍光X線分析で行う元素比法²⁾が報告されている。また、碧玉製管玉の産地分析で系統的に行った研究としては蛍光X線分析法と電子スピニング共鳴法を併用することで産地分析をより正確に行った例³⁾が報告されている。石簾などの石器と玉類の製品はそれぞれ使用目的が異なるため、それぞれの産地分析で得られた結果の意味も異なる。(1)石器の原産地推定で明らかになる遺跡から石材原産地までの移動距離、活動範囲は、石器が生活必需品であるので、生活上必要な生活圏と考えられる。(2)玉類は古代人が生きるために必ずしもいるものではなく、勾玉、管玉は権力の象徴、お祭、御守り、占いの道具、アクセサリーとして精神的な面に重要な作用を与えると考えられる。従って、玉類の産地分析で、明らかになるヒスイ製玉類の原石の分布範囲は、権力の象徴としての玉類であれば、権力圏を現わしているかもしれないし、お祭、御守り、占いの道具であれば、同じような習慣を持つ文化圏ではないかと考えられる。このように玉類の産地分析では、石器の原産地分析で得られない貴重な資料を考古学の分野に提供することができる。

第1表 梅田東古墳群出土小管玉の出土地区一夫さ

分析番号	遺物番号	墳丘墓	主体部	出土位置	径(mm)	長さ(mm)	孔径(mm)	
75064	J575	18号墓	第2主体部	棺内	2.6	11.9	0.9	1.2
75065	J576	18号墓	第2主体部	棺内	2.0	9.9	0.9	1.2
75066	J577	18号墓	第2主体部	棺内	2.4	9.8	0.9	1.0
75067	J578	18号墓	第2主体部	棺内	2.6	8.5	1.2	1.3
75068	J579	18号墓	第2主体部	棺内	2.1	8.1	0.9	1.0
75069	J580	18号墓	第2主体部	棺内	2.7	8.1	1.1	1.3
75070	J581	18号墓	第2主体部	棺内	2.2	7.9	1.3	1.3
75071	J582	18号墓	第2主体部	棺内	2.2	8.0	1.3	1.3
75072	J583	18号墓	第2主体部	棺内	2.0	7.8	0.4	0.5
75073	J584	18号墓	第2主体部	棺内	2.0	7.5	0.9	1.1

今回分析を行った遺物は、兵庫県朝来郡和田山町久留引字権田に位置する梅田東古墳群の弥生時代後期の木棺墓群の18号墓から出土した細身の管玉の中の10個で、分析した遺物の出土地区、大きさなど第1表に示した。これら管玉の分析結果が得られたので報告する。

原産地推定の第一歩は、原産地を区別する人間で言えば指紋のような、その原産地だけにしかないという指標を見つけなければならない。その区別するための指紋は鉱物組成の組み合わせ、比重の違い、原石に含有されている元素組成の違いなどにより、原産地同士を区別できなければ産地分析はできない。成功するかどうかは、とにかく行ってみなければわからない。原産地同士が指紋でもって区別できたならば、次に遺跡から出土する遺物の指紋と原産地の指紋を比較して、一致しない原産地を消去して一致する原産地の原石が使用されていると判定する。

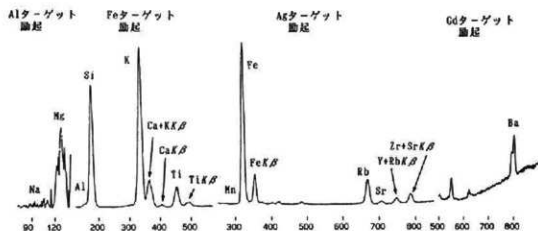
非破壊での産地分析の方法と手段

ヒスイ、碧玉製勾玉、大珠、玉などは、国宝、重要文化財級のものが多くて、非破壊で産地分析が行なえる方法でなければ発展しない。よって石器の原材産地分析で成功している¹⁾非破壊で分析を行なう蛍光X線法を用いて玉類に含有されている元素を分析する。

遺跡から出土した大珠、勾玉、管玉などを水洗いして、試料ホルダーに置くだけの、完全な非破壊で産地分析を行った。玉類は蛍光X線分析法で元素の種類と含有量を求め、試料の形や大きさの違いの影響を打ち消すために分析された元素同士で含有量の比をとり、この元素比の値を原産地を区別する指紋とした。碧玉製玉類はESR法を併用するが試料を全く破壊することなく、碧玉に含有されている常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した²⁾。

碧玉原石の蛍光X線分析

碧玉の蛍光X線スペクトルの例として高根果、花仙山産原石を第192図に示す。筑八産、玉谷産の原石から検出される蛍光X線ピークも異同はあるものの第192図で示されるピークは観測される。土岐、興部の産地の碧玉は鉄の含有量が他の産地のものに比べて大きいのが特徴である。産地分析に用いる元素比組成は、Al/Si、K/Si、Ca/K、Ti/K、K/Fe、Rb/Fe、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zrである。Mn/Fe、



第192図 花仙山産碧玉原石の蛍光X線スペクトル

Ti/Fe、Nb/Zrの元素比は非常に小さく、小さい試料の場合測定誤差が大きくなるので定量的な判定の指標とはせず、判定のときに、Ba、La、Ceのピーク高さとともに、定性的に原産地を判定する指標として用いている。

碧玉の原産地と原石の分析結果

分析した碧玉の原石の原産地を第193図に示す。佐渡嶺八原産地は、①新潟県佐渡郡畑野町嶺八地区で、産出する原石は地元で青玉と呼ばれている緑色系の石で、良質なものは割れ面がガラス光沢を示し、質の良くないものは光沢の少ないグリーンタフ的なものである。産出量は豊富であったらしく採石跡が何ヶ所も見られるが、今回分析した原石は嶺八の各地点から表採したもの、および地元で提供された原石などであり、また提供されたものの中には露頭から得られたものがあり、それはグリーンタフ層の間に約7cm幅の良質の碧玉層が挟まれた原石であった。分析した原石の比重と個数は、比重が2.6~2.5の間のものは31個、2.5~2.4の間の合計36個で、この中には、茶色の碧玉も2個含まれている。原石の比重が2.6~2.3の範囲で違っても、碧玉の色が茶色、緑色、また、茶色系と緑色系の幅があるなど、多少色の違いがあっても分析した組成上には大きな差はみられなかった。出雲の花仙山は近世まで採掘が行われた原産地で、所在地は②島根県八束郡玉湯町玉造温泉地域である。産出する原石は、濃緑色から緑色の緻密で割れ面が光沢をもつ良質の碧玉から淡緑色から淡白色などいろいろで、他に硬度が低そうなグリーンタフの様な原石も見られる。良質な原石の比重は2.5以上あり、質が悪くなるにしたがって比重は連続的に2.2まで低くなる。分析した原石は、比重が2.619~2.600の間のものは10個、2.599~2.500は18個、2.499~2.400は17個、2.399~2.300は11個、2.299~2.200は11個、2.199~2.104は3個の合計60個である。比重から考えると碧玉



第193図 原産地不明碧玉製管玉および玉材の使用圏と産地同定できた碧玉製玉類使用遺跡

第3表 各原石産地不明碧玉五類、玉材の遺物群の元素比の平均値と標準偏差値

遺群	物名	分析回数	Al/Si X _{±σ}	K/Si X _{±σ}	Ca/K X _{±σ}	Ti/K X _{±σ}	K/Fe X _{±σ}
女代南B	68	0.045±0.016	3.115±0.445	0.042±0.024	0.197±0.036	0.283±0.098	
女代南C	58	0.030±0.028	4.416±0.818	0.013±0.013	0.207±0.034	0.589±0.130	
女代南(1)	47	0.035±0.004	3.575±0.347	0.033±0.005	0.439±0.050	0.704±0.037	
長塚(2)	45	0.028±0.007	2.669±0.122	0.010±0.004	0.064±0.003	0.719±0.069	
No.200-1	32	0.042±0.004	0.868±0.025	3.588±0.074	0.639±0.016	0.051±0.002	
No.200-2	28	0.037±0.004	0.990±0.021	2.384±0.047	0.605±0.029	0.064±0.003	
No.200-3	28	0.035±0.003	0.926±0.020	2.527±0.114	1.385±0.059	0.036±0.002	
No.200-4	32	0.047±0.007	0.855±0.025	3.771±0.079	1.258±0.035	0.057±0.003	
No.200-5	32	0.040±0.006	4.185±0.152	0.031±0.006	0.103±0.003	0.821±0.019	
梅田1	40	0.021±0.003	1.204±0.094	0.066±0.017	0.143±0.008	0.065±0.005	
梅田2	44	0.032±0.004	2.639±0.246	0.025±0.006	0.322±0.050	0.172±0.038	
梅田3	40	0.027±0.003	1.911±0.032	0.020±0.007	0.518±0.010	0.281±0.012	
梅田4	38	0.081±0.008	1.149±0.288	0.023±0.003	0.082±0.002	0.588±0.029	
上ノ段1	42	0.014±0.002	0.413±0.046	0.054±0.026	0.395±0.040	0.053±0.005	
梅田東1	51	0.030±0.007	1.974±0.317	0.026±0.011	0.529±0.061	0.078±0.011	
新方1	67	0.062±0.005	1.868±0.115	1.540±0.137	0.733±0.059	0.078±0.012	
新方2	30	0.055±0.005	4.152±0.162	0.226±0.181	0.313±0.010	0.212±0.018	
新方3	39	0.044±0.005	0.912±0.178	2.416±0.174	0.768±0.257	0.080±0.011	

遺群	物名	分析回数	Rb/Fe X _{±σ}	Fe/Zr X _{±σ}	Rb/Zr X _{±σ}	Sr/Zr X _{±σ}	Y/Zr X _{±σ}
女代南B	68	0.267±0.063	2.374±0.676	0.595±0.066	0.214±0.097	0.171±0.047	
女代南C	58	0.650±0.113	0.583±0.110	0.389±0.035	0.090±0.030	0.070±0.026	
長塚(1)	47	0.361±0.040	2.756±0.473	0.980±0.110	0.472±0.083	0.379±0.143	
長塚(2)	45	0.832±0.054	0.412±0.038	0.341±0.023	0.036±0.010	0.386±0.242	
No.200-1	32	0.042±0.006	1.751±0.145	0.073±0.015	4.665±0.374	0.239±0.028	
No.200-2	28	0.072±0.011	1.432±0.075	0.102±0.015	6.639±0.322	0.173±0.017	
No.200-3	28	0.053±0.009	1.568±0.093	0.088±0.015	4.455±0.197	0.343±0.031	
No.200-4	32	0.118±0.023	1.110±0.129	0.130±0.030	9.626±1.090	0.117±0.025	
No.200-5	32	0.892±0.040	0.646±0.037	0.447±0.025	6.207±0.320	0.286±0.026	
梅田1	40	0.220±0.029	12.353±0.882	2.710±0.421	0.273±0.374	0.741±0.134	
梅田2	44	0.299±0.051	3.517±0.603	2.024±0.353	0.316±0.048	0.283±0.066	
梅田3	40	0.430±0.017	3.262±0.209	1.401±0.057	0.080±0.028	0.386±0.048	
梅田4	38	0.473±0.026	1.003±0.046	0.478±0.018	0.222±0.032	0.190±0.013	
上ノ段1	42	0.223±0.020	3.772±0.448	0.833±0.068	0.077±0.037	0.286±0.063	
梅田東1	51	0.219±0.019	2.365±0.474	0.512±0.089	0.072±0.024	0.191±0.042	
新方1	67	0.111±0.205	1.619±0.264	0.175±0.018	8.298±0.619	0.078±0.019	
新方2	30	0.297±0.018	3.847±0.314	1.037±0.057	0.849±0.095	0.185±0.053	
新方3	39	0.085±0.018	1.685±0.413	0.144±0.050	7.449±1.605	0.182±0.056	

遺群	物名	分析回数	Mn/Fe X _{±σ}	Ti/Fe X _{±σ}	Nb/Zr X _{±σ}	比重 X _{±σ}
女代南B	68	0.011±0.004	0.026±0.009	0.034±0.016	2.554±0.019	
女代南C	58	0.002±0.001	0.101±0.019	0.019±0.016	2.846±0.023	
長塚(1)	47	0.005±0.001	0.094±0.013	0.022±0.016	2.533±0.016	
長塚(2)	45	0.004±0.001	0.047±0.004	0.024±0.013	2.869±0.003	
No.200-1	32	0.006±0.001	0.033±0.001	0.006±0.009	2.308	
No.200-2	28	0.008±0.001	0.038±0.002	0.006±0.010	2.277	
No.200-3	28	0.014±0.003	0.098±0.003	0.002±0.005	2.270	
No.200-4	32	0.005±0.001	0.068±0.002	0.008±0.008	2.256	
No.200-5	32	0.011±0.002	0.082±0.003	0.038±0.026	2.542	
梅田1	40	0.001±0.000	0.009±0.001	0.014±0.019	2.579±0.013	
梅田2	44	0.005±0.001	0.080±0.011	0.035±0.015	2.531±0.007	
梅田3	40	0.005±0.001	0.121±0.005	0.033±0.027	2.511	
梅田4	38	0.006±0.001	0.039±0.002	0.039±0.010	2.446	
上ノ段1	42	0.006±0.001	0.019±0.001	0.014±0.018	2.636±0.001	
梅田東1	51	0.008±0.001	0.095±0.014	0.027±0.018	2.541±0.015	
新方1	67	0.050±0.020	0.046±0.006	0.027±0.009	2.290±0.018	
新方2	30	0.010±0.003	0.081±0.004	0.032±0.017	2.545±0.011	
新方3	39	0.068±0.027	0.057±0.013	0.007±0.007	2.257±0.024	

X_{±σ}: 平均値、σ: 標準偏差値
 女代南B: 女代南遺跡(豊岡市)、女代南C: 宇木古墳遺跡(津津市)、長塚(1)、
 (2): 長塚古墳(可児市)、No.200-1~6: 多摩ユウクン遺跡、梅田東1: 梅田東古墳(東濃郡和田山町)、
 梅田1~4: 上ノ段遺跡(長原郡島田町)、新方1~3: 新方遺跡(神戸市)で使われている
 原石産地不明の玉類で作った群

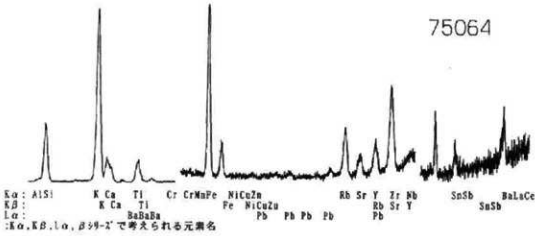
ある。また元素組成は他の産地の組成と異なり区別できる。しかし、この4個が二俣原産地から産出する碧玉原石の特徴を代表しているかどうか検証するために、さらに分析数を増やす必要がある。細入村の産地は、⑤富山県婦負郡細入村割山定座岩地区にあり、そのグリーンタフの岩脈に固塊として緻密な濃緑の碧玉質の部分が見られる。それは肉眼では、他の産地の碧玉と区別できず、また、出土する碧玉製の玉類とも非常に似た石質である。しかし、比重が分析した8個は2.25~2.12と非常に軽く、この比重の値で他の原産地と区別できる場合が多い。土岐原産地は、⑥愛知県土岐市地域であり、そこでは赤色、黄色、緑色などが混じり合った原石が産出している。このうち緻密な光沢のよい濃緑で比重が2.62~2.60の原石を碧玉として11個分析を行った。ここの原石は鉄の含有量が非常に大きく、カリウム含有量が小さいという特徴を持ち、この元素比の値で他の原産地と区別できる。興部産地は、⑦北海道紋別郡西興部村にあり、その碧玉原石は鉄の含有量が非常に高く、他の原産地と区別する指標になっている。また、比重が2.6以下のものはなく遺物の産地を特定する指標として重要である。石戸の産地は、⑧兵庫県氷上郡山南町地区にあり、その安山岩に脈岩として採取されるが産出量は非常に少ない。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑨北海道富良野市の空知川流域から採取される碧玉は濃い緑色で比重が2.6以上が4個、2.6~2.5が5個、2.5~2.4が5個である。その碧玉の露頭は不明で河原の裸から採取するため、短時間で良質のもの碧玉を多数収集することは困難である。また元素組成から他の産地の碧玉と区別できる。⑩北海道上磯郡上磯町の茂辺地川の川原で採取される碧玉は不均一な色の物が多く、管玉に使用できる色の均一な部分を大きく取り出せる原石は少ない。これら原石を原産地ごとに統計処理を行い、元素比の平均値と標準偏差値をもとめて母集団を作り第2表に示す。各母集団に原産地名を付けて、その産地の原石群、例えば花仙山群と呼ぶ。花仙山群は比重によって2個の群に分けて表に示したが比重は異なっても組成に大きな違いはみられない。したがって、統計処理は一緒に行い、花仙山群として取り扱った。原石群とは異なるが、例えば、豊岡市女代南遺跡で主体的に使用されている原石産地不明の碧玉製の玉の原材料で、玉作り行程途中の遺物が多数出土している。当初、原石産地を探索すると言う目的で、これら玉、玉材遺物で作った女代南B（女代（B））群であるが、同質の材料で作られた可能性のある玉類は最近の分析結果で日本全土に分布していることが明らかになってきた。宇木浜田遺跡の管玉に産地未発見の原石を使用した同質の材料で作られた管玉で作った未定C（未定（C））群をそれぞれ原石群と同じように使用する。また、岐阜県可見市の長塚古墳出土の管玉で作った長塚（1）、（2）の遺物群、摩多ニュータウン遺跡、梅田古墳群、上ノ段遺跡、梅田東古墳群、新方遺跡などから出土した玉類および玉材剥片でそれぞれ遺物群を作り他の遺跡、墳墓から出土する玉類に組成が一致するか定量的に判定できるようにし、遺物群を第3表に示した。この他、鳥取県の福部村多鯉池、鳥取市防己尾岬などの自然露頭からの原石を4個分析した。比重は2.6以上あり元素比組成は、興部、玉谷、土岐石に似るが、他の原産地の原石とは組成で区別される。また、緑系の原石ではない。最近、兵庫県香住町の海岸から採取された親指大1個の碧玉製の玉材は貝殻状剥離がみられる緻密な石質で少し青っぽい緑の石材で玉の原材料になると思われる。この玉材の蛍光X線分析の結果では、興部産碧玉に似ているが、ESR信号および比重（2.35）が異なっているため、興部産碧玉と区別ができる。

梅田東古墳群出土の管玉と国内産碧玉原料との比較

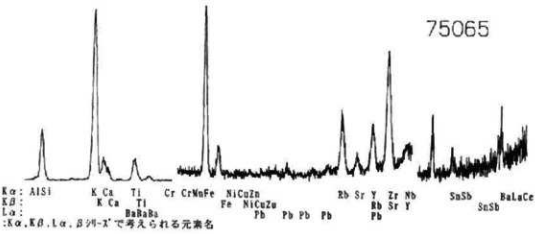
遺跡から出土した玉類、玉材は表面の泥を超音波洗浄器で水洗するだけの完全な非破壊分析で行っている。遺物の原料産地の同定をするために、(1)蛍光X線法で求めた原石群と碧玉製遺物の分析結果を数理統計の手法を用いて比較をする定量的な判定法で行なう。(2)また、ESR分析法により各産地の原石の信号と遺物のそれを比較して、似た信号の原石の産地の原料であると推測する方法も応用した。

蛍光X線法による産地分析

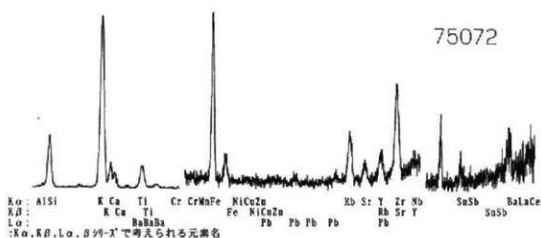
これら玉類の蛍光X線分析のスペクトルを第194図～第203図に示し、比重および管玉の蛍光X線分析から原材料の元素組成比を求めて結果を第4表・第5表に示す。碧玉と分類した遺物は、緻密で、蛍光X線分析でRb, Sr, Y, Zrの各元素が容易に観測できるなどを条件に分類した。また、グリーンタフ製は比重が2.4



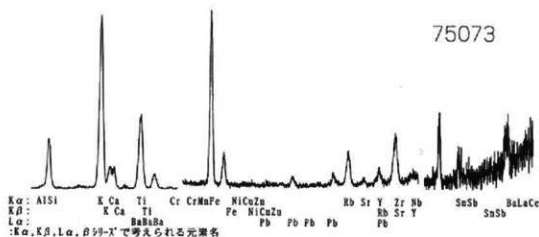
第194図 梅田東古墳群出土管玉J575 (75064) の蛍光X線スペクトル



第195図 梅田東古墳群出土管玉J576 (75065) の蛍光X線スペクトル



第202図 梅田東古墳群出土管玉J583 (75072) の蛍光X線スペクトル



第203図 梅田東古墳群出土管玉J584 (75073) の蛍光X線スペクトル

に達しない玉材が多い。これら遺物の元素組成比の結果をの碧玉原石群（第2表）の結果と比較してみる。分析個数が少なく統計処理ができる群が作れなかった産地については、原石の元素組成比を今回分析した遺物と比較したが一致するものは見られなかった。原石の数が多く分析された原産地については、数理統計のマハラノビスの距離を求めて行うホテリングT²乗検定⁴⁾により同定を行ったところ、分析番号75064～75065、75070、75072番の5個は女代南（B）遺物群に、また、分析番号75063番は佐渡・猿八産原石群にそれぞれ信頼限界の0.1%以上で帰属され、女代南（B）遺物群、猿八群と判定する必要条件は求められた。次に十分条件である他の全ての原石・遺物群（第2表）について、信頼限界の0.1%に達しないなど、一致しないことを全ての群について証明しているが、紙面都合上、第4表には例として原石・遺物群（第2表）の中から一部を抜粋して示した。これら管玉は女代南（B）遺物群、猿八産原石群と同質の管玉、玉材であることを、必要条件、十分条件を満たして客観的に証明された。また分析番号75067、75069、75071、75073番は一致する原石産地、遺物群は見られず、産地、遺物群が特定できなかった。これら管玉の群への帰属確率の結果を第4表に示した。より正確に産地を特定するためにE S R分析を併用して産地分析を行った。

第4表 梅田東古墳群出土小管玉の分析結果

遺物 番号	分析 番号	元 素 比							
		Al/Si	K/Si	Ca/K	Ti/K	K/Fe	Rb/Fe	Fe/Zr	Rb/Zr
J575	75064	0.033	2.196	0.027	0.134	0.258	0.299	1.687	0.504
J576	75065	0.033	2.362	0.037	0.127	0.394	0.365	1.264	0.461
J577	75066	0.031	2.113	0.023	0.123	0.204	0.254	2.178	0.553
J578	75067	0.028	1.751	0.033	0.591	0.184	0.251	2.033	0.510
J579	75068	0.029	2.804	0.055	0.087	0.228	0.421	1.300	0.548
J580	75069	0.023	1.833	0.033	0.580	0.194	0.230	2.015	0.463
J581	75070	0.033	2.454	0.027	0.114	0.294	0.296	1.634	0.483
J582	75071	0.028	2.847	0.038	0.121	0.388	0.394	1.225	0.483
J583	75072	0.027	2.512	0.019	0.133	0.366	0.365	1.455	0.532
J584	75073	0.033	2.652	0.032	0.466	0.161	0.216	2.670	0.576
JG-1 ^{a)}		0.067	3.392	0.774	0.237	0.111	0.263	3.795	0.998

a): 標準試料、Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974).
1974 compilation of data on the GJS geochemical reference
samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt.
Geochemical Journal, Vol. 8 175-192.

第5表 梅田東古墳群出土小管玉の分析結果

遺物 番号	分析 番号	元 素 比					重 量 gr	比 重
		Sr/Zr	Y/Zr	Mn/Fe	Ti/Fe	Nb/Zr		
J575	75064	0.248	0.292	0.010	0.032	0.065	0.11447	2.584
J576	75065	0.114	0.268	0.008	0.046	0.042	0.06552	2.652
J577	75066	0.151	0.256	0.006	0.025	0.010	0.08523	2.519
J578	75067	0.071	0.054	0.009	0.102	0.015	0.07909	2.524
J579	75068	0.094	0.165	0.001	0.019	0.019	0.05256	2.526
J580	75069	0.060	0.079	0.010	0.103	0.017	0.07969	2.542
J581	75070	0.160	0.285	0.007	0.030	0.000	0.06614	2.567
J582	75071	0.107	0.409	0.007	0.044	0.014	0.05766	2.554
J583	75072	0.189	0.201	0.007	0.041	0.025	0.03621	2.529
J584	75073	0.095	0.155	0.007	0.070	0.070	0.04263	2.556
JG-1 ^{a)}		1.345	0.281	0.024	0.024	0.079		

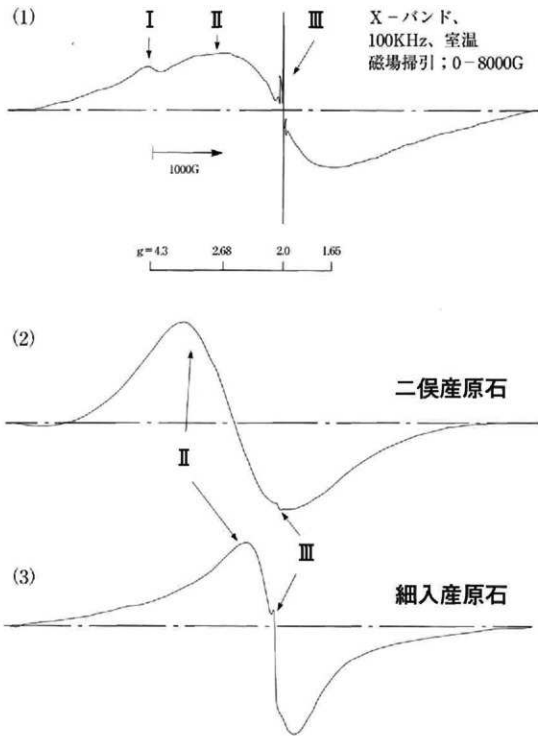
a): 標準試料、Ando, A., Kurasawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974).
1974 compilation of data on the GJS geochemical reference
samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt.
Geochemical Journal, Vol. 8 175-192.

第6表 梅田東古墳群出土小管玉の産地推定結果

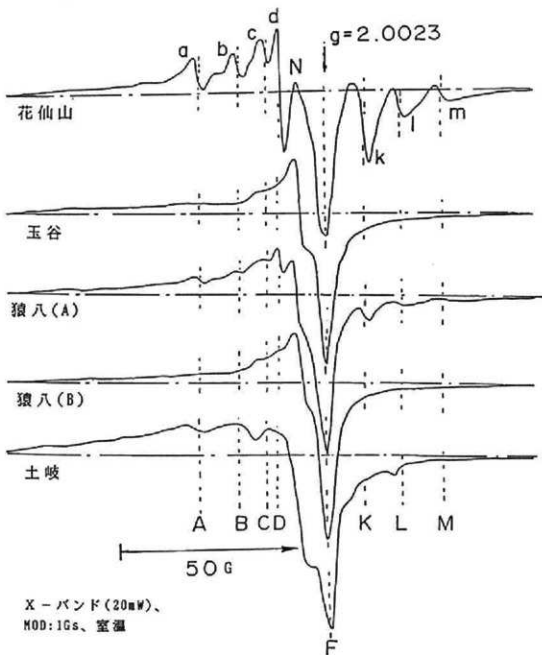
遺物 番号	分析 番号	碧玉製玉類蛍光X線分析法による積算確率						ESR 信号形	総合判定 原石産地		
		玉谷群	花仙山群	土岐群	猿八群	女代B群	未定C群			長塚1群	
1575	75044	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	0.00033	5	3	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	女代B形	女代B
1575	75045	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	0.00033	7	3	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	女代B形	女代D
1575	75046	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	0.02333	5	3	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	女代B形	女代D
1575	75047	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	0.00033	未定B形	
1679	75048	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	3	3	3	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	猿八形	猿八
1680	75049	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	未定B形	
1681	75070	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	0.05433	12	3	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	女代B形	女代B
1582	75071	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	0.00033	0.00033	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	未定B形	
1583	75072	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	0.00033	15	3	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	女代B形	女代B
1584	75073	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	<10 ^{-1%}	0.01133	未定B形	

ESR法による産地分析

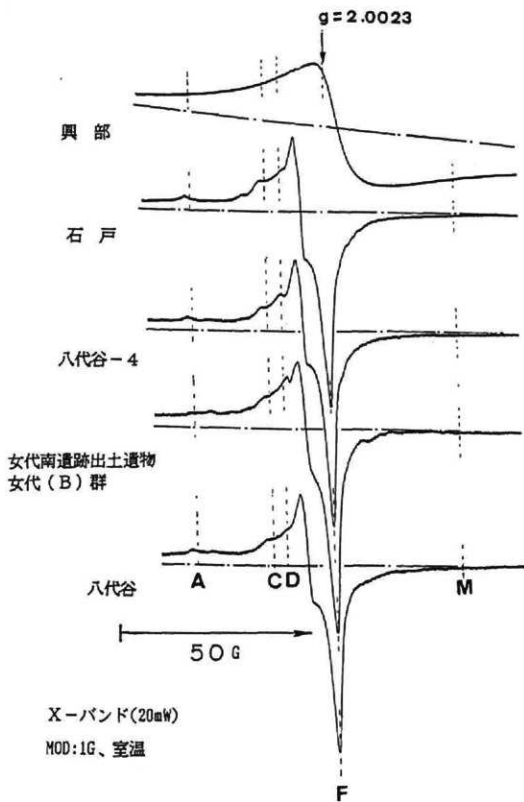
ESR分析は碧玉原石に含有されているイオンとか、碧玉が自然界からの放射線を受けてできた色中心などの常磁性種を分析し、その信号から碧玉産地間を区別する指標を見つけて、産地分析に利用した。ESRの測定は、完全な非破壊分析で、直径が11mm以下の管玉なら分析は可能で、小さい物は胡麻粒大で分析ができる場合がある。第204図-(1)のESRのスペクトルは、幅広く絶縁抽出したときに得られた信号スペクトルで、g値が4.3の小さな信号(I)は鉄イオンによる信号で、g値が2付近の幅の広い信号(II)と何本かの幅の狭いピーク群からなる信号(III)で構成されている。第204図-(1)では、信号(II)より信号(III)の信号の高さが高く、第204図-(2)、-(3)の二俣、細入原石ではこの高さが逆になっているため、原石産地の判定の指標に利用できる。今回分析した玉類の中で信号(II)が信号(III)より小さい場合は、二俣、細入産でないといえる。各原産地の原石の信号(III)の信号の形は産地ごとに異同があり産地分析の指標となる。第205図に花仙山、猿八、玉谷、土岐を第206図に興部、石戸、八代谷-4、女代(B)遺物群、八代谷および第207図に富良野市空知川の空知(A)、(B)、北海道今金町花石および茂辺地川の各原石の代表的な信号(III)のスペクトルを示す。第208図には字木沢田遺跡の管玉で作った未定C形と未定D形およびグリーンタフ製管玉によく見られる不明E形を示した。ESR分析では玉材割片と管玉のESR信号の形が、それぞれ似た信号を示す原石だったり、産地不明遺物群のESR信号形と一致した場合、その産地の可能性が大きいことを示唆している。今回分析した管玉のESR信号(III)の結果を第209図に示す。分析番号75064~75065、75070~75072番の6個は女代南(B)形に、また、分析番号75063番は佐渡・猿八(A)形産原石群に、それぞれ一致し、これら管玉を女代南(B)遺物群、猿八産原石が使用されていると判定しても矛盾しない。分析番号75067、75069、75073番は一致する原石、遺物群のESR信号(III)は見られず、産地、遺物群が特定できなかったが、これら管玉のESR信号(III)は女代南(B)形が崩れた形をしていて相互に酷似している。この3個の管玉は、同じ岩塊を玉材として作られた兄弟管玉の可能性が推測される。ESRスペクトルが一致した原石産地に管玉の原産地を特定するが、より正確な原産地を推測するために蛍光X線分析の結果と組み合わせ総合判定として、両方法でともに同じ原産地に特定された場合のみ、その群の原石と同じものが使用されているとして総合判定原産地の欄に結果(第6表)を記した。



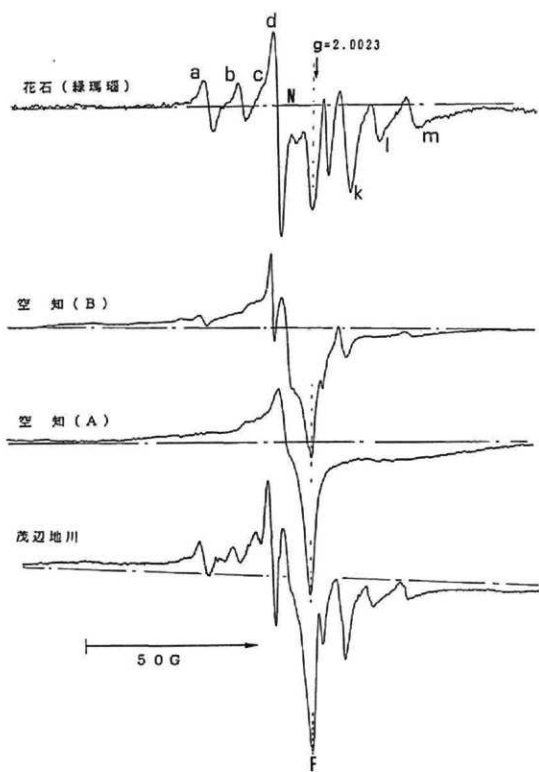
第204図 碧玉産地のESRスペクトル（花仙山・玉谷・猿八・土岐）



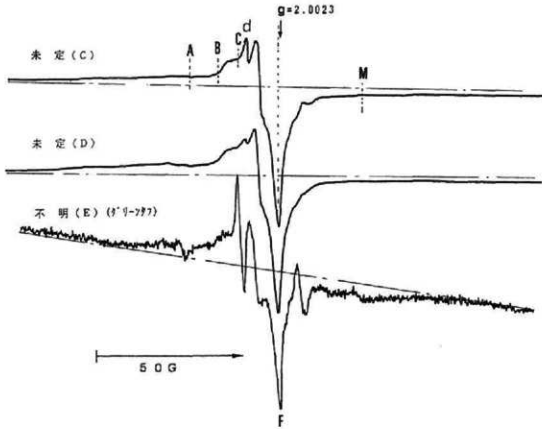
第205図 碧玉原石の信号(Ⅱ)のESRスペクトル



第206図 碧玉原石の信号(重)のESRスペクトル



第207図 碧玉原石の信号 (Ⅲ) のESRスペクトル

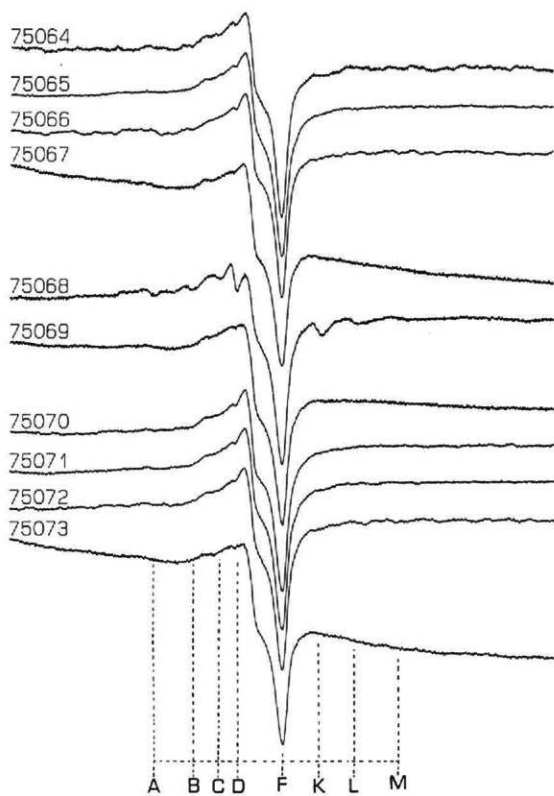


第208図 碧玉原石の信号(Ⅲ)のESRスペクトル

結論

分析した管玉の分析番号75064～75065、75070、75072番の5個は女代南(B)遺物群に、また、分析番号75063番は佐渡・猿八産原石群に、蛍光X線分析、ESR分析の両結果がそれぞれ一致し、これら管玉を女代南(B)遺物群、猿八産原石が使用されていると同定しても矛盾しない。分析番号75071番の管玉はESR分析では女代南(B)遺物群と推定されるが、蛍光X線分析結果でも原石・遺物群の中で女代南(B)遺物群に定性的には近いが、定量的判定では帰属確率は信頼限界の0.1%に達しないことから、原石産地の判定は保留した。また、分析番号75067、75069、75073番は一致する原石、遺物群は見られないが、ESR信号(Ⅲ)は相互に酷似し、蛍光X線分析では相対的にTi元素の含有量が多いなど似ていて、この3個の管玉は、未発見産地の同じ岩塊を玉材として作られた兄弟管玉の可能性が推測されることから、梅田東1遺物群を作り、他の遺跡でこの玉材で作られた兄弟玉類が存在したとき同定できるようにした。

梅田東古墳群で使用された女代南B群は弥生時代を中心に使用された原石で、豊岡市の女代南遺跡の中期の玉作り過程の石片、温賀町の筑摩館、立花遺跡出土の管玉、神戸市の玉津田中遺跡の中期の石片、管玉には玉谷産と共に使用されていた。関東地方では埼玉県蓮田市宿下遺跡、東海地方では、清洲町朝日遺跡、新城市大宮の大ノ木遺跡の弥生時代の管玉に、畿内地域では東大阪市の、鬼虎川、巨摩、亀井、久宝



第209図 梅田東古墳群出土管玉の信号(Ⅱ)のESRスペクトル

寺北、久宝寺南遺跡で、また中国地方では、作用町の長尾・沖田遺跡の中期末の管玉、総社市の南溝手遺跡出土の弥生前期末～中期初頭の玉材、岡山市の南溝手遺跡および百間川原尾島遺跡出土の管玉、岡山県川上村下郷原和田遺跡の管玉、鳥取県羽合町の長瀬高浜遺跡の中期中葉の管玉、米子市の御建山遺跡尾高19号墳第2主体部出土の管玉、東広島市の西本6号遺跡の管玉に使用されている。四国地方では徳島県板野町の蓮華谷古墳群Ⅱ、2号墳、3世紀末の管玉、香川県善通寺市の彼ノ宗遺跡の末期の管玉に使用され、九州地方では、多久市牟田辺遺跡の中期の管玉、また宇木汲田遺跡の管玉に使用されていた。また、縄縄文時代には北海道の上磯町茂別遺跡、余市町大川遺跡、千歳市キウス遺跡にまで伝播し、女代南B群の原石は糸魚川産ヒスイに匹敵する広い分布圏を示している。一方、今だ畿内では使用が確認されていない管玉として、南溝手遺跡の中期前葉の管玉片には、唐津市の宇木汲田遺跡の管玉で作った原石群の未定C群の原石が使用され、この未定C群は坂出市の龍川・五条遺跡の管玉、今治市の持田町3丁目遺跡の前期の管玉、大和町の尼寺一本松遺跡の管玉、多久市牟田辺遺跡の中期の管玉、吉野ヶ里遺跡の南西サブトレ出土の管玉に使用されている。また、今回の産地分析で梅田東古墳群で使用が明らかになった、狭八産原石は弥生時代に主に使用され、使用遺跡は、倉吉市のトドロケ遺跡のすり切り分層痕の残る玉材に使用され、北海道余市町の大川遺跡および茂別遺跡の縄縄文時代では女代南B群原石の管玉と共に使用され、江別市の大塚22遺跡出土の縄縄文(後北C1式)の管玉に、七飯町の大中山13遺跡(縄縄文)出土の管玉に使用され、佐渡島以北で主に使用されていることが明らかになっている。これら佐渡産碧玉、女代南B群の剥片出土遺跡は、豊岡市、米原町、福井県など日本海側で、これら玉類が日本海の玉材原産地地方で作られ、これら玉類の使用圏からみて、日本海を交易ルートとし遠距離に伝播したと推測され、伝播には遺跡をリレー式に伝わる場合、また、産地から遠距離の遺跡に直接到達する場合などが考えられる。未定C群は、最近の予備的な実験で朝日遺跡で使用されている可能性が推測されたことから、推測は空論になるが、未定C群の管玉が韓国で作られ、西北九州地方および瀬戸内海ルートを通じて伊予、備前、讃岐へ流入し現在の東進の限界になっている。朝日遺跡での使用が確実になれば、播磨、摂津、大和、近江を飛び越え、尾張の朝日遺跡に伝播したことが明らかになり東進の限界が一気に300km延びる可能性がでている(第193図)。玉類の産地分析の困難さは原石の入手で、産地同定を定量的に行う場合、統計処理の母集団(原石群)を作り、原石群の組成の変動を評価するため多数の原石が必要で、今後、佐渡島狭八産原石が佐渡島以南に本当に伝播していないかを調査し、女代南B群、未定C群、不明の管玉などの原石産地を明らかにし、これら不明の原石群を作ること、また、玉類に使用されている産地の原石が多い方が、その産地地方との文化交流が強いと推測できることから、日本各地の遺跡から出土する貴重な管玉を数多く分析することが重要で、是非とも各地の遺跡の詳細な碧玉製遺物の科学的調査が必要であるが現在調査が殆ど進んでいないのが現状で、国庫補助での発掘調査には必ず科学的調査も加えるべきだと思う。今回行った産地分析は完全な非破壊で、玉類、碧玉産地に関する小さな情報であっても御提供頂ければ研究はさらに前進すると思われまます。

参考文献

- 1) 茅原一也 (1964)、長者原遺跡産のヒスイ (翡翠) について (概報)。長者ヶ原、新潟県糸魚川市教育委員会63-73
- 2) 薬科哲男・東村武信 (1987)、ヒスイの産地分析。富山市考古資料館紀要 6:1-18
- 3) 薬科哲男・東村武信 (1990)、奈良県内遺跡出土のヒスイ製玉類の産地分析。
橿原考古学研究所紀要「考古学論叢」,1495-109
- 4) 薬科哲男・東村武信 (1983)、石器原料の産地分析。考古学と自然科学,16:59-89
- 5) Tetsuo Warashina (1992)、Alloction of Jasper Archeological
Implements By Means of ESR and XRF. Journal of Archaeological
Science 19:357-373
- 6) 東村武信 (1976)、産地推定における統計的手法。考古学と自然科学,9:77-90

第3節 石棺に用いられた石材の同定

第4章 第3節は
公開していません

第4節 梅田東古墳群出土赤色顔料の分析

独立行政法人 奈良文化財研究所

高妻 洋成

1. はじめに

梅田東古墳群のうち、10号墳、木棺墓群よりわずかに赤色を帯びた土が採取された。本報告では、これらの土試料に含まれている赤色顔料の定性分析結果を報告する。

2. 試料と分析法

土試料は各古墳の主体部より採取された。表にその詳細を示す。

通常、土壌試料を元素分析した場合、鉄を必ず検出する。したがって、元素分析だけではこの鉄がそもそも土壌に含まれているものであるのか、混入している「ベンガラ」(赤鉄鉱, hematite, Fe₂O₃)に由来するものかを判断することは困難である。通常、「ベンガラ」の判定には元素分析に加え、X線回折法を用いた結晶性化合物の定性分析が行なわれている。しかしながら、今回の土試料のようにごくわずかにのみ赤色顔料を含んでいるような場合、石英などの強いスペクトルによりその存在が確認できないことが多い。そこで、今回は顕微測定が可能であるレーザーラマン分光分析法を採用し、赤色顔料の定性分析を行なった。

3. 分析結果

分析結果を図に示す。比較のために標準試料としてのベンガラと水銀朱のラマンスペクトルを図の下部に示す。10SX01、10SX05、16SX01および16SX02では明らかに水銀朱と一致するラマンスペクトルを得ることができた。15SX04では含まれる顔料がきわめて少ないため、得られたラマンスペクトルはバックグラウンドが高くなり、結果としてS/N比の悪いスペクトルとなっているが、水銀朱に特徴的な2本のスペクトルを確認することができる。

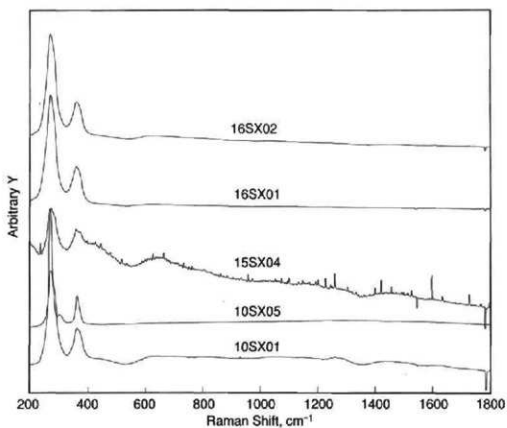
得られたラマンスペクトルにはベンガラの存在を示すスペクトルは確認されなかった。

4. まとめ

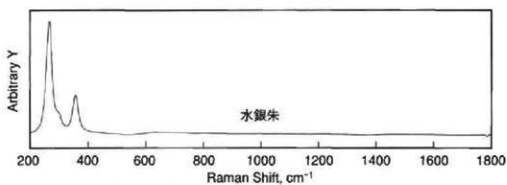
梅田東古墳群のうち、10号墳、木棺墓群よりわずかに赤色を帯びた土に含まれている赤色顔料の分析を行なったところ、いずれの試料にも水銀朱が含まれることが明らかとなった。ベンガラの存在を示すスペクトルが確認されなかったことから、土試料に含まれる赤色顔料にはほとんどベンガラが含まれていないといえる。

第7表 梅田東古墳群出土赤色顔料一覧

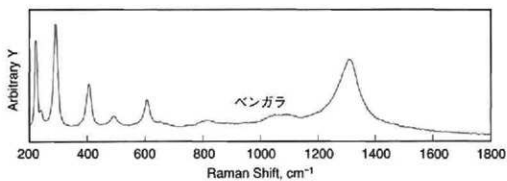
墳 墓	主体部	時 期	試料番号
10号墳	第1主体部	弥生時代後期末～古墳時代初頭	10SX01
	第5主体部	弥生時代後期末～古墳時代初頭	10SX05
木棺墓群	8号墓	弥生時代後期前半	15SX04
	15号墓	弥生時代後期中葉	16SX01
	18号墓	弥生時代後期前半	16SX02



第217図 赤色顔料のラマンスペクトル



第218図 水銀朱 (標準試料) のラマンスペクトル



第219図 ベンガラ (標準試料) のラマンスペクトル

第5節 梅田東古墳群出土ガラス玉の科学的調査

奈良文化財研究所

肥塚隆保

1. はじめに

日本においてガラスが登場するのは、弥生時代前期末から中期初頭であるとされている。弥生時代後期になると、鉛バリウムガラスやカリガラスは多量に流通し、鉛バリウムガラスは九州から東海・関東地域まで、カリガラスは九州沖縄県から北海道の一部まで分布していることが明らかになってきた。また、カリガラスのなかでも青紺色のガラス玉と淡青色のガラス玉の出現比率は九州地域とそれより東の地域では異なることも明らかになってきた。いっぽう、弥生時代後期には少量ではあるが、北部九州地域にソーダ石灰ガラスや混合アルカリガラスが伝えられている。しかし、弥生時代におけるガラス材質の分析データは少なく、各地域から出土するガラスの分析調査を通してより詳細なデータベースの構築が必要である。

今回調査した梅田東古墳群出土のガラス玉のほとんどすべては、淡青色系のガラスであり、微小小玉は青紺色系ガラスであった。これらのガラスについて材質調査と構造調査をおこなったのでその概要について報告する。

2. 試料と調査方法

今回出土したガラス玉の点数が多いので、材質調査にあたっては各地区の任意のガラス玉31点についてエネルギー分散型蛍光X線分析法により測定した。測定試料の一覧は第8表に示した。なお、測定にあたっては、表面の風化部分を超音波研磨装置で取り除いた後、未風化部分と推定される部分を測定した(参考として試料7、7'は同一試料の表面と研磨面の測定をおこなった)。測定条件は、励起用X線

第8表 分析試料

No	出土遺構	種類	色調	状態	No	出土遺構	種類	色調	状態
1	10号第1主体部	小玉	淡青色	新鮮	16	5号墓	小玉	淡青色	新鮮
2	10号第1主体部	小玉	淡青色	新鮮	17	5号墓	小玉	淡青色	新鮮
3	10号第1主体部	小玉	淡青色	新鮮	18	5号墓	小玉	淡青色	新鮮
4	10号第1主体部	小玉	淡青色	新鮮	19	15号墓	小玉	淡青色	新鮮
5	2号墓	小玉	淡青色	新鮮	20	15号墓	小玉	淡青色	新鮮
6	2号墓	小玉	淡青色	新鮮	21	15号墓	小玉	淡青色	新鮮
7	2号墓	小玉	淡青色	風化	22	18号墓	小玉	淡青色	新鮮
7'	2号墓	小玉	淡青色	新鮮	23	15号墓	管玉	淡青色	新鮮
8	2号墓	小玉	淡青色	新鮮	24	15号墓	管玉	淡青色	新鮮
9	2号墓	小玉	緑色	風化	25	18号墓	管玉	淡青色	新鮮
10	6号墓	小玉	淡青色	新鮮	26	18号墓	管玉	淡青色	新鮮
11	6号墓	小玉	淡青色	新鮮	27	18号墓	微小小玉	青紺色	弱風化
12	6号墓	小玉	淡青色	新鮮	28	18号墓	微小小玉	青紺色	弱風化
13	12号墓	小玉	淡青色	新鮮	29	18号墓	微小小玉	青紺色	弱風化
14	12号墓	小玉	淡青色	新鮮	30	18号墓	微小小玉	青紺色	弱風化
15	12号墓	小玉	淡青色	新鮮	31	18号墓	微小小玉	青紺色	弱風化

管：Mo（モリブデン）、励起電圧：20kV、電流：4mA、計数時間：300秒、装置：TREX-650Sで、定量にはEC、BCRなどの標準試料校正をおこなった。

また、ガラス玉の加工方法を調べるため、顕微鏡観察とCR法（フィルムの代わりにイメージングプレートを用いたコンピューテッド・ラジオグラフィ）による調査をおこなった。

3. 調査結果

今回調査したガラス玉の殆どは、保存状態は良好である。定量分析できた淡青色系ガラス小玉・管玉および微小な青緑色の小玉は、酸化カリウム（K₂O）がほぼ15-20%、酸化アルミニウム（Al₂O₃）が2-3%、二酸化ケイ素（SiO₂）が70-75%を示していることから、これらの試料はすべてカリガラス（K₂O-SiO₂ system）であることが明らかとなった（第9表）。各試料の定量値にかなり変動が見られるが、個体間の変動に加えて研磨が充分でなく若干風化部分も残っている可能性もあるが、比較的まとまった値を示している。また、定量分析していない試料についても、定性分析の結果から青色系ガラスはすべてカリガラスであると同定できた。

いっぽう、緑色を呈する小玉は著しく風化しているため、ガラスの種類を特定することはできなかった。一般にカリガラスは風化が進むと、アルカリ成分である酸化カリウムが減少し、二酸化ケイ素や酸化アルミニウム含有量が多くなる傾向が顕著で、風化の著しい試料の材質を特定することは困難である。今回の緑色ガラス小玉試料No9は、その外形からも著しく風化が進んでおり、アルカリ成分がほとんど残っておらず、ガラスの種類を同定することはできなかったが、カリガラスである可能性が高い。淡青色系ガラスに比べて酸化鉄（Fe₂O₃）含有量はやや大きいのは風化による影響が、もともと酸化鉄含有量が多く、着色に関与していたのかはわからない。同様に酸化鉛（PbO）含有量もかなり大きい値を示した。この緑色ガラスがソーダ石灰ガラス（Na₂O-Al₂O₃-CaO-SiO₂ system）の可能性がないことは、これまでのデータを比較検討した結果、酸化チタン含有量（TiO₂）や酸化ジルコニウム（ZrO₂）含有量などから判断した。以上の結果、当遺跡からは鉛バリウムガラスやソーダ石灰ガラスは検出されなかったことも同時に明らかになった。

ガラスの色調と化学組成を比較すると、淡青色系ガラスはいずれも酸化銅（CuO）：1-2%、酸化鉄（Fe₂O₃）：0.4-0.6%、酸化鉛（PbO）：0.1%前後含有し、そして酸化錫（SnO₂）が微量検出された。いわゆる銅イオンによる着色がなされていることがわかる。また、銅にともなって鉛、錫が検出されることから着色材料として銅合金が利用されたのかもしれない。また、鉄は基礎ガラスの原料に伴う不純物と考えられる。いっぽう、青緑色ガラスは淡青色ガラスに比べて、酸化鉄（Fe₂O₃）：2%前後、酸化マンガン（MnO）：2%前後と大きな含有量を示し、さらに酸化コバルト（CoO）が0.04-0.07%含有し、酸化鉛は検出限界以下（0.03%以下）で、酸化銅は0.03%であった。これらの青緑色ガラスは明らかにコバルトイオンによって着色されており、鉄、マンガン、銅はコバルト鉱石に伴う不純物であると考えられる。また、ニッケルも微量に含有していると考えられたが、定量限界以下であった。一般に、日本で出土する青緑色カリガラスにはこれらの不純物が必ず含有しており、酸化状態で作られたガラスはマンガンによる着色が影響して紫色の色調を与えている。今回の試料は紫色を帯びているものは存在せず、還元状態で作られたと推定できた。

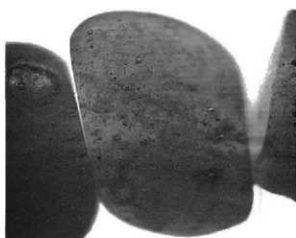
以上、今回出土したカリガラス小玉・管玉の基礎ガラスの組成や着色因子は、中国・韓国をはじめ東南アジア、南アジアで出土しているカリガラスと同じ特徴を有している。

第9表 ガラス遺物の化学組成 (wt%)

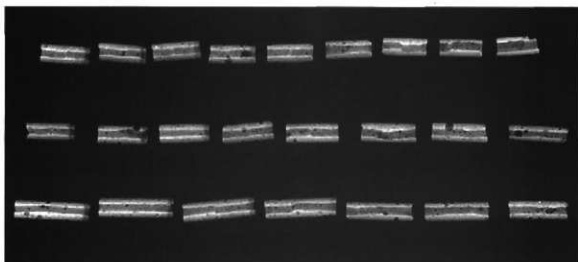
No.	SiO ₂	Al ₂ O ₃	Na ₂ O	K ₂ O	MgO	CaO	TiO ₂	Fe ₂ O ₃	CuO	MnO	CoO	PbO
1	75.9	3.8	0.7	16.4	1.0	0.5	0.1	0.40	1.27	0.05	-	0.06
2	77.0	3.2	0.7	14.7	0.6	0.3	0.1	0.55	1.45	0.01	-	0.12
3	75.4	2.4	0.9	17.4	0.5	0.4	0.1	0.53	1.33	0.02	-	0.10
4	72.6	2.8	0.7	20.3	0.8	0.7	0.1	0.50	1.42	0.01	-	0.08
5	74.4	3.4	0.9	17.2	0.8	0.5	0.1	0.57	1.91	0.00	-	0.09
6	76.1	2.8	0.8	16.6	0.8	0.5	0.1	0.52	1.34	0.00	-	0.09
7	79.0	5.9	1.5	9.7	1.0	0.3	0.1	0.60	1.73	0.02	-	0.10
7	75.1	2.8	0.9	17.7	1.0	0.5	0.1	0.56	1.37	0.01	-	0.09
8	72.6	2.1	0.6	21.2	0.9	0.6	0.1	0.58	1.36	0.02	-	0.09
9	85.6	6.3	0.9	1.4	1.8	0.9	0.2	0.86	1.46	0.02	-	0.54
10	71.0	2.9	0.8	21.4	0.7	0.6	0.1	0.40	1.36	0.01	-	0.09
11	70.3	3.6	0.5	21.1	0.7	0.6	0.1	0.47	2.04	0.01	-	0.12
12	70.6	3.3	0.9	21.3	0.6	0.5	0.1	0.41	1.43	0.01	-	0.09
13	73.4	3.7	0.9	18.8	0.5	0.4	0.1	0.39	1.62	0.01	-	0.09
14	73.3	3.3	0.9	18.6	0.6	0.4	0.1	0.37	1.61	0.01	-	0.10
15	74.6	3.3	0.6	17.4	0.8	0.5	0.1	0.57	1.56	0.00	-	0.15
16	76.3	3.8	0.5	16.3	0.9	0.4	0.1	0.56	0.96	0.01	-	0.09
17	75.3	3.4	1.0	15.6	0.8	0.3	0.1	0.52	1.33	0.01	-	0.07
18	73.0	4.3	0.8	18.4	0.6	0.4	0.1	0.70	1.24	0.00	-	0.09
19	76.8	3.5	1.0	15.2	0.5	0.5	0.1	0.50	1.56	0.01	-	0.10
20	75.0	3.8	0.7	16.2	0.6	0.4	0.1	0.45	1.56	0.01	-	0.10
21	73.6	3.7	0.6	16.4	0.8	0.4	0.1	0.58	1.78	0.01	-	0.11
22	74.4	3.5	0.9	17.1	0.8	0.5	0.1	0.48	1.63	0.01	-	0.10
23	71.5	3.5	0.6	18.9	0.7	0.5	0.1	0.43	0.94	0.01	-	0.08
24	74.7	3.2	0.8	18.1	1.0	0.4	0.1	0.43	1.20	0.01	-	0.08
25	74.5	3.5	1.0	16.4	0.6	0.4	0.1	0.49	1.24	0.01	-	0.06
26	78.0	3.5	0.9	14.1	0.8	0.4	0.1	0.48	0.85	0.00	-	0.06
27	74.3	2.0	0.8	15.0	0.6	0.7	0.1	1.95	0.05	2.32	0.05	-
28	75.4	2.4	0.5	15.0	0.8	0.5	0.1	1.95	0.03	1.91	0.04	-
29	76.7	2.7	0.9	14.3	0.8	0.6	0.1	2.00	0.03	1.94	0.04	-
30	76.4	2.0	0.8	15.5	0.8	0.4	0.1	2.05	0.03	1.81	0.07	-

(- : 定量限界以下を示す)

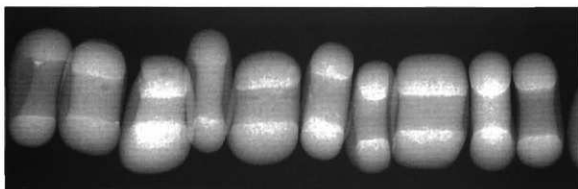
今回調査したガラス小玉は、その径がいずれも6mm以下で引き伸ばし法で作られ、かつ単色ガラスである。微小な小玉についても、引き伸ばされたガラス管を切断して作られていることは顕微鏡観察やCR法による調査で明らかである。これはインドパジフィック系ビーズの特徴を示しており、南アジアから東南アジアのどこかでカリガラスの小玉がつくられていたのかもしれないが、現在のところどこでカリガラスが造られていたのかは明らかではない。いっぽう、管玉については管状のガラスを適当な大きさに引き伸ばして作られたり、巻き付け法によって作られたのではなく、長方体もしくは円柱状のガラスブロックを研磨し、穿孔して作られたことは明らかである。このようなガラス管玉は北陸・畿内・山陰・山陽地域に分布しており、九州地域には分布していないことから、前述の地域のどこかで輸入したガラス素材をもとに、石器の技術を利用して加工していた可能性がある。



第220図 小玉の顕微鏡写真(透過光)
気泡が一定方向に配列しており、引き伸ばされている



第221図 18号墓出土のカリガラス製管玉のCR画像(穿孔されている)



第222図 青紺色カリガラス製の微小小玉のCR画像

第6節 梅田東古墳群から出土した遺構に残存する脂肪の分析

第4章 第6節は
公開していません

第5章 まとめ

第1節 土器の編年と梅田東古墳群の形成過程

本節では、墳丘墓群および木棺墓群の埋葬過程の把握を目的とする。この前提作業として、土器の分析を行う。この結果および埋葬施設相互の切り合い関係等から、上記の検討を行うことにしたい。

1. 土器の分析

はじめに

10号墳～14号墳の墳丘墓群および木棺墓群から51点の土器を図化することができた。土器棺に転用された土器を除くと、いずれも埋葬施設あるいは墳墓に供献された土器である。これらの土器は、概ね、弥生時代後期～布留式の範囲で理解できるものである。なお、分析にあたっては、墳丘墓群および木棺墓群出土土器を一括して進めていくことにする。

研究史

梅田東古墳群の位置する但馬地方の当該期の土器については、谷本 進⁽¹⁾によって編年が試みられている。また、近年、谷本により庄内併行期の土器についての詳細な分析が行われている⁽²⁾。

ところで、当該期の但馬の土器については、基本的には、丹後・丹波地域と同一の土器圏に含まれるものと考えられる。そして、当該地域においては、墳墓の調査例の増加に比例し、良好な土器資料も増加してきている。このような状況のもと、肥後弘幸・野々口陽子⁽³⁾によって、当該期の土器の詳細な分析・編年（以下、肥後編年・野々口編年）が行われている。本節では、これらの先行研究をもとに、分析を進めていくことにしたい。

(1) 器種分類

壺形土器・甕形土器・鉢形土器・鉢形土器・高坏形土器・器台形土器が出土している。器種分類と併行して、その時期的な位置付けが可能な形式については、そのつど検討する。

壺形土器

口縁部の形態を中心に、壺A・壺B・壺C・壺D・壺Eの5形式に分類できる。

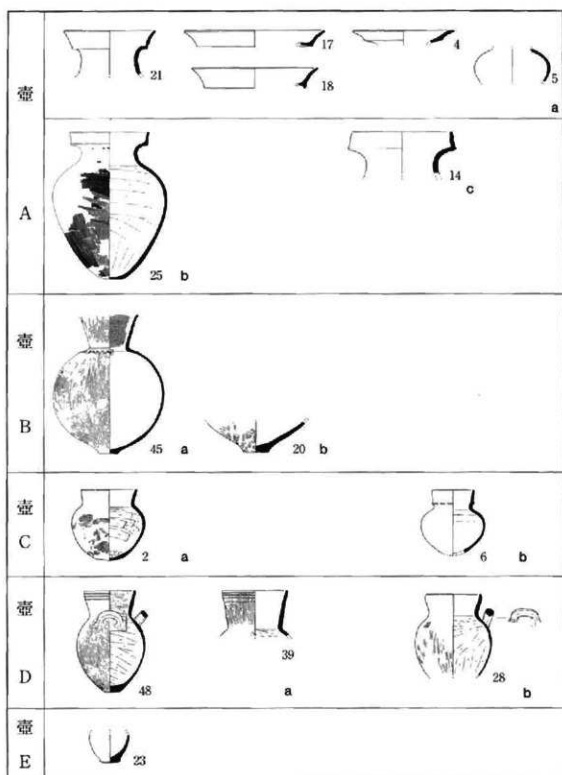
壺A

いわゆる複合口縁壺である。さらに複合部の形態から、外反するタイプ(a)、直立するタイプ(b)、内傾するタイプ(c)の3型式に細分できる。bについては、山陰系の範囲で理解できるものである。また、aの21と他の土器とは、口縁部および頸部の形態から細分可能である。しかし、21以外の土器は頸部まで残存しないため、当節では同一形式として取り扱うことにする。庄内併行期から布留初頭に位置付けられる。

特に25については、岩吉遺跡の報告における谷口恭子の編年のIV期中段階に位置付けられる資料に、類例が認められる。よって、布留式初頭から前半に位置付けられる。

壺B

いわゆる広口壺である。畿内系の壺である。特に45は生駒西麓産と考えられる土器で、いわゆる西ノ辻1地点式の壺と考えられる。畿内では、後期中葉に位置付けられている⁽⁴⁾。45は口縁部まで残存しないが、大山墳墓群3号墓第1主体部からは同タイプの生駒西麓産の土器が出土している⁽⁵⁾。肥後は共伴土器から当該資料をV-2期に位置付けているが、45については、体部形体がより球形化していることから、大山墳墓群出土例より新しく位



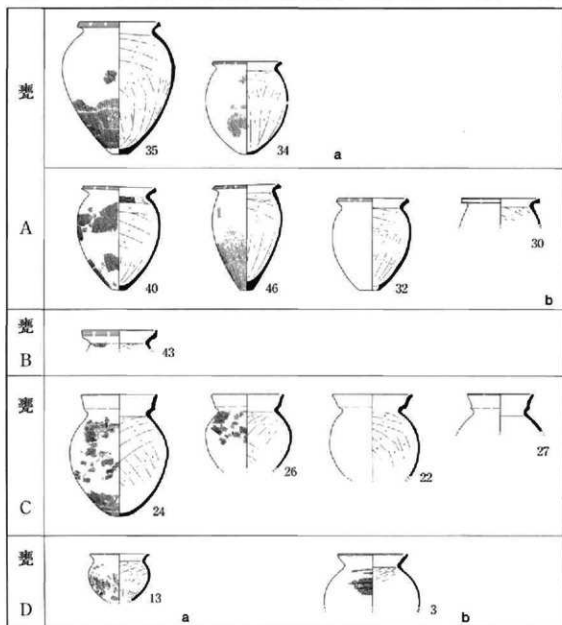
第235図 壺形土器の分類

置付けられるものと考えられる。

- 壺C** 直口壺である。複合口縁をなす山陰的な直口壺（b）と、その他（a）の2タイプに細分できる。bについては、庄内併行期から布留式に位置付けられるものである。
- 壺D** いわゆる水差形壺である。より丹後のな形式である。口縁部に凹線があるもの（a）とないもの（b）に細分できる。野々口編年によると、後期前半に位置付けられ、a→bと

変化するとされている。

- 壺E 残存状況が良好でないため、明確に形式分類できない土器である。
- 変形土器 口縁部を中心とした形態を中心に、壺A・壺B・壺C・壺Dの4形式に分類できる。
- 壺A 中期の中部瀬戸内系壺の系譜を引く壺である。口縁部を外方に広く屈曲させ、腹面に2・3条の凹線を施す。体部外面はハケ調整、内面はヘラ削りにより仕上げられ、内面のヘラ削りは頸部まで及ぶ。口径と体部最大径の比において、口径<最大径となるタイプ(a)と、口径=最大径となるタイプ(b)に細分できる。a・b両タイプとも後期前葉に位置付けられるものであるが、肥後編年によるとa→bと変化する。
- 壺B いわゆる丹後系の壺である。口縁端部を拡張し、外端面に縦凹線を施す。野々口編年の弥生後期Ⅲ、肥後編年のV-3に位置付けられる形式である。
- 壺C いわゆる山陰系の壺である。口頭部形態において個体差が認められるが、ここでは同一



第236図 変形土器の分類

形式として扱う。明らかに搬入品と認められるものは出土していない。口頭部の特徴から、庄内併行期から布留式初頭を中心とした時期に位置付けられる。

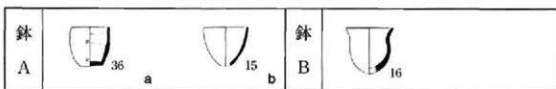
甕D いわゆる畿内系の甕である。外面をタタキ整形により仕上げ、口縁部はくの字形をなす。明らかに搬入品と認められるものは出土していない。口頭部の特徴から、庄内併行期から布留式初頭を中心とした時期に位置付けられる。

V様式系甕（a）と、布留式傾向甕（b）に分けられる。bについては、布留0式の特徴を示すタイプである。aについても、庄内併行期を中心とした時期が考えられる。

鉢形土器 出土量が少ないため、口縁部の形態を中心に分類する。

鉢A 体部から口縁部まで直線的にのびる直口鉢である。底部が平底を呈するもの（a）と丸底をなすもの（b）に細分できる。

鉢B 16の1個体のみである。帯城墳墓群7号墓出土例に類例を求めることができ、肥後編年においては、V-5、庄内併行期に位置付けられている。



第237図 鉢形土器の分類

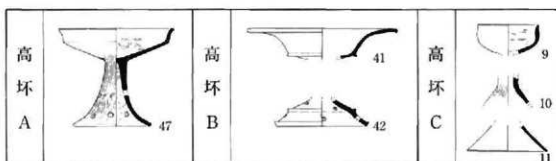
高環形土器 環部の形態を中心に3タイプに分類可能である。

高環A いわゆる有稜高環である。加陽土屋ヶ鼻遺跡7号墓第3主体部出土例・東山墳墓群11主体部出土例（豊岡市）に類例を求めることができる。東山墳墓群の報告においては、谷本編年のV-2様式に位置付けられている。

高環B 大きくは有稜高環に分類されるものであるが、環部が大型で脚部に段を有するものである。環部と脚部の屈曲部外面に突起が付く。当遺跡出土例は脚柱部が残存しないが、柱状をなすものと考えられる。類例として五反田遺跡SK04出土例（山東町）が認められ、谷本編年ではV-2様式に位置付けられている。ただし、同遺構において共存する土器から判断して、前半まで遡る可能性が考えられる。

この他、地域は異なるが、摂津の古曾部遺跡（大阪府高槻市）出土の高環（高環D）もほぼ同タイプで、後期初頭の土器に伴って出土している。

高環C 環部が碗形を呈するものである。類例が、西谷2号墓出土例に求められ、庄内併行期～布留式初頭に位置付けられる。



第238図 高環形土器の分類

器台形土器	野々口編年によると、筒部径・脚部径に対する受部径は漸次増大する。これをもとに、筒部径と脚部径を基準に分類する。	
器台A	受部径に対して筒部径・脚部径が大きいタイプである。受部の特徴は若干異なるが、大山墳墓群周辺第23主体部出土土器に類例を求めることができ、野々口編年においては後期Ⅱ新相に位置付けられている。	
器台B	受部径に対して筒部径・脚部径が小さいタイプである。当タイプに分類した7と8については、受部まで残存しないが、脚部の形態から判断した。脚部のみから判断すると、	第239図 器台形土器の分類 野々口編年の庄内Ⅰ新相に位置付けられている。

(2) 編年の位置付け

はじめに 前項の分類において、そのいくつかの形式については、肥後編年・野々口編年・谷本編年との対応関係についても触れてきた。この検討結果から判断すると、木棺墓群と墳丘墓群とで大きく時期が分かれる。木棺墓群出土土器については、谷本編年のV-1～V-2、肥後編年のV-1～V-3、高野編年の後期Ⅰ・Ⅱの時期、つまり後期前半～中葉に位置付けられる。墳丘墓群出土土器については、庄内併行期から布留式前半に位置付けられる。以下、木棺墓群と墳丘墓群とにわけて、詳細な時期の検討を試みたい。

なお、上記3者間には若干の編年観の相違が認められる。また、土器の出土量が少なく、これらの編年に厳密に対応させることは困難である。そこで、弥生時代後期以降を、後期前半・中葉・後半・庄内併行期・布留式期に区分し、検討していくことにする。

木棺墓群 前半と中葉の大きく2時期に細分できる。

前半 5号墓・6号墓・7号墓・9号墓・12号墓・13号墓・14号墓・18号墓が該当する。

中葉 1号墓・2号墓・15号墓・16号墓・17号墓が該当する。

墳丘墓群 墳丘墓ごとに時期を検討する。

10号墳 第1主体部・第5主体部・第6主体部から土器が出土している。このなかで、時期の特定が可能なのは第6主体部出土土器で、布留式初頭に位置付けられる。第5主体部出土土器については、壺C_aの類例が管見の限り認められない。しかし、丸底形態をとることから、庄内併行期以降と考えられる。第1主体部出土土器についても、丸底形態をとることから、庄内併行期以降に位置付けられるものと考えられる。

11号墳 第1主体部・第2主体部・第4主体部・第6主体部から土器が出土している。このなかで、時期の特定が可能なのは第1主体部出土土器・第4主体部出土土器・第6主体部主体部出土土器である。これらの土器から、第1主体部は庄内併行期～布留式初頭に、第4主体部は庄内併行期中葉に、第6主体部は庄内併行期に位置付けられる。また、第2主体部出土土器については、底部形態から判断して、庄内併行期以降と考えられる。

この他、墳丘上に供献された土器についても、庄内併行期のなかで理解できるものと考えられる。

- 12号墳 第1主体部から土器が出土している。前項での検討から、庄内併行期を中心とした時期に位置付けられる。
- 13号墳 各主体部および区画溝内から出土している。第1主体部出土土器については、庄内併行期後半～布留式初頭にかけての時期に位置付けられる。第2主体部出土土器については時期の特定は困難であるが、底部形態から判断して、後期後半以降と考えられる。
- また、第3主体部の棺転用土器については、蓋転用土器の方が古い時期観を示している。しかし、蓋と棺はセットであることから、第3主体部は、棺に転用された土器の時期、つまり布留式まで下るものと考えたい。
- この他、区画溝出土土器については、後期後半～庄内併行期中葉に位置付けられる。さらに、墳丘墓上に供献された土器については、布留式初頭～前半に位置付けられる。
- 14号墳 第1主体部のみから土器が出土しており、布留式初頭に位置付けられる。

2. 埋葬順序の復元

はじめに

前項では、木棺墓群について、土器の年代観をもとに時期区分を行った。一方、墳丘墓群については、土器のみからの時期区分は困難との結論に至った。そこで、木棺墓群については、墓坑相互の切り合い関係をもとに土器を伴わない埋葬施設の時期的な位置付けを検討する。墳丘墓群についても、各墳丘墓内での埋葬順序ならびに墳丘墓相互の築造過程について検討する。

(1) 木棺墓群の検討

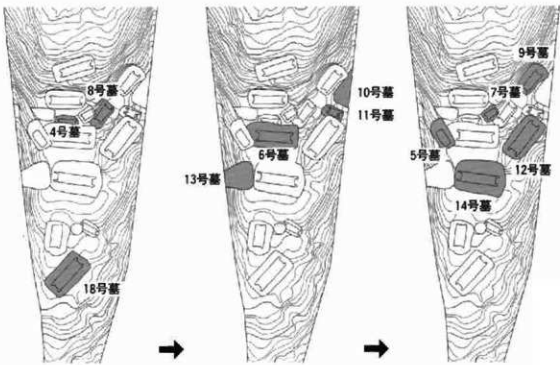
まず、土器を伴わない3号墓・4号墓・8号墓・10号墓・11号墓について検討する。

- 3号墓 調査結果から判断すると、当墓と切り合い関係にある墓坑は認められない。しかし、この結果は遺構検出面においての状況であり、当墓の検出過程において、2号墓（後期中葉）を切る形で一部確認されている。したがって、後期中葉後半に位置付けられる。
- 4号墓 6号墓（後期前半）に切られていることから、後期前半の古い段階に位置付けられる。
- 8号墓 6号墓と7号墓（後期前半）に切られていることから、後期前半の古い段階に位置付けられる。
- 10号墓 9号墓（後期前半）に切られていることから、後期前半の古い段階に位置付けられる。
- 11号墓 12号墓（後期前半）に切られていることから、後期前半の古い段階に位置付けられる。
- 小結 以上の検討結果に加え、時期の明らかな遺構相互の切り合い関係を考慮に入れると、後期前半を3期に、中葉を2期に細分することができる。以上をまとめたのが第240図である。
- なお、初期の段階において、上記の検討結果のみから判断すると、4号墓と8号墓の2墓が最古段階となる。しかし、両墓の被葬者は棺の規模から成年とは考えがたい（第5章第4節）。よって、18号墓についても、当該段階まで遡るものと考えたい。

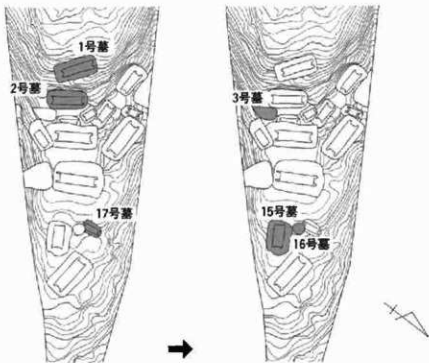
(2) 墳丘墓群の検討

まず、各墳丘墓内における埋葬順序を検討し、次に墳丘墓間の築造順序を検討する。

第1節 土器の編年と梅田東古墳群の形成過程



後期前半



後期中葉

第240図 木棺墓群の形成過程

第12表 10号墳埋葬順

時 期		埋 葬 施 設				
庄内併行期	前業	第1主体部 ↓ 第2主体部 第3主体部 第5主体部				
	中業					
	後業					
布留式	初頭	第6主体部	第4主体部			
	前半					

10号墳 当墳の中心主体は第1主体部で、当墳の造墓契機となったものと考えられる。よって、第1主体部が最も古く位置付けられる。ところで、第1主体部は第6主体部に切られており、第6主体部が布留式初頭に位置付けられている。よって、第1主体部については、庄内併行期の範囲で理解したい。

また、第4主体部は第1主体部を切っていることから、第1主体部より新しい時期に位置付けられる。他の主体部については、第5主体部を除いては土器を伴わず、他の主体部との切り合い関係が認められない。このため、埋葬時期の特定は困難である。第1主体部に後続する庄内併行期から布留初頭の時期幅、で理解できるものと考えたい。

11号墳 まず、造墓契機となったのは第1主体部と考えられ、最も古く庄内併行期後半に位置付けたい。このため、土器のみからは庄内併行期中業と考えられた第4主体部については、第1主体部に後続する庄内併行期後半に位置付けられる。また、第7主体部は第1主体部を切っていることから、庄内併行期後半以降に位置付けられる。そして、第6主体部についても同様の時期が考えられる。

また、第2主体部については、前項の検討結果と合わせて、庄内併行期～布留式初頭にかけての時期に位置付けられるものと考えられる。その他、土器を伴わない第3主体部と第5主体部については、他の墓坑との切り合い関係も認められないことから時期の特定は困難であるが、いずれも庄内併行期～布留式前半の範囲で理解できるものと考えられる。

12号墳 造墓契機となったと考えられる第1主体部が、庄内併行期に位置付けられる。したがって第2主体部についてはこれに後続する時期が考えられる。

13号墓 第1主体部が造墓契機となったものと考えられ、庄内併行期後半～布留式初頭に位置付けられる。このため、先述したように古く位置付けることも可能な第2主体部については、

第13表 11号墳埋葬順

時 期		埋 葬 施 設					
庄内併行期	前業	第1主体部 ↓ 第7主体部 第2主体部 第3主体部 第4主体部 第5主体部 第6主体部					
	中業						
	後業						
布留式	初頭						
	前半						

第14表 13号墳埋葬順

時 期		埋 葬 施 設	
庄内併行期	前業	第1主体部	第2主体部
	中業		
	後業		
布留式	初頭 前半	第3主体部	

第1主体部に接続する時期に位置付けたい。また、第1主体部を切る第3主体部は、前項での検討通り、布留式初頭から布留式前半に位置付けられる。この他、墳丘上に供献された土器についても、第3主体部とはほぼ同時期に位置付けられる。

なお、区画溝内から出土した土器については、前項での検討通り、第1主体部より古く位置付けが可能である。しかし、20のような平底についても布留式段階まで残る例も認められることから、第1主体部の時期まで下らせて、造墓時期に伴うものと理解したい。

14号墓

造墓契機となった第1主体部が、布留式初頭から前半に位置付けられる。よって、第2主体部については、これに接続するものと考えられ、布留式前半のなかで理解できるものと考えられる。

墳丘墓の築造

最後に墳丘墓相互の築造順序について検討する。第3章で報告したように、11号墳から14号墳にかけての墳丘墓間に区画溝が認められる。そしてこれらの区画溝は、13号墳と14号墳は12号墳を、13号墳と12号墳は11号墳を前提として設けられている。また、13号墳の区画溝は12号墳の区画溝を切っている。よって、11号墳→12号墳→13号墳・14号墳の築造

第15表 木棺墓群・墳丘墓群の形成過程

時 期	木 棺 墓 群	墳 丘 墓 群
弥生時代後期	前半 4号墓 8号墓 18号墓 ↓ 6号墓 ← 10号墓 11号墓 13号墓 ↓ ↓ ↓ 5号墓 7号墓 9号墓 12号墓 14号墓 1号墓 2号墓 17号墓 ↓ ↓ 3号墓 15号墓 16号墓	
	中業	
	後半	
庄内併行期	前業	
	中業	
	後業	10号墳 11号墳 → 12号墳 → 13号墳 → 14号墳
布留式	初 前半	

順序が考えられる。また、13号墳と14号墳の関係については、前項での出土土器の検討から、13号墳→14号墳と理解できる。以上から、11号墳→12号墳→13号墳→14号墳と築造されたものと考えられる。

次に、これらの10号墳と11号墳との関係について検討する。10号墳と11号墳は隣接するが、両者の関係については、10-11号墳間が後世の改変を受けていることもあり、11号墳から14号墳にかけてのようには理解することはできない。また、先の土器の検討結果からも、前後関係を明確にすることは困難である。11号墳から14号墳の流れから、10号墳→11号墳の可能性も十分考えられるが、明確な根拠を示すことはできない。よって、ほぼ同時期に造墓が開始されたものと考えたい。

3. 小結

以上の検討結果から木箱墓群および墳丘墓群の形成過程をまとめたのが第15表である。

[註]

- (1) 谷本 進「但馬地域」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1992
- (2) 谷本 進「但馬における庄内併行期の土器の様相」『北近畿の考古学』両丹考古学研究会・但馬考古学研究会 2001
- (3) 肥後弘幸「丹後地域の弥生時代後期から古墳時代前期の土器編年(上)」『太歳波考古』第7号 両丹考古学研究会 1995
- (4) 高野陽子「北近畿における弥生時代後期前半期の土器とその時間列」『京都府埋蔵文化財論集 第4集』財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001
野島 永・野々口陽子「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓(1)」『京都府埋蔵文化財情報』第74号 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1999
- (5) 谷口恭子他「岩古遺跡Ⅲ—中小河川改修事業大井手川改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査—」鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1991
- (6) 寺沢 薫・森井貞夫「河内地域」『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ』木耳社 1989
- (7) 平良泰久「丹後大山墳墓群」(京都府丹後町文化財調査報告 第1集)丹後町教育委員会 1983
- (8) 岡田晃治「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要 帯城墳墓群」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1987
- (9) 瀬戸谷 皓「加陽土屋ヶ鼻遺跡群—民間開発事業にかかる埋蔵文化財発掘調査概要—」豊岡市教育委員会・豊岡市郷土資料館 1994
- (10) 瀬戸谷皓「上鉢山・東山墳墓群」(豊岡市文化財調査報告書 第26集)豊岡市教育委員会 1992
- (11) 前掲(1)
- (12) 宮崎康雄「古曾部・芝谷遺跡—高地性集落遺跡の調査—」(高槻市文化財調査報告書 第20冊)高槻市教育委員会 1996
- (13) 岸岡貴美「野田川流域の弥生遺跡 野田川町西谷墳墓群」『京都府弥生土器集成』財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988

第2節 土器の分析

はじめに 前節で、土器の時期的な検討を行った。この編年をもとに、①土器の使用法、②土器の地域性等について検討する。

1. 土器の使用法







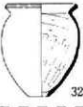



当遺跡出土の土器は、棺転用土器と供献土器とに限られる。

(1) 棺転用土器



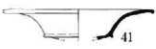









- 木棺墓群 16号墓に埋葬施設として転用された、45の壺1点のみである。
- 墳丘墓群 13号墳第3主体部に埋葬施設として転用された、25の壺1点のみである。24の壺がこの蓋として転用されている
- 小結 13号墳第3主体部に転用された壺については、類型として柿塚中山古墳群2号壺棺(兵庫県山崎町)・小山3号墳第5主体(兵庫県養父郡八咫町)・内場山墳丘墓(兵庫県篠山市)で認められ、いずれも棺に転用されている。また、時期的にもほぼ同時期に位置付けられる。以上から、このタイプの壺は、棺専用につくられた可能性が考えられる。

(2) 供献土器









- 墓坑内供献 供献場所から、墓坑内・墓坑上面・墳丘上に分けることができる(第241回～第244回)。木棺墓群・墳丘墓群両方で認められる。
- 木棺墓群 いずれも破砕された状態での出土で、いわゆる「墓坑内破砕土器供献」と称されるものである。その出土位置をみると、棺の周囲(棺側部)と棺上に認められる。
- 棺側部 棺のプランを検出したレベルもしくはそれより上のレベルから出土している。棺を埋置し、その周囲を埋める段階で供献されたものと考えられる。
- 供献された土器の器種(第16表)をみると、壺・甕・鉢・高坏が認められる。なかでも、壺が最も多くの埋葬施設において供献されている。また、同一埋葬施設へ複数の器種が供献される場合でも、壺は必ず含まれている。
- さらに、複数の器種を供献する例は、初期の段階においては認められないが、後期前半の後半以降になると一般化する。ただし、複数器種の供献の場合、18号墓の3器種を除くは、2種類に限られる。
- 次に、棺側部でのより具体的な供献位置についてみると、頭位側・体部・足位側のいずれの位置にも供献されている(第17表)。ただし、足位側への供献例は少なく、特に小口側への供献は認められない。頭位側についても、小口側への供献は5号墓と2号墓の2墓に限られ、棺の両側に比べてわずかである。また、被葬者に対する供献位置の左右については、明確な特徴を指摘することは困難である。傾向としては、頭位側では被葬者の右側、体部付近では被葬者の左側への供献例が多い。
- また、個々の破砕された土器の供献状況を見ると、土器の内面を上側にしての例が多く認められた。

	供 献 土 器			転 用 土 器	
	棺 側	棺 上	墓 坑 上		
前 半	8号墓	 36			
	18号墓	 48  51	 50		
	6号墓	 34			
	13号墓			 39	
	5号墓	 32	 33		
	7号墓	 35			
	9号墓	 37			

第241図 木棺墓群供献土器 (1)

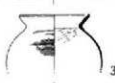
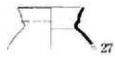
		供 献 土 器			転 用 土 器
		棺 側	棺 上	墓 坑 上	
前 半	12号墓				
	14号墓			 	
中 葉	1号墓				
	2号墓				
	17号墓				
	15号墓		 		
	16号墓				

第242図 木棺墓群供献土器(2)

	墳丘	主体部	供 献	
			棺 側	棺 上
庄 内 併 行 期 (後 葉)	10号墳	第1主体部		
		第5主体部		
	11号墳	第1主体部		
		第2主体部		
		第4主体部		
		第6主体部		
		供献土器		
	12号墳	第1主体部		
	13号墳	第1主体部		
		第2主体部		

第243図 墳丘墓群供献土器 (1)

土 器		転用土器
墓坑上	墳丘上	
<p>4 5 7 8</p>	<p>9 10 11</p>	
	<p>15</p>	
<p>16</p>		
<p>21</p>		

	墳丘	主体部	供 献	
			棺側	棺上
布 留 式	10号墳	第6主体部	 3	
	13号墳	第3主体部		
		供献土器		
		区画溝		
14号墳	第1主体部		 27	



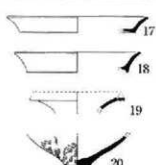
第244図 墳丘墓群供献土器（2）

なお、棺側部への供献例は、後期前半から中葉にかけて認められるが、この間における時間的な明確な変化は認められない。

棺上部 15号墓の1例のみである。棺内に落ち込んだ土器の出土から判断したものであるが、その平面的な出土位置は、頭位側小口付近にあたる。

墳丘墓群 棺側部および棺上への供献が認められる。

棺側部 供献された土器の器種（第16表）は、本棺墓群の棺側部への供献例と同じく、甕が主流

土 器		転 用 土 器
墓 坑 上	墳 丘 上	
		
		
		

である。逆に木棺墓群で認められた、高坏の供献例は認められない。また、甕の一部を除いては、供献される土器が小型で、量的に少ない傾向が認められる。

次に、棺側部でのより具体的な供献位置についてみると、木棺墓群同様、頭位側・体部・足位側への供献が認められる（第17表）。また、足位側の小口側への供献例が認められない点も同じ傾向にある。木棺墓群と大きく異なる点は、被葬者の体部右側への供献例が認められないことである。

最後に、土器の供献状況を把握できた例に関しては、木棺墓群同様、土器の内面を上側にして供献されている。特に、10号墳第6主体部がその顕著な例（図版25）である。

なお、棺側部への供献例は、庄内併行期から布留式初頭にかけて認められるが、この間における明確な時間的な変化は認められない。

棺上 破砕されて供献された例と、破砕されずに供献された例が認められる。後者の例として、10号墳第5主体部がある。完形の壺形土器（2）が石棺の蓋の上に置かれた状態で供献されている。平面的な位置関係をみると、頭位側の左棺側部にあたる。

他は、前者の例にあてはまるものである。多くの例は、棺底に土器が落ち込んだ状態で出土していることから、棺上に供献されたものと判断したものである。例外としては、10号墳第6主体部例（3：第44図）で、甕の口縁部が蓋石の上に置かれた状態で出土している（図版24）。この土器は、上記の棺側部へ供献された土器と同一個体である点も注目される。

供献された土器の器種をみると、壺・甕・鉢の3器種に限られる（第16表）。供献例が少ないため、特徴として理解できるものではないが、甕と鉢が多い傾向にある。

墓坑上供献 木棺墓群・墳丘墓群ともに認められる。

木棺墓群

1号墓・13号墓・14号墓で認められる。1号墓に供献された29については完形に復元できたが、当初から完形の状態で供献されたのかどうかについては明確にできない。逆に、他の完形に復元できない土器についても、表土層中からの出土であることから、完形の状態で供献されたのか、破砕された状態で供献されたのかについては、明確にできない。

供献された土器の器種としては、壺・高坏・器台に限られる（第16表）。棺側部への供献において主流であった甕が、1例も認められない点が注目される。

墳丘墓群

11号墳第1主体部・12号墳第1主体部・13号墳第1主体部で認められる。供献された埋葬施設が、各墳丘墓の造墓の契機となった中心主体である点は注目される。供献された土器の器種をみると、壺・鉢・高坏・器台と甕が認められない点は、木棺墓群で認められた特徴と一致する。

なお、墓坑上の供献例は、いずれも庄内併行期の埋葬施設に限られ、布留式段階の埋葬施設には認められない。

墳丘上供献

11号墳と13号墳で認められる。13号墳の区画溝から出土した土器についても、墳丘上からの流れ込みと判断し、13号墳の墳丘上に供献されたものと判断した。

11号墳では壺が、13号墳では甕と壺が供献されている。墓坑上供献土器と同様、表土層中からの出土であることから、完形の状態で供献されたのか、破砕されて供献されたのかについては明確にできない。ただし、11号墳については、その出土状況（第3章第3節）から判断して、完形の状態で供献された可能性がたかいものと考えられる。逆に、13号墳については、破砕され供献された可能性が高いものと考えられる。

また、2例しか認められないため、時間的な傾向については言及できない。

(3) 小結

はじめに 以上、梅田東古墳群出土の土器の使用方法についてみてきた。埋葬施設に転用された土器も認められるが、ほとんどの土器は供献されたものである。弥生時代後期前半～中葉の木棺墓群で13基、庄内併行期～布留式前半の墳丘墓群中11基の埋葬施設で、土器の供献が認められた。木棺墓群と墳丘墓群と時期が明らかに異なる両者で、土器の供献を認めることができた。以下、これら両時期の間に変化を認めることができるのかを検討してみたい。

供献位置 土器の供献場所は、大きく墓坑内・墓坑上・墳丘上からなる。墓坑内についてはさらに棺側部と棺上に分けることができる。墳丘上については、当然墳丘墓群に限られ、その時

第16表 供献土器器種構成

時期	組 葬 遺 構	棺 側 部					棺 上					墓 坑 上						
		壺	甕	鉢	高杯	器台	壺	甕	鉢	高杯	器台	壺	甕	鉢	高杯	器台		
後 期 前 半	木 棺 墓 群	4号墓																
		8号墓																
		18号墓																
	木 棺 墓 群	6号墓																
		10号墓																
		11号墓																
		13号墓																
		5号墓																
		7号墓																
	木 棺 墓 群	9号墓																
		12号墓																
		14号墓																
		14号墓																
	後 期 中 葉	庄 内 併 行 期	1号墓															
			2号墓															
			17号墓															
3号墓																		
15号墓																		
16号墓																		
布 留 式	10号墳	第1主体部																
		第2主体部																
		第3主体部																
		第5主体部																
		第5主体部																
	11号墳	第1主体部																
		第2主体部																
		第4主体部																
		第7主体部																
	12号墳	第1主体部																
		第2主体部																
	13号墳	第4主体部																
		第6主体部																
		第3主体部																
第5主体部																		
第7主体部																		
第2主体部																		
第3主体部																		
14号墳	第1主体部																	
	第2主体部																	

期も庄内併行期以降に限定される。また、棺上への供献も、木棺墓群では15号墓で1例認められるのみである。但馬における当該期の棺上への供献例は、東山墳墓群（豊岡市）・門谷墳墓群（豊岡市）において認められる。15号墓は東山墳墓群に後出するものであるが、梅田東古墳群例が当該地域からの影響かについては、今後の検討課題としたい。

土器の供献場所の違いは、埋葬儀礼における過程の違いを意味する。つまり、棺側部への供献は棺設置段階、棺上への供献は棺に蓋をした段階、墓坑上への供献は棺を完全に埋めた段階を意味する。

また、同じ埋葬施設における数段階に及ぶ供献例は、木棺墓群では14号墓に限られる。一方、墳丘墓群では、10号墳第6主体部・11号墳第1主体部と13号墳第1主体部・14号墳第1主体部に限られる。具体的な供献場所については、木棺墓群では棺側部への供献と墓坑上への供献に限られるが、墳丘墓群の時期になると、新たに棺上への供献が加わる。

以上から、庄内併行期以降の供献場所の多様化は、埋葬儀礼の厚葬化を意味するものと考えられる。また、墳丘墓群における供献例は、10号墳第6主体部を除くと、墳丘墓の造墓契機となった埋葬施設に限られる。これは、上記の厚葬化は特定の被葬者に限定されることを意味するものと理解できる。

供献器種
墓坑内

棺側部と墓坑上に供献された器種に、時間的な変化傾向の違いが認められる。

弥生時代後期前半～中葉と庄内併行期～布留式前半の2時期とも、甕が主流をなす。しかし、後期前半段階では他に壺・鉢・高坏が認められたが、庄内併行期以降になると高坏の供献が認められなくなる。

墓坑上

両時期とも、壺・高坏・器台の3器種については共通する。庄内併行期以降に鉢が加わる点が異なる。いずれにしても、これらの器種は、他地域の当該期の埋葬儀礼に供献される器種と共通する点は注目される。

肥後弘幸によると、近畿北部で広く分布が認められる墓坑内破砕土器供献は、すべての器種が墓坑内に破砕供献されていたものが、後期中葉以降に鉢・高坏・器台は墓坑上に供献されるようになるようである。当遺跡に認められた墓坑上に甕が供献されない特徴は、北近畿で一般に認められる傾向と一致するものといえよう。

第17表 棺側部土器供献位置

時期	埋葬施設	部位								
		右側	小口	左側	右側	左側	右側	小口	左側	
後期前半	木棺墓群	18号墓								
		5号墓								
		7号墓								
		12号墓								
		14号墓								
中葉		2号墓								
		17号墓								
庄内併行期	10号墳	第1主体部								
	11号墳	第1主体部								
	13号墳	第4主体部								
		第1主体部								
布留式	10号墳	第6主体部								
	14号墳	第1主体部								

棺側部供献 棺側部への供献位置についてみてみたい。両時期とも、被葬者の頭位側・体部・足位側への供献は同じである。また、足位側の小口への供献が認められない点も共通する。しかし、肥後の分析によると、左坂墳墓群・三坂神社墳墓群に見られる破砕供献例は「被葬者の足元から下半身の周辺に集中する」ようである。梅田東古墳群では、このような集中傾向は認められず、特徴を異にする。

供献土器 最後に、供献された土器そのもので気づいた点を一つ指摘しておきたい。それは、北近畿における破砕供献で一般的に認められるように、供献された壺のなかで器表面の観察が可能な土器の多くに、煤の付着が認められたことである。明らかに、一端使われた土器が使用されていることを意味している。この使用については、大庭重信が指摘しているような埋葬儀礼に伴うものなのか、肥後のように日常容器の再利用と考えるのかは明確にできない。ただし、調査においては、火を伴った儀礼の痕を確認することはできなかった。

2. 土器の地域性

本章第1節における器種分類において、地域性についても検討を行った。ここでは、時期についても考慮し、当遺跡出土の土器の地域色についてまとめておきたい。

本棺墓群 明確に認識できる地域色として、畿内系と丹後系を指摘できる。前者が壺Bのみである。他は丹後系に分類でき、壺D・壺A・壺B・高坏Aが対応する。

墳丘墓群 畿内系・丹後系に加えて山陰系が認められる。畿内系としては、壺Bb・壺Da・壺Dbが対応する。この他、壺Aaの口縁部の立ち上がりが高いタイプについても、畿内系に分類できるものと考えられる。丹後系としては、高坏Cが対応する。最後に山陰系としては、壺Ab・壺AC・壺Cb・壺Cが対応する。

これらの土器のなかで、畿内系とした壺Daについては、器形および外面のタタキ整形については畿内的であるが、内面のヘラ削りについては、その方向等から山陰地方の影響が考えられる。つまり、畿内と山陰の折衷型と考えられる。

小結 以上、熊地域の特色をもった土器についてまとめてみた。これらの土器のなかで明らかに搬入されたと考えられるのは、本棺墓群16号墓で棺に転用された壺Ba(45)のみである。他の土器については、搬入された可能性も否定できない土器もあるが、当該地域の影響が認められる土器、という理解にとどめておきたい。

本棺墓群の時期、つまり弥生時代後期前半から中葉にかけては、壺Baの1点を除いては丹後系のみである。これに対して、墳丘墓群の時期、つまり庄内併行期～布留式初頭にかけは、新たに畿内系と山陰系の土器が加わる。むしろ、量的にはこの両地域の土器で大半を占める状況である。特に山陰系の土器が圧倒的である。

谷本は、但馬における当該期の土器の様相について、山陰の土器様式と畿内の土器様式が共有する形で、但馬の布留期の土器様式が確立するとされている¹¹¹。当遺跡でみた土器の様相は、まさにこのような状況と一致した傾向にあるものといえよう。

しかし、梅田東古墳群からわずか数kmのはば同時期の筒江浦石遺跡出土土器¹¹²について、山陰系が圧倒的であるが、畿内系は皆無に近いようである。筒江浦石遺跡が集落遺跡であり、梅田東古墳群が埋葬遺跡であることに起因する可能性もあるが、遺跡単位でその状況

が異なるようである。さらに、丹後地域においても同様の傾向が認められるようである。¹¹²⁾

〔註〕

- (1) 徳本誠一『埴野中山古墳群 第1集』兵庫県山東町教育委員会 1975
- (2) 谷本 進『小山古墳群・東家の上遺跡』八鹿町教育委員会 1990
- (3) 岡崎正雄他『内場山城跡—近畿自転車道舞鶴線関係文化財報告書(XXTI)—』(兵庫県文化財調査報告 第126冊) 兵庫県教育委員会 1993
- (4) 宮村良雄『豊岡の弥生墳墓と墓坑内破砕土器供献』[上鉢山・東山墳墓群] (豊岡市文化財調査報告書 第26集) 豊岡市教育委員会 1992 以下、東山墳墓群に関しては、当報告による。
- (5) 松井敬代『破砕土器の埋納について—豊岡市神美地域を中心として—』[但馬考古学 第6集] 但馬考古学研究会 1991
- (6) 肥後弘幸『墓坑内破砕土器供献(上・下)—近畿北部弥生墳墓土器供献の一例—』『みずほ』12・13号 1994
肥後弘幸『弥生墳墓における土器供献—丹後の場合—』『YAY! 弥生土器を語る会20回到達記念論文集』弥生土器を語る会 1996
- (7) 前掲(6)
- (8) 前掲(6)
- (9) 大庭重信『弥生時代の葬送儀礼と土器』[待兼山論叢] 第26号史学論 1992
- (10) 前掲(6)
- (11) 谷本 進『但馬における庄内併行期の土器の様相』[北近畿の考古学] 両丹考古学研究会・但馬考古学研究会 2001
- (12) 荒木幸治『古墳時代初頭における粘土探掘坑とそれに伴う具体的活動—兵庫県朝来郡和田町筒江浦石遺跡の調査—』[兵庫県埋蔵文化財研究紀要] 創刊号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2001
- (13) 高野陽子『弥生大形墳墓出現前夜の土器様相』[丹後の弥生王墓と巨大古墳] (季刊考古学別冊10) 2000

第3節 副葬品について

本棺墓群および墳丘墓群の各埋葬施設から出土した副葬品は、玉類と鉄製品に限られる。以下、この2種についてまとめてみたい。

1. 玉類

はじめに

玉類の副葬は、本棺墓群では7基の埋葬施設に、墳丘墓群では3基の埋葬施設の、計10基で認められた(第245図)。埋葬施設ごとに副葬された玉類の大きさ等をまとめたのが第18表である。これによると、副葬された玉類は、ガラス小玉・ガラス粟玉・ガラス管玉・碧玉製管玉の4種類である。このなかで、墳丘墓群に副葬された玉類は、ガラス小玉に限られる。以下、各玉製品の検討、および出土状況からみた副葬状況の復元についての検討を行いたい。

(1) 玉類の検討

ガラス小玉

最も多く副葬された玉である。本棺墓群18号墓の182点をはじめとして、計719点出土している。後期前半～中葉にかけての本棺墓群および庄内併行期の墳丘墓群から出土している(第245図)が、量的に前者からの出土が圧倒的に多い。

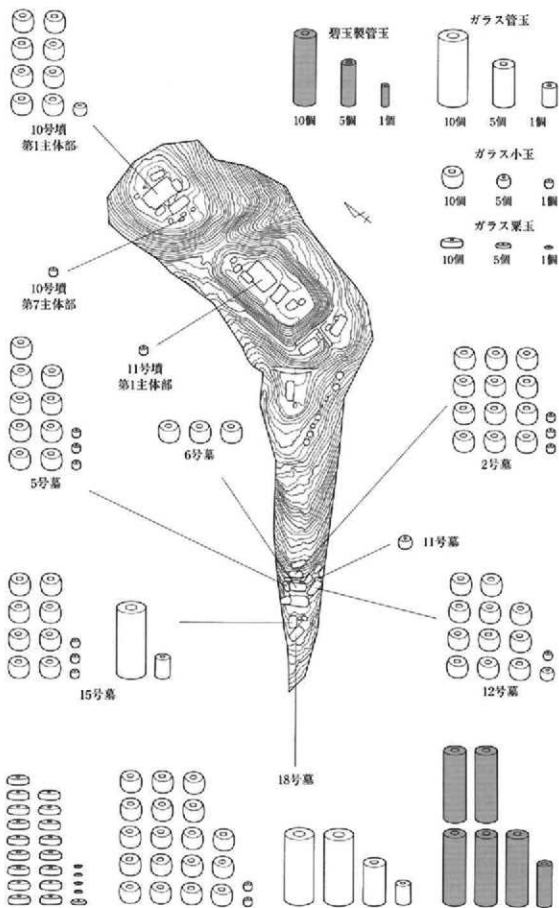
墳丘墓群出土のガラス小玉は、10号墳第7主体部と11号墳第1主体部から各1点出土している以外は、全て10号墳第1主体部からの出土である。10号墳第7主体部と11号墳第1主体部のガラス小玉は計測されていないこともあり、以下10号墳第1主体部出土ガラス小玉を、墳丘墓出土ガラス小玉として検討していくことにする。

材質

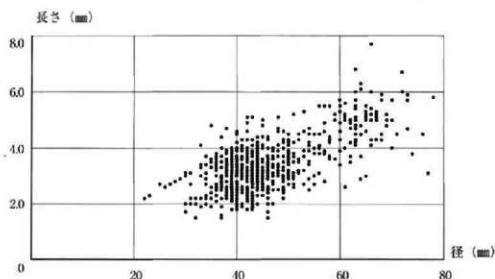
肥塚隆保の分析(第4章第5節)では、全てカリガラスとの分析結果が得られている。

第18表 出土玉類一覧表

埋葬施設	種類	出土 点数	長さ(mm)				径(mm)			重さ(g)			
			最大	最小	平均	連結長	最大	最小	平均	最大	最小	平均	
墳丘墓	10-1	ガラス小玉	85	4.3	1.7	2.9	243.4	5.5	3.7	4.3	0.1245	0.167	0.0584
	10-7	ガラス小玉	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	11-1	ガラス小玉	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
本棺墓群	2号墳	ガラス小玉	123	4.6	1.5	2.9	322.8	5.3	2.5	4.0	0.1303	0.0079	0.0466
	5号墳	ガラス小玉	93	4.1	1.6	3.0	267.6	5.5	2.2	4.1	0.1163	0.0127	0.0613
	6号墳	ガラス小玉	30	6.7	2.6	5.0	128.8	7.8	5.8	6.8	0.4119	0.0047	0.2359
	11号墳	ガラス小玉	5	4.2	2.2	3.1	15.6	4.9	3.6	4.1	0.0824	0.0379	0.0351
	12号墳	ガラス小玉	116	5.1	1.5	3.3	376.9	6.2	3.0	4.4	0.2152	0.0359	0.0741
	15号墳	ガラス小玉	83	4.3	1.8	3.0	228.0	5.5	3.5	4.3	0.1146	0.0078	0.0638
		ガラス管玉	11	27.7	13.0	22.3	244.0	6.7	5.4	6.2	1.8526	0.6171	1.4224
	18号墳	ガラス小玉	182	7.7	1.5	4.2	729.9	7.7	3.3	5.2	0.3259	0.0046	0.1434
		ガラス粟玉	179	1.5	0.4	0.8	149.2	2.1	1.1	1.6	0.0092	0.0010	0.0029
		ガラス管玉	26	16.7	9.7	12.3	285.6	4.8	3.8	4.6	0.6236	0.0568	0.4657
碧玉製管玉		55	11.9	3.0	6.3	346.2	2.7	1.7	2.1	0.1195	0.0107	0.0422	
総計 990点	ガラス小玉	719	7.7	1.5	3.4	2283.5	7.8	2.2	4.6	0.4119	0.0046	0.0913	
	ガラス粟玉	179	1.5	0.4	0.8	149.2	2.1	1.1	1.6	0.0092	0.0010	0.0029	
	ガラス管玉	37	27.7	9.7	15.4	540.4	6.7	3.8	5.1	1.8526	0.0568	0.7080	
	碧玉製管玉	55	11.9	3.0	6.3	346.2	2.7	1.7	2.1	0.1195	0.0107	0.0422	



第245図 玉副葬施設



第246図 ガラス小玉計測値

大きさ

玉の大きさを比較すると、墳丘墓群出土のガラス小玉は、長さ・径・重さの平均値がそれぞれ $2.9\text{mm} \cdot 4.3\text{mm} \cdot 0.0584\text{g}$ と、全体の平均値 ($3.4\text{mm} \cdot 4.6\text{mm} \cdot 0.0913\text{g}$) を下回っている (第18表)。また、これらの規模の最大値を比較しても、墳丘墓群出土のガラス小玉のほう明らかに小型である。したがって、墳丘墓群へ副葬されたガラス小玉は、木棺墓群と比較して、全体的に小型のものであったようである。墳丘墓群からの出土量が少ないため、これが時期的な差をどこまで反映したものかについては明確にできない。梅田東古墳群での一つの傾向として、理解しておきたい。

次に、木棺墓群から出土したガラス小玉の大きさについて検討してみたい。ここで注目されるのは、6号墓出土ガラス小玉がとりわけ大きな点である。玉の長さ・径・重さの平均値がそれぞれ $5.0\text{mm} \cdot 6.8\text{mm} \cdot 0.2359\text{g}$ と、他の木棺墓群出土資料 (各平均値は $4.6\text{mm} \cdot 3.5\text{mm} \cdot 0.0959\text{g}$) より抜きん出ていることがわかる。平均値からみると、18号墓出土資料がこれに次ぐが、最大値と最小値の差が大きい。

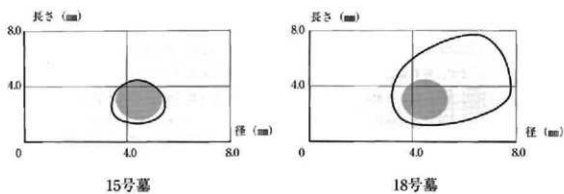
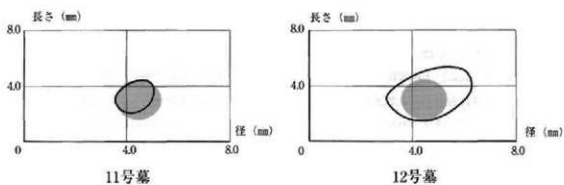
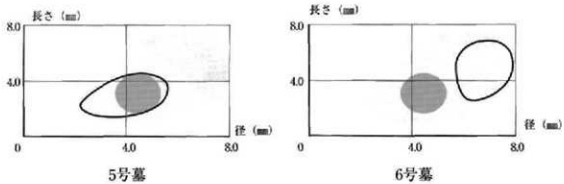
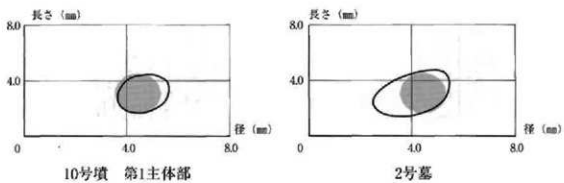
なお、丹後ではあるが、木棺墓群とほぼ同時期に位置付けられる三坂神社墳墓群出土ガラス小玉の分析において、径 $3 \sim 4\text{mm}$ 前後の小型のものと、径 $5 \sim 6\text{mm}$ 前後の大型のものに大別できるとされている。後者が6号墓、前者が他の木棺墓出土ガラス小玉の大きさにほぼ対応する。つぎに、この大きさのばらつきについてみることにする。

ばらつき

まず、埋葬施設ごとのガラス小玉全体の分散図を作成 (第246図) し、これを全体分布とし、さらにより集中する範囲を濃い網で示した (集中域)。これに第3章で示した埋葬施設ごとにその分布域 (分布域) を重ね合わせてみた (第247図)。これによると、10号墳第1主体部・11号墓・15号墓は、全体の集中域とほぼ一致する。これに対して、18号墓では集中域より明らかに広い範囲に分布が認められ、ガラス小玉の規模にばらつきがみられる。また、6号墓出土資料は、その分布域は全体の分布集中域とは明らかに異なり、先にみた大きさの違いを顕著に表している。ただし、その分布範囲は比較的狭く、その規模は一定している。

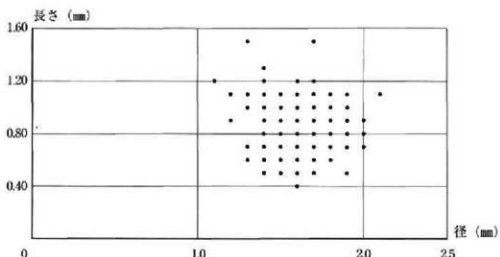
色調

これまでの分析において、6号墓出土ガラス小玉がその大きさの点において明らかに異



分布域
 全体分布
 集中域

第247図 ガラス玉の分布



第248図 粟玉計測値

なることが明らかとなった。この違いは、その色調にも認められ、6号墓出土ガラス小玉は青色透明系であるのに対して、他の木棺墓群出土ガラス小玉は空色透明系である。

ガラス粟玉 木棺墓群18号墓のみから出土している。長さ・径・重さの平均値がそれぞれ0.8mm・1.6mm・0.0029gと、ガラス小玉と比較して明らかに微小である。ちなみに、ガラス小玉と比較して、平均値ベースで長さが約1/4、径が約1/3弱、重さが約1/30にすぎない。大きさも比較的集中しており（第248図）、ばらつきは認められない。また、色調も紺色系と、ガラス小玉の空色透明系とは明らかに異なる。

類例 弥生時代後期前半におけるガラス粟玉の出土例は、但馬はもとより丹後地域においても管見の限り認められない。

ガラス管玉 15号墓と18号墓の2基から出土している。

大きさ 両資料を比較すると、15号墓出土資料の長さ・径・重さの平均値がそれぞれ22.3mm・6.2mm・1.4224gであるのに対し、18号墓出土資料の平均値はそれぞれ12.3mm・4.6mm・0.4657gと、平均的な大きさが明らかに異なる（第18表）。これらの要素について、最大値・最小値を比較しても同様の傾向が認められる。

製作技法 15号墓と18号墓のX線透過撮影によると、両資料とも両面穿孔により孔が穿たれている（図版85・図版88）。両資料間には大きさの違いが顕著であったが、製作技法については同様の技法により穿孔されている。

類例 当該期のガラス管玉の報告例としては、但馬では半坂墳墓群例のみである。また、丹後でも後期前半の三坂神社墳墓群・大山墳墓群と後期後半の赤坂今井墳墓群に限られる。これらのなかで、梅田東古墳群同様の両面からの穿孔を確認できる例は、三坂神社墳墓群出土例のみである。他は、いずれも巻き付け技法もしくは引伸ばし技法によって¹³⁾。

碧玉製管玉 18号墓のみで出土している。

大きさ 第18表からも明かなように、ガラス管玉



第249図 碧玉製管玉の穿孔

と比較して、長さ・径・重さの平均値がそれぞれ6.3mm・2.1mm・0.0422gと小型である。

材質 薬科哲男による産地分析(第4章第2節)によると、佐波・猿八原石と女代南遺物群が使用されていることが明らかとなっている。

製作技法 X線透過撮影によると(第249図)、全てではないが、両面穿孔による製作を確認することができた。

(2) 出土状況の検討

各埋葬施設内における出土状況から、副葬状況について検討する。玉類を副葬した埋葬施設における出土位置およびその出土状況をまとめたのが、第19表である。以下、その出土状況が特徴的なものを中心に検討する。

10号墳

明らかに連結した状態で出土したことが確認できる。第3章第2節で報告したように、その出土位置から腕輪として装着されていたことは明らかである。左側で7.6cm、右側で7.5cm分出土しており、左右を判断できなかった他のガラス小玉が9.1cm分出土している。これらをたして2分すると、左右それぞれの長さが12.1cmの腕輪であったものと考えられる。

ところで、当該期を含めた弥生時代後期を中心とした時期の埋葬遺構に副葬された玉類のなかで、確実に腕輪として装着された状態で出土した例をまとめたのが、第20表である。これをみると、各手首部分で出土した玉類の連結長をみると、三坂神社墳墓群例・左坂墳墓群例は3cm～10cm大の例が多く、梅田東古墳群で復元した12.1cmは、それよりも長いことになる。唯一、吉武樋渡墳丘墓出土例は11.1cmと、梅田東古墳群例に近い値である。ちなみに、同じ腕飾類として、大風呂南墳墓群出土のガラス製の内径および鋼製から復元される内周の長さは、それぞれ18.2cm・15.7cmで、梅田東古墳群・吉武樋渡墳丘墓例よりも長くなる。以上から、被葬者の性別・体格等を考慮する必要もあるが、梅田東古墳群で復元されたサイズは、腕輪として不自然ではないものと判断される。

15号墓

ガラス管玉とガラス小玉が出土しているが、その分布範囲は施土の範囲とほぼ一致し、

第19表 玉出土状況

埋葬施設	玉の種類	出土位置	出土状況	
木棺墓群	2号墳	ガラス小玉	頭部～胸部・一部体部	散在
	5号墳	ガラス小玉	頭部～胸部・一部体部	散在
	6号墳	ガラス小玉	胸部上半身左側	散在
	11号墳	ガラス小玉	頭部左側・体部	散在
	12号墳	ガラス小玉	胸部	散在
	15号墳	ガラス小玉	胸部～体部	散在
		ガラス管玉	胸部上半	連
	18号墳	ガラス小玉	頭部～胸部上半	散在
		ガラス管玉	頭部	散在
		ガラス粟玉	頭部～胸部	散在
碧玉製管玉		頭部下半～胸部上半	散在	
10号墳	第1主体部	ガラス小玉	右手首・左手首	連
	第7主体部	ガラス小玉	不明	1個体
11号墳	第1主体部	ガラス小玉	頭部	1個体

第20表 胸飾りの規模

遺 跡 名	埋葬施設	時期	部位	腕輪の種類	個数	連結長 (cm)	備 考
梅田東古墳群	10号墳 第1主体部	庄内 併行期	右手	ガラス小玉	28	7.5	復元長は12.1cm
			左手	ガラス小玉	25	7.6	復元長は12.1cm
左坂墳墓群	16号墳 第2主体部	後期 前半	右手	ガラス小玉	26	4.9	玉2
			左手	ガラス小玉	29	7.5	玉1
			右手	ガラス小玉	20	5.2	玉3
			左手	ガラス小玉	23	5.7	玉2
			右手	ガラス小玉	39	10.8	玉1
			左手	ガラス小玉	17	4.4	玉2
三坂神社墳墓群	3号墳 第2主体部	後期 前半	右手	ガラス小玉	16	5.2	
			右手	ガラス小玉	30	3.6	全体の連結長から首・胸付近出土分を除外して計算
			左手	ガラス小玉	30	3.6	
吉武遺跡群	横波墳丘墓 木棺墓	後期	右手	ガラス小玉	35	11.1	
			左手	ガラス小玉	1	18.2	連結長は内周 (cm)
大風呂南墳墓群	1号墳 第1主体部	後期 後半	左手	ガラス鋼	1	18.2	連結長は内周の平均値 (cm)
				鋼環	13	15.7	

遺体の位置とも合致する。このなかで、管玉の出土状況(第154図)をみると、ガラス小玉と比較して、連の状態でも副葬された可能性が高い。管玉の連結長は24.4cmに及ぶこととその出土位置から、首飾りとして使用されていた可能性が考えられる。一方、ガラス小玉の出土状況を見ると、連の状態でも出土したとは言い難い状況である。その分布は施朱の範囲と一致し比較的といっ致死広範囲であることから、頭飾り・首飾りなどとして着装されたのではないことは明らかである。

18号墓

当墓からは、4種の玉類が出土している。その出土位置は、頭から胸部にかけて集中している。さらにその出土状況(第171図)を詳細にみると、ガラス管玉・ガラス小玉・碧玉製管玉それぞれの集中箇所が異なる。なお、粟玉については、微細なためその出土位置を平面的に記録することができなかった。散在した状態で出土したことは明らかである。これらの状況から、少なくとも、4種の玉が一括して扱われたものとは考え難い。

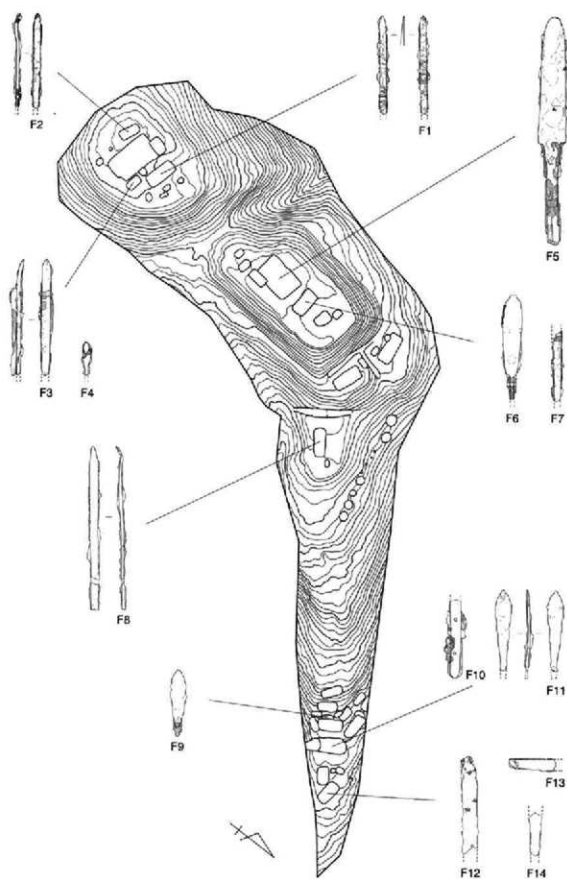
特に粟玉の径は1.2~2.1mmであるのに対して、ガラス管玉・ガラス小玉の孔径がこれより大きいものが少なからず認められる。よって、粟玉とこれらの玉との直接の連結は困難である。この点も、各種の玉の出土位置に偏りが認められる一因と考えられる。

その他

この他、2号墓・5号墓・6号墓・11号墓・12号墓においては、第19表のとおり、いずれも頭部から胸部を中心に散在した状態で出土している。15号墓・18号墓を含めたこのような出土状況については、同時期の丹後地域においても認められるようである¹¹⁾。

このような出土状況について、肥後弘幸は、被葬者の上に置かれたもしくは埋葬過程でばらまかれたものと考えている¹²⁾。この他、布飾りの一部として使われ、これが被葬者を覆っていた可能性も考えたい。

また、10号墳第7主体部・11号墳第1主体部については、それぞれ1個体しか出土していない。両遺構とも、棺内埋土の積査を行っていることから、調査精度に起因するものではなく、ある程度実態を反映しているものと考えたい。特に、11号墳第1主体部においては、頭部右側から出土していることから、耳飾りの一部として使用されていた可能性も選択肢の一つと考えられる。



第250図 鉄製品副葬品施設

2. 鉄製品

(1) 鉄製品の検討

墳丘墓群・木棺墓群合わせて14点出土している(第250図)。その内訳は、大きく武器と工具からなる。

武器

短剣と鉄鏃が出土している。

短剣

11号墳第1主体部と14号墓から出土している。14号墓出土例(F10)は茎部分のみの残存で、その特徴を明らかにすることはできない。

11号墳第1主体部出土例(F5)は、刃長13.7cmと、川越哲志によると、短剣Iに分類されるタイプである。当該期の但馬における出土例と比較しても、中型の部類に属するものと考えられる。一方、茎の長さは10.5cmを測り、刃長との比がほぼ1:1に近い長茎式に分類されるものである。

しかし、当該期のものとして報告された類例は、管見の限り但馬さらには北近畿においては認められない。ただし、時期が若干後出するが、古墳時代前期として報告されている駄坂・舟隠古墳群中の9号墳第11主体部出土例(当該報告書第82図39)に類例を求めることができる。梅田東古墳群例がわずかに大きい程度で、酷似している。駄坂・舟隠古墳9号墳は、第8主体部の土器から古墳時代前期と判断されているが、第11主体部は当該古墳の中心主体と考えられる。よって、報告された時期より、梅田東古墳群の時期に近いものと考えられる。さらに、同9号墳第10主体部からも同タイプの剣が出土している。この例は、梅田東古墳群例より若干大型である。

鉄鏃

また、F5は、11号墳の造墓契機となった第1主体部から出土している点は注目される。

後期前半の4号墓・14号墓と庄内併行期の10号墳第5主体部・11号墳第2主体部から、各1点計4点出土している。これら4点は、その大きさには差が認められるが、いずれも柳葉形タイプに分類されるものである。最も小さなものが10号墳第5主体部出土例(F4)で最も大きな例が11号墳第2主体部出土例(F6)であることから、規模の差は時期差を反映したものではないと考えられる。

工具

鉤と刀子の2種である。

鉤

6例出土しており、工具はもとより梅田東古墳群出土鉄製品のなかで、最も多く出土している。木棺墓群からの出土例は18号墓出土例(F14)に限られ、他は墳丘墓群からの出土である。F14についても、茎部の小片であり、その特徴を明らかにすることはできない。このため、墳丘墓群出土例との時間的な比較も困難である。

墳丘墓群出土の5例は、茎部のみのF7を除いては、川越分類のB2タイプ、村上分類のIIa式に分類されるものである。

刀子

18号墓で2例(F12・F13)出土しているのみである。2例とも小片で、その特徴を明らかにすることはできない。

(2) 副葬位置の検討

前項で検討した鉄製品は、すべて棺内に副葬された状態で出土している。しかも、一部を除いては、棺内における出土位置を記録することができた。ここで、棺内での具体的な

出土位置									
福島分類		1AR-h	1AR-b	1AR-c	1AC-b	1AL-h	1BC-h	1BC-b	不明
庄内併行期	11号墳 第1主体部								
	11号墳 第2主体部								
布留式	14号墳 第1主体部								

第252図 鉄器副葬位置(2)

副葬位置を、被葬者との関係をもとに検討する。

分析視点

ところで、鉄製品の副葬位置については、福島孝行の研究がある。丹後・但馬を中心とした近畿北部の弥生墳墓に副葬された鐙の副葬位置について分析したものである。分析の結果、丹後においては、弥生時代後期において棺内で長軸板に平行して被葬者の頭部右側に置く例が卓越し、但馬においても後期前半においては丹後と同様の副葬配置をとるが、後半になるとその規制が緩くなるようである。

出上位置									
福島分類		1AR-h	1AR-b	1AR-c	1AC-b	1AL-h	1BC-h	1BC-b	不明
後 期 前 半	木棺墓群 4号墓								
	木棺墓群 14号墓								
	木棺墓群 18号墓								
庄 内 併 行 期	10号墳群 第2主体部								
	10号墳 第3主体部								
	10号墳 第5主体部								

第251図 鉄器副葬位置(1)

福島孝行の分析方法を採用し、出土鉄製品の副葬位置をまとめたのが第251図と第252図である。ここでは、鏡以外の鉄製品についてもまとめてみた。

鏡

まず、鏡についてみると、弥生時代後期前半において丹後・但馬において共通の副葬配置される1AR-h類は、庄内併行期の10号墳第5主体部出土例(F3)のみである。後期前半の18号墓例(F14)が1AC-b類に分類される。次に、庄内併行期の10号墳第2主体部(F1)・第3主体部例(F2)は1AR-b類に、11号墳第2主体部例(F7)は1AL-h類に分類される。最後に、右留式の14号墳第1主体部例(F8)は1BC-h類に分類される。

以上から、梅田東古墳群で認められた副葬配置は、後期前半の段階及び庄内併行期を中心とした段階とともに、丹後・但馬地域で共通して認められた副葬配置(1AR-h類)とは異なることがわかる。また、14号墳第1主体部例(1BC-h類)についても、丹後・但馬においては認められない副葬配置である。ただし、1AR-b類に関しては、同時期の内場山墳丘墓(丹波)で認められる点は興味深い。また、この副葬配置は、丹後では、後期初頭の三坂神社墳墓群・左坂墳墓群、後期後半の浅後谷南墳墓に見られる副葬配置であることから、当該地域の影響をも考慮に入れる必要がある。

ところで、10号墳においては3基の主体部で鏡が副葬されている。これら3基の主体部の副葬配置をみると、1AR-b類と1AR-h類の2タイプであるが、両者は被葬者の左側の頭部から胸部と近接した副葬配置といえる。また、3基の主体部は時期的にもほぼ同時期と考えられる(第5章第1節)。以上から、同一墳丘墓への副葬にあたって、一定の埋葬原理の存在が考えられる。また、両副葬配置が類似することから、基本的には丹後・但馬に伝統的な副葬配置(1AR-h類)を遵守しているものといえよう。

鏡以外

14号墓と11号墳第1主体部で出土している短剣は、いずれも丹後・但馬に伝統的な鏡の副葬配置(1AR-h類)である点が注目される。

(3) 副葬状態の検討

前項では、各鉄製品の棺内における出土位置の検討をおこなった。ここでは、刃部の向きを主眼とした出土状態を検討したい。

木棺墓群

鉄製品の中で、刃部の方向を記録できたのは、4号墓と14号墓の2基に限られる。4号墓出土例は、棺の主軸に平行し、刃部を足位側小口方向に向けて出土している。14号墓では、棺の主軸方向に対し斜行し、刃先を足位方向に向けた状態で出土している。

墳丘墓群

10号墳第5主体部出土のF4を除いては、その出土状態を記録することができた。これによると、14号墳第1主体部出土例(F8)が棺の主軸方向に直交する。これ以外は、全て棺の主軸方向と一致し、刃部が頭位側小口に向けられて副葬されていた。

小結

木棺墓群出土例と墳丘墓群出土例とは明らかにその副葬方法が異なる。前者は刃部の向きを足位側に、後者は頭位側を意識して副葬されている。時期的な差と考えたい。また、墳丘墓群のなかで唯一異なった14号墳第1主体部出土例についても、当墳丘墓群のなかで最も新しく位置付けられている(第5章第1節)ことから、時期差の可能性も考えられる。

(4) 小結

以上の鉄製品の検討結果をもとに、鉄製品の特徴をまとめておくと以下のようになる。

- ①鉄製品の副葬が少なからず認められる点は、丹後・但馬に認められる当該期の副葬品の特徴と一致する。ただし、各埋葬施設の副葬量は、多くはない。
- ②鉄製品のなかでも施が多い点も、丹後・但馬の特徴と一致する。
- ③副葬配置をみると、丹後・但馬に伝統的な副葬配置から逸脱した例が目立つ。一方、10号墳例のように、大きくみると伝統を遵守しようとする状況も認められる。
- ④F5の短剣は当該期の丹後・但馬では類例が認められないタイプで、独自の入手ルートが存在が考えられる。

3. 施朱について

最後に、施朱の行われた棺について検討する。施朱については、あくまでも肉眼観察の結果に基づくものであることを明記しておく。施朱が行われた棺は、木棺墓群で3基、墳丘墓群で2基の、計5基で認められた。

木棺墓群

4号墓・15号墓・18号墓の3基である。4号墓は胸部を中心とした位置、15号墓は頭部～体部下半にかけて、18号墓は頭部に、それぞれ施朱が認められた。これら3基に共通する特徴は、何らかの副葬を伴う点である。特に、15号墓と18号墓は、木棺墓群のなかでも豊富な玉類の副葬が認められた埋葬施設である。以上から、施朱が行われた被葬者は、副葬行為を受けることのできた、限られた人物であったと考えられる。

墳丘墓群

また、施朱が認められた埋葬施設は、H字形組合せ木棺に限られている。

10号墳第1主体部と同第5主体部の2例に限られる。第1主体部では施朱の範囲が頭部に限られるのに対して、第5主体部では頭部を除く全身に施朱が認められた。特に、第5主体部への施朱は、墳丘墓群・木棺墓群のなかでも多量である。なお、肉眼観察では、第5主体部の頭部への施朱は認められなかったが、頭部の腐植との関連もあり、この部分に施朱がなかったとは断定できない。

なお、施朱が認められた2基の埋葬施設においては、木棺墓群同様、いずれも副葬が認められた。

4. 小結

以上、木棺墓群および墳丘墓群への副葬品と施朱についてみてきた。最後に、これらの組合せについて検討する。

副葬品の組合せ

副葬が認められた埋葬施設をピックアップし、玉と鉄製品の組合せおよび被葬者の性別をまとめたのが第21表である。

木棺墓群

玉と鉄製品の両者を副葬した例は、18号墓の1例に限られる。また、施朱が認められた全ての埋葬施設において、副葬が認められた。これらのなかで、18号墓では、唯一、鉄製品と玉類の副葬および施朱の組合せが認められる。野島 永の副葬品と施朱のクラスター分析による階層分析¹⁷⁾によると、このような組合せは、比較的上位にランクされている。したがって、18号墓については、当木棺墓群の中心的な被葬者の可能性が考えられる。

第21表 副葬・施朱の認められた埋葬施設

埋葬遺構名	時期	埋葬施設		被葬者		副葬品		施朱
		種類	形式	性別	年齢	玉類	鉄製品	
木棺群	2号墓	木棺墓	H形			ガラス小玉	なし	
	4号墓	木棺墓	H形			なし	鉄鍔	あり
	5号墓	木棺墓	箱形		未成年	ガラス小玉	なし	
	6号墓	木棺墓	H形	不明		ガラス小玉	なし	
	11号墓	木棺墓	H形		未成年	ガラス小玉	なし	
	12号墓	木棺墓	H形		成年	ガラス小玉	なし	
	14号墓	木棺墓	H形			なし	鉄剣・鉄鍔	
	15号墓	木棺墓	H形			ガラス小玉・ガラス管玉	なし	あり
墳丘群	18号墓	木棺墓	H形			ガラス小玉・ガラス管玉・粟玉、碧玉製管玉	施・刀子	あり
	10号墳	第1主体部	木棺墓	舟形		ガラス小玉	なし	あり
10号墳	第2主体部	小型六式石室		女性	熟年後半～老年	なし	施	
	第3主体部	石棺墓	箱形			なし	施	
	第5主体部	石棺墓	箱形		小児	なし	鉄鍔・施	あり
	第7主体部	石棺墓	箱形		小児	ガラス小玉	なし	
11号墳	第1主体部	木棺墓	H形			ガラス小玉	鉄剣	
	第2主体部	木棺墓	H形			なし	鉄鍔・施	
14号墳	第1主体部	布置	木棺墓	H形		なし	施	

墳丘群 10号墳第1主体部で施朱と玉の副葬が認められ、11号墳第1主体部で玉類と鉄製品の副葬が認められた。両主体部とも各墳丘墓の造墓契機となった中心的埋葬施設である。以上から、玉の副葬・鉄製品の副葬・施朱のいずれか2者が組み合わせられた埋葬施設の被葬者は、10号墳第5主体部を除いては、各墳丘墓の造墓契機となった人物に限られると考えられる。

副葬品と性差 肥後弘幸は、丹後における玉類・鉄製品の副葬品の組合せを分析した結果、①弥生時代後期においては鉄製武器・工具は男性被葬者に、玉類のみは女性の方に副葬し、②庄内併行期においては、玉類は女性の装身具と分析されている。木棺墓群については、被葬者の性別を明らかにできたものはないため、この当否は判断できない。庄内併行期において、被葬者の性別と副葬品との関係を検討できるのは、施のみを副葬した10号墳第2主体部の1例のみである。被葬者は女性であり、肥後の分析結果とは合致しない。

10号墳第2主体部例は、会下和宏の指摘と一致する。しかし、この1例のみからでは、一般的な傾向として理解することは困難である。少なくとも、肥後弘幸の見解に合致するものではないものといえよう。なお、10号墳第2主体部例は、時期が下り古墳時代の同様な分析を行った川西宏幸の分析結果とも一致する。

また、会下和宏の分析によると、女性が武器を持たない傾向が認められるようである。これに従うと、短剣を副葬した11号墳第1主体部・14号墓、鉄鍔を副葬した10号墳第5主体部・11号墳第2主体部・4号墓の被葬者については、男性の可能性が高いものと考えられる。

〔註〕

- (1) 肥後弘幸「三坂神社墳墓群」〔三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群〕(京都府大宮町文化財調査報告書 第14集) 大宮町教育委員会 1998 以下、当遺跡に関しては、当報告による。
- (2) 潮崎 誠「大蘇岡半坂時古墳群」〔豊岡市史考古資料編 豊岡市教育委員会 1987
- (3) 平良泰久他「丹後大山墳墓群」(京都府丹後町文化財調査報告 第1集) 丹後町教育委員会 1983
- (4) 岡林峰夫・石崎善久「赤坂今井墳丘墓—第3次発掘調査概要報告—」(京都府峰山町文化財調査報告 第21集) 峰山町教育委員会 2001
- (5) 赤坂今井墳丘墓出土例については、当該報告書からは穿孔方法を確認することはできない。
- (6) 肥後弘幸「国営農地開発事業関係遺跡平成5年度発掘調査 [7] 左坂墳墓群」〔埋蔵文化財発掘調査概報 京都府教育委員会 1994 以下、当遺跡に関しては、当報告による。
- (7) 力武卓治「古武遺跡群 Ⅲ 飯盛・古武園場整備事業関係調査報告書2」(福岡市埋蔵文化財調査報告書第461集) 福岡市教育委員会 1996
- (8) 白敷真也「大風呂市墳墓群」(岩瀬町文化財調査報告第15集) 岩瀬町教育委員会 2000
- (9) 肥後弘幸「弥生時代における石器、鉄製品、玉類の出土状況の検討—丹後の場合—」〔浪江庸二先生・林 和廣先生追悼 大瀬波考古学論集 両丹考古学研究会 1997
- (10) (9) と同じ
- (11) 川越智志「弥生時代の鉄器文化」雄山閣出版 1994
- (12) 谷本由美・宮村良雄「豊岡市域弥生墳墓群副葬の鉄製品」〔但馬考古学 第10集 但馬考古学研究会 1998
- (13) 瀬戸谷皓「駄坂・舟尾遺跡群」(豊岡市文化財調査報告書22) 豊岡市教育委員会 1989 以下、当遺跡に関しては、当報告による。
- (14) 村上恭通「弥生時代の鉄器普及に関する一試論—日本海沿岸地域を対象として—」〔たたら研究会創立40周年記念 製鉄史論文集 たたら研究会編 2000
- (15) 福島孝行「弥生墳墓における 鐘の副葬作法について」〔京都府埋蔵文化財情報 第78号・第81号 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000・2001
- (16) 伊野近富他「国営農地(丹後東部地区)関係遺跡(1) 浅後谷南城遺跡・浅後谷南墳墓」〔京都府遺跡調査概報 第84冊 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1998
- (17) 野島 水・野々口陽子「近畿地方北部における古墳成立期の墳墓」〔京都府埋蔵文化財情報 第74号・第76号 1999・2000
- (18) (9) と同じ
- (19) 会下和宏「西日本における弥生墳墓副葬品の様相とその背景」〔島根県考古学会誌 第17集 島根県考古学会 2000
- (20) 川西安幸・辻村純代「古墳時代の巫女」〔博古研究 第2号 1991
- (21) (19) と同じ

第4節 埋葬施設について

はじめに 木棺墓群および墳丘墓群の調査により明らかとなった埋葬施設は、木棺墓・小型穴式石室・石棺墓・土器棺墓・土壌墓の5種である。以下、これら5種の埋葬施設について検討する。

1. 各埋葬施設の検討

(1) 木棺墓

木棺墓群・墳丘墓群の調査を通じて最も多く検出された埋葬施設である。

木棺墓群 16号墓を除いては、全て木棺墓である。棺の痕跡を確認できなかった10号墓と13号墓についても、掘り形の形状から木棺墓と判断している。

木棺墓は、棺材の組合せ方法により、箱形木棺とH字形組合せ木棺とに分類できる。大半はH字形組合せ木棺で、箱形に分類されるのは5号墓のみである。H字形組合せ木棺は、底板が遺存していたものは認められないが、11号墓を除いては、Ⅱ型に分類されるものである。11号墓は、小口穴を有するもので、唯一Ⅰ型に分類されるものである。Ⅰ型・Ⅱ型とも、頭位側ほど小口幅が広がる傾向が認められる。

墳丘墓群 10号墓第1主体部・11号墳第3主体部を除く各主体部、12号墳の全主体部、13号墳第1主体部、14号墳第1主体部の計11基である。これらの木棺墓は、大きく例抜式木棺と組合せ木棺の2種からなる。

例抜式木棺 舟底状を呈するタイプと割竹状を呈するタイプがある。

舟底状を呈するタイプは、近年、舟形木棺あるいは舟底状木棺と称されるもので、10号墓第1主体部の1例のみである。両小口の平面形がほぼ同様の弧を描くタイプで、石崎分類の平面B類に対応する。また、横断断面は水平近く仕上げられており、同じく石崎分類のⅠ類に対応する。石崎によると、丹後地域においては弥生時代後期～古墳時代初期にかけての資料が、16例ほど見つまっているようである。但馬地域においては、10号墳より明らかに新しい古墳時代前期～中期の例が梅田古墳群などで見つまっている。しかし、庄内併行期まで確実に遡る例は、管見の限り見当たらない。

割竹状を呈するタイプは、11号墳第1主体部例である。平面的にはH型組合せ木棺と同じであるが、棺の横断面が緩やかな逆台形状を呈することから、例抜式の可能性が高いものと判断した。例抜式木棺を分類した吉留分類のC型式に対応するものと考えられる。しかし、棺の小口および長側壁を人頭大の礎で固定していることから、組合せ式木棺の可能性も考えられる。このため、吉留分類の()'型式に対応する可能性も否定しきれない。

H字形木棺 10号墳を除く各墳丘墓で認められた。特に12号墳・13号墳・14号墳では、各墳丘墓の造墓架橋となった中心主体部で採用されている点は、注目される。11号墳では、造墓架橋となった主体部に次ぐ規模の主体部で採用されている。

これらのH字形組合せ木棺は、木棺墓群で採用されたH字形組合せ木棺とは特徴を異にするいくつかの点を指摘できる。①棺の規模は墳丘墓群に採用されたものの方がはるかに大きい(第253図)。②このため、墓坑の規模も大きく、いわゆる2段墓坑に分類されるも

のが多い。これは、墓坑の体積の比較からもその差は明らかである（第254図）。H字形組合せ木棺を埋葬施設とする木棺墓群の墓坑体積の平均値は2.3m³であるのに対して、墳丘墓群におけるH字形組合せ木棺墓の墓坑体積は、12号墳第1主体部の9.04m³をはじめとして、その平均値は5.2m³に及ぶ（第254図）。③棺の組合せにおいて、人頭大の礎を用いて棺材の組合せを固定している。これも①の棺の長大さに起因するものと考えられる。

なお、H字形組合せ木棺に分類したのであるが、11号墳第6主体部は他のH字形組合せ木棺とは若干特徴を異にする。他のH字形組合せ木棺は全て木材のみからなるのに対して、当主体部においては、数枚の板石を蓋としている点である。先述したように（第3章第3節）、木蓋の上に蓋石が置かれていたものと考えられる。

箱形木棺

11号墳第4主体部・同第7主体部、12号墳第2主体部の3基が検出されている。12号墳第2主体部については、棺の痕跡そのものは確認できなかった。棺の痕跡を確認できた他の箱形木棺は、いずれも平面長方形を呈するもので、小口幅において頭位側と足位側とでは明確な差は認められない。棺の規模は、墳丘墓に伴うH字形組合せ木棺と比較すると全体的に小型である（第253図）。また、3基とも、各墳丘墓における中心主体をなすものではない。

(2) 小竪穴式石室

類例

10号墳第2主体部の1基のみである。庄内併行期に位置付けられる例は、但馬では認められない。時期が若干下る布留式初頭～前半の例として、向山古墳群向山2号墳・柿坪中山古墳群に類例が認められる。向山2号墳例とは石室の組み方は類似するが、その規模は向山2号墳の約1/2である。

以上から、10号墳第2主体部の小竪穴式石室は、但馬地域におけるこの種の埋葬施設の初現例の1つに位置付けられるものと考えられる。

(3) 石棺墓

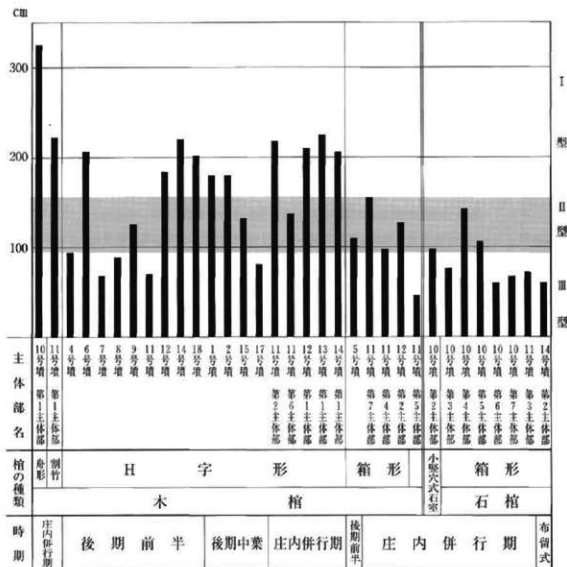
墳丘墓群のみで検出されている。10号墳の第1主体部と第2主体部を除く5基の埋葬施設、11号墳第3主体部、14号墳第2主体部の7基である。以下の特徴が認められる。

棺の規模

棺内の長さ（小口間距離）は、10号墳第4主体部の142cmを最大とし、同第5主体部の115cmがこれに次ぐ。しかし、他の石棺は全て1m以下である。墳丘墓に伴うH字形組合せ木棺の規模と比べて明らかに小型である。

石棺の組合せ

いずれも床面には底石をもたず、墓坑底もしくは整地面を利用している。小口石と長側石の組合せは、長側石が小口石を挟むタイプ（H字形タイプ：10号墳第3主体部・同第4主体部・同第6主体部、11号墳第3主体部・14号墳第2主体部）と、小口石が長側石を挟むタイプ（10号墳第5主体部）、小口石と長側石の隅が接するタイプの3タイプが基本となる。さらには、前2タイプの組合せが1基の棺に共存する例も認められる。これらのなかで、H字形タイプが7基中4基と、最も多く認められる。いずれの石棺も、小口石は1石からなる。そして、H字形組合せ木棺同様、頭位側の小口幅の方が広くなる傾向にある。長側石は板状の石材2～3石からなり、長軸を横長にして使われている。その継ぎ方はい



第253図 棺の規模

いずれも平継ぎタイプに分類されるものである。

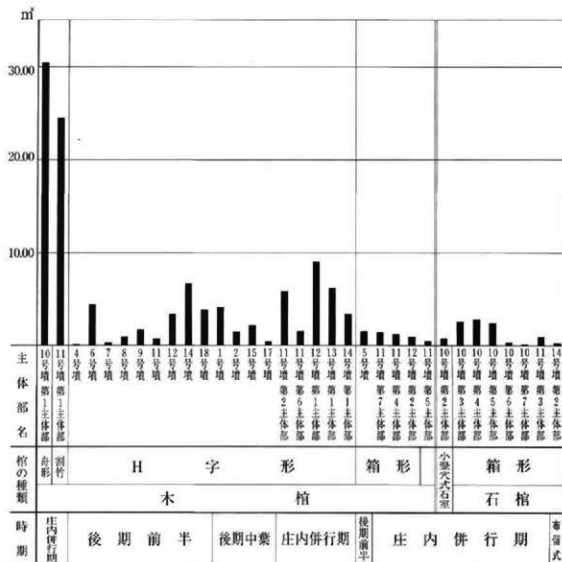
ところで、箱形石棺は11号墳・14号墳においては、H字形組合せ木棺に時間的に後続する。よって、箱形石棺の小口構造をはじめとした棺の組み立てにあたっては、清家 章も触れているが、H字形組合せ木棺を意識したものと考えられる。

また、11号墳第3主体部を除いては、小口石・長側石とも頭位側に最も大きな石材が用いられている。これは、蓋石についても同様の傾向が認められる。この一因として、H字形組合せ木棺を意識しているため、頭位側の小口幅が広がる傾向が認められる。その結果として、頭位側の石材規模が大型となったものと考えられる。

石材

石棺材については2タイプが認められ、第3章においては、「山石」・「川原石」と称してきた。第4章第3節において、これらの石材について分析したところ、山石は「流紋岩」、川原石は「デイサイト質溶結凝灰岩」との同定結果が得られた。また、これらの石材は、ともに梅田東古墳群の周辺から入手できることも明らかとなった。

以上から、石材の入手にあたっては、より入手しやすい石材を求めたものと考えられる。



第254図 墓坑の規模

同一の石棺において、同タイプの石材が混在しての使われ方が一般的であったことは、このことを表付けるものといえよう。

類例

但馬における当該期の箱形石棺としては、立石墳墓群102号地点⁽¹¹⁾(豊岡市)、田多地引谷墳墓群(出石町)と、類例は少ない。これらの類例のなかで、時期的な前後関係をつけるのは困難である。梅田東古墳群例と合わせて、但馬における初現例と位置付けたい。丹後においては、当該期の例は認められず、布留式期の宝蔵山4号墳⁽¹²⁾の出現まで待たなければならぬ。よって、箱形石棺に関しては、丹後地域に先行するものと考えられる。

(4) 土器植墓

木棺墓群の16号墓と、13号墳第3主体部の2基である。棺転用土器については本章第2節で検討したとおりである。いずれも非在地系の土器を転用している。特に、16号墓は生駒西麓産の壺を転用したものである。当該期の土器棺に搬入土器を転用した例は、但馬においては例をみない。

谷本らによると、但馬における弥生時代後期～庄内併行期の土器棺について、①棺は壺、

蓋は高坏を転用し、②土器は日常雑器を転用している、と特徴を指摘している。しかし、梅田東古墳群の土器棺に認められる特徴は明らかに異なるものであり、注目される。

(5) 土坑墓

13号墳第2主体部の1基である。当主体部については、確実に土坑墓と断定できるものではない。第3章でも報告したように、棺の痕跡を確認できなかったため、土坑墓としたものである。木棺墓とした11号墳第5主体部と同様の特徴をもつことから、木棺墓の可能性も否定できない。

なお、時期は梅田東古墳群より後出の古墳時代前期と考えられる資料であるが、北浦古墳群25号地点3号墳主体部において、小口石に板材が用いられた例が認められる。木棺墓に小口部のみ石材を用いた例となり、13号墳第2主体部についても、木棺墓の可能性が考えられる。

2. 墳丘墓における異棺複数葬

(1) 異棺複数葬について

はじめに

5基の墳丘墓は、ともに複数の埋葬施設を有する。いずれも、同一墳丘墓内において、単一の埋葬施設から構成される墳丘墓は、1基も認められない。

墳丘墓群

10号墳は舟形木棺・小竪穴式石室・箱形石棺の3種で構成される。11号墳は、木棺墓と石棺墓からなり、木棺墓は側板式木棺・H字形組合せ木棺・箱形木棺の3種と、パリエーションに富む。12号墳は2基とも木棺墓であるが、H字形組合せ木棺と箱形木棺からなる。13号墳は、H字形組合せ木棺・土坑墓・土器棺墓の3種で構成される。14号墳もH字形組合せ木棺と箱形石棺からなる。

また、墳丘墓の主体部数が異なることもあるが、その構成に規則性は見出せない。同じ2基の主体部からなる12号墳と14号墳においても、その構成は異なる。

このように、明確な墳丘を伴う墳丘墓群において、数種の埋葬施設から構成される例は、但馬・丹後において多く認められる特徴である。しかし、庄内併行期から布留式初頭にかけての時期において、箱形石棺を伴う例は、立石墳墓群102号地点・田多地引谷墳墓群の2例に限られる。特に、田多地引谷墳墓群は、箱形石棺が木棺墓と混在して比較的多く認められ、梅田東古墳群と類似した特徴を示している。ただし、梅田東古墳群とは異なり、田多地引谷墳墓群では箱形石棺が中心主体に採用されている点は、注目される。

(2) 墳丘墓群における異棺複数葬の意味について

棺の階層性

ところで、12号墳・13号墳・14号墳において、各墳丘墓の造墓主体となった主体部の埋葬施設は、H字形組合せ木棺を採用している点が注目される。少なくとも、H字形組合せ木棺は、全ての被葬者に採用されるものではなかったことがわかる。

次に、11号墓に注目すると、H字形組合せ木棺が採用された主体部は、造墓契機となった主体部ではなく、それに次ぐ主体部である。造墓契機となった主体部に採用されたのは、側板式木棺である。よって、H字形組合せ木棺より側板式木棺のほうが上位に位置付けら

れる。その後箱形木棺・箱形石棺が採用されている。

最後に10号墳に注目すると、造墓契機となった主体部に採用されたのは朝杖式木棺で、その次が小壜式石室である。その後、箱形石棺が採用されている。

以上から、朝杖式木棺→小壜式石室→H字形組合せ木棺→箱形石棺・箱形木棺・土器棺という階層性を明らかにすることができる。ただし、上記の結果からは、朝杖式木棺のなかの舟形木棺と割竹形木棺の差、箱形石棺・箱形木棺・土器棺の差については、明確にできない。そこで、別の視点から上記の問題について検討してみたい。

棺と年齢階梯 肥後弘幸は、左坂墳墓群（京都府大宮町）・大山墳墓群（京都府丹後町）・東山墳墓群（兵庫県豊岡市）の木棺規模の分析から、1.2m以下を乳幼児、1.2m～1.7mを小児・青年、1.7m以上を成人としている¹⁰⁰。

しかし、梅田東古墳群における小口間距離を基にした棺の規模（第253図）をみると、大きく1.8m以上（Ⅰ型）、90cm～1.6m（Ⅱ型）、90cm未満（Ⅲ型）の3タイプが認められる。また、片山一遺の骨格分析（第4章第1節）によると、Ⅰ型の10号墳第1主体部・12号墳第1主体部の被葬者はそれぞれ青年～壮年・壮年、Ⅱ型の10号墳第2主体部・10号墳第4主体部・10号墳第5主体部の被葬者は、それぞれ熟年後半～老年・壮前半・小児、との分析結果が得られている。

そこで、本報告では、Ⅰ型を青年～壮年用、Ⅱ型を小児～壮年用、Ⅲ型を小児用と考えたい。よって、先の箱形石棺の分析において認められた小型の棺については、小児用と考えられる。また、土器棺については、胎児もしくは乳児用との考えが一般的である。

ところで、13号墳第3主体部のように、「大人」の墓を切って埋葬される土器棺墓について、角南徳一郎により検討がなされている。特に、13号墓のように中心主体を切るような土器棺について、後者が前者と切り合うことを目的として行われた結果と判断し、後者が先祖と距離的・意識的に近い場所に葬るという背景を考えている。そして、両者の関係を現代的な「家族」として捉えることの危険性を指摘している。

13号墳を親子の関係と考えた場合、中心埋葬の被葬者（初葬者）の子供の誕生→初葬者の死→子供の死が極めて短時間に起きたと想定しなければならず、両者の関係を親子と考えるには無理がある。しかし、両者の具体的な関係については明確な知見を持ち合わせていないため、本項では土器棺の被葬者を初葬者の子孫と考えたい。また、箱形石棺の被葬者についても、同様な関係を考えたい。

この他、野島 永は、中心主体の墓坑の一部を破壊して構築された主体部について、両者の間に夫婦関係を想定している¹⁰¹。これによると、10号墳の第1主体部（Ⅰ型：朝杖式木棺）と第4主体部（Ⅱ型：箱形石棺）、11号墳第1主体部（Ⅰ型：朝杖式木棺）と第7主体部（Ⅱ型：箱形木棺）との関係は、夫婦関係を想定することができる。

したがって、各墳丘墓は造墓契機となった被葬者夫婦を中心とした同系集団の墓であったと考えられる。

小結 これまでの検討結果から、5種の棺相互に認められた階層性の一部は、年齢階梯を反映したものと考えられる。逆にいうと、被葬者の年齢によって、棺形態が決定されることがあったものと考えられる。福永がいうように¹⁰²、木棺を作る作業はかなりの労力を必要とす

る。これに比べると、小型の箱形石棺は、容易に入手できる石材が用いられており、労力はわずかである。これは、墓坑掘削土量（第254図）からも明らかである。

また、舟形木棺は当地域における初現例と考えられる。よって、舟形木棺を採用した10号墳第1主体部の被葬者は、当該地域において中核的な役割を担ったものと考えられる。

3. 棺の頭位方向について

棺の頭位方向について検討する。第3章における報告でも明らかなように、墳丘墓群においては、墳丘主軸方向に対して平行もしくは直交方向の傾向が認められた。これに対して木棺墓群においては、墳丘墓群のような明確な規則性は認められなかった。以下、墳丘墓群と木棺墓群とに分けて検討する（第255図・第256図）。

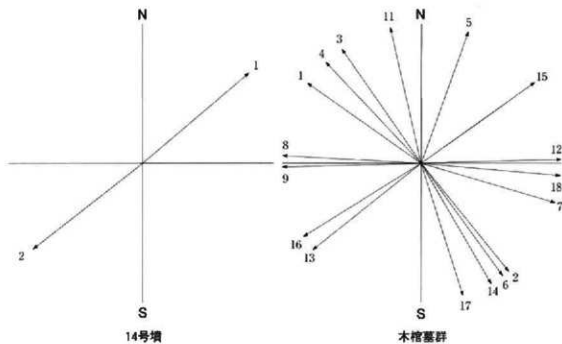
墳丘墓群

10号墳においては4方向に分類され、それぞれ約90°ずれた位置関係にある。このなかで第4主体部と第6主体部の主軸方向は墳丘の主軸方向とほぼ一致する。前項で夫婦・子孫の関係とみた第1主体部と第6主体部・第4主体部の主軸方向をみると、両者とも直交する関係にある。

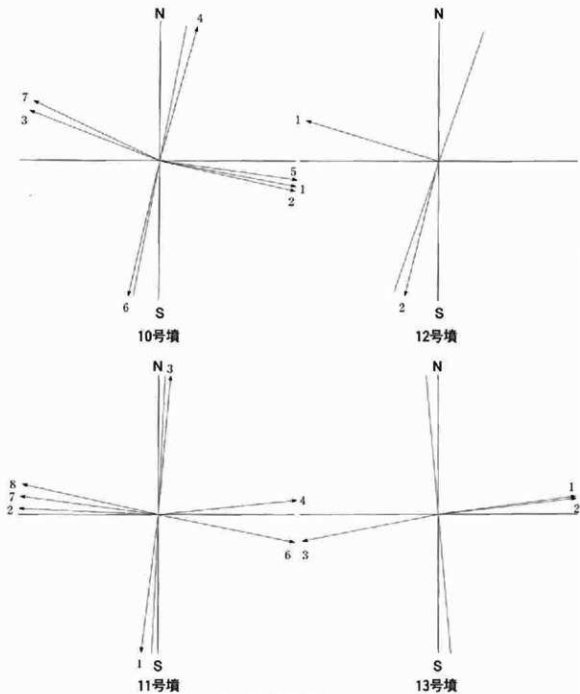
11号墳についても、10号墳同様、4方向に分類される。その4方向の角度も同様である。第1主体部と第3主体部の主軸方向が、墳丘の主軸方向とほぼ一致する。11号墳において夫婦とみた第7主体部との関係は、直交する関係にある。

12号墳においては、2基の主体部からなるが、直交関係にある。このなかで、第2主体部の主軸方向と墳丘の主軸方向がほぼ一致する。

13号墳においては、3基の主体部からなるが、全く逆方向の関係にある。子孫の関係と考えた第1主体部と第3主体部との関係も逆方向の関係にある。なお、これらの主体部の方向はいずれも墳丘の主軸方向に直交する。



第255図 棺の頭位方向(1)



第256図 棺の頭位方向(2)

14号墳も2基の主体部からなるが、その頭位方向は約180°方向を違える。2基ともその主軸方向は墳丘の主軸方向と一致する。

このように、墳丘墓群における被葬者の頭位方向は、磁方位へのこだわりは認められない。墳丘の主軸方向を基準としている(第256図 アミ線)ことが理解できる。また、子孫・夫婦と考えた被葬者の頭位方向は、一致するものは認められず、90°もしくは180°方向を違えている。

瀬戸谷略は、立石墳墓群例(兵庫県豊岡市)をもとに、中心主体の小口部分に直交して

配置される小規模な埋葬施設について、親子・夫婦の関係が考えられるのではと推測されている。梅田東古墳群墳丘墓群では、中心主体の小口部に直交する例は、10号墳第1主体部と第4主体部のみである。しかし、中心主体の頭位方向に直交する点で、同じ傾向を認めることができる。

木棺墓群 墳丘墓群で認められたような規則性は見出しえない。主軸方向を東西方向にとる例は数例認められるが、南北方向を意識したと考えられる例は1例も認められない。狭い尾根上に立地するため、その等高線に平行させる傾向が顕著である。

〔註〕

- (1) 福永伸哉「木棺墓」『弥生文化の研究 8』1996
- (2) 石崎善久「舟底状木棺考—丹後の例按式木棺—」『京都府埋蔵文化財論集 第4集』財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001
- (3) 吉識肇仁「梅田古墳群（第2・3・4次調査）」『平成9年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1998
- (4) 吉留秀敏「九州の割竹形木棺」『古文化談叢』第20集 九州古文化研究会 1989
- (5) 墓坑の体積は、(墓坑検出面の面積+墓坑底部の面積)×2×墓坑の深さで算出した。
- (6) 中村 弘「向山古墳群 市乗寺古墳群 一乗寺経塚 矢別遺跡—県立北部農業センター整備に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—」(兵庫県文化財調査報告 第191冊)兵庫県教育委員会 1999
- (7) 榎本誠一「柿坪中山古墳群 第1集」兵庫県山東町教育委員会 1975
- (8) 清家 章「畿内周辺における箱形石棺の型式と集団」『古代学研究』152 古代学研究会 2001
- (9) 瀬戸谷皓「北浦古墳群・立石墳墓群」豊岡市教育委員会 1987
- (10) 小寺 誠「田多地引谷墳墓群」『出石町史 第4巻(資料編Ⅱ)』出石町 1993 以下、田多地引谷墳墓群に関しては、当書による。
- (11) 堤主三郎「宝蔵山古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1967
- (12) 瀬戸谷 皓・谷本由美「但馬の土器棺」『加陽土屋ヶ岳遺跡群—民間開発事業にかかる埋蔵文化財発掘調査概要—』(豊岡市文化財調査報告書29) 豊岡市教育委員会 1994
- (13) 前掲(12)
- (14) 前掲(9)
- (15) 岸本道昭「新宮東山古墳群」(龍野市文化財調査報告16) 龍野市教育委員会 1996
- (16) 肥後弘幸「家族墓へのアプローチ—北近畿後期弥生墳墓の場合—」『京都府埋蔵文化財論集 第3集』財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996
- (17) 角南総一郎「土器棺切合考—埋葬時における子供と大人—」『ひょうご考古』第7号 兵庫考古学研究会 2001
- (18) 野島 永「弥生時代の対外交易と流通—弥生墳墓の副葬鉄器を通して—」『丹後の弥生大墓と巨大古墳』(季刊考古学・別冊10) 2000
- (19) 前掲(1)
- (20) 瀬戸谷皓「但馬における弥生墳墓の展開」『北近畿の考古学』両丹考古学研究会・但馬考古学研究会 2001

第5節 墳丘墓について

はじめに

5基の墳丘墓を検出した。これらの墳丘墓について、まず墳丘形態の分類をおこなう。次にこれをもとに類型・立地などについて検討する。

1. 分類

はじめに

墳丘墓群を構成する10号墳～14号墳は、いずれも明確な墳丘を有する。これらの墳丘墓は、墳丘の4辺の裾部が明確な典型的な方形台状墓に分類されるタイプ（定形タイプ）と、墳丘の裾部が不明瞭で墳丘形態も不定形なタイプ（不定形タイプ）に分類できる。前者は肥後弘幸による墳丘墓の分類の台状墓A、後者が台状墓Bに該当するものと考えられる。前者に該当するのが11号墳と14号墳で、一部後世の擾乱を受けているが、平面形が長方形を呈し、横断面・縦断面が台形を呈する。他の10号墳・12号墳・13号墳は不定形タイプに該当する。

2. 類例

定形タイプ

11号墳・14号墳のような、庄内併行期における定形タイプの墳丘墓は、但馬では確認されていない。時期が下がり布留式段階になると、芝花古墳群26号墳・28号墳（兵庫県山手町）が調査によって明らかとなっている。

丹波においては、後期後半の赤坂今井墳丘墓（京都府峰山町）・金谷1号墓（京都府峰山町）などに類例が認められる。

丹波においては、内場山墳丘墓（兵庫県篠山市）とボラ山1号墓（兵庫県青垣町）が調査で明らかとなっている。両墓の時期は、いずれも庄内併行期で、梅田東古墳群とはほぼ同時期に位置付けられている。

定形タイプ

但馬においては、立石墳墓群（兵庫県豊岡市）・柿坪中山墳墓群（兵庫県山手町）・田多地引谷墳墓群（兵庫県出石町）などが調査によって明らかとなっている。

丹波では、浅後谷南墳墓（京都府網野町）・左坂墳墓群（京都府大宮町）・大田南古墳群（京都府弥栄町）・帯城墳墓群（京都府大宮町）など、類例は多い。

丹波においては、ボラ山13号墓（兵庫県青垣町）・豊富谷丘陵遺跡（京都府福知山市）などが調査によって明らかとなっているが、丹波・但馬に比べると、類例は少ない。

第22表 定形タイプの方形台状墓

墳丘墓名	地域	時期	墳丘墓整形	基底部規模 (m)		墳頂部規模 (m)		高さ (m)	体積 (m ³)
				長軸	短軸	長軸	短軸		
梅田東11号墳	但馬	庄内併行期	盛土+削り出し	24.0	14.0	18.0	8.3	2.3	558.2
梅田東14号墳	但馬	布留式初頭	削り出し	9.8	9.5	7.3	4.2	1.2	74.3
内場山墳丘墓	丹波	庄内併行期	削り出し	21.6	19.5	18.5	14.2	2.3	786.5
ボラ山1号墓	丹波	庄内併行期	盛土+削り出し	10.3	11.2	9.0	8.5	0.5	48.0
赤坂今井墳丘墓	丹波	後期後半	盛土+削り出し	39.0	36.0	26.5	23.5	4.0	4053.5
金谷1号墓	丹波	後期後半	削り出し	15.0	15.0	10.0	9.0	2.0	315.0

3. 立地

梅田東古墳群は、加郡向山から張り出す流れ尾根筋上に立地する。但馬・丹後・丹波においては、定形タイプ・不定形タイプともに同様の立地にあり、当該地域に共通した特徴といえよう。

4. 墳丘の構築

不定形タイプ 墳丘墓群の立地する尾根を削り出し、整形することによって造り出されている。尾根地形を最大限に生かしており、墳裾部を明瞭にする意識を欠く。また、調査においては、盛土を確認することはできなかった。ただし、10号墳第7主体部の検出状況から判断して、若干の盛土は行われていたものと考えられる。

定形タイプ 当タイプについても、尾根の削り出し整形を基本とする。不定形タイプと大きく異なる点は、墳裾部が明確かつ直線的に仕上げられている点である。また、11号墳においては、若干の盛土（約30cm）も確認されている。14号墳については、調査においては盛土を確認することはできなかった。しかし、第2主体部の検出状況から判断して、若干の盛土はなされていたものと考えられる。以上から、定形タイプの墳丘墓は、盛土と削り出しによって、精美ないわゆる方形台状墓に仕上げられたものと考えられる。

当タイプの墳丘墓を代表する赤坂今井墳丘墓においても、地山整形と盛土が併用されている。一方、内場山墳丘墓においては盛土は認められず、ほとんどが削り出しによって造りだされている。よって、11号墳については、赤坂今井墳丘墓と同様な工法によって築かれていることが理解できる。

5. 形態と規模

不定形タイプについては、形態・規模の比較が困難なため、定形タイプのみを検討対象とする。主要な定形タイプの墳丘墓の規模を比較したのが第22表である。

平面形 まず平面形を比較すると、梅田東古墳群を除く墳丘墓は、主軸方向とその直交方向の規模が比較的近似し、方形に近い傾向にある。ところが、梅田東古墳群は両者の差が大きく、長方形を呈する。14号墳についても、基底部の規模からみると方形に近いが、墳頂部の規模からみると長方形を呈する。

墳丘墓の規模を比較するため、各墳丘墓の体積を計算した¹⁰⁾。赤坂今井墳丘墓はもとより、内場山墳丘墓よりも明らかに小型である。当タイプの墳丘墓のなかでは小型の部類に位置付けられるものと考えられる。

6. その他

10号墳においては、土坑として報告したSK01～SK03について触れておきたい。遺物を伴わず時期を特定できない。しかし、時期は若干異なるが、後期後半の赤坂今井墳丘墓と布留式以降の若水A11号墳¹¹⁾（兵庫県山東町）の墳頂部で、大型の柱穴が調査で明らかとなっている。このような例から、梅田東10号墳例についても、墳丘に伴う柱穴の可能性を指摘しておきたい。

7. 小結

11号墳と14号墳は、精美な形態をなす方形台状墓としては、但馬初の調査例であり、特に庄内併行期の類例は認められない。類例が、丹後・丹波において認められ、立地・造り方等共通点も認められることから、当該地域との関係が考えられる。一方、墳丘墓形態は若干異なり、規模についても当該地域の墳丘墓より劣るなど、差異が認められる。さらに、時期的に、丹後の類例は後期後半のものであるが、但馬の梅田東古墳群は庄内併行期以降の築造と、丹後の類例に比べて時期が新しくなる。

〔註〕

- (1) 肥後弘幸「丹後地域の弥生墓制」『京都府埋蔵文化財論集 第2集』財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991
- (2) 池田征弘「芝花古墳群 (その1)」『平成13年度 兵庫県下埋蔵文化財発掘調査連絡会資料』2001
- (3) 岡林峰夫・石崎善久「赤坂今井墳丘墓-第3次発掘調査概要報告-」(京都府峰山町文化財調査報告第21集) 峰山町教育委員会 2001 以下、赤坂今井墳丘墓に関しては、当報告による。
- (4) 石崎善久「金谷1号墓の発掘調査」『京都府埋蔵文化財情報』第55号 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995
- (5) 中川 渉「内場山墳丘墓」『内場山城跡-近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書(X X I)-』(兵庫県文化財調査報告 第126冊) 兵庫県教育委員会 1993 以下、内場山墳丘墓に関しては、当報告による。
- (6) 徳原多喜雄「プラシ・ボラ山-青垣工業団地建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-」(水上郡埋蔵文化財発掘調査報告書) 青垣町・水上郡教育委員会 1995
- (7) 瀬戸谷昭徳「北浦古墳群・立石墳墓群」豊岡市教育委員会 1987
- (8) 榎本誠一他「柿坪中山古墳群 第1集」兵庫県山崎町教育委員会 1975
榎本誠一他「柿坪中山古墳群 第2集」兵庫県山崎町教育委員会 1978
- (9) 小寺 誠「田多地引谷墳墓群」『出石町史 第4巻(資料編Ⅱ)』出石町 1993
- (10) 竹原一彦「国営農地(丹後東部地区)関係遺跡 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓」『京都府埋蔵文化財情報』第84冊 1998
- (11) 肥後弘幸「国営農地開発事業関係遺跡平成5年度発掘調査〔7〕左坂墳墓群」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1994
- (12) 肥後弘幸「大田南古墳群-大田南2・3号墳、矢田城跡発掘調査概要-」(京都府弥栄町文化財調査報告 第7集) 京都府弥栄町教育委員会 1991
- (13) 岡田晃治「国営農地開発事業関係遺跡昭和61年度発掘調査概要 帯城墳墓群」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1987
- (14) 前掲(6)
- (15) 増田孝彦他「京都府遺跡調査報告書 第1冊」財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター 1983
- (16) 体積は、(墳頂部の面積+墳裾部の面積)×2×高さで算出した。墳丘の視覚的な比較を試みたもので、必ずしも労働力の差を反映するものではない。
- (17) 平成13年度 兵庫県教育委員会調査

第6節 総括

1. はじめに

本章第1節から第5節において、土器の分析を通じた築造順序の復元、土器の供献方法、副葬品・埋葬施設・墳丘の特徴を中心にまとめた。これをまとめたのが附表（埋葬施設一覧表）である。これらの検討結果を踏まえ、梅田東古墳群の調査成果を簡単にまとめ、その特徴を明らかにしたい。

2. 梅田東古墳群の特徴

検出遺構

①梅田東古墳群で検出した遺構は、大きく埋葬遺構と落し穴群に分けることができる。さらに、埋葬遺構は、木棺墓群と墳丘墓群からなる。

落し穴群

②落し穴群は、6基の落し穴と2穴の柱穴からなるが、遺物を全く伴わず、時期を明らかにすることができなかった（第3章第8節）。

木棺墓群

③木棺墓群は、1基の土器棺を含む18基からなる。これら18基は、弥生時代後期前半から中葉にかけて形成されたものである。

④木棺墓の大半はH字形組合せ木棺からなる。

⑤木棺墓群中唯一の土器棺墓である16号墓は、生駒西麓産の壺を棺に転用しており、このような搬入土器を棺に転用した例は、但馬では例をみない（第5章第4節）。

⑥木棺内への副葬品としては、玉類と鉄製品が認められた。玉類は、ガラス小玉・ガラス管玉・ガラス粟玉とガラス製の玉が圧倒的に多く、他に碧玉製管玉も副葬されている。ガラス製の玉が多い点は、丹後地域との共通点が認められる。特に、ガラス管玉には、丹後に共通した穿孔技法（両面穿孔）が認められ、当該地域との関係を伺うことができる。鉄製品の副葬が認められた点も、同様の関係を伺うことができる（第5章第3節）。

⑦多くの埋葬施設において、破砕土器供献が認められた。墓坑内供献が大半であるが、一部に墓坑上供献も認められた。供献された土器は、在地的な特徴を有する土器のみで、他地域の土器は認められない。

墳丘墓群

⑧5基の墳丘墓からなる。いずれも庄内併行期から布留式初頭にかけて築造されたものである。10号墳と他の墳丘墓との前後関係は明らかにできなかったが、10号墳以外については、11号墳→12号墳→13号墳→14号墳の順に築造されたことが明らかとなった（第5章第1節）。

⑨11号墳と14号墳は、いわゆる方形台状墓に分類される墳丘墓である。このような墳丘墓は、但馬では初めての調査例である（第5章第5節）。

⑩各墳丘墓は、複数の埋葬施設を有し、その埋葬施設は、木棺・箱形石棺・小竪穴石室・土坑墓・土器棺とバラエティーに富む。さらに、木棺は、割板式木棺・H字形組合せ木棺・箱形木棺の3タイプに分類でき、削り抜き木棺は舟形木棺と割竹形木棺に細分できる。特に、10号墳第1主体部の舟形木棺は、当該期のものとしては、丹後では数例認められるが、但馬では初めての調査例である（第5章第4節）。

- ⑩10号墳・11号墳・13号墳では、墓坑相互の切り合い関係が認められ、これらの被葬者間には、子孫・夫婦の関係を想定できた(第5章第4節)。
- ⑪棺への副葬は、木棺墓同様玉類と鉄製品からなるが、玉類の副葬が減り、逆に鉄製品の副葬が目立つ。玉類はガラス小玉に限られる。鉄製品は鍔が目立ち、但馬・丹後と同様の傾向が認められる。ただし、その副葬位置には当遺跡の独自性も認められる(第5章第3節)。
- ⑫木棺墓群同様、破砕土器供献も認められたが、木棺墓群ほど盛んではない。また、供献された土器には山陰地域に特徴的な土器が目立つ(第5章第2節)。土器棺に転用された甕も山陰的特徴を有するが、このタイプの甕の棺への転用例は、但馬・丹後で少なからず認められる。

3. 小結

近畿北部における弥生時代後期の共通の墓制として、①丘陵上に区画の明瞭でない連続した台状墓を築造すること、②墳頂部に複数の埋葬施設があり家族墓的性格が強いこと、③葬送儀礼として墓坑内破砕土器供献を実施すること、④鉄製武器・工具類およびガラス玉類を副葬することが指摘されている⁽¹⁾。

これらの特徴は、今回報告してきた木棺墓群に認められた様々な特徴とまさに一致するものである。さらに、後期後半～古墳時代初頭にかけての墳丘墓群に認められた特徴も、当該地域の特徴と一致する。つまり、梅田東古墳群を営んだ集団は、丹後・但馬一帯と共通する埋葬儀礼を行った集団といえよう。

特に、庄内併行期における、精美なマウンドをもつ11号墳・舟形木棺を埋葬主体とする10号墳第1主体部などに象徴されるように、丹後地域を中心に認められる地域首長クラスの墓制と多くの点で共通する。つまり、墳丘墓の被葬者と当該地域との強いつながりを想定することができる。

一方、①土器などに畿内中心部との関係が少なからず認められる点(第5章第2節)、②土器が破砕供献される位置が異なる点(第5章第2節)、③鉄製品の副葬が認められるが、埋葬施設単位の副葬量が多くない点(第5章第3節)、④庄内併行期以降、丹後に認められない箱形石棺を積極的に採り入れている点(第5章第4節)、⑤墳丘墓の平面形が方形ではなく長方形を呈する点(第5章第5節)など、当遺跡の独自性も認めることができる。

[註]

- (1) 肥後弘幸「弥生王墓の誕生—北近畿における首長墓の変遷—」『丹後の弥生王墓と巨大古墳』(季刊考古学・別冊10)2000

報告書抄録

ふりがな	うめたひがしこふんぐんはつくつちようさほうこくしょ							
書名	梅田東古墳群発掘調査報告書							
副書名								
巻次	兵庫県教育委員会埋蔵文化財報告書 第241冊							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	山田清朝							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 兵庫県神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号 TEL 078-531-7011							
発行年月日	西暦2002年(平成14年) 3月29日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	調査番号					
梅田東古墳群	兵庫県朝来郡和田山町久留引字梅田		960352	35° 18' 35"	134° 50' 19"	19961122 ～ 19970328	1855	播但連絡 道路(5 期)事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
梅田東古墳群	墳墓跡	弥生時代後期後半	木棺墓17基	土器 ガラス小玉 ガラス管玉 碧玉製管玉 鉄器 水銀朱		破砕土器供献		
			土器棺1基	土器				
		弥生時代後期後半～古墳時代初頭	墳丘墓 木棺墓 箱形石棺墓 土器棺墓	土器 ガラス小玉 鉄器 水銀朱		舟形木棺 小竪穴式石室		
	牙痕跡		落とし穴6基					

附表

埋葬施設一覽表

出土土器觀察表

出土玉類一覽表

埋葬施設一覽表

地区	時期	埋葬施設		墓坑の規模 (m)			棺の規模 (cm)				方位方向	
		棺の種類	型式	主軸方向	副軸方向	深さ	長さ	小口幅(頭)	小口幅(足)	深さ		
木柩墓群	1号墓	後期中重	木柩墓	H形	2.80	1.30	1.41	180	23	20	22	N55° 00' W
	2号墓	後期中重	木柩墓	H形	2.65	1.20	0.55	(180)	44	-	10	N141° 15' E
	3号墓	後期中重	木柩墓		1.65	0.84	0.35	-	-	-	-	N35° 00' W
	4号墓	後期前半	木柩墓	H形	1.60	(0.6)	0.56	94	(30)	(22)	8	N43° 30' W
	5号墓	後期前半	木柩墓	箱形	2.00	1.03	0.86	110	45	42	5	N19° 30' E
	6号墓	後期前半	木柩墓	H形	3.54	1.68	1.03	206	47	41	9	N144° 15' E
	7号墓	後期前半	木柩墓	H形	1.05	0.85	0.42	98	30	25	25	N106° 30' E
	8号墓	後期前半	木柩墓	H形	1.86	0.91	0.70	88	40	32	50	N87° 00' W
	9号墓	後期前半	木柩墓	H形	1.15	2.16	0.96	125	36	25	40	N91° 30' W
	10号墓	後期前半	木柩墓		-	-	-	-	-	-	-	-
	11号墓	後期前半	木柩墓	H形	1.40	0.80	0.82	70	29	21	10	N13° 00' W
	12号墓	後期前半	木柩墓	H形	3.07	1.60	0.85	184	55	48		N88° 30' E
	13号墓	後期前半	木柩墓		-	1.80	1.10					N128° 45' W
	14号墓	後期前半	木柩墓	H形	3.42	2.17	1.25	220	48	42	5	N150° 00' E
	15号墓	後期中重	土器棺	H形	2.30	1.50	0.82	132	53	45	27	N84° 20' E
	16号墓	後期中重	木柩墓		0.75	0.75	0.65	-	-	-	-	N122° 00' W
	17号墓	後期中重	木柩墓	H形	(1.37)	0.80	0.45	81	21	18	13	N162° 30' E
	18号墓	後期前半	木柩墓	H形	3.04	1.63	0.95	202	46	46	25	N95° 00' E
10号墳	第1主体部	庄内併行期	木柩墓	舟形	6.40	3.75	2.15	325	70	15		N100° 30' E
	第2主体部	庄内併行期	小竪穴式石室		2.05	0.90	0.65	98	25	10	30	N102° 30' E
	第3主体部	庄内併行期	石棺	箱形	2.76	1.35	1.20	76	36	24	16	N69° 00' W
	第4主体部	布留式初頭	石棺	箱形	2.35	1.60	1.07	142	50	32	26	N15° 30' E
	第5主体部	庄内併行期	石棺	箱形	2.11	1.24	1.34	115	40	20	27	N97° 45' E
	第6主体部	布留式初頭	石棺	箱形	1.43	0.96	0.40	60	26	15	20	N167° 20' W
	第7主体部	庄内併行期	石棺	箱形	1.10	0.65	0.24	67	23	13	20	N64° 45' W
11号墳	第1主体部	庄内併行期	木柩墓	H形	5.30	3.65	2.05	222	60	54	42	N173° 05' W
	第2主体部	庄内併行期	木柩墓	H形	3.60	1.88	1.20	218	50	48	22	N87° 30' W
	第3主体部	庄内併行期	石棺	箱形	1.44	1.00	0.84	72	33	22	22	N84° 00' E
	第4主体部	庄内併行期	木柩墓	箱形	1.80	1.07	0.83	98	31	35	26	N101° 30' E
	第5主体部	庄内併行期	木柩墓		1.30	0.90	0.62	46	21	19	13	N82° 30' W
	第6主体部	庄内併行期	木柩墓	H形	2.24	1.63	0.52	137	46	45	27	N77° 30' W
	第7主体部	庄内併行期	木柩墓	箱形	2.40	1.18	0.60	155	20	19	35	N5° 00' E
12号墳	第1主体部	庄内併行期	木柩墓	H形	3.90	1.85	2.00	210	47	41	25	N73° 10' W
	第2主体部	布留式初頭	木柩墓	箱形	1.56	0.78	1.16	127	40	37	16	N14° 00' E
13号墳	第1主体部	庄内併行期	木柩墓	H形	4.00	1.80	1.25	225	43	40	30	N82° 40' E
	第2主体部	庄内併行期	土坑墓		1.24	0.95	0.63	-	-	-	-	N83° 30' E
	第3主体部	布留式前半	土器棺		0.89	0.70	0.55	-	-	-	-	N169° 10' W
14号墳	第1主体部	布留式初頭	木柩墓	H形	3.70	1.73	0.76	206	60	43	20	N49° 50' E
	第2主体部	布留式前半	石棺	箱形	1.20	0.75	0.30	60	25	27	19	N127° 45' E

被 葬 者			施 床	副 葬 品		供 献 土 器		その他
人 骨	性別	年 齢		玉 類	鉄製品	供献位置	器 種	
なし			なし	なし	なし	墓坑上	壺・高坏	
なし			なし	ガラス小玉	なし	墓坑内	甕	
なし			なし	なし	なし	なし	-	
なし			あり	なし	鉄線	なし	-	
なし		未成年	なし	ガラス小玉	なし	墓坑内	甕・高坏	
なし			なし	ガラス小玉	なし	墓坑内	甕	
なし		未成年	なし	なし	なし	墓坑内	甕	
なし		未成年	なし	なし	なし	墓坑内	鉢	
なし			なし	なし	なし	墓坑内	甕	
なし			なし	なし	なし	なし	-	
なし		未成年	なし	ガラス小玉	なし	なし	-	
なし		成年	なし	ガラス小玉	なし	墓坑内	甕	
なし			なし	なし	なし	墓坑上	甕	
なし			なし	なし	鉄附・鉄線	墓坑内・墓坑上	甕・高坏	
なし			あり	ガラス小玉・管玉	なし	墓坑内	甕	
なし		幼児	なし	なし	なし	なし	-	
なし			なし	なし	なし	墓坑内	甕・高坏	
なし			あり	小玉・管玉・粟玉	鏝・刀子	墓坑内	壺・甕・銅器	
頭蓋骨	不明		あり	小玉	なし	墓坑内	鉢	
	女性	熟年後半～老年	なし	なし	鏝	なし	-	
			なし	なし	鏝	なし	-	
			なし	なし	なし	なし	-	
頭蓋骨・歯	不明	小児	あり	なし	鉄線・鏝	墓上	甕	
なし			なし	なし	なし	墓坑内・墓上	甕	
なし		小児	なし	ガラス小玉	なし	なし	-	
なし			なし	ガラス小玉	短剣	墓坑内・墓坑上	壺・高坏・器台	
なし			なし	なし	鉄線・鏝	墓坑内	鉢	
なし			なし	なし	なし	なし	-	
なし			なし	なし	なし	墓坑内	甕	
なし			なし	なし	なし	なし	-	
なし			なし	なし	なし	墓上	鉢	石蓋あり
			なし	なし	なし	なし	-	
歯	不明	青年	なし	なし	なし	墓坑上	鉢	
なし			なし	なし	なし	なし	-	
なし			なし	なし	なし	墓坑内・墓坑上	壺・甕	
なし			なし	なし	なし	墓坑内	甕	
なし	不明	小児	なし	なし	なし	なし	-	
なし			なし	なし	鏝	墓坑内	甕	
			なし	なし	なし	なし	-	

出土土器觀察表

No.	器種	埋葬遺構	法量 (cm)						現存	
			口径	頸徑	最大径	底径	脚柱径	器高		脚高
1	鉢	10号墳 第1主体部						7.3	底部完存	
2	甗	10号墳 第5主体部	11.6	10.9	15.6			15.1	ほぼ完存	
3	甗	10号墳 第6主体部	14.6	11.7	20.3			11.3	口頸部ほぼ完存・体部1/2弱	
4	甗	11号墳 第1主体部	21.3					2.7	口縁部1/4・体部1/8	
5	甗	11号墳 第1主体部			16.0			7.1	体部1/2・頸部若干	
6	甗	11号墳 第1主体部	8.9	8.0	13.5			13.4	口縁部ほぼ完存・体部1/3	
7	器台	11号墳 第1主体部				15.5	4.0	8.2	基部付近完存・脚部1/2	
8	器台	11号墳 第1主体部				15.9	3.5	9.8	脚部1/3・基部完存	
9	高坏	11号墳 第1主体部	12.7		13.2			6.0	口縁部・体部1/2	
10	高坏	11号墳 第1主体部					4.2	6.0	基部1/3弱	
11	器台	11号墳 第1主体部				16.7		5.5	脚部1/3	
12	鉢	11号墳 第2主体部				2.6		4.1	底部完存	
13	甗	11号墳 第6主体部	12.4	10.8	13.2			10.0	口縁部・体部ほぼ完存	
14	鉢	11号墳 第8主体部	9.3					8.3	口縁部1/3・体部2/3	
15	甗	11号墳 第8主体部	20.8	15.2				9.1	口縁部1/16・頸部1/3	
16	鉢	12号墳 第1主体部	9.7	8.3	8.6			9.6	口縁部2/3・体部1/4	
17	甗	13号墳 区画溝	29.6					3.5	口縁部1/8	
18	甗	13号墳 区画溝	25.3					4.3	口縁部1/12	
19	器台	13号墳 区画溝						2.5	口縁部付近1/4弱	
20	甗	13号墳 区画溝				5.6		6.5	底部完存	
21	甗	13号墳 第1主体部	19.2	12.0				9.5	口縁部1/4	
22	甗	13号墳 第1主体部	16.8	12.4	19.0			17.4	口頸部完存・体部1/3	
23	甗	13号墳 第2主体部			8.5	4.1		5.9	底部完存	
24	甗	13号墳 第3主体部	15.8	13.2	20.9			25.9	完存	
25	甗	13号墳 第3主体部	33.4	23.6	48.7	7.5		62.5	ほぼ完存	
26	甗	13号墳 第4主体部	14.7	12.5	18.3			13.5	口頸部ほぼ完存・体部1/4	
27	甗	14号墳 第1主体部	13.7	11.1				8.0	口縁部2/3・頸部3/4	
28	水差形甗	木棺墓群 1号墓	11.3	10.5	16.1			17.2	口頸部3/8・体部1/4・把手完存	
29	器台	木棺墓群 1号墓	17.2		6.7	14.2		17.5	口縁部1/2・脚柱3/4・脚部完存	
30	甗	木棺墓群 2号墓	16.2	13.8				5.4	口頸部3/8	
31	甗	木棺墓群 2号墓			4.2			9.6	底部完存	
32	甗	木棺墓群 5号墓	14.4	13.0	16.7	4.3		19.6	口縁部1/4・体部1/3・底部1/2	
33	脚部	木棺墓群 5号墓			10.0	3.4		8.2	基部完存・底部1/6	
34	甗	木棺墓群 6号墓	14.0	13.0	17.5	3.2		19.6	口頸部8/9・体部1/4・底部完存	
35	甗	木棺墓群 7号墓	16.6	15.0	23.9	3.8		28.2	口頸部ほぼ完存・体部1/8・底部完存	
36	鉢	木棺墓群 8号墓	7.7		8.5	5.0		8.3	口縁部1/2弱・底部完存	
37	水差形甗	木棺墓群 9号墓		7.8	10.4	3.9		10.1	頸部1/4・体部2/3・底部3/4	
38	甗	木棺墓群 12号墓	14.4	12.7	14.8			14.4	口縁部1/3・体部1/2	
39	甗	木棺墓群 13号墓	13.6	11.4				9.7	口縁部3/4・頸部1/2	
40	甗	木棺墓群 14号墓	15.0	12.8	17.6	3.0		22.0	口縁部8/9・体部2/3・底部完存	
41	高坏	木棺墓群 14号墓	31.6					6.3	口縁部3/8	
42	高坏	木棺墓群 14号墓			18.7			5.6	脚部完存	
43	甗	木棺墓群 15号墓	15.8	12.6				4.2	口頸部3/4	
44	甗	木棺墓群 15号墓			4.1			3.6	底部完存	
45	甗	木棺墓群 16号墓		16.5	47.3	8.6		59.3	頸部2/3・体部一底部ほぼ完存	
46	甗	木棺墓群 17号墓	13.3	12.1	14.7	2.8		22.3	口頸部完存・体部1/3・底部完存	
47	高坏	木棺墓群 17号墓	24.0		16.0	4.5		20.6	13.6	口縁部1/4・基部完存・底部2/3
48	水差形甗	木棺墓群 18号墓	10.6	8.8	14.4	3.4		21.6	口縁部完存・体部1/2・底部完存	
49	甗	木棺墓群 18号墓	16.6	13.3				2.5	口縁部1/9	
50	甗	木棺墓群 18号墓			19.0	4.3		19.6	体部1/2・底部完存	
51	脚部	木棺墓群 18号墓			14.8			3.7	底部1/4弱	

色 調	給 土	備 考	挿 図	図 録
淡黄～灰黄・にぶい橙	1～3mmの石英・チャート多く含む		27	30
浅黄橙～橙	1～4mmの石英・長石・赤グサリ礫多く含む		40	30
浅黄橙～灰黄橙	1～4mmの石英・雲母・赤グサリ礫多く含む		44	30
にぶい黄橙	1～2.5mmの石英・長石多く含む		35	
橙	1～2.5mmの赤グサリ礫・石英・長石・チャート含む		35	
橙・オリーブ黒	1～2.5mmの石英・長石多く含む		35	44
橙	1～2mmの石英・長石含む		35	44
橙	1～2mmの石英・長石・黒雲母多く含む		35	44
にぶい橙～橙	1～2.5mmの石英・長石・チャート含む		35	44
にぶい黄橙	1～2.5mmの石英・長石・赤グサリ礫多く含む		35	
にぶい黄橙	1～2.5mmの石英・長石・赤グサリ礫・雲母多く含む		35	
黄灰・黒濁	1～2.5mmの石英・長石多く含む		61	44
橙	1～3mmの石英・長石多く含む		63	44
橙	1～3mmの石英・長石・チャート・赤グサリ礫多く含む		67	45
橙	1～4.5mmの長石・石英多く含む		71	45
にぶい橙～橙・暗灰	1～2mmの石英・長石・黒雲母・赤グサリ礫多く含む		76	46
浅黄橙～にぶい黄橙	1～2mmの石英・長石・赤グサリ礫多く含む		81	55
浅黄橙	1～2.5mmの石英・長石・チャート・赤グサリ礫多く含む		81	55
浅黄橙・灰黄濁	1～3.5mmの石英・長石・チャート多く含む		81	55
浅黄橙	1～5.5mmの石英・長石・チャート・赤グサリ礫多く含む		81	55
浅黄橙～明黄濁	1～2mmの石英・長石・チャート多く含む		85	55
にぶい黄橙～灰黄濁	1～2mmの石英・長石・チャート多く含む		85	55
暗灰～オリーブ黒	0.5～2mmの石英・長石・赤グサリ礫・黒雲母含む		87	55
浅黄橙～にぶい橙	1～2.5mmの石英・長石・赤グサリ礫含む	蓋転用	90	
浅黄橙～にぶい橙	1～2mmの長石・赤グサリ礫含む	箱転用	90	
にぶい黄橙・濁灰	1～4.5mmの石英・長石・黒雲母多く含む		91	55
明黄濁～にぶい黄濁	1～3mmの石英・長石非常に多く含む		98	61
橙・濁灰	1～6.5mmの石英・長石・赤グサリ礫多く含む		102	74
橙～にぶい橙	1～2mmの石英・長石・赤グサリ礫多く含む		102	74
にぶい黄橙・暗灰	1～2mmの石英・長石・赤グサリ礫多く含む		109	74
にぶい黄橙～橙・黒	0.5～3mmの石英・長石・赤グサリ礫多く含む		109	74
橙～にぶい橙	1～4mmの石英・長石・赤グサリ礫非常に多く含む		118	74
浅黄・暗灰	1～2.5mmの石英・長石非常に多く含む		118	74
明黄濁～にぶい黄濁・橙	1～3mmの石英・長石・赤グサリ礫多く含む		125	75
橙～にぶい橙	1～8mmの石英・長石・赤グサリ礫多く含む		128	75
にぶい黄橙～橙・暗灰	0.5～4mmの石英・長石・チャート・黒雲母多く含む		129	75
橙～にぶい黄橙	1～2.5mmの石英・長石・赤グサリ礫多く含む		131	75
橙～にぶい黄濁	1～2mmの石英・長石多く含む		145	75
橙～にぶい赤濁	1～2mmの石英・長石含む		146	75
橙～浅黄橙	1～3mmの石英・長石・赤グサリ礫多く含む		151	76
明黄濁	1～1.5mmの石英・長石・赤グサリ礫多く含む		151	76
にぶい黄橙	1～2mmの石英・長石含む		151	76
橙～浅黄橙	1～3mmの石英・長石多く含む		159	76
橙・灰	1～2mmの石英多く含む		159	
明赤濁～にぶい濁	1～4mmの長石・角閃石・石英・雲母多く含む		164	76
にぶい黄橙～にぶい橙	1～3mmの石英・長石・赤グサリ礫やや多く含む		168	77
橙	1～4mmの石英・長石・チャート多く含む		168	77
にぶい黄橙	1～1.5mmの長石・石英・雲母含む	箱転用	178	77
にぶい黄橙・黒濁	1～2.5mmの石英・長石・赤グサリ礫含む		178	77
浅黄橙～橙	1～3mmの石英・長石・チャート・赤グサリ礫含む		178	77
橙～浅黄橙	1～3mmの石英・長石非常に多く含む		178	77

出土玉類一覧表

No.	埋藏施設	種類	材質	色調	形態	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	備考	排阻	図版
								小	大				
J001	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	淡空緑透明	楕円形	5.5	3.0	1.7	2.0	0.0833	小口研磨	22	29
J002	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	楕円不整形	5.5	4.0	1.2	1.5	0.1245		22	29
J003	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不整形	5.4	2.5	2.0	2.5	0.0620		22	29
J004	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	5.2	3.5	1.0	1.5	0.1061		22	29
J005	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	6.1	3.7	1.5	2.0	0.0944		22	29
J006	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	5.1	3.0	1.4	2.1	0.0823		22	29
J007	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	5.0	3.0	1.7	2.5	0.0590	小口研磨	22	29
J008	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	5.0	3.1	1.2	1.6	0.0892		22	29
J009	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	やや楕円形	5.0	4.2	1.0	1.6	0.1099		22	29
J010	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	5.0	4.3	1.5	1.9	0.1110		22	29
J011	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	5.0	4.1	1.7	1.9	0.1226	片側小口研磨	22	29
J012	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	4.6	2.4	1.1	1.6	0.0608	小口研磨	22	29
J013	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.6	1.7	1.8	2.0	0.0445	小口研磨	22	29
J014	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	4.6	3.7	1.1	2.1	0.0635		22	29
J015	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	4.6	2.5	2.0	2.4	0.0435		22	29
J016	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.6	2.9	1.3	1.6	0.0643		22	29
J017	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	4.5	3.2	1.1	1.4	0.0712		22	29
J018	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.5	2.9	1.5	1.9	0.0604		22	29
J019	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.4	2.5	1.2	1.5	0.0581		22	29
J020	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.4	2.0	1.9	1.9	0.0486		22	29
J021	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.2	2.9	1.4	1.7	0.0592		22	29
J022	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.2	3.5	1.6	1.9	0.0637	小口研磨	22	29
J023	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	淡空色透明	不定形	4.2	3.5	2.0	1.8	0.0625		22	29
J024	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.0	3.6	0.8	1.4	0.0692		22	29
J025	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明						0.0187	小口研磨・破砕	22	29
J026	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.5	4.1	1.9	2.0	0.0847		24	29
J027	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.3	2.4	1.3	1.6	0.0536		24	29
J028	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.3	3.3	1.0	1.6	0.0650		24	29
J029	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.2	2.6	1.3	1.6	0.0584		24	29
J030	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	4.2	2.9	1.0	1.3	0.0524		24	29
J031	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.2	2.2	1.2	1.4	0.0483		24	29
J032	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	4.2	2.4	1.5	1.7	0.0485		24	29
J033	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.1	3.7	0.7	1.0	0.0730		24	29
J034	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	4.1	2.5	1.0	1.3	0.0430		24	29
J035	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.0	2.2	0.7	1.3	0.0374		24	29
J036	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.0	2.2	1.0	1.3	0.0380		24	29
J037	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.0	3.0	1.3	1.7	0.0488		24	29
J038	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.0	3.9	0.9	1.2	0.0593		24	29
J039	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.0	3.1	1.0	1.3	0.0532		24	29
J040	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.0	3.7	0.9	1.4	0.0621		24	29
J041	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.0	2.6	0.9	1.4	0.0415		24	29
J042	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.0	3.0	0.6	1.3	0.0463		24	29
J043	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.9	2.5	1.0	1.2	0.0364		24	29
J044	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.9	2.9	1.1	1.6	0.0481		24	29
J045	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.9	2.1	1.3	1.8	0.0303		24	29
J046	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.9	2.9	1.2	1.7	0.0413		24	29
J047	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.8	2.6	0.7	1.6	0.0359		24	29
J048	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.8	3.1	0.9	1.3	0.0373		24	29
J049	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.8	2.2	1.1	1.2	0.0371		24	29
J050	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	淡空緑透明	円形	3.8	2.8	1.1	1.5	0.0462		24	29
J051	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.7	2.8	1.2	1.5	0.0389		24	29
J052	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.7	3.0	0.8	1.5	0.0440		24	29
J053	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明						0.0187	欠片	25	28
J054	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	淡空色透明	円形	4.8	2.5	0.8	1.6	0.0255		25	28
J055	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	4.6	3.6	1.1	1.3	0.0249		25	28
J056	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.6	2.5	1.4	1.6	0.0632		25	28
J057	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.5	2.9	0.9	1.3	0.0585		25	28
J058	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.5	2.7	1.3	1.4	0.0574		25	28
J059	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	淡空色透明	楕円形	4.4	3.8	1.0	1.2	0.0545		25	28
J060	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.4	3.7	1.2	1.4	0.0863		25	28
J061	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.4	3.3	1.3	1.7	0.0623		25	28
J062	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.4	2.8	1.2	1.5	0.0576		25	28
J063	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.4	2.5	1.3	2.0	0.0466		25	28
J064	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.4	2.6	1.6	1.7	0.0584		25	28
J065	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.4	2.5	1.5	1.7	0.0523		25	28
J066	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.4	3.3	1.3	1.6	0.0555		25	28
J067	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.3	3.1	0.6	1.1	0.0657		25	28
J068	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.3	3.1	1.3	1.6	0.0661		25	28
J069	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.3	2.7	1.0	1.2	0.0645		25	28
J070	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.2	3.5	1.1	1.2	0.0712		25	28

出土玉器一覽表

No.	埋藏施設	種類	材質	色調	形態	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	備考	標図	図版
								小	大				
J071	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	4.2	2.8	1.0	1.5	0.0566		25	29
J072	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.2	3.0	0.9	1.1	0.0603		25	29
J073	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.2	3.0	1.2	1.3	0.0591		25	29
J074	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	2.5	1.1	1.3	0.0435		25	29
J075	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.2	3.2	1.2	1.7	0.0648		25	29
J076	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.2	2.4	1.2	1.6	0.0529		25	29
J077	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	淡青色透明	楕円形	4.2	2.1	1.2	1.5	0.0418		25	29
J078	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.0	4.0	1.3	1.6	0.0737		25	29
J079	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.0	2.4	1.0	1.3	0.0470		25	29
J080	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	青色透明	不定形	3.9	2.1	1.3	1.5	0.0349		25	29
J081	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	淡青色透明	円形	3.8	3.2	1.4	1.7	0.0383		25	29
J082	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	青色透明	円形	3.7	3.0	1.3	1.6	0.0588		25	29
J083	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	青色透明	不定形	3.7	2.5	1.1	1.3	0.0392		25	29
J084	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	青色透明	不定形	3.9	2.5	1.0	1.3	0.0414			
J085	10号墳 第1主体部	小玉	ガラス	青色透明	円形		2.1	1.3		0.0280			
J086	10号墳 第7主体部	小玉	ガラス									45	
J087	11号墳 第1主体部	小玉	ガラス										
J088	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.3	4.6	1.3	1.4	0.1303		106	80
J089	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	5.3	2.7	1.4	1.9	0.0809		106	80
J090	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明		5.0	3.7	1.5	1.8	0.0728		106	80
J091	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.9	2.4	1.9	2.2	0.0601		106	80
J092	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.9	2.5	1.7	1.9	0.0637		106	80
J093	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.8	3.0	1.6	1.9	0.0638		106	80
J094	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.7	2.5	1.4	1.9	0.0537		106	80
J095	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.7	3.4	1.3	1.8	0.0652		106	80
J096	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	4.6	4.4	1.1	1.5	0.0986		106	80
J097	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.6	2.9	1.5	1.9	0.0586		106	80
J098	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.5	2.6	1.2	1.4	0.0584		106	80
J099	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.5	3.5	1.5	1.7	0.0756		106	80
J100	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.5	3.1	1.2	1.6	0.0652		106	80
J101	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡緑不透明	円形	4.5	2.7	1.0	1.5	0.0406		106	80
J102	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス			4.4	3.5	0.9	1.6	0.0726		106	80
J103	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.4	3.4	1.4	1.7	0.0715		106	80
J104	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.4	2.7	1.4	1.5	0.0586		106	80
J105	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.4	3.1	1.2		0.0705		106	80
J106	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.4	3.0	1.0	1.2	0.0671		106	80
J107	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.3	3.5	0.8	1.3	0.0636		106	80
J108	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.3	2.6	1.2	1.7	0.0645		106	80
J109	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	円形	4.3	2.2	1.4	1.5	0.0412		106	80
J110	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.3	3.5	1.1	1.4	0.0665		106	80
J111	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.3	2.7	1.2	1.4	0.0628		106	80
J112	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.3	3.4	1.0	1.2	0.0688		106	80
J113	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.3	3.0	1.3	1.5	0.0632		106	80
J114	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.3	2.7	0.9	1.4	0.0483		106	80
J115	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	(4)楕円形	4.3	2.9	1.1	1.5	0.0648		106	80
J116	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス			4.2	2.5	1.3	1.6	0.0414		106	80
J117	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス			4.2	2.6	1.4	2.0	0.0446		106	80
J118	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.2	3.3	0.7	1.1	0.0573		106	80
J119	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.2	2.8	1.1	1.7	0.0534		106	80
J120	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	3.8	1.1	1.2	0.0592		106	80
J121	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	円形	4.2	2.2	1.7	1.3	0.0400		106	80
J122	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.2	3.0	1.2	1.5	0.0558		106	80
J123	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	2.9	1.3	1.8	0.0450		106	80
J124	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	円形	4.2	2.6	1.1	1.5	0.0506		106	80
J125	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	2.4	0.8	1.1	0.0474		106	80
J126	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.2	3.5	1.6	2.0	0.0601		106	80
J127	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.2	2.8	1.1	1.7	0.0527		106	80
J128	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.2	3.0	1.3	1.7	0.0623		106	80
J129	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	3.8	1.2	1.5	0.0670		106	80
J130	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.2	3.0	1.3	1.8	0.0481		106	80
J131	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	2.2	0.9	1.5	0.0413		106	80
J132	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	2.8	1.5	2.0	0.0549		106	80
J133	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス			4.1	3.1	1.3	2.1	0.0553		106	80
J134	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス			4.1	4.3	1.0	1.3	0.0662		106	80
J135	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡黄色透明	円形	4.1	2.4	1.5	1.6	0.0427		106	80
J136	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡緑不透明	不定形	4.1	3.0	1.0	1.4	0.0451		106	80
J137	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.1	2.6	0.8	1.1	0.0445		106	80
J138	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.1	3.3	1.2	1.5	0.0696		106	80
J139	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.1	3.4	1.4	1.5	0.0587		106	80
J140	本棺墓群 2号墓	小玉	ガラス			4.0	3.5	0.9	1.0	0.0595		106	80

出土玉類一覧表

No.	埋葬施設	種類	材質	色調	形態	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	備考	採回 回数
								小	大			
J141	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.0	3.7	0.8	1.2	0.0656		106 80
J142	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.0	2.6	1.0	1.3	0.0460		106 80
J143	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.0	4.0	0.5	1.0	0.0722		106 80
J144	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡緑不透明	円形	4.0	1.8	1.2	1.5	0.0304		106 80
J145	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.0	2.5	1.4		0.0406		80
J146	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.0	4.0	0.5	0.9	0.0706		106 80
J147	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.0	2.3	1.3	1.5	0.0341		106 80
J148	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.0	2.8	0.9	1.1	0.0496		80
J149	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.0	2.8	1.4	1.5	0.0413		80
J150	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡黄色透明	円形	4.0	2.0	1.7	1.9	0.0358		80
J151	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	4.0	2.6	1.3	1.6	0.0386		106 80
J152	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	4.0	1.9	1.2	1.4	0.0573		106 80
J153	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	ほぼ円形	4.0	2.0	1.5		0.0402		80
J154	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	ほぼ円形	4.0	3.4	1.0	1.5	0.0580		80
J155	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.9				0.0722		80
J156	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.9	4.0	1.2	1.5	0.0663		80
J157	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.9	3.0	0.9	1.1	0.0511		106 80
J158	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.9	2.3	1.1	1.2	0.0372		106 80
J159	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.9	3.6	0.8	1.5	0.0636		106 80
J160	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.9	3.3	0.5	1.1	0.0566		80
J161	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.9	2.2	1.0	1.2	0.0384		106 80
J162	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.9	2.4	0.9	1.4	0.0299		106 80
J163	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス			3.8	3.3	0.7	0.9	0.0459		106 80
J164	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス			3.8	2.5	0.8	1.4	0.0387		106 80
J165	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.8	3.5	1.0	1.4	0.0371		106 80
J166	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.8	3.4	0.8	1.4	0.0489		80
J167	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.8	2.4	0.9		0.0382		80
J168	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.8	2.6	1.3	1.6	0.0358		80
J169	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.8	2.4	1.0	1.5	0.0387		106 80
J170	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.7	3.7	1.0	1.3	0.0544		106 80
J171	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.7	2.6	0.3	1.0	0.0384		106 80
J172	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	144円形	3.7	1.9	0.8	1.3	0.0349		80
J173	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明		3.6	2.3	0.9	1.2	0.0350		106 80
J174	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.6	3.2	1.0	1.6	0.0350		106 80
J175	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.6	2.5	1.3	1.4	0.0387		106 80
J176	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.6	3.8	0.7	1.2	0.0574		106 80
J177	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.6	2.1	1.1	1.4	0.0245		106 80
J178	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.6	2.7	1.0	1.2	0.0343		106 80
J179	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	円形	3.6	2.6	1.3	1.4	0.0355		106 80
J180	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡黄色透明	円形	3.6	3.5	0.2	0.4	0.0290		106 80
J181	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス			3.5	2.2	0.6	1.0	0.0323		106 80
J182	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.5	3.3	1.3	1.6	0.0370		106 80
J183	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.5	2.6	1.0	1.2	0.0303		106 80
J184	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.5	3.6	0.9	1.1	0.0456		106 80
J185	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.4	2.9	0.9	1.2	0.0340		106 80
J186	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.4	2.0	1.0	1.7	0.0219		80
J187	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.4	3.1	0.8	1.1	0.0400		106 80
J188	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.4	2.7	0.9	1.2	0.0363		106 80
J189	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡黄色透明	円形	3.4	2.3	1.0	1.2	0.0276		80
J190	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.3	1.9	0.8	1.0	0.0279		107 80
J191	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.3	3.4	1.0	1.4	0.0416		107 80
J192	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.3	2.2	1.0	1.3	0.0348		107 80
J193	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス			3.2	2.0	0.7	1.3	0.0414		107 80
J194	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.2	1.5	0.9	1.0	0.0156		107 80
J195	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス			3.1	2.7	0.9	1.2	0.0382		107 80
J196	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.1	2.9	1.3	1.6	0.0184		107 80
J197	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.1	2.2	1.0	1.2	0.0231		107 80
J198	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.0	1.7	1.1	1.4	0.0163		107 80
J199	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡黄色透明	円形	3.0	2.0	0.8	1.1	0.0193		107 80
J200	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	2.5	2.7	0.9	1.2	0.0174		107 80
J201	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡緑不透明						0.0418		
J202	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡緑不透明						0.0204		
J203	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡緑不透明						0.0079		
J204	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡緑不透明						0.0247		
J205	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡緑不透明						0.0290		
J206	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡緑不透明	不定形		2.6	1.3		0.0185		
J207	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡緑不透明	不定形					0.0237		
J208	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡緑不透明						0.0120	細片	
J209	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡緑不透明						0.0192	細片	
J210	木棺墓群 2号墓	小玉	ガラス	淡緑不透明						0.0200	細片	

出土玉類一覧表

No	埋葬施設	種類	材質	色調	形態	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	備考	押印	図版
								小	大				
J211	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	5.5	4.0	1.7	2.2	0.1163		116	81
J212	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	5.4	2.9	1.5	1.9	0.1003		116	81
J213	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	5.3	3.7	1.4	1.6	0.0127		116	81
J214	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	5.1	2.6	1.4	1.8	0.0679		116	81
J215	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	5.1	3.1	1.1	1.3	0.1002		116	81
J216	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	5.0	3.2	1.5		0.1056			81
J217	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	5.0	3.7	1.3	1.8	0.0909		116	81
J218	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.9	3.0	1.2	2.1	0.0701		116	81
J219	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.8	2.5	1.5	2.0	0.0688		116	81
J220	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.8	3.2	0.5	0.8	0.0908			81
J221	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.8	3.3	1.5	1.9	0.0752			81
J222	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.8	4.1	1.2	1.5	0.1085		116	81
J223	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.8	3.1	0.8	1.4	0.0996		116	81
J224	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.7	3.0	1.4	1.5	0.0780		116	81
J225	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.7	2.5	1.3	1.7	0.0586		116	81
J226	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.7	2.0	1.7	2.3	0.0519		116	81
J227	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.7	2.7	1.6	1.7	0.0721		116	81
J228	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.6	3.0	0.7	1.5	0.0833		116	81
J229	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.6	2.2	1.1	1.9	0.0531			81
J230	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.6	3.7	1.4	1.5	0.0670		116	81
J231	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.5	2.9	0.8	1.1	0.0662			81
J232	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不全楕円形	4.5	3.0	1.4	1.7	0.0724		116	81
J233	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.5	3.1	0.7	1.0	0.0630		116	81
J234	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.5	2.5	0.9		0.0851		116	81
J235	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.5	2.5	1.7	2.1	0.0588		116	81
J236	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	4.5	3.5	0.6	1.1	0.0892		116	81
J237	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.5	3.6	1.4	1.6	0.0892			81
J238	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.4	3.0	1.5		0.0621		116	81
J239	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	円形	4.4	2.3	1.0	1.2	0.0388		116	81
J240	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.4	3.0	1.1	1.5	0.0537		116	81
J241	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.4	4.1	1.5	1.6	0.0858		116	81
J242	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.4	4.0	0.9		0.0841		116	81
J243	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.3	3.7	1.0	1.5	0.0641		116	81
J244	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.3	3.2	0.6	1.3	0.0657		116	81
J245	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.3	3.1	0.8	1.0	0.0658		116	81
J246	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	楕円形	4.3	1.8	1.7		0.0521		116	81
J247	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.3	2.7	1.4	1.6	0.0615		116	81
J248	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.3	2.6	1.7	1.9	0.0526			81
J249	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	3.1	1.1	1.7	0.0603		116	81
J250	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.2	3.1	0.7	1.4	0.0513		116	81
J251	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	3.7	0.7	1.2	0.0704		116	81
J252	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.2	3.5	1.1	1.3	0.0539		116	81
J253	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.2	2.9	1.3	1.9	0.0589		116	81
J254	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.2	2.4	1.7	2.2	0.0421			81
J255	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.2	2.4	1.4	1.9	0.0447		116	81
J256	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	2.8	1.0	1.4	0.0551		116	81
J257	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	2.3	1.2	1.5	0.0485		116	81
J258	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不全不定形	4.1	4.1	0.5	1.3	0.0652		116	81
J259	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.0	3.1	0.7	1.1	0.0821			81
J260	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.0	2.0	0.8	1.1	0.0410			81
J261	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	4.0	4.0	0.5	0.9	0.0543		116	81
J262	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.0	3.0	1.1	1.4	0.0524		116	81
J263	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.0	2.1	1.4	1.9	0.0343		116	81
J264	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.0	3.3	0.6	1.3	0.0599		116	81
J265	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	3.9	2.7	0.7	1.3	0.0436		116	81
J266	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	3.9	3.4	1.6	1.8	0.0587		116	81
J267	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	3.9	2.8	1.4	1.5	0.0429		116	81
J268	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	3.9	3.3	0.7	1.2	0.0591		116	81
J269	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	3.9	3.2	1.0	1.1	0.0583			81
J270	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	3.9	3.1	1.3		0.0617		116	81
J271	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	円形	3.9	3.0	1.2	1.8	0.0547		116	81
J272	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	3.9	3.9	1.0	1.3	0.0900		116	81
J273	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	3.9	3.9	0.9	1.2	0.0905		116	81
J274	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	楕円形	3.8	3.8	0.6	0.9	0.0485			81
J275	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	3.8	3.0	1.2	1.4	0.0385			81
J276	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	3.7	1.6	0.9	1.1	0.0259			81
J277	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	3.7	2.7	1.3	1.6	0.0382		116	81
J278	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	3.7	2.7	1.3	1.6	0.0510		116	81
J279	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	3.7	4.0	1.0	1.2	0.0642		116	81
J280	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	3.7	2.9	1.1	1.2	0.0506		116	81

出土玉類一覽表

No	埋葬施設	種類	材質	色調	形態	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	備考	博図	図版
								小	大				
J281	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空緑透明	ほぼ円形	3.7	3.0	1.0	1.2	0.0499			81
J282	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空緑透明	ほぼ円形	3.6	3.6	0.4	0.9	0.0658			81
J283	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	3.6	3.7	0.4	1.3	0.0618		116	81
J284	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	3.5	2.2		1.0	0.0666			116 81
J285	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	3.5	2.4	1.0	1.2	0.0322			116 81
J286	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	3.4	3.4	0.7	0.9	0.0836			116 81
J287	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	3.4	3.1	1.3	1.3	0.0443			116 81
J288	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	3.3	3.3	1.4	1.6	0.0875			116 81
J289	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空緑透明	円形	3.3	1.9	1.1	1.2	0.0185			116 81
J290	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空緑透明	円形	3.2	2.2	1.3	1.5	0.0338			81
J291	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	3.1	3.1	1.0	1.1	0.0731			116 81
J292	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	3.0	3.0	0.6	1.0	0.0687			116 81
J293	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明	円形	2.9	2.9	1.6	1.6	0.0678			81
J294	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	2.8	2.8	1.4	1.7	0.0571			81
J295	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	2.7	2.7	0.5	1.8	0.0521		116	81
J296	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	2.6	2.6	0.7	1.2	0.0407			116 81
J297	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	2.3	2.3	1.1	1.3	0.0409			116 81
J298	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明	円形	2.2	2.2	1.6	1.9	0.0471			116 81
J299	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	淡青色透明		2.3	2.3			0.0263	細片		
J300	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明						0.0639	細片		
J301	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明						0.0224	小片		
J302	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空色透明						0.0223	小片		
J303	木棺墓群 5号墓	小玉	ガラス	空緑透明						0.0513	破損		
J304	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	7.8	5.8	1.9	2.4	0.4083		122	82
J305	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	7.6	4.5	2.8	3.2	0.2881			82
J306	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	7.4	3.8	2.8	2.9	0.2477		122	82
J307	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	7.3	5.9	2.2	2.4	0.2595			82
J308	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	7.3	5.7	2.1	2.5	0.2129		122	82
J309	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	7.3	4.7	1.8	2.1	0.2583		122	82
J310	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	7.2	6.0	1.8	2.1	0.2572		122	82
J311	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	7.2	6.7	2.2	2.9	0.4119		122	82
J312	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	7.1	4.5	2.1	2.8	0.2509			82
J313	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	7.0	5.7	1.8	2.3	0.2354			82
J314	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.9	4.8	2.0	2.8	0.2589			82
J315	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	6.9	5.2	2.1	2.3	0.2842		122	82
J316	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	6.8	4.5	1.8		0.2383			82
J317	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.8	5.9	1.7	2.0	0.2384			82
J318	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	やや楕円形	6.6	4.3	2.0	2.4	0.2167		122	82
J319	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	6.6	6.0	1.8	1.9	0.2424		122	82
J320	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.5	3.0	1.8	2.1	0.1653			82
J321	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	6.5	5.5	1.9	2.0	0.2630		122	82
J322	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	6.5	4.6	2.4	3.0	0.1940		122	82
J323	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	6.4	4.5	2.0	2.7	0.1846		122	82
J324	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.3	6.0	2.1	2.5	0.2465		122	82
J325	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.1	2.6	1.8	2.0	0.1396		122	82
J326	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.0	3.4	1.8	2.0	0.1387		122	82
J327	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	5.8	5.5	1.8		0.2428		122	82
J328	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明		7.0	3.7	1.8	2.3	0.2505			
J329	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明						0.0754	細片		
J330	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明						0.0301	細片		
J331	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明						0.0947	細片		
J332	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明						0.0207	細片		
J333	木棺墓群 6号墓	小玉	ガラス	青色透明						0.0354	細片		
J334	木棺墓群 11号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.9	4.2	1.2	2.1	0.0824		138	82
J335	木棺墓群 11号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	4.3	2.2	1.6	2.0	0.0379			
J336	木棺墓群 11号墓	小玉	ガラス	空色透明	円形	3.6	3.0	1.0	1.4	0.0410		138	82
J337	木棺墓群 11号墓	小玉	ガラス	空色透明	円形	3.6	3.0	1.2		0.0428		138	82
J338	木棺墓群 11号墓	小玉	ガラス	空色透明		4.1	3.2			0.0716	千欠		
J339	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	6.2	3.5	1.6	2.1	0.1562		142	83
J340	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	6.1	5.0	1.3	2.1	0.2152		142	83
J341	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.2	4.5	1.0	1.8	0.1261		142	83
J342	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	淡青色不透明	楕円形	5.2	3.5	1.7		0.1190		142	83
J343	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	5.0	3.6	1.6	1.9	0.0997		142	83
J344	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	5.0	4.1	1.3	1.9	0.0671		142	83
J345	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	5.0	3.6	0.7	1.3	0.0944		142	83
J346	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	空色透明	円形	5.0	2.9	1.6	1.8	0.0886		142	83
J347	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	5.0	3.0	2.0	2.1	0.0810		142	83
J348	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	楕円形	5.0	3.8	1.3	1.9	0.0903		142	83
J349	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	5.0	3.6	1.1	1.2	0.0956		142	83
J350	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	5.0	3.5	0.7	1.1	0.1074		142	83

出土玉類一覽表

No.	埋藏施設	種類	材質	色調	形態	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	備考	図版
								小	大			
J351	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	5.0	3.5	1.3	1.9	0.0911		142 83
J352	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	やや不定形	4.9	2.9	1.8	2.0	0.0866		142 83
J353	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.9	3.2	0.9	1.5	0.0897		142 83
J354	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.9	3.3	1.3	1.5	0.0889		142 83
J355	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.9	4.0	1.0	1.4	0.1084		142 83
J356	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	楕円形	4.9	3.7	1.1	1.5	0.1054		142 83
J357	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.8	3.4	1.3	1.6	0.0899		142 83
J358	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.8	3.1	1.1	1.4	0.0835		83
J359	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.8	5.1	1.4	1.9	0.1294		83
J360	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.8	3.2	1.6	2.0	0.0758		142 83
J361	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.8	4.1	1.3	1.4	0.0939		142 83
J362	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.8	3.7	1.8		0.0967		142 83
J363	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.8	3.0	1.2	1.9	0.0721		142 83
J364	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.8	4.7	0.8	1.4	0.1248		142 83
J365	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	やや楕円形	4.7	3.3	1.5	1.6	0.0858		83
J366	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.7	4.0	1.0	1.3	0.0948		142 83
J367	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.7	3.1	0.7	1.1	0.0883		142 83
J368	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.7	3.4	1.0	1.2	0.0918		142 83
J369	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.7	3.0	1.3	1.6	0.0701		83
J370	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.7	3.7	1.0	1.5	0.0887		83
J371	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.7	2.8	1.2	1.6	0.0764		142 83
J372	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.6	3.2	1.8		0.0781		142 83
J373	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.6	3.2	2.0	2.1	0.0784		142 83
J374	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.6	3.3	0.9	1.6	0.0798		142 83
J375	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.6	2.9	1.1	1.3	0.0722		142 83
J376	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.6	2.9	1.2	1.7	0.0791		142 83
J377	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.6	3.0	0.9	1.5	0.0665		142 83
J378	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.6	3.0	1.3	1.6	0.0722		142 83
J379	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.6	3.2	1.0	1.6	0.0825		142 83
J380	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.6	1.5	1.2	2.1	0.0532		83
J381	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.6	2.6	1.8		0.0637		142 83
J382	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.6	3.2	0.8	1.2	0.0823		142 83
J383	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.6	3.0	1.7	1.8	0.0675		142 83
J384	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.6	3.5	1.1	1.4	0.0715		142 83
J385	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.6	4.0	0.7	1.3	0.0846		83
J386	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.5	3.3	1.3	1.5	0.0656		83
J387	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.5	3.6	1.2		0.0937		142 83
J388	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.5	2.8	1.0	2.0	0.0704		142 83
J389	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.5	4.0	1.0		0.0998		142 83
J390	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.5	3.6	0.6	1.5	0.0777		142 83
J391	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.5	3.0	1.0		0.0805		142 83
J392	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.5	3.6	1.0	1.1	0.0928		142 83
J393	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.5	3.0	1.9	2.2	0.0579		142 83
J394	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.5	3.2	1.3	1.5	0.0823		83
J395	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	淡緑色透明	ほぼ円形	4.5	3.0	1.5		0.0810		83
J396	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.4	4.0	1.0	1.2	0.0589		142 83
J397	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.4	3.6	1.4	1.5	0.0832		83
J398	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.4	2.7	1.3	1.4	0.0618		83
J399	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.4	2.9	1.2	2.2	0.0576		142 83
J400	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.4	3.2	1.1	1.3	0.0849		142 83
J401	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.4	4.4	1.0	1.2	0.0855		83
J402	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.4	3.9	1.1	1.8	0.0711		142 83
J403	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.3	4.1	1.4	1.7	0.0889		83
J404	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.3	2.6	1.2	1.5	0.0447		142 83
J405	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.3	3.9	0.8	1.4	0.0746		142 83
J406	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.3	2.9	1.2	1.4	0.0649		142 83
J407	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.3	2.9	1.0	1.5	0.0668		142 83
J408	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	円形	4.3	3.5	1.3		0.0787		83
J409	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.3	2.3	1.4		0.0325		83
J410	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.2	3.9	1.0	1.6	0.0753		142 83
J411	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	4.0	1.1	1.5	0.0663		142 83
J412	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.2	3.3	1.0	1.2	0.0746		83
J413	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.2	2.4	1.3	1.5	0.0588		142 83
J414	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.2	3.2	1.0	1.2	0.0597		142 83
J415	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	3.5	0.6	1.5	0.0630		142 83
J416	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	やや不定形	4.1	3.0	1.0	1.5	0.0630		142 83
J417	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.1	4.0	1.7	1.8	0.0630		142 83
J418	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.1	2.9	0.8	1.6	0.0738		142 83
J419	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.1	3.0	1.2	1.5	0.0524		83
J420	本館墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.1	2.0	1.1	1.3	0.0454		83

出土玉類一覧表

No	埋葬施設	種類	材質	色調	形態	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	備考	図版
								小	大			
J421	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	楕円形	4.1	3.6	1.9		0.0359		142 83
J422	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	楕円形	4.1	3.0	1.4		0.0614		142 83
J423	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	円形	4.0	2.8	1.8		0.0451		142 83
J424	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	楕円形	4.0	3.7	1.5	1.9	0.0562		142 83
J425	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	ほぼ円形	4.0	4.5	0.9	1.4	0.0496		142 83
J426	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	円形	4.0	3.9	1.0	1.1	0.0703		142 83
J427	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	円形	4.0	3.2	1.3	1.5	0.0661		142 83
J428	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	ほぼ円形	4.0	3.2	1.5	1.7	0.0563		142 83
J429	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	やや楕円形	4.0	3.0	0.9	1.0	0.0531		142 83
J430	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	円形	4.0	2.3	1.0	1.2	0.0475		142 83
J431	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.0	3.5	1.2	1.3	0.0699		142 83
J432	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	ほぼ円形	4.0	4.2	0.9	1.2	0.0682		87
J433	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.0	3.0	1.2	1.5	0.0562		142 87
J434	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	楕円形	4.0	3.6	1.2	1.4	0.0637		87
J435	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.0	3.0	1.2	1.4	0.0530		142 87
J436	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	3.9	3.5	1.0	1.2	0.0666		142 87
J437	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	3.9	3.2	1.1	1.3	0.0523		142 87
J438	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	3.9	3.5	1.3	1.4	0.0636		142 87
J439	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	3.9	3.2	1.3	1.4	0.0696		142 87
J440	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	3.9	2.6	1.0	1.3	0.0449		87
J441	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	ほぼ円形	3.9	2.8	1.4	1.7	0.0521		87
J442	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	円形	3.9	3.2	0.4	1.1	0.0635		83
J443	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	3.8	3.0	1.1	1.8	0.0464		83
J444	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	不定形	3.8	2.2	1.4	1.5	0.0383		142 83
J445	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	ほぼ円形	3.8	3.2	1.2	1.3	0.0548		142 83
J446	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	円形	3.6	2.6	1.0	1.3	0.0442		142 83
J447	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	3.6	2.7	1.3		0.0406		83
J448	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	3.5	3.5	0.8	1.2	0.0529		142 83
J449	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	3.4	2.7	1.5	1.6	0.0380		83
J450	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明	円形	3.0	3.1	1.5		0.0489		142 83
J451	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明		4.6	3.0	1.4		0.0473	平欠	
J452	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明				2.8		0.0373	平欠	
J453	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	白色透明								
J454	木棺墓群 12号墓	小玉	ガラス	青色透明						0.0373	細片	
J455	木棺墓群 15号墓	管玉	ガラス	青色透明		6.3	27.7	1.8	2.0	1.8536		156 85
J456	木棺墓群 15号墓	管玉	ガラス	青色透明		6.5	25.9	1.7	1.9	1.7389		156 85
J457	木棺墓群 15号墓	管玉	ガラス	青色透明		6.0	25.6	1.5	1.8	1.5135		156 85
J458	木棺墓群 15号墓	管玉	ガラス	青色透明		6.0	25.0	1.6	1.8	1.6086		156 85
J459	木棺墓群 15号墓	管玉	ガラス	青色透明		6.2	23.6	1.3	1.5	1.8912		156 85
J460	木棺墓群 15号墓	管玉	ガラス	青色透明		5.9	23.2	1.8	1.8	1.3786		156 85
J461	木棺墓群 15号墓	管玉	ガラス	青色透明		6.4	24.0	2.5	2.5	1.6000		156 85
J462	木棺墓群 15号墓	管玉	ガラス	青色不透明		6.5	21.6	1.8	1.8	1.3490		156 85
J463	木棺墓群 15号墓	管玉	ガラス	青色透明		6.3	21.4	1.3	1.8	1.4702		156 85
J464	木棺墓群 15号墓	管玉	ガラス	青色透明		6.7	13.8	1.8	2.0	0.9761		156 85
J465	木棺墓群 15号墓	管玉	ガラス	青色透明		5.4	13.0	1.3	1.5	0.6171		156 85
J466	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	白色透明	不定形	5.5	2.7	1.7	2.0	0.0888		157 84
J467	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.3	3.2	1.0	1.4	0.1146		157 84
J468	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.2	3.2	1.2	1.7	0.1002		157 84
J469	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	5.1	2.7	1.3	1.6	0.0853		157 84
J470	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	白色透明	ほぼ円形	5.1	2.9	2.2	1.5	0.0872		84
J471	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	5.0	2.7	1.3	1.8	0.0914		167 84
J472	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	5.0	3.1	1.3	2.0	0.0903		167 84
J473	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	白色透明	不定形	4.9	2.6	1.0	1.1	0.0751		167 84
J474	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	白色透明	不定形	4.9	2.8	1.5	1.7	0.0825		167 84
J475	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.9	2.2	1.2	1.7	0.0674		84
J476	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	4.8	3.1	1.2	1.8	0.0751		167 84
J477	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	白色透明	不定形	4.7	3.1	1.4	1.8	0.0844		84
J478	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	4.6	3.6	1.2	1.2	0.0745		167 84
J479	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.6	2.0	0.9	1.4	0.0574		84
J480	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	白色透明	ほぼ円形	4.6	2.2	1.3	1.6	0.0606		167 84
J481	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	白色透明	楕円形	4.6	2.4	1.1	1.2	0.0642		167 84
J482	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.6	3.4	0.7	1.6	0.0779		84
J483	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.5	3.0	1.6	1.9	0.0671		167 84
J484	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.5	3.5	0.9	1.3	0.0828		84
J485	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	白色透明	不定形	4.5	3.1	1.3	1.5	0.0741		167 84
J486	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	白色透明	不定形	4.5	3.0	0.9	1.7	0.0701		167 84
J487	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.5	3.2	0.7	0.9	0.0893		167 84
J488	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.5	2.3	1.2	1.5	0.0562		167 84
J489	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	白色透明	ほぼ円形	4.5	3.5	1.7	1.8	0.0919		167 84
J490	木棺墓群 15号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.5	3.2	1.5	1.5	0.0736		167 84

出土玉類一覽表

No	埋藏施設	種類	材質	色調	形態	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	備考	所属
								小	大			
1491	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	円形	4.4	4.2	1.7	1.9	0.0915		157 84
1492	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	円形	4.4	3.9	0.6	1.2	0.0853		157 84
1493	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	4.4	3.4	0.9	1.5	0.0713		157 84
1494	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.4	2.8	1.3	1.8	0.0525		157 84
1495	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.4	2.8	1.2	1.4	0.0646		157 84
1496	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.3	1.9	1.1	1.7	0.0511		157 84
1497	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.3	2.8	0.8	1.2	0.0595		157 84
1498	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	4.3	3.8	0.8	1.4	0.0813		157 84
1499	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.3	3.0	1.5	1.5	0.0599		84
1500	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.3	2.8	1.2	1.4	0.0616		157 84
1501	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	4.3	3.1	1.3	1.7	0.0638		157 84
1502	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	円形	4.3	3.2	1.2	1.4	0.0735		157 84
1503	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.3	2.1	1.3	1.5	0.0524		157 84
1504	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	円形	4.3	2.6	1.5	2.1	0.0505		157 84
1505	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.3	2.2	0.9	1.5	0.0587		84
1506	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	4.3	3.3	0.8	1.2	0.0582		84
1507	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	やや不定形	4.2	4.3	1.3	1.2	0.1011		157 84
1508	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	やや不定形	4.2	2.5	1.0	1.4	0.0481		157 84
1509	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	4.2	4.0	0.9	1.2	0.0770		84
1510	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	4.2	3.6	1.2	1.3	0.0758		84
1511	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.2	3.3	0.4	1.3	0.0721		84
1512	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.2	1.8	1.8	2.0	0.0682		84
1513	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.2	2.9	0.7	1.2	0.0549		157 84
1514	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	4.2	4.0	0.8	1.7	0.0910		84
1515	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.1	2.4	1.2	1.9	0.0428		157 84
1516	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.1	3.6	1.5	1.8	0.0562		84
1517	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.1	3.9	0.5	1.2	0.0755		84
1518	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.1	2.6	1.3	1.7	0.0586		84
1519	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	やや不定形	4.1	3.0	1.1	1.2	0.0591		84
1520	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.1	2.6	0.9	1.4	0.0509		157 84
1521	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	円形	4.1	1.9	1.4	1.9	0.0382		157 84
1522	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.1	2.6	1.5	1.6	0.0490		157 84
1523	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.1	3.3	0.9	1.3	0.0733		157 84
1524	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	4.0	2.7	0.9	1.1	0.0550		157 84
1525	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.0	3.1	1.1	1.3	0.0608		157 84
1526	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	4.0	4.0	1.1	1.5	0.0553		157 84
1527	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	円形	4.0	2.8	0.6	1.2	0.0541		84
1528	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.0	2.2	1.1	1.4	0.0471		157 84
1529	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.0	2.5	1.0	1.3	0.0451		84
1530	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	4.0	3.3	0.9	1.3	0.0629		84
1531	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	3.9	2.4	1.4	1.6	0.0448		84
1532	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	3.9	2.2	1.0	1.4	0.0448		157 84
1533	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	3.9	3.1	1.1	1.4	0.0549		157 84
1534	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	3.9	3.8	0.6	1.2	0.0637		157 84
1535	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	3.8	2.8	0.2	1.7	0.0454		157 84
1536	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	3.8	2.3	1.3	1.3	0.0387		157 84
1537	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	3.8	3.6	1.0	1.4	0.0590		157 84
1538	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	3.7	3.3	1.3	1.3	0.0495		84
1539	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	3.7	2.2	1.1	1.6	0.0383		157 84
1540	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	3.7	3.5	0.4	1.2	0.0654		84
1541	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	3.6	3.4	0.8	1.4	0.0547		157 84
1542	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	3.5	1.9	1.0	1.2	0.0355		157 84
1543	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	淡緑透明						0.0078	細片	
1544	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	黄緑不透明				0.9	1.4	0.0452	細片	
1545	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明						0.0221	細片	
1546	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	黄緑不透明						0.0356	細片	
1547	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明						0.0650	細片	
1548	本館庫群 15号墓	小玉	ガラス	空色透明						0.0382	破片	
1549	本館庫群 18号墓	碧玉	ガラス	青色透明		4.6	16.7	1.8	1.8	0.5772		176 88
1550	本館庫群 18号墓	碧玉	ガラス	黄緑透明		4.7	16.6	1.1	1.6	0.6236		176 88
1551	本館庫群 18号墓	碧玉	ガラス	青色透明		4.8	16.2	1.3	1.8	0.6019		176 88
1552	本館庫群 18号墓	碧玉	ガラス	青色透明		4.8	15.9	1.8	2.0	0.5724		176 88
1553	本館庫群 18号墓	碧玉	ガラス	青色透明		4.4	14.8	1.9	1.9	0.4727		176 88
1554	本館庫群 18号墓	碧玉	ガラス	青色透明		4.5	14.2	2.0	2.0	0.4788		176 88
1555	本館庫群 18号墓	碧玉	ガラス	淡青緑透明		4.6	13.1	1.4	1.8	0.4449		176 88
1556	本館庫群 18号墓	碧玉	ガラス	淡青緑透明		3.8	13.1	1.1	1.5	0.3120		176 88
1557	本館庫群 18号墓	碧玉	ガラス	淡青緑透明		4.6	12.5	1.7	1.7	0.4230		176 88
1558	本館庫群 18号墓	碧玉	ガラス	淡青緑透明		4.7	12.2	1.8	2.0	0.4378		176 88
1559	本館庫群 18号墓	碧玉	ガラス	淡青緑不透明		4.7	11.9	1.7	1.9	0.4303		176 88
1560	本館庫群 18号墓	碧玉	ガラス	淡青緑不透明		4.7	11.5	1.9	1.9	0.4033		176 88

出土玉類一覽表

No.	埋葬施設	種類	材質	色調	形態	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	備考	採掘 図
								小	大			
J561	木棺墓群 18号墓	碧玉	ガラス	青色透明		4.8	11.4	1.3	1.6	0.4226		176 88
J562	木棺墓群 18号墓	碧玉	ガラス	青色透明		4.6	11.2	1.6	2.0	0.3653		176 88
J563	木棺墓群 18号墓	碧玉	ガラス	淡青緑透明		4.3	11.1	1.3	1.5	0.3446		176 88
J564	木棺墓群 18号墓	碧玉	ガラス	青色透明		4.7	11.1	1.9	1.9	0.4110		176 88
J565	木棺墓群 18号墓	碧玉	ガラス	淡青色透明		4.6	10.9	1.5	1.8	0.3733		176 88
J566	木棺墓群 18号墓	碧玉	ガラス	淡青色透明		4.6	10.7	1.8	1.9	0.3740		176 88
J567	木棺墓群 18号墓	碧玉	ガラス	淡青色透明		4.7	10.5	1.8	1.8	0.3580		176 88
J568	木棺墓群 18号墓	碧玉	ガラス	淡青緑透明		4.5	10.4	1.8	1.8	0.3675		176 88
J569	木棺墓群 18号墓	碧玉	ガラス	青色透明		4.5	10.3	1.8	2.0	0.3387		176 88
J570	木棺墓群 18号墓	碧玉	ガラス	青色透明		4.6	9.8	1.4	1.5	0.3433		176 88
J571	木棺墓群 18号墓	碧玉	ガラス	淡青色透明		4.4	9.8	1.9	1.9	0.2968		176 88
J572	木棺墓群 18号墓	碧玉	ガラス	淡青緑透明		4.6	9.7	2.0	2.2	0.2841		176 88
J573	木棺墓群 18号墓	碧玉	ガラス	淡青色透明		4.0				0.4243	破損	
J574	木棺墓群 18号墓	碧玉	ガラス			2.6		1.4	1.5	0.0568		
J576	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.6	11.9	0.9	1.2	0.1195		175 89
J576	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.0	8.9	0.9	1.2	0.0667		175 89
J577	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.4	9.8	0.9	1.0	0.0885		175 89
J578	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.6	8.5	1.2	1.3	0.0107	埋部若干欠	175 89
J579	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.1	8.1	0.9	1.0	0.0625		175 89
J580	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰色不透明		2.7	8.1	1.1	1.3	0.0811		175 89
J581	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.2	7.9	1.3	1.3	0.0963		175 89
J582	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.2	8.0	1.3	1.3	0.0575	埋部若干欠	175 89
J583	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉			2.0	7.8	0.4	0.5	0.0064		175 89
J584	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.0	7.5	0.9	1.1	0.0432		175 89
J585	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.1	7.5	0.9	1.2	0.0393		175 89
J586	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.1	7.3	1.0	1.3	0.0502		175 89
J587	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉			2.4	7.1	1.0	1.0	0.0603		175 89
J588	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰色不透明		1.9	6.7	0.9	1.0	0.0366		175 89
J589	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.0	6.9	1.0	1.2	0.0403		175 89
J590	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.0	6.5	1.0	1.1	0.0417	埋部若干欠	175 89
J591	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰色不透明		2.4	7.0	0.8	1.1	0.0622		175 89
J592	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.0	6.8	0.8	1.0	0.0409		175 89
J593	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		1.9	6.7	0.5	0.5	0.0332		175 89
J594	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		1.7	6.7	1.0	1.1	0.0333		175 89
J595	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		1.9	6.4	1.0	1.2	0.0370		175 89
J596	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.1	6.4	0.8	1.0	0.0404		175 89
J597	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	透灰緑不透明		2.0	6.4	1.1	1.2	0.0448		175 89
J598	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	透灰緑不透明		2.2	3.0	0.8	0.9	0.0575		175 89
J599	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		1.9	6.2	0.9	1.0	0.0378		175 89
J600	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		1.9	6.3	1.0	1.0	0.0336		175 89
J601	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.4	6.2	0.8	1.2	0.0444		175 89
J602	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		1.8	6.1	0.8	0.8	0.0278		175 89
J603	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		1.8	6.1	1.2	1.2	0.0270		175 89
J604	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		1.9	6.1	1.0	1.2	0.0322		175 89
J605	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.1	6.0	1.0	1.1	0.0408	埋部若干欠	89
J606	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	透灰緑不透明		2.1	5.9	1.1	1.1	0.0454		175 89
J607	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.1	5.9	1.0	1.2	0.0451		175 89
J608	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	透灰緑不透明		2.0	5.8	1.0	1.0	0.0386		175 89
J609	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	淡灰色不透明		1.9	5.8	1.0	1.2	0.0336		175 89
J610	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.0	5.7	1.0	1.0	0.0290		175 89
J611	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰色不透明		1.9	5.6	1.0	1.1	0.0288		175 89
J612	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	透灰緑不透明		2.1	5.5	1.0	1.0	0.0413		175 89
J613	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	透灰緑不透明		1.9	5.5	1.1	1.0	0.0294		175 89
J614	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	透灰緑不透明		2.0	5.5	1.0	1.1	0.0387		175 89
J615	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰色不透明		2.7	5.5	2.0		0.0572		175 89
J616	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		1.9	5.4	0.8	1.0	0.0331		175 89
J617	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	透灰緑不透明		2.0	5.4	1.0	1.0	0.0361		175 89
J618	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		1.7	5.3	0.5	1.0	0.0273		175 89
J619	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉			1.9	5.2	0.5	0.5	0.0214		175 89
J620	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	透灰緑不透明		1.8	5.2	0.9	1.0	0.0330		175 89
J621	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.0	5.4	1.0	1.0	0.0281	埋部若干欠	175 89
J622	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.1	5.1	1.1	1.4	0.0282		175 89
J623	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		2.0	4.9	0.9	1.0	0.0327	破片	175 89
J624	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰色不透明		2.2	4.7	1.1	1.2	0.0372		175 89
J625	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	透灰緑不透明		2.0	4.5	1.0	1.0	0.0366		175 89
J626	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰緑不透明		1.9	4.6	0.9	1.1	0.0337		175 89
J627	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	灰色不透明		1.7	4.2	1.0	1.0	0.0185		175 89
J628	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	透灰緑不透明		1.8	4.1	0.9	1.0	0.0188		175 89
J629	木棺墓群 18号墓	碧玉	碧玉	透灰緑不透明		2.5	3.6	1.0	1.0	0.0297	破片	175 89
J630	木棺墓群 18号墓	碧玉	ガラス	青色透明	不定形	7.7	3.1	1.4	2.0	0.2482		86

出土玉類一覽表

No.	埋蔵施設	種類	材質	色調	形態	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	備考	編年 図版
								小	大			
J631	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	7.0	5.0	1.7	2.1	0.2739		172 86
J632	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	7.0	4.0	1.6	2.1	0.2263		172 86
J633	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.9	5.0	1.6	2.0	0.2604		86
J634	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.8	5.7	1.7	1.9	0.3132		172 86
J635	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.8	4.3	1.5	2.4	0.2439		172 86
J636	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.7	5.1	1.6	2.2	0.2656		86
J637	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.7	5.0	2.4	2.4	0.2760		86
J638	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.7	5.2	1.4	1.5	0.2843		86
J639	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.7	5.3	1.6	2.0	0.2786		172 86
J640	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	楕円形	6.7	4.3	1.4	1.8	0.2887		172 86
J641	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.6	5.4	1.5	2.6	0.2806		172 86
J642	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.6	4.1	2.2	2.8	0.1860		172 86
J643	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.6	5.0	1.4	2.1	0.2845		86
J644	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	6.6	5.2	2.2	2.8	0.2506		172 86
J645	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.6	7.7	2.6	2.9	0.3299		86
J646	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.5	5.3	0.9	2.1	0.1938		172 86
J647	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.5	5.0	1.3	1.6	0.2712		172 86
J648	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	6.5	5.1	1.4	1.9	0.2949		172 86
J649	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	6.5	5.2	2.0		0.2398		86
J650	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	6.4	2.9	2.0	2.4	0.1799		172 86
J651	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	6.4	6.1	1.0	1.9	0.2643		86
J652	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明		6.4	3.7	2.2	2.8	0.1820		86
J653	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明		6.4	6.3	1.7	1.9	0.2732		86
J654	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	6.4	4.8	1.7	2.4	0.2182		172 86
J655	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.3	5.7	1.5	1.6	0.2490		86
J656	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.3	4.2	1.8	2.1	0.2160		172 86
J657	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	6.3	6.8	1.6	2.4	0.3180		172 86
J658	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.3	4.1	1.2	2.2	0.2170		86
J659	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.3	4.5	1.9	2.3	0.2204		86
J660	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.3	4.5	1.2	1.8	0.2334		172 86
J661	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.3	4.8	2.3	1.9	0.1912		172 86
J662	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青緑透明	不定形	6.3	4.7	1.6	1.9	0.2149		172 86
J663	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	6.3	4.3	2.1	2.4	0.1946		172 86
J664	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	ほぼ円形	6.3	5.5	0.8	1.8	0.2968		86
J665	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	6.3	5.0	1.5	1.8	0.2442		172 86
J666	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	6.3	5.1	1.6	2.1	0.2228		172 86
J667	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.3	5.4	1.1	1.8	0.2303		172 86
J668	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	濃青色透明	不定形	6.2	5.0	1.3	1.9	0.2582		172 86
J669	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	6.2	3.7	1.9	2.1	0.1673		172 86
J670	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	6.2	4.7	1.8	1.9	0.1802		172 86
J671	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.2	4.9	1.6	2.0	0.2123		86
J672	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	6.2	4.2	1.9	2.2	0.2307		172 86
J673	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.1	5.1	0.9	1.8	0.2388		86
J674	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.1	4.0	1.5	2.3	0.1646		172 86
J675	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.1	5.2	1.6	2.2	0.2851		172 86
J676	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	6.1	5.6	0.9	1.7	0.2252		172 86
J677	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.1	5.6	2.2	2.6	0.0626		172 86
J678	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	6.0	4.6	1.4	2.1	0.1941		172 86
J679	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	ほぼ円形	6.0	4.3	1.3	2.0	0.1766		172 86
J680	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	6.0	5.5	0.9	1.5	0.2836		172 86
J681	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	楕円形	6.0	5.3	1.2	1.8	0.2464		172 86
J682	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明		6.0	5.7	1.8	2.0	0.2678		86
J683	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	6.0	3.9	1.5	1.9	0.1679		172 86
J684	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	6.0	4.9	1.2	1.6	0.2228		172 86
J685	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.9	5.0	1.4	1.7	0.2204		86
J686	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.9	3.6	1.5	1.7	0.1687		86
J687	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	5.9	5.2	1.5	1.7	0.2033		172 86
J688	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明	円形	5.8	3.7	1.3	1.8	0.1516		172 86
J689	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明		5.8	4.4	1.3	2.0	0.1734		86
J690	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明	不定形	5.8	4.2	1.0	1.6	0.1621		172 86
J691	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	やや楕円形	5.8	3.6	0.7	1.4	0.1351		172 86
J692	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	5.8	4.3	1.5	1.6	0.1749		86
J693	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	やや不定形	5.8	4.4	0.9	1.3	0.2194		86
J694	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.7	3.8	0.9	1.9	0.1514		86
J695	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	5.7	3.9	1.3	2.1	0.1492		172 86
J696	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明	ほぼ円形	5.7	2.8	1.2	1.4	0.1246		172 86
J697	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空色透明	楕円形	5.7	4.6	1.3	1.7	0.1579		172 86
J698	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	不定形	5.7	4.9	1.2	1.9	0.1763		172 86
J699	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.7	5.5	1.2	1.5	0.2335		86
J700	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	やや不定形	5.6	3.8	1.2	1.9	0.1540		172 86

出土玉類一覽表

No	埋葬施設	種類	材質	色調	形態	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	備考	採掘 段階
								小	大			
J701	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.6	4.0	0.9	1.7	0.1369		85
J702	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.6	4.1	1.0	1.9	0.1338		172 86
J703	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	5.6	3.1	0.6	1.7	0.1174		172 86
J704	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.6	5.5	1.9	2.0	0.2025		86
J705	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	5.6	4.5	1.5	2.3	0.1763		86
J706	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.6	4.1	1.1	1.6	0.1326		172 86
J707	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.6	3.8	1.0	1.5	0.1205		86
J708	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.5	3.8	0.9	1.4	0.1407		172 86
J709	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.5	4.5	1.0	1.5	0.1579		86
J710	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	5.4	3.9	1.6	1.6	0.1534		86
J711	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	5.4	4.7	1.2	1.5	0.1646		172 86
J712	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.4	3.5	1.0	1.6	0.1282		172 86
J713	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	5.4	4.1	1.8	1.9	0.1418		172 86
J714	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	5.4	4.5	1.5	1.9	0.1688		172 86
J715	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.4	3.4	1.4	1.8	0.0990		172 86
J716	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	やや不定形	5.4	4.2	1.0	1.4	0.1437		172 86
J717	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	5.3	3.7	1.0	1.3	0.1260		172 86
J718	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.3	3.9	0.7	1.3	0.1383		172 86
J719	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.2	4.3	1.2	1.4	0.1197		86
J720	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.2	3.6	1.5	1.8	0.1148		86
J721	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	5.2	3.1	1.4	2.2	0.1068		172 86
J722	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.1	3.8	0.6	1.2	0.1229		86
J723	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.1	3.5	1.6	1.9	0.1121		86
J724	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	5.1	5.2	1.0	1.3	0.1573		172 86
J725	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	5.1	4.2	1.6	1.8	0.1401		172 86
J726	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.1	3.8	1.0	2.2	0.0957		86
J727	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	5.0	3.4	1.7	2.1	0.1671		172 86
J728	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	5.0	3.9	0.9	1.5	0.1294		172 86
J729	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.0	3.6	1.3	1.6	0.0984		172 86
J730	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.0	4.1	1.4	1.5	0.1137		172 86
J731	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.0	4.5	1.0	1.3	0.1216		172 86
J732	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	5.0	3.8	1.3	1.8	0.1060		85
J733	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.9	4.6	1.4	1.7	0.1190		172 86
J734	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	4.9	4.2	1.4	1.7	0.1196		172 86
J735	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.9	3.5	1.6	2.1	0.0910		172 86
J736	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.9	4.3	1.0	1.2	0.1139		172 86
J737	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.8	3.9	1.0	1.4	0.1182		172 86
J738	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	4.8	3.7	1.0	1.8	0.0933		172 86
J739	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.7	3.6	0.9	1.5	0.1006		172 86
J740	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.7	3.9			0.1088		172 86
J741	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.6	4.2	1.3	2.0	0.1189		172 86
J742	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	4.6	3.1	0.3	0.9	0.0966		172 86
J743	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.6	3.5	1.2	1.4	0.0947		172 86
J744	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	4.5	4.0	1.7	2.0	0.0990		172 86
J745	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	やや不定形	4.5	4.4	1.1	2.0	0.0940		172 86
J746	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	4.5	3.0	0.7	1.4	0.1172		173 86
J747	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.5	4.8	1.8	2.0	0.1016		86
J748	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.5	4.1	0.5	1.1	0.0886		173 86
J749	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.5	4.8	0.9	1.5	0.1104		86
J750	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.4	4.0	1.1	1.2	0.0803		86
J751	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	4.4	4.0	0.6	1.1	0.0653		173 86
J752	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.4	3.8	1.0	1.5	0.0890		173 86
J753	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.3	4.1	0.5	1.8	0.0924		173 86
J754	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	4.3	3.2	1.2	1.4	0.0744		173 86
J755	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	やや不定形	4.3	4.3	0.8	1.1	0.1046		173 86
J756	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.3	5.1	1.0	1.2	0.1259		86
J757	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.3	4.1	0.9	1.3	0.1017		173 86
J758	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	4.2	4.9	0.8	1.4	0.0856		173 86
J759	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	3.8	1.1	1.7	0.0762		173 86
J760	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	5.1	1.2	1.6	0.1148		86
J761	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.2	4.6	0.2	0.6	0.0973		86
J762	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	やや不定形	4.1	2.9	1.1	1.1	0.0602		173 86
J763	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.1	4.1	0.9	1.4	0.0842		173 86
J764	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	4.1	3.3	1.0	1.2	0.0688		173 86
J765	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	円形	4.1	3.4	1.0	1.3	0.0997		86
J766	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	楕円形	4.0	3.4	1.0	1.2	0.0670		173 86
J767	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	4.0	3.2	1.2	1.4	0.0680		173 86
J768	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	4.0	4.6	0.8	1.3	0.0988		173 86
J769	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	1412円形	4.0	3.0	1.2	1.4	0.0903		173 86
J770	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	円形	4.0	3.2	0.9	1.5	0.0670		173 86

出土玉類一覽表

No	埋葬施設	種類	材質	色調	形態	径 (mm)	高さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	備考	図 録
								小	大			
7771	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス		楕円形	4.0	3.6	0.5	1.3	0.0581		86
7772	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス		楕円形	4.0	3.5	0.7	1.3	0.0552		86
7773	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス		楕円形	4.0	3.5	1.1	1.1	0.0646		86
7774	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス		楕円形	4.0	3.1	1.0	1.4	0.0516		86
7775	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス		楕円形	4.0	2.8	0.8	1.0	0.0506		86
7776	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.9	3.7	1.5	1.8	0.0688		173 86
7777	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.9	3.8	1.2	1.8	0.0257		173 86
7778	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.9	2.5	1.1	1.8	0.0428		173 86
7779	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.9	3.1	1.0	1.2	0.0552		173 86
7780	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.9	3.8	0.7	1.1	0.0702		173 86
7781	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	ほぼ円形	3.9	3.1	0.8	1.3	0.0508		173 86
7782	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス		円形	3.9	3.3	0.7	1.1	0.0680		86
7783	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス		円形	3.9	3.3	1.0	1.2	0.0713		86
7784	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.8	3.9	0.9	1.2	0.0670		173 86
7785	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明		3.8	2.3	1.1	1.2	0.0046		173 86
7786	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明		3.8	4.7	1.1	1.1	0.0009		173 86
7787	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.7	3.7	0.5	0.9	0.0642		173 86
7788	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.7	1.5	1.3	1.7	0.0219		173 86
7789	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明	不定形	3.7	4.4			0.0628		173 86
7790	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明	やや不定形	3.7	1.6	1.1	1.4	0.0270		86
7791	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.6	3.3	0.9	1.2	0.0450		173 86
7792	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.6	3.4	0.8	1.0	0.0526		173 86
7793	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.6	3.5	0.8	1.1	0.0452		86
7794	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形	3.5	4.8	0.9	1.2	0.0606		173 86
7795	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.4	2.9	1.2	1.6	0.0258		173 86
7796	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明		3.4	3.7	0.8	1.1	0.0507		173 86
7797	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明		3.4	2.2	1.0	1.1	0.0317		86
7798	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明	円形	3.3	4.1	1.0	1.2	0.0607		173 86
7799	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明	楕円形	3.3	3.0	0.9	1.3	0.0374		173 86
7800	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明		5.3	5.3	2.4		0.1580	破片	
7801	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明		4.8	4.6	1.3	1.8	0.1101	J802と接合	
7802	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明						0.1204	J801と接合	
7803	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	青色透明	不定形		5.0	1.7	2.2	0.2633		
7804	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明						0.0790	破片	
7805	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明						0.0754	破片	
7806	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明						0.0620	破片	
7807	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡緑透明						0.0887	破片	
7808	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明						0.0294	破片	
7809	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	空白透明						0.0421	破片	
7810	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	淡青色透明						0.0456		
7811	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス		ほぼ円形	2.1	1.1	0.8	0.8	0.0049		87
7812	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	2.0	0.8	0.5	0.6	0.0045		87
7813	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	2.0	0.8	0.4	0.5	0.0041		87
7814	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	2.0	0.9	0.5	0.7	0.0025		87
7815	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	2.0	0.9	0.5	0.7	0.0016		87
7816	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	不定形	2.0	0.7	0.5	0.7	0.0038		87
7817	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	2.0	0.8	0.4	0.7	0.0058		87
7818	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	2.0	0.7	0.5	0.7	0.0037		87
7819	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	2.0	0.9	0.4	0.7	0.0045		87
7820	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.9	0.7	0.5	0.7	0.0039		87
7821	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.9	1.0	0.6	0.8	0.0045		87
7822	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.9	1.1	0.3	0.7	0.0049		87
7823	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.9	0.8	0.1	0.5	0.0037		87
7824	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.9	1.1	0.4	0.5	0.0054		87
7825	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.9	0.8	0.4	0.6	0.0037		87
7826	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	不定形	1.9	0.9	0.6	0.9	0.0034		87
7827	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	不定形	1.8	0.8	0.5	0.6	0.0013		87
7828	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.8	0.6	0.5	0.5	0.0029		87
7829	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.8	0.9	0.5	0.6	0.0038		87
7830	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.8	0.7	0.5	0.6	0.0037		87
7831	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.8	0.8	0.8	0.8	0.0036		87
7832	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.8	0.7	0.5	0.6	0.0037		87
7833	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	不定形	1.8	0.8	0.8	0.8	0.0036		87
7834	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.8	0.9	0.7	0.7	0.0030		87
7835	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.8	0.9	0.4	0.4	0.0044		87
7836	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	不定形	1.8	0.6	0.4	0.8	0.0021		87
7837	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.8	1.0	0.4	0.5	0.0040		87
7838	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.8	0.7	0.6	0.7	0.0031		87
7839	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.8	0.7	0.6	0.7	0.0021		87
7840	木棺墓群 18号墓	小玉	ガラス	緑色透明	ほぼ円形	1.8	1.1	0.4	0.5	0.0048		87

出土玉類一覧表

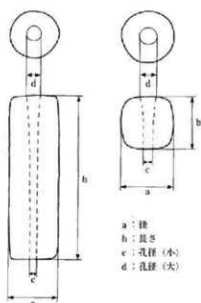
No	埋葬施設	種類	材質	色調	形態	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	備考	埋蔵	図版
								小	大				
J841	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.8	0.6	0.4	0.5	0.0028			87
J842	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.8	0.6	0.6	0.7	0.0019			87
J843	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.8	0.9	0.5	0.5	0.0007			87
J844	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.8	0.7	0.6	0.8	0.0003			87
J845	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.8	0.6	0.5	0.6	0.0028			87
J846	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.8	0.8	0.5	0.6	0.0038			87
J847	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.8	0.9	0.5	0.7	0.0048			87
J848	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.8	0.6	0.6	0.7	0.0038			87
J849	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	不定形	1.7	0.7	0.5	0.7	0.0023			87
J850	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.8	0.4	0.7	0.0031			87
J851	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	1.1	1.1	1.3	0.0038			87
J852	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.9	0.5	0.6	0.0038			87
J853	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.6	0.4	0.7	0.0023			87
J854	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.5	0.6	0.6	0.0024			87
J855	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.8	0.6	0.6	0.0038			87
J856	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.6	0.4	0.5	0.0025			87
J857	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.9	0.4	0.6	0.0031			87
J858	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.6	0.5	0.6	0.0022			87
J859	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.7	0.7	0.9	0.0025			87
J860	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.8	0.5	0.6	0.0039			87
J861	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	1.2	0.3	0.4	0.0035			87
J862	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.5	0.5	0.6	0.0021			87
J863	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	不定形	1.7	0.7	0.5	0.5	0.0018			87
J864	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.5	0.6	0.6	0.0018			87
J865	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.9	0.4	0.7	0.0039			87
J866	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.9	0.4	0.6	0.0034			87
J867	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.7	0.4	0.5	0.0023			87
J868	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.8	0.4	0.5	0.0033			87
J869	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.5	0.6	0.6	0.0021			87
J870	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.7	0.6	0.6	0.0034			87
J871	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.7	0.6	0.7	0.0021			87
J872	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.5	0.5	0.5	0.0027			87
J873	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.7	0.6	0.7	0.0023			87
J874	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	1.5	0.5	0.6	0.0031			87
J875	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	1.0	0.5	0.6	0.0038			87
J876	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.9	0.5	0.6	0.0039			87
J877	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.5	0.6	0.7	0.0029			87
J878	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.8	0.8	0.8	0.0031			87
J879	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.6	0.4	0.6	0.0029			87
J880	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.8	0.4	0.7	0.0026			87
J881	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.7	0.6	0.3	0.6	0.0025			87
J882	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.7	0.6	0.7	0.0018			87
J883	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	1.1	0.4	0.6	0.0035			87
J884	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	1.0	0.4	0.4	0.0027			87
J885	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.6	0.7	0.7	0.0022			87
J886	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.9	0.4	0.6	0.0023			87
J887	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	1.1	0.5	0.6	0.0034			87
J888	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.8	0.6	0.6	0.0026			87
J889	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.8	0.6	0.6	0.0026			87
J890	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.9	0.6	0.6	0.0031			87
J891	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.9	0.6	0.7	0.0037			87
J892	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	1.0	0.4	0.4	0.0034			87
J893	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	不定形	1.6	0.4	0.1	0.6	0.0012			87
J894	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.9	0.4	0.4	0.0031			87
J895	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.9	0.4	0.6	0.0033			87
J896	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	1.0	0.5	0.6	0.0030			87
J897	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.7	0.4	0.5	0.0020			87
J898	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.7	0.5	0.6	0.0024			87
J899	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.9	0.4	0.5	0.0026			87
J900	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.7	0.4	0.5	0.0029			87
J901	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	1.0	0.4	0.6	0.0038			87
J902	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	1.1	0.6	0.6	0.0034			87
J903	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.7	0.4	0.7	0.0023			87
J904	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	1.2	0.6	0.6	0.0038			87
J905	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.8	0.3	0.6	0.0027			87
J906	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.8	0.5	0.5	0.0027			87
J907	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	0.7	0.1	0.4	0.0022			87
J908	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	1.2	0.3	0.7	0.0042			87
J909	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	不定形	1.6	0.7	0.5	0.7	0.0019			87
J910	木棺墓群 18号墓	瑠璃玉	ガラス	紺色透明	1212円形	1.6	1.0	0.4	0.4	0.0019			87

出土玉類一覽表

No	埋藏施設	種類	材質	色調	形態	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	備考	持因	図版
								小	大				
1911	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.6	0.6	0.4	0.6	0.0026			87
1912	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.6	1.0	0.3	0.7	0.0030			87
1913	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.6	0.7	0.5	0.7	0.0022			87
1914	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.6	1.0	0.4	0.6	0.0037			87
1915	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	不定形	1.6	0.9	0.4	0.6	0.0022			87
1916	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.6	0.7	0.5	0.5	0.0027			87
1917	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.6	0.6	0.6	0.6	0.0024			87
1918	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.6	0.9	0.4	0.7	0.0034			87
1919	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.6	0.5	0.5	0.6	0.0021			87
1920	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.6	0.7	0.4	0.5	0.0027			87
1921	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.6	1.0	0.5	0.6	0.0039			87
1922	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.6	0.9	0.5	0.6	0.0030			87
1923	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.6	0.5	0.4	0.5	0.0026			87
1924	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.6	0.6	0.4	0.6	0.0035			87
1925	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.6	0.6	0.6	0.6	0.0031			87
1926	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	不定形	1.5	0.8	0.6	0.7	0.0016			87
1927	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.8	0.5	0.6	0.0022			87
1928	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	1.1	0.5	0.6	0.0036			87
1929	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	1.1	0.5	0.5	0.0036			87
1930	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.8	0.1	0.5	0.0019			87
1931	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.9	0.4	0.6	0.0027			87
1932	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.6	0.6	0.7	0.0011			87
1933	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	1.0	0.5	0.6	0.0027			87
1934	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	1.1	0.4	0.4	0.0029			87
1935	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	1.1	0.5	0.6	0.0034			87
1936	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	1.1	0.4	0.5	0.0027			87
1937	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.8	0.7	0.7	0.0016			87
1938	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	1.1	0.3	0.5	0.0021			87
1939	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	不定形	1.5	0.6	0.3	0.7	0.0019			87
1940	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.9	0.5	0.5	0.0022			87
1941	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.6	0.5	0.5	0.0011			87
1942	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.5	0.5	0.6	0.0016			87
1943	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.9	0.5	0.7	0.0027			87
1944	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.9	0.5	0.7	0.0025			87
1945	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.9	0.3	0.7	0.0029			87
1946	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.9	0.6	0.6	0.0026			87
1947	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.9	0.5	0.5	0.0026			87
1948	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.7	0.5	0.5	0.0017			87
1949	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.6	0.6	0.6	0.0022			87
1950	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.6	0.5	0.6	0.0025			87
1951	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.8	0.4	0.6	0.0043			87
1952	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.8	0.3	0.5	0.0027			87
1953	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.7	0.5	0.7	0.0022			87
1954	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.5	0.7	0.6	0.7	0.0027			87
1955	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	0.9	0.4	0.4	0.0019			87
1956	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	0.9	0.5	0.5	0.0030			87
1957	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	1.0	0.5	0.5	0.0027			87
1958	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	1.3	0.4	0.5	0.0035			87
1959	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	0.5	0.6	0.7	0.0023			87
1960	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	0.9	0.2	0.4	0.0021			87
1961	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	1.3	0.3	0.5	0.0036			87
1962	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	0.9	0.3	0.4	0.0025			87
1963	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	0.7	0.5	0.7	0.0016			87
1964	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	1.1	0.3	0.6	0.0027			87
1965	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	1.1	0.3	0.6	0.0021			87
1966	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	1.0	0.4	0.6	0.0021			87
1967	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	0.9	0.4	0.6	0.0029			87
1968	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	0.8	0.5	0.6	0.0021			87
1969	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	0.8	0.5	0.6	0.0029			87
1970	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	1.2	0.5	0.6	0.0032			87
1971	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	1.1	0.4	0.5	0.0030			87
1972	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	0.6	0.5	0.6	0.0030			87
1973	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	0.9	0.3	0.5	0.0030			87
1974	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	0.7	0.6	0.6	0.0023			87
1975	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	0.6	0.5	0.6	0.0034			87
1976	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.4	0.5	0.4	0.5	0.0029			87
1977	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.3	1.2	0.4	0.4	0.0031			87
1978	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.3	1.1	0.4	0.4	0.0027			87
1979	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	11:12円形	1.3	1.0	0.3	0.4	0.0026			87
1980	本館墓群 18号墓	碧玉	ガラス	紺色透明	不定形	1.3	0.7	0.5	0.5	0.0030			87

出土玉類一覽表

No	埋藏施設	種類	材質	色調	形態	径 (mm)	長さ (mm)	孔径 (mm)		重量 (g)	備考	押印	図版
								小	大				
J981	本指墓群 18号墓	冢玉	ガラス	紺色透明	1112円形	1.3	0.7	0.5	0.5	0.0015			87
J982	本指墓群 18号墓	冢玉	ガラス	紺色透明	1112円形	1.3	0.7	0.4	0.6	0.0023			87
J983	本指墓群 18号墓	冢玉	ガラス	紺色透明	1112円形	1.3	1.1	0.4	0.4	0.0027			87
J984	本指墓群 18号墓	冢玉	ガラス	紺色透明	1112円形	1.3	0.6	0.6	0.6	0.0034			87
J985	本指墓群 18号墓	冢玉	ガラス	紺色透明	1112円形	1.2	1.1	0.5	0.5	0.0013			87
J986	本指墓群 18号墓	冢玉	ガラス	紺色透明	1112円形	1.2	1.1	0.3	0.6	0.0019			87
J987	本指墓群 18号墓	冢玉	ガラス	紺色透明	1112円形	1.2	1.1	0.1	0.3	0.0016			87
J988	本指墓群 18号墓	冢玉	ガラス	紺色透明	1112円形	1.2	0.9	0.4	0.4	0.0016			87
J989	本指墓群 18号墓	冢玉	ガラス	紺色透明	1112円形	1.1	1.2	0.4	0.5	0.0022			87
J990	本指墓群 18号墓	冢玉	ガラス	紺色透明	1112円形	1.0	0.7	0.7	0.7	0.0059			87



写真図版





北東から



西から



北東から



北から



北西から



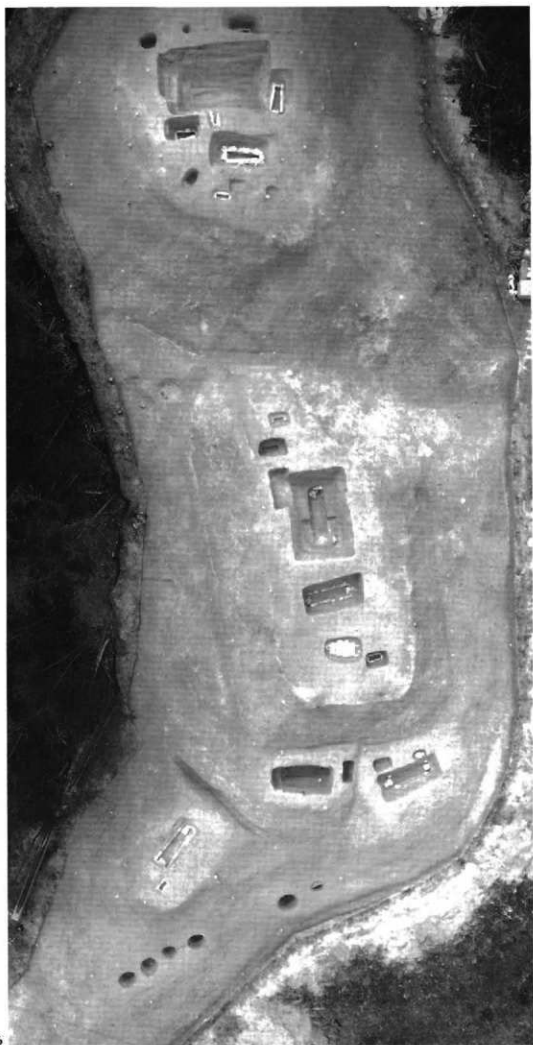
東方向



北東方向



北西上空から



北西上空から



調査前
墳丘側面
(北から)



調査前
墳頂部 (北から)



調査前
北側カット部
(西から)



表土掘削作業
(北西から)



墳頂部全景
(北から)



墳丘断面
(東から)

10号墳



全景（北から）



全景（北東から）



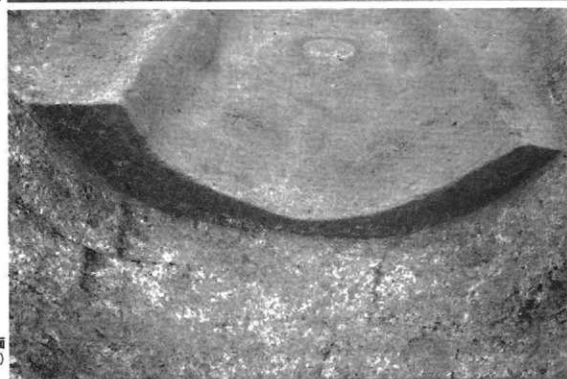
全景（北西から）



墓坑横断面
(西から)

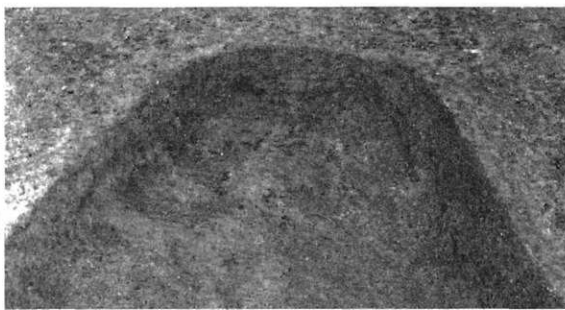


棺内横断面
(西から)

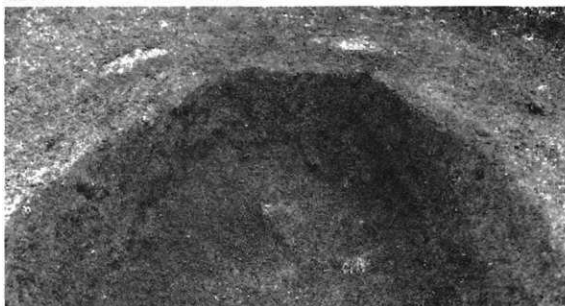


棺底横断面
(西から)

10号墳



棺頭位側
(西から)



棺足位側
(東から)



墓坑全景
(北から)

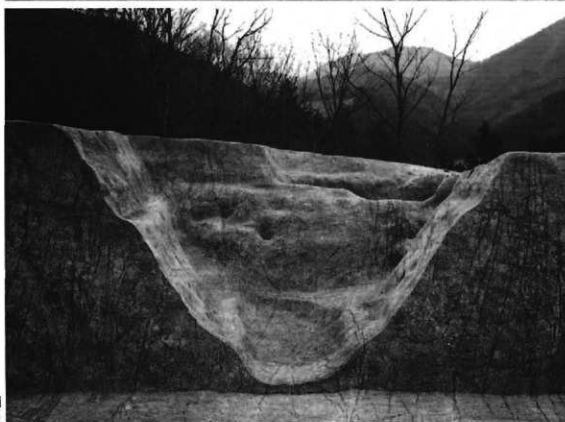
棺底縦断面
頭位側（南から）



棺底縦断面
足位側（北から）

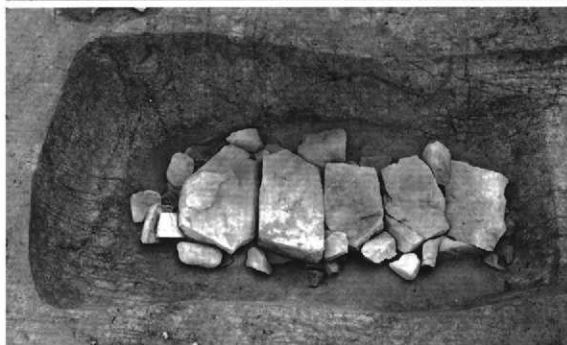


墓坑断面
（東から）





蓋石検出状況
(北から)



蓋石検出状況
(北から)



石室検出状況
(北から)



蓋石検出状況
(東から)



蓋石検出状況
(西から)



人骨出土状況
(西から)



石室検出状況
(西から)



南側長側石
全景（北から）



南側長側石
頭位側（北から）



南側長側石
足位側（北から）

北側長側石
全景 (南から)



北側長側石
頸位側 (南から)

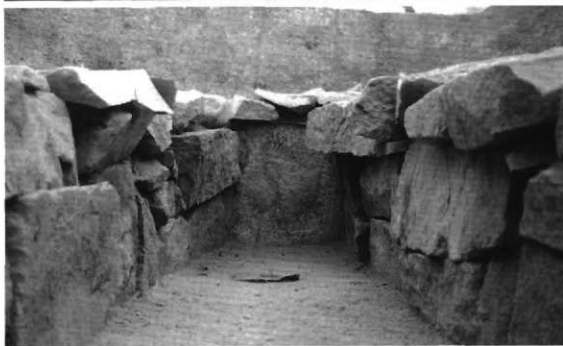


北側長側石
足位側 (南から)

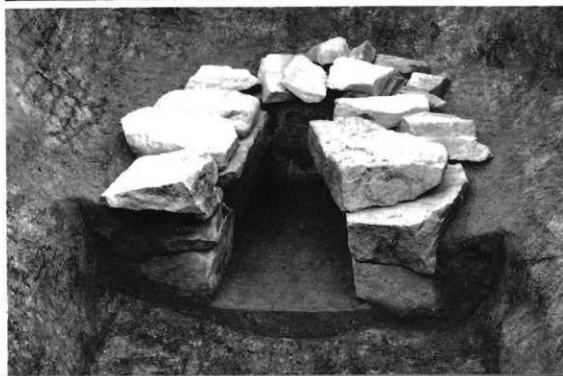




頭位側小口
(西から)



足位側小口
(東から)



石室横断面
(東から)



墓坑横断
(東から)



墓坑横断
(東から)



墓坑横断
(東から)

10号墳



蓋石検出状況
(西から)
蓋石検出状況
(東から)



石棺検出状況
(東から)



石棺検出状況
(南から)



石棺検出状況
(南から)

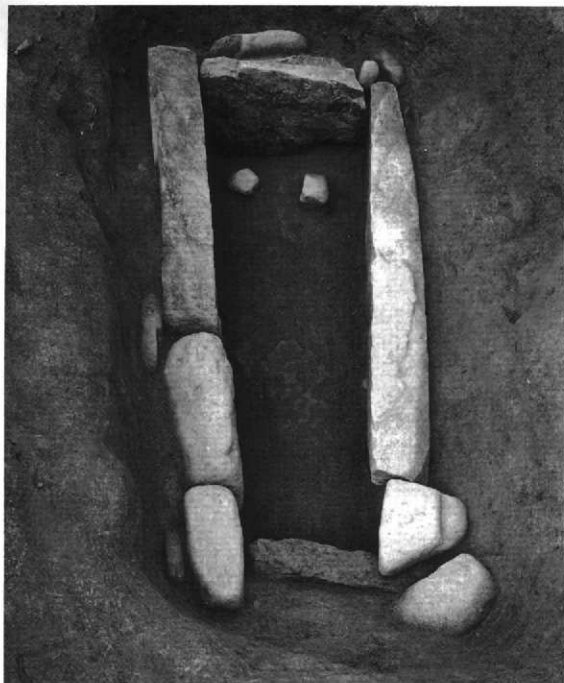


墓坑底部
(南から)

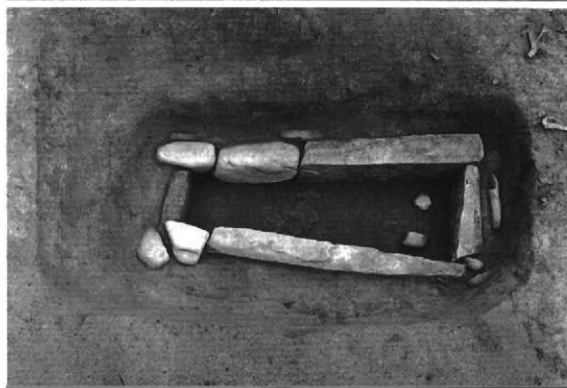


石棺検出状況
(南から)

10号墳

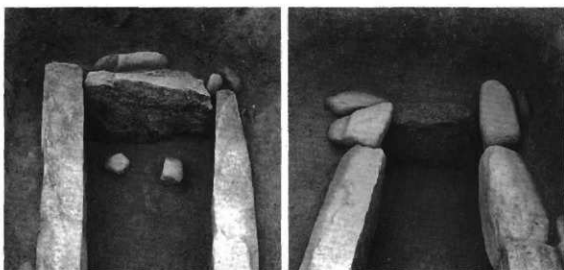


石棺全景
(南から)



石棺全景
(東から)

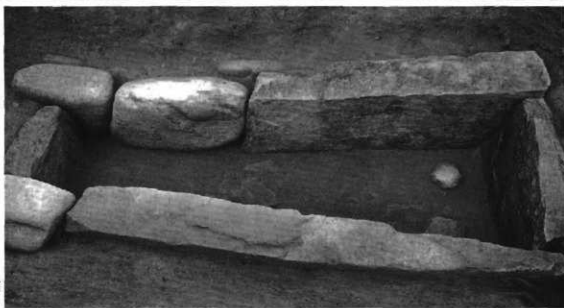
足位側小口
(北から)
頭位側小口
(南から)



東側長側石
(西から)



西側長側石
(東から)



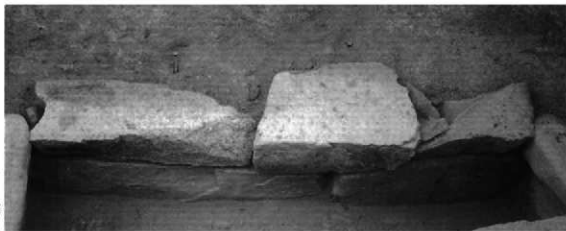
10号墳



墓石検出状況
(西から)
墓石検出状況
(西から)



墓石 (北から)



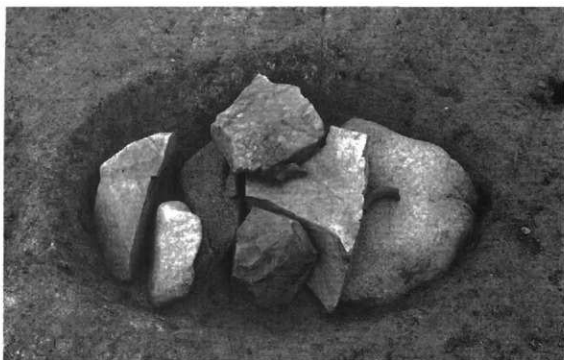
南側長側石
(北から)



北側長側石
(南から)



墓坑断面
(東から)



蓋石検出状況
(西から)



蓋石検出状況
(南から)
蓋石検出状況
(北から)



蓋石上破砕土器
供獻 (南から)
蓋石上破砕土器
供獻 (東から)





棺外破砕土器供獻
(北から)



棺外破砕土器供獻
(北から)



石棺全景
(西から)



石棺全景
(北から)



西側長側石
(東から)



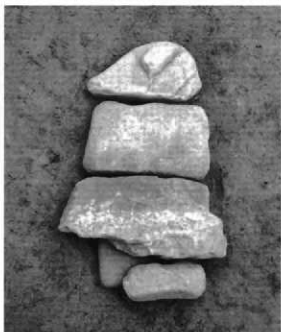
東側長側石
(西から)



墓坑西面
(南から)



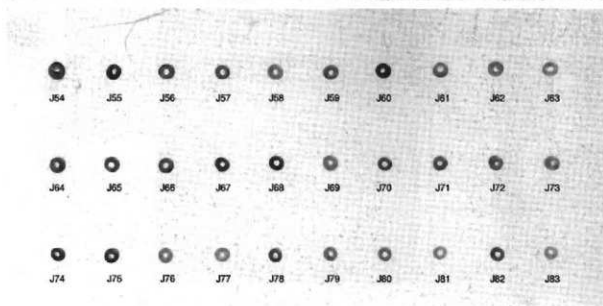
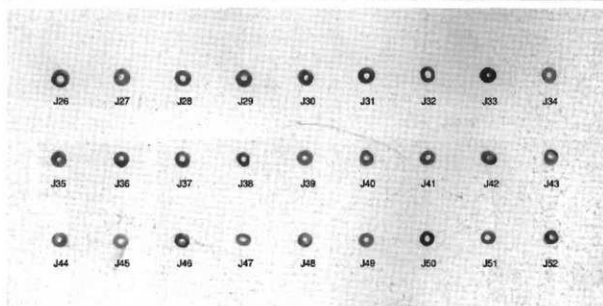
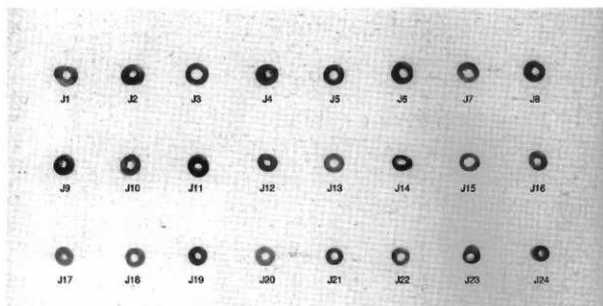
蓋石検出状況
(西から)
蓋石検出状況
(東から)



蓋石検出状況
(西から)
石棺検出状況
(東から)



石棺内断面
(東から)



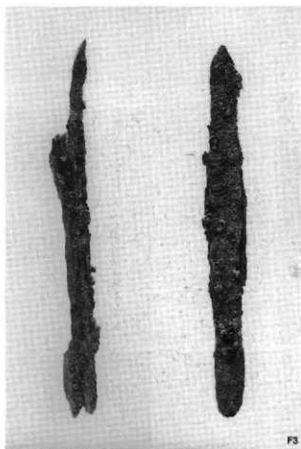
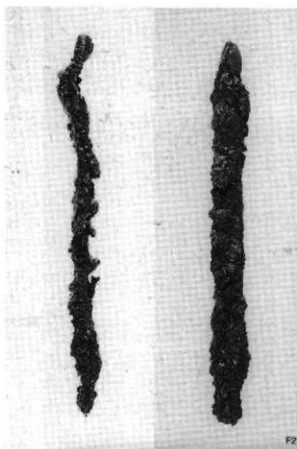
第1主体部出土ガラス小玉（上段から右腕・左腕・他）

10号墳



第1主体部出土土器 (1)
 第5主体部出土土器 (2)
 第6主体部出土土器 (3)
 第2主体部出土鉄器 (F1)





F2

F3



第3主体部出土鉄器 (F2)
 第5主体部出土鉄器 (F3・F4)



F4



調査前 墳丘側面
(北東から)



調査前 墳頂部
(南から)



表土掘削作業
(南から)



墳頂部全景
(南から)



北側斜面
(西から)



西側斜面
(南から)



東側斜面
(南東から)



北側斜面
(東から)



東側斜面
(南から)



墳丘断面
(南東から)



全景
(北から)



頭位側小口
(北から)



足位側小口
(南から)



墓坑内断面
(北から)



短剣 (F5)
出土状況



墓坑北東隅
(南西から)



墓坑全景
(北から)



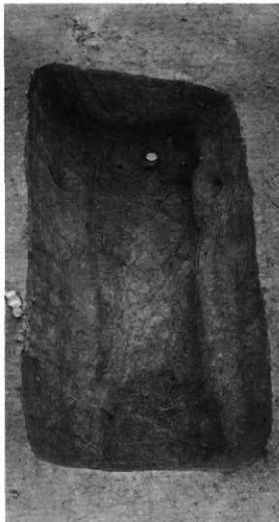
墓坑縦断面
(東から)

11号墳



全景（東から）

頭位側小口
(西から)
足位側小口
(東から)



墓坑全景
(東から)
墓坑内断面
(東から)
鉄製品
(F6・F7)
出土状況

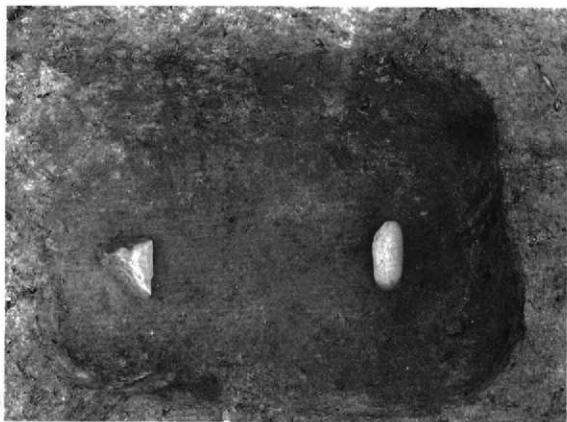




墓石検出状況
〔北から〕
棺検出状況
〔北から〕



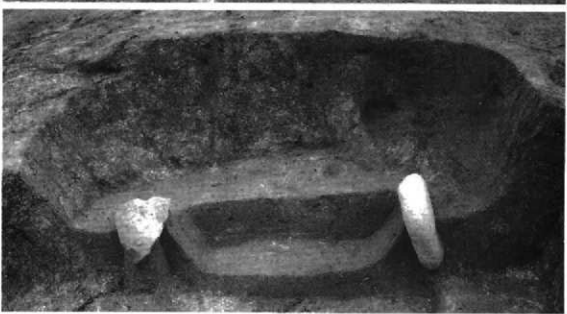
石棺全景
〔西から〕



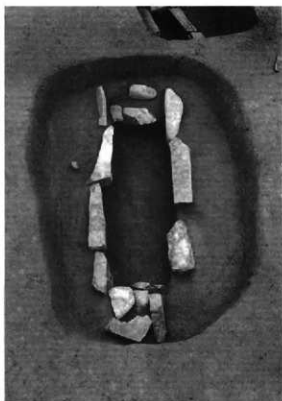
棺確認状況
(南から)



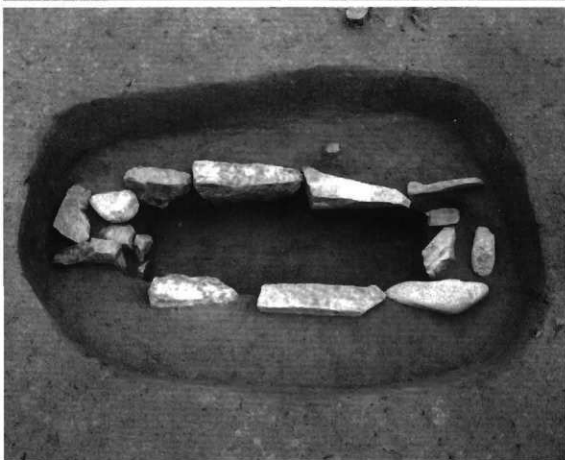
棺検出状況
(南から)



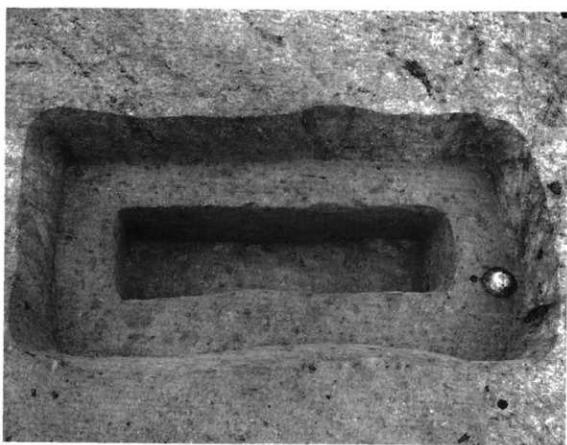
墓坑内縦断面
(南から)



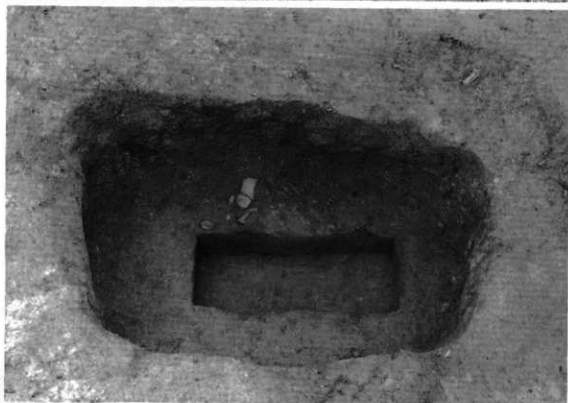
蓋石検出状況
(東から)
棺検出状況
(東から)



石棺全景
(北から)



第7主体部全景
(西から)



第4主体部全景
(北から)



6



13



9



12



8



7

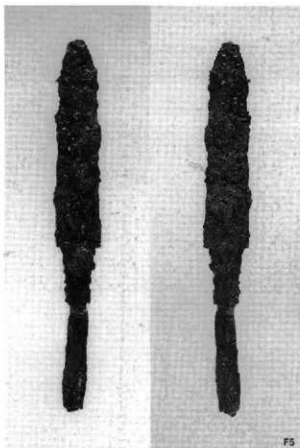
11号墳出土土器 第1主体部出土土器(6~9) 第2主体部出土土器(12) 第4主体部出土土器(13)



15



14



F5



F7



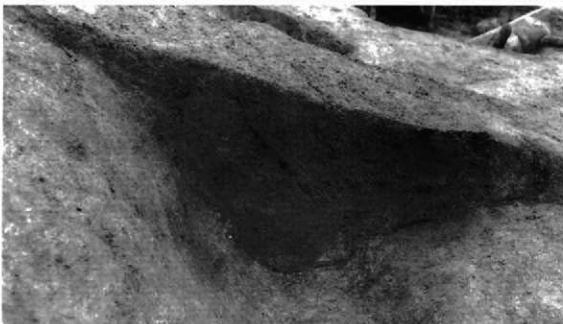
F6



第6主体部出土土器 (14・15)
第1主体部出土铁器 (F5)
第2主体部出土铁器 (F6・F7)
F6 附着布痕



墳頂部全景
(南から)

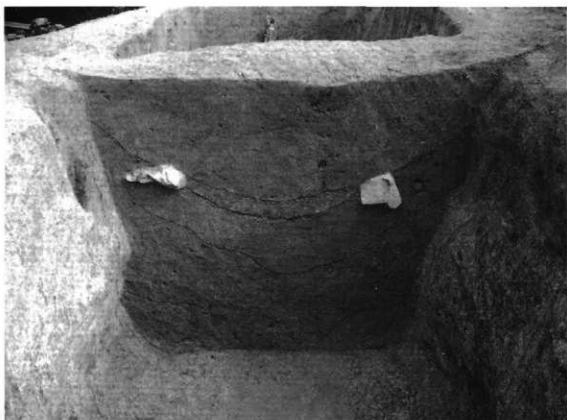


区画溝断面
(東から)



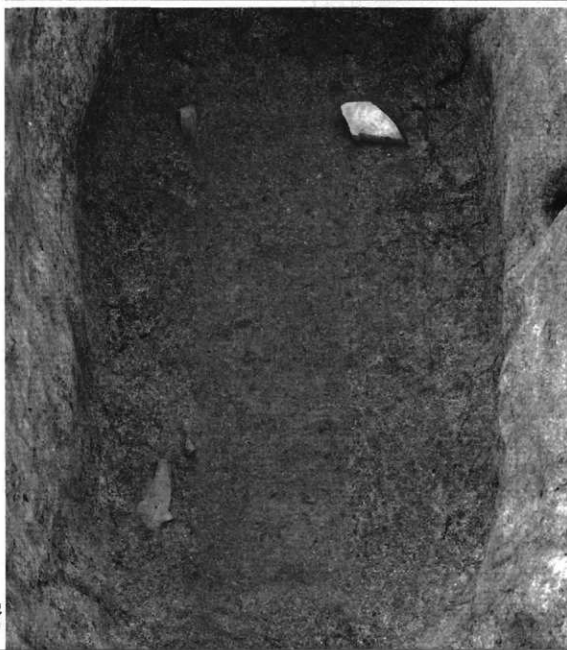
第2主体部全景
(北から)

第1主体部
出土土器 (16)



墓坑断面
(西から)

12
号
墳



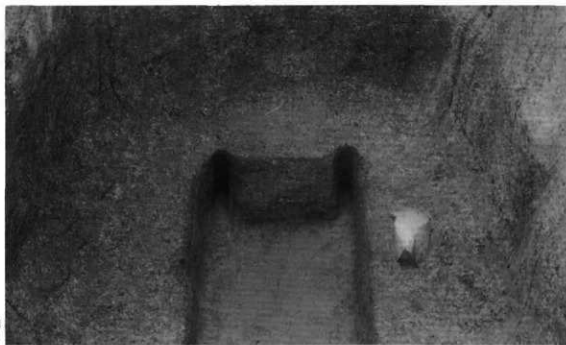
棺確認状況
(東から)



棺全景 (東から)



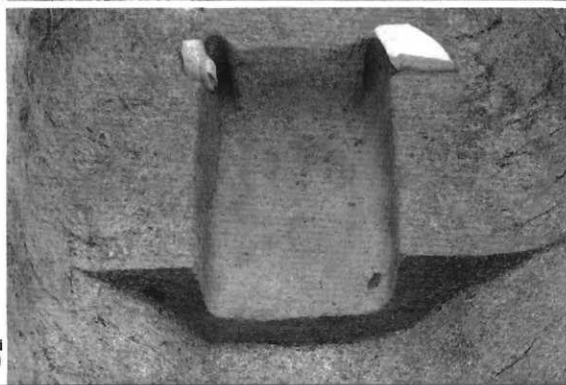
棺全景 (南から)



足位側小口
(西から)



頭位側小口
(東から)



墓坑内断面
(東から)



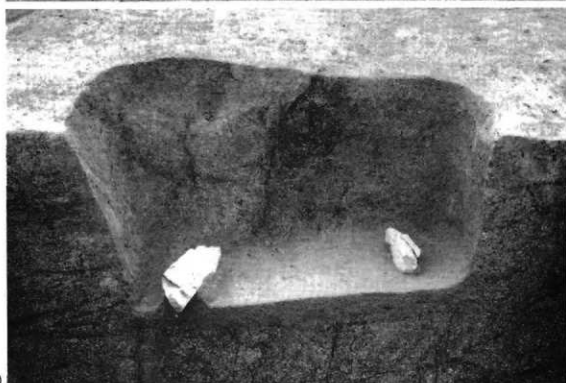
墳頂部全景
(西から)



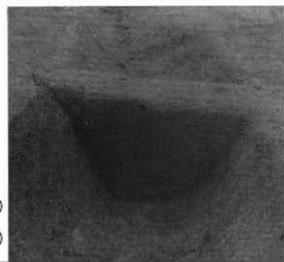
墳頂部全景
(南から)



全景 (北から)

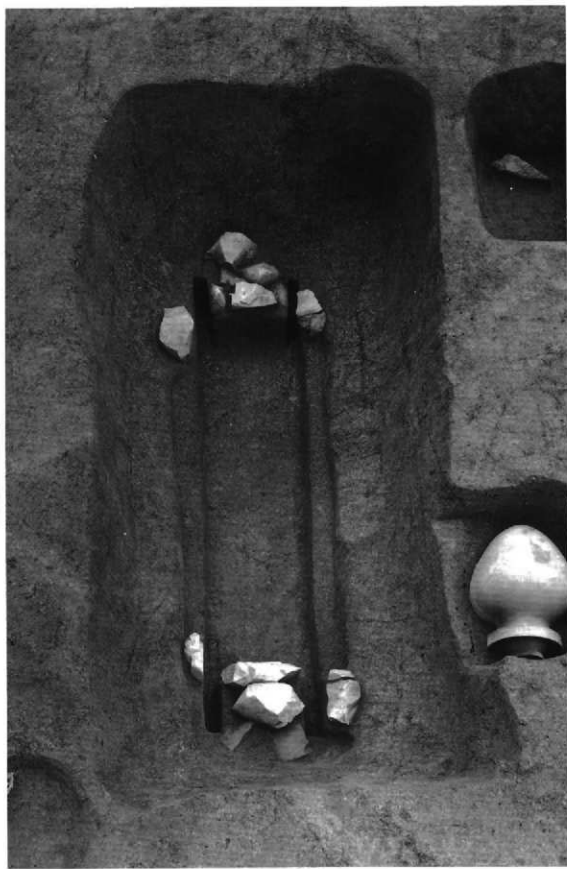


墓坑横断面 (北から)



第4主体部
(東から)
区画溝断面
(北から)





全景（西から）

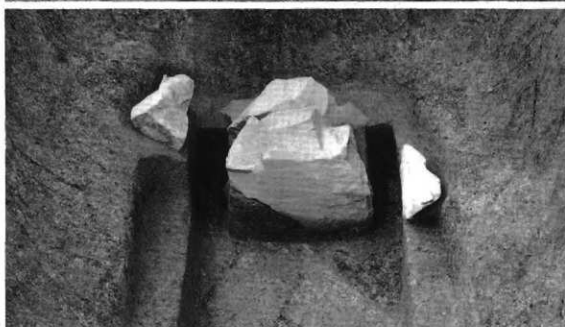
13
号
墳



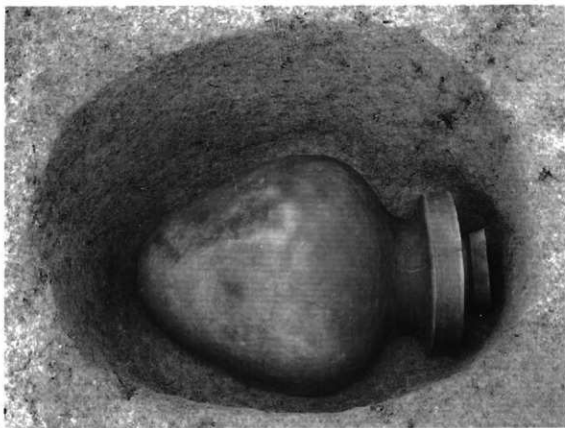
棺全景 (北から)



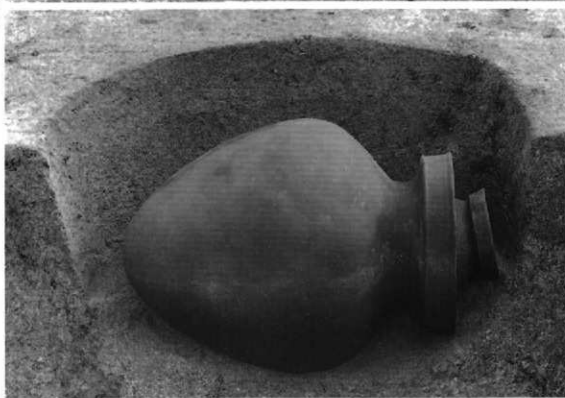
頭位側小口
(西から)



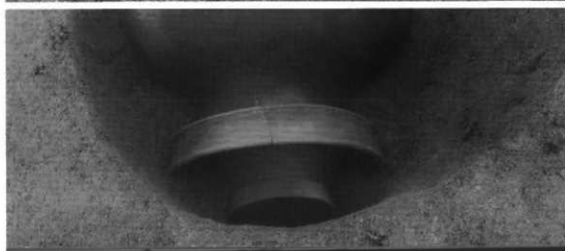
足位側小口
(東から)



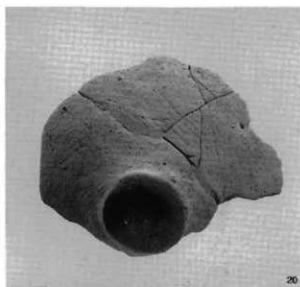
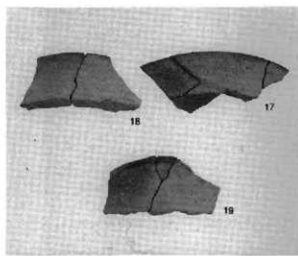
全景（北から）



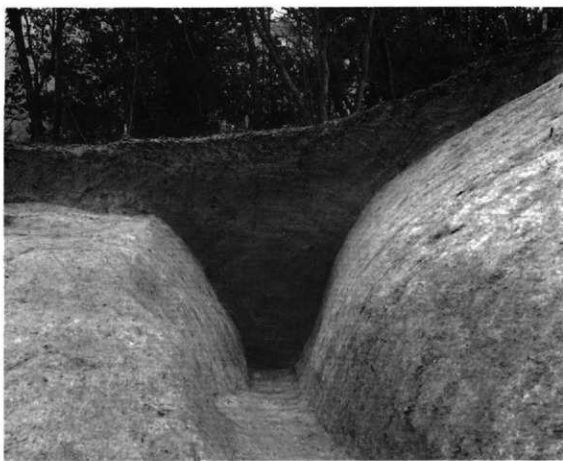
墓坑断面
（北から）



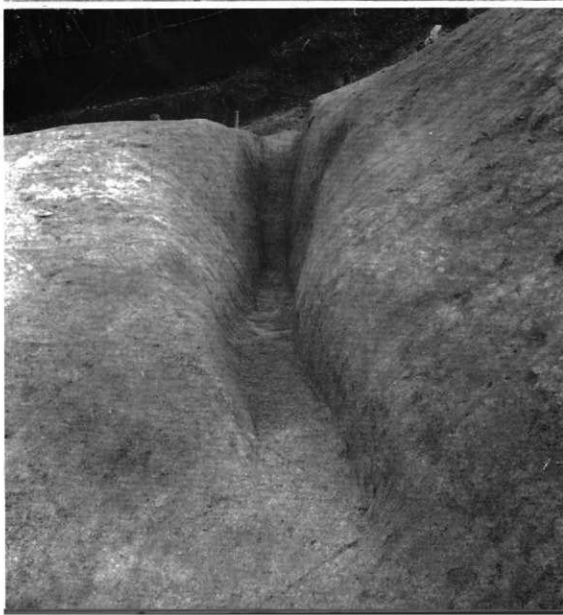
棺蓋（西から）



区画清出土土器 (17~20) 第1主体部出土土器 (21・22) 第2主体部出土土器 (23)
墳頂部出土土器 (26)



区画溝断面
(北西から)



区画溝全景
(北西から)



墳頂部全景
(北東から)



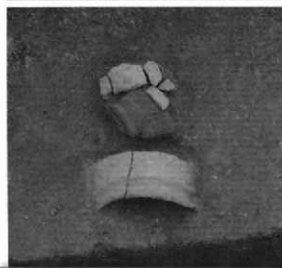
墳丘側面
(南西から)



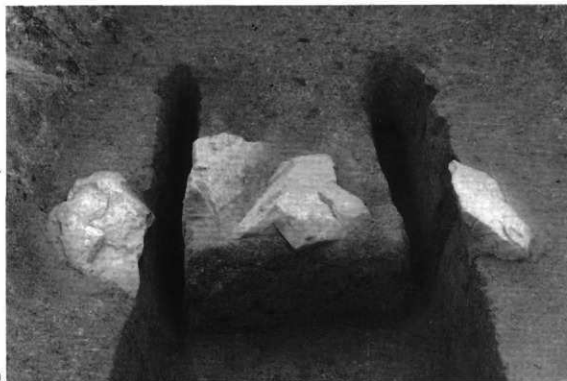
墳丘側面
(北西から)



全景（北東から）



破砕供獻土器
出土状況
（南東から）
鉄器出土状況



足位側小口
(北東から)



頭位側小口
(南西から)



墓坑内断面
(南西から)



墓石検出状況
(南東から)



北西側長側石
(南東から)



南東側長側石
(北西から)

14号墳



全景 (北東から)



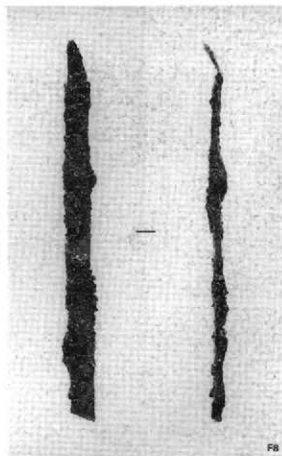
全景 (南西から)



27

第1主体部出土鉄器 (F8)

第1主体部出土土器 (27)



F8



北東上空から



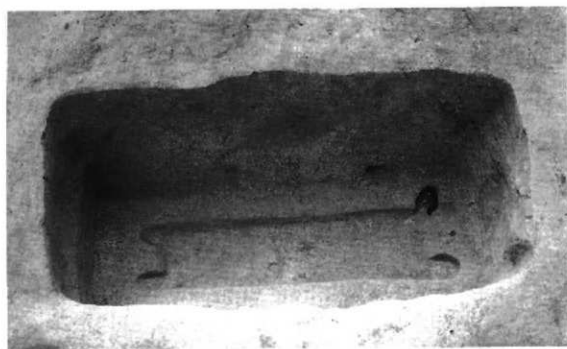
南西から



北から



北西から



1号墓 全景
(北東から)



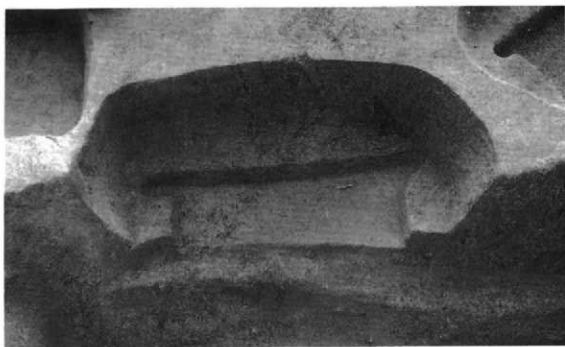
2号墓 全景
(北西から)



8号墓 全景
(北から)



6号墓・全景
(北から)



4号墓 全景
(北東から)

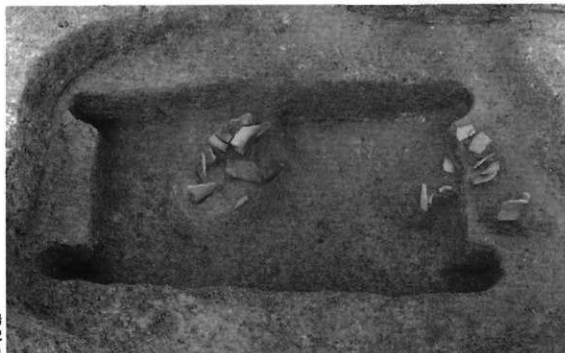


4号墓 鉄器出土状況
(F9)
4号墓 破砕供獻土器
出土状況

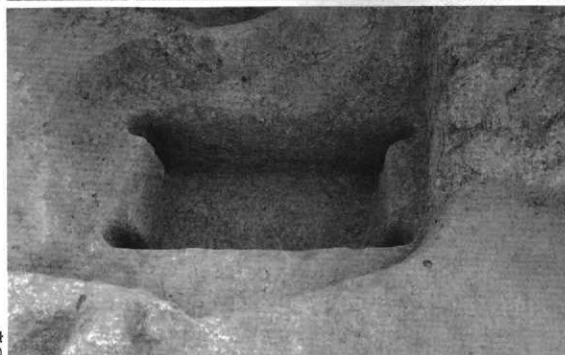


5号墓 全景
(東から)

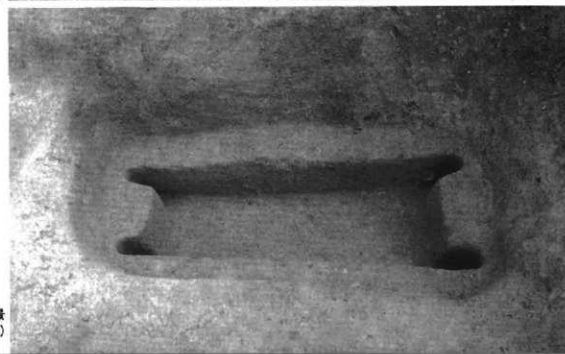
木棺墓群



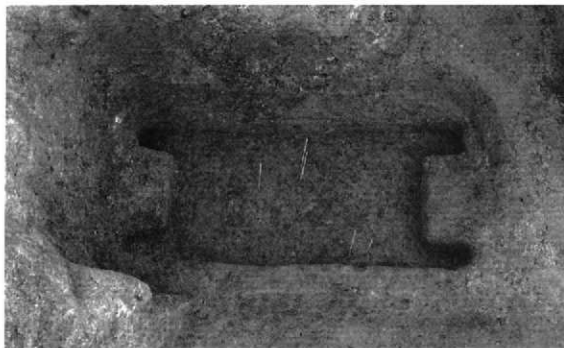
7号墓
破砕供献土器
出土状況
(南から)



7号墓 全景
(南から)



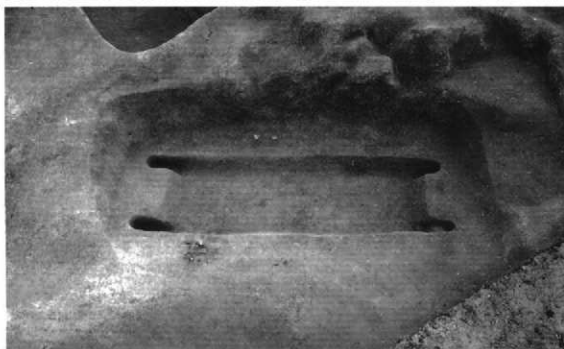
9号墓 全景
(北から)



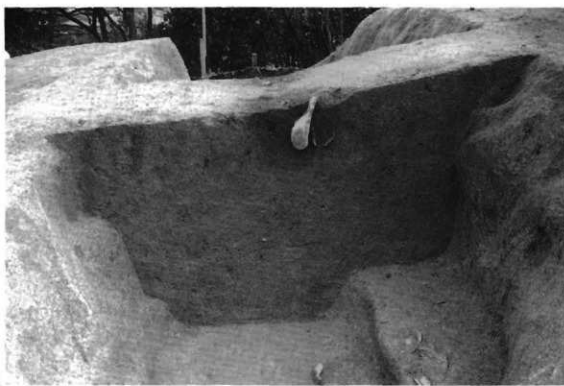
11号墓 全景
(東から)



11号墓 小口穴
(東から)



12号墓 全景
(北から)



墓坑断面
(北西から)



全景 (南東から)



全景 (南東から)



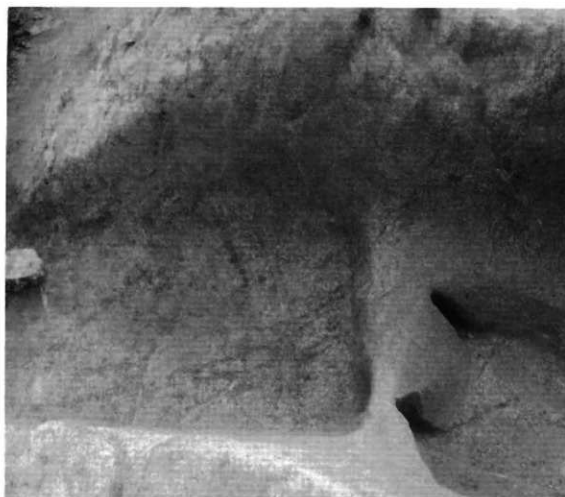
槽全景
〔南西から〕



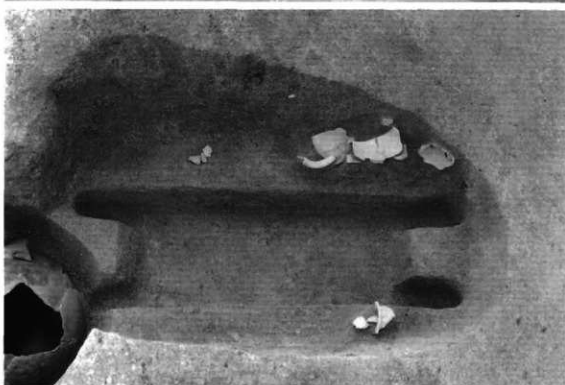
全景 (北西から)



墓坑断面
(北西から)



13号墓 全景
(北東から)



17号墓 全景
(東から)

木棺墓群



全景（西から）

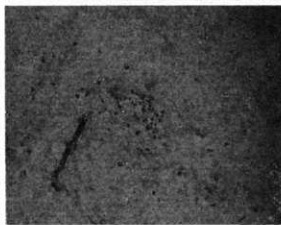
木棺墓群

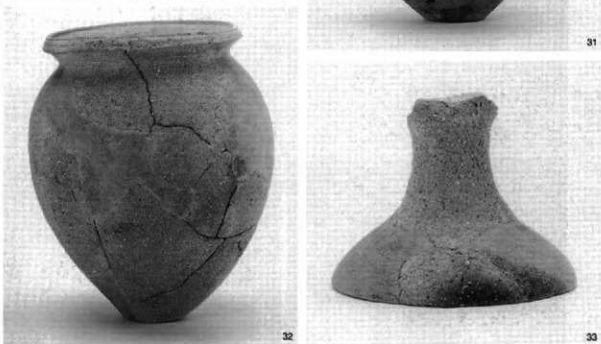
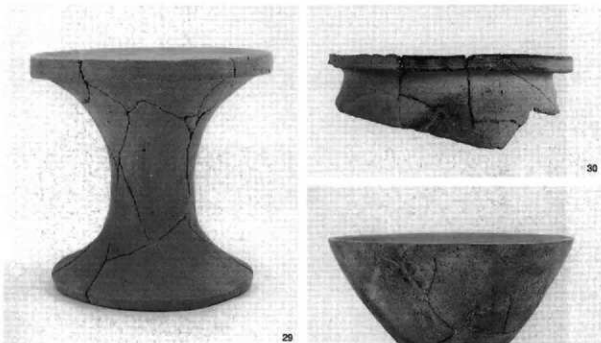


破砕供獻土器
出土状況
破砕供獻土器
出土状況



ガラス小玉
出土状況
管玉出土状況





1号墓出土土器 (28・29) 2号墓出土土器 (30・31) 5号墓出土土器 (32・33)



34



35



36



37



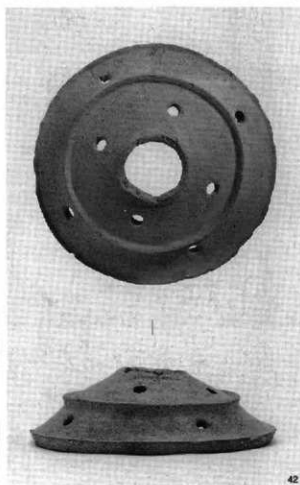
38



39

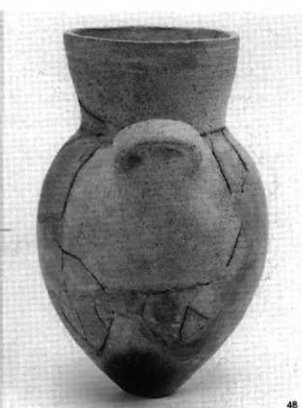
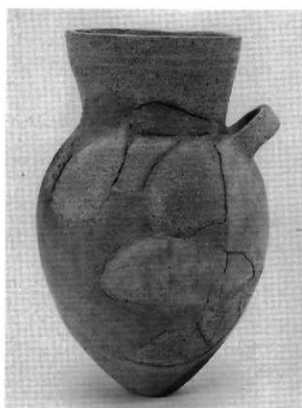
6号墓出土土器 (34) 7号墓出土土器 (35) 8号墓出土土器 (36) 9号墓出土土器 (37)
 12号墓出土土器 (38) 13号墓出土土器 (39)

木棺墓群



14号墓出土土器(40~42) 15号墓出土土器(43) 16号墓出土土器(45)

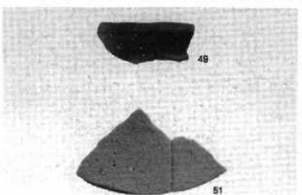
木
挖
墓
群



48



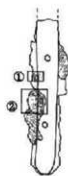
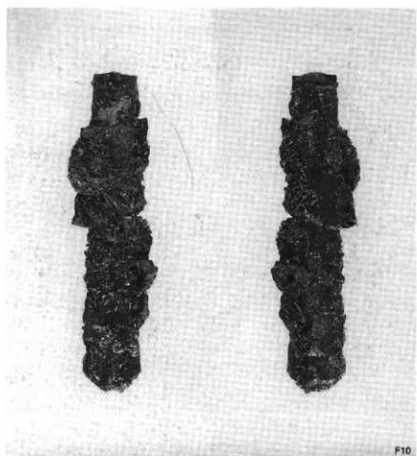
50



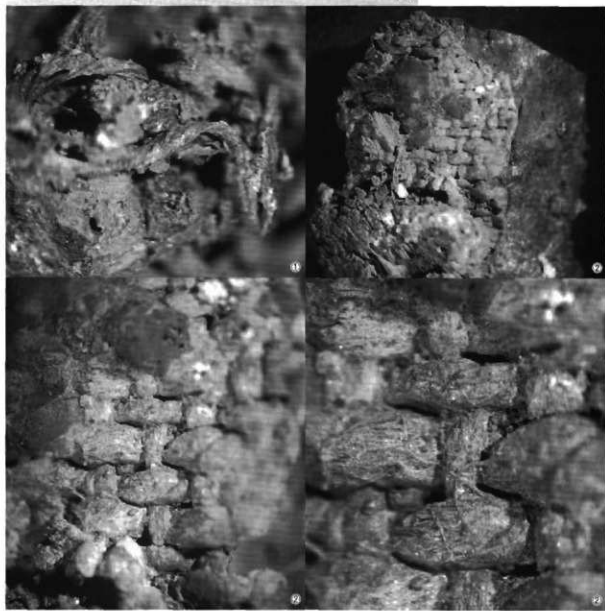
47

木棺墓群

17号墓出土土器 (46・47) 18号墓出土土器 (48~51)



F10



木棺墓群



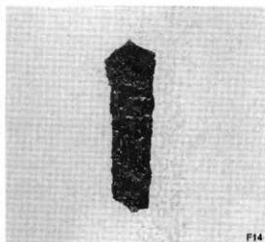
F9



F11

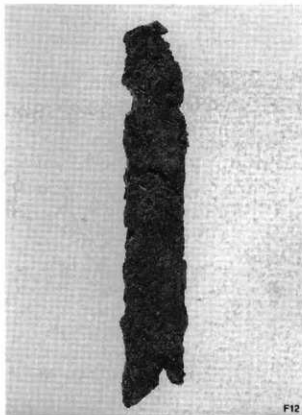


F13

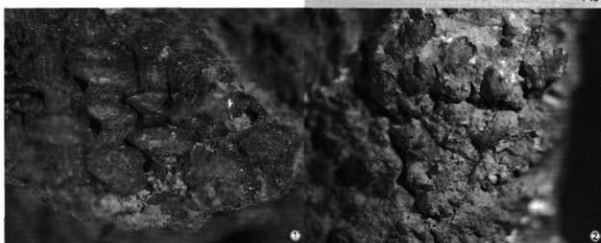


F14

4号墓出土铁器 (F9)
14号墓出土铁器 (F11)
18号墓出土铁器 (F12~F14)



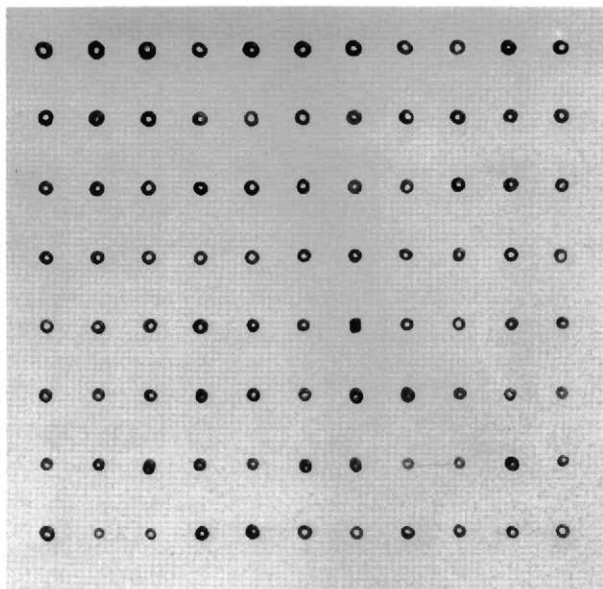
F12



木棺墓群

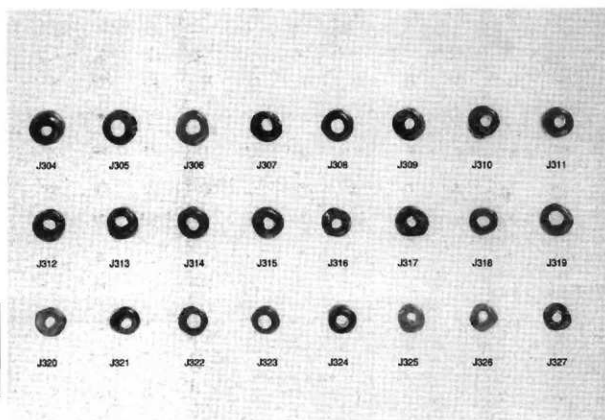
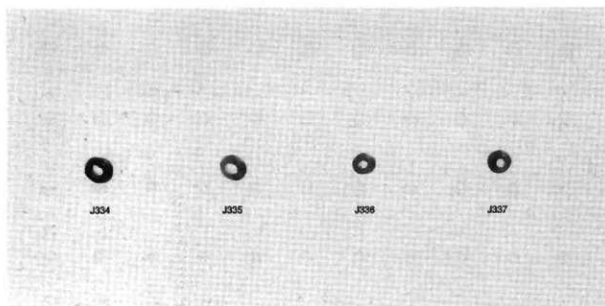


2号墓出土ガラス小玉

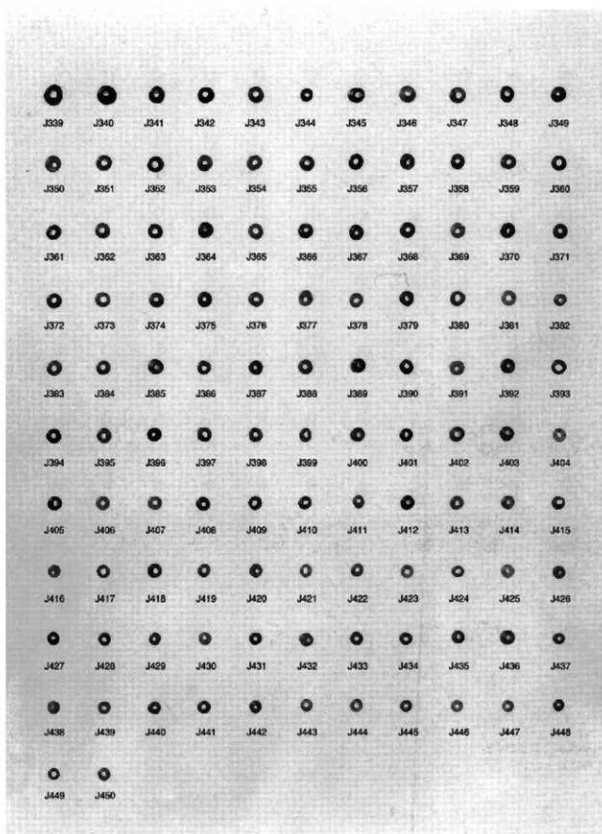


5号墓出土ガラス小玉

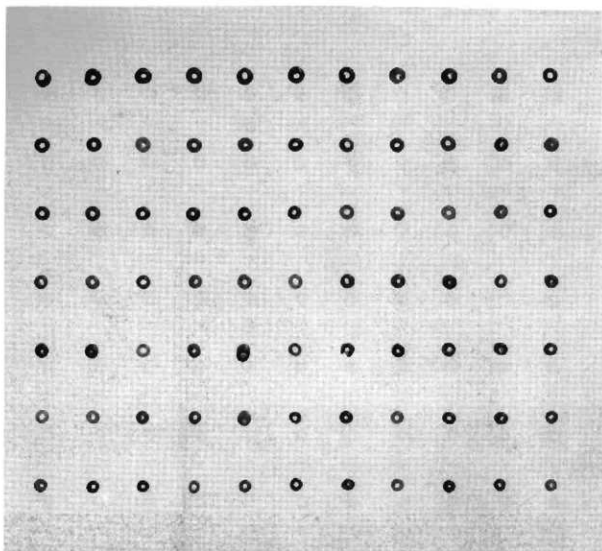
J211	J212	J213	J214	J215	J216	J217	J218	J219	J220	J221
J222	J223	J224	J225	J226	J227	J228	J229	J230	J231	J232
J233	J234	J235	J236	J237	J238	J239	J240	J241	J242	J243
J244	J245	J246	J247	J248	J249	J250	J251	J252	J253	J254
J255	J256	J257	J258	J259	J260	J261	J262	J263	J264	J265
J266	J267	J268	J269	J270	J271	J272	J273	J274	J275	J276
J277	J278	J279	J280	J281	J282	J283	J284	J285	J286	J287
J288	J289	J290	J291	J292	J293	J294	J295	J296	J297	J298



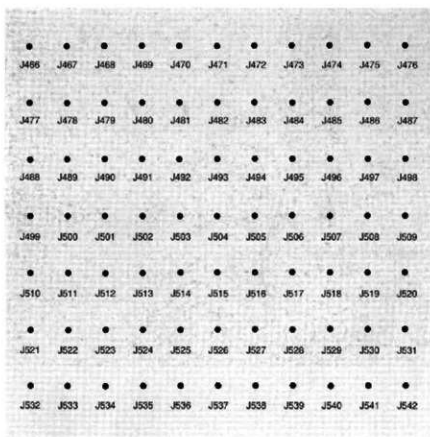
11号墓出土ガラス小玉
6号墓出土ガラス小玉

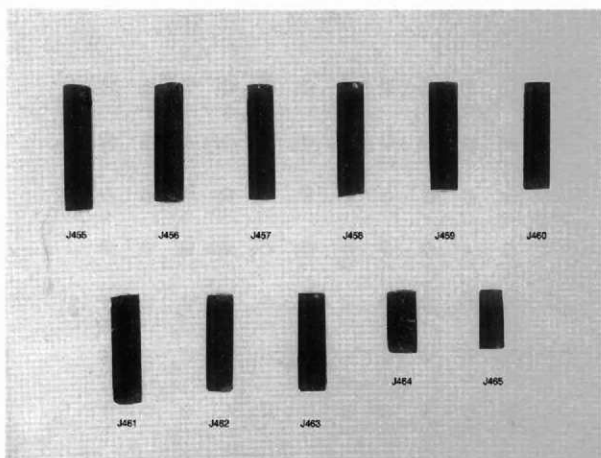


12号墓出土ガラス小玉

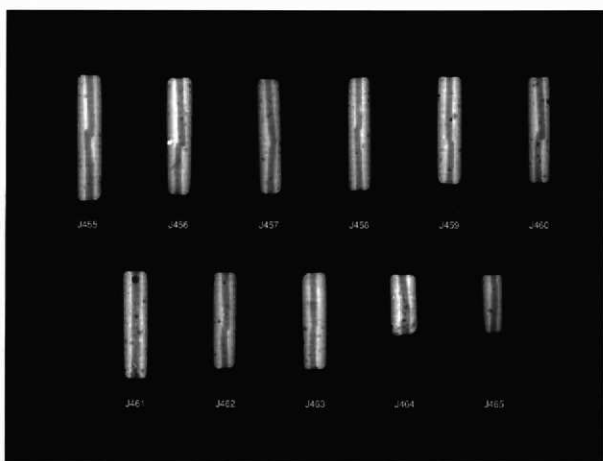


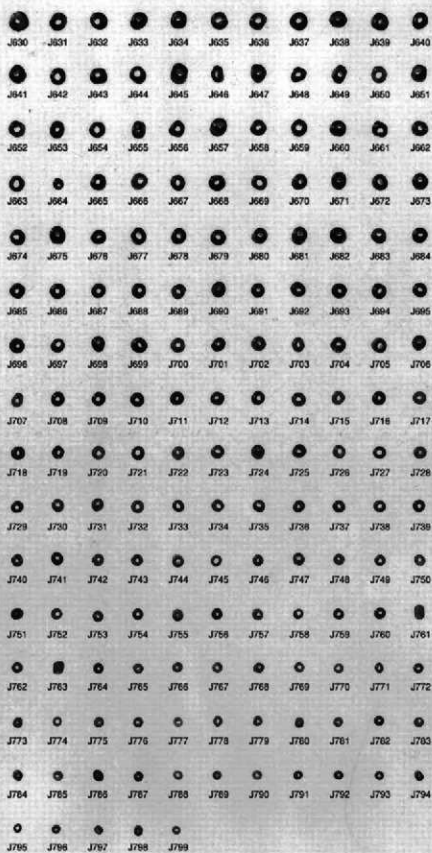
15号墓出土ガラス小玉



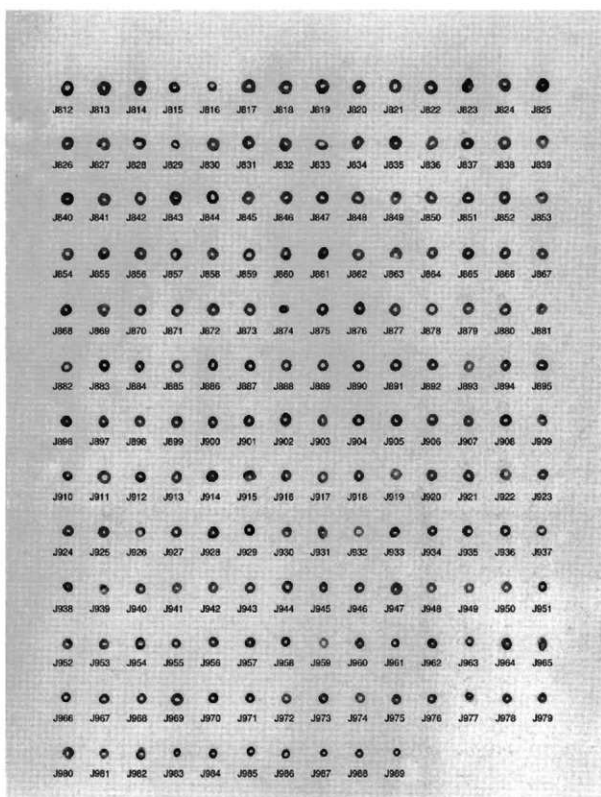


15号墓出土ガラス管玉

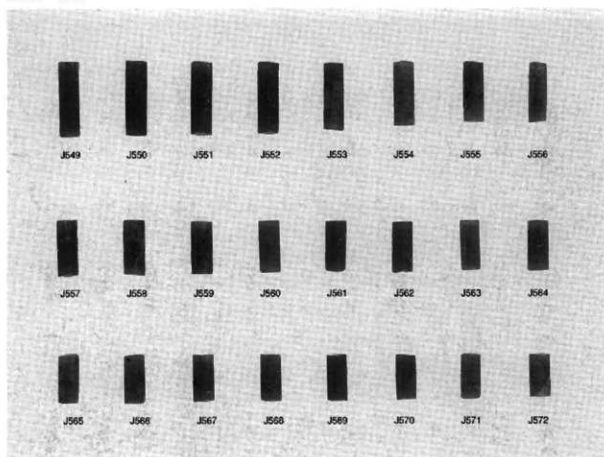




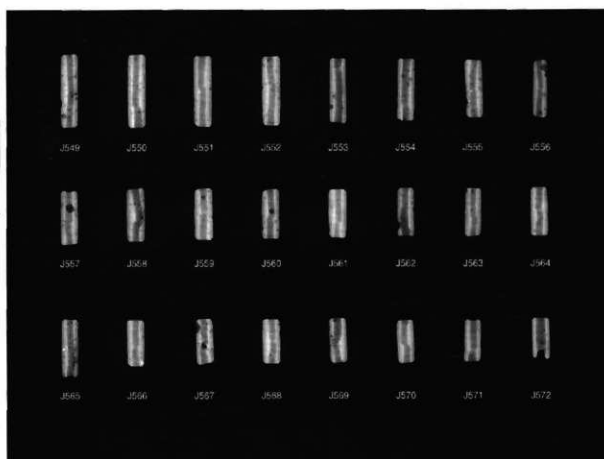
18号墓出土ガラス小玉

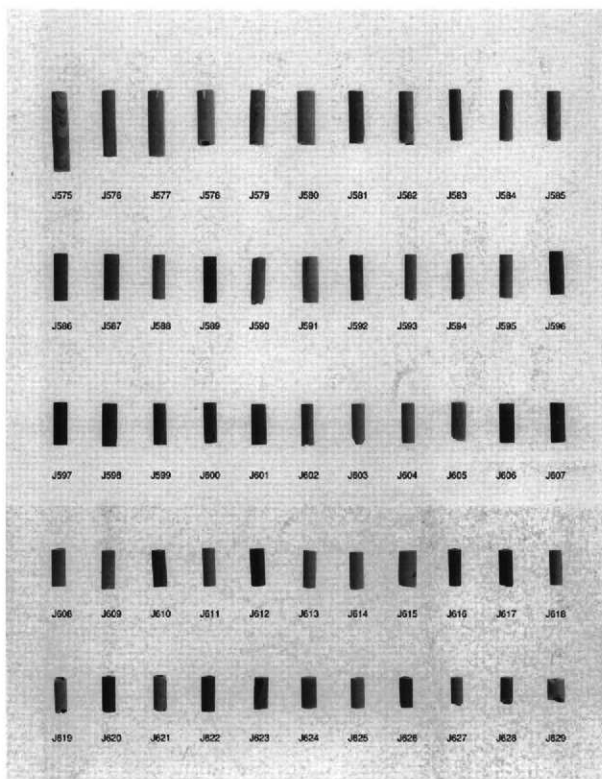


18号墓出土ガラス粟玉



18号墓出土ガラス管玉

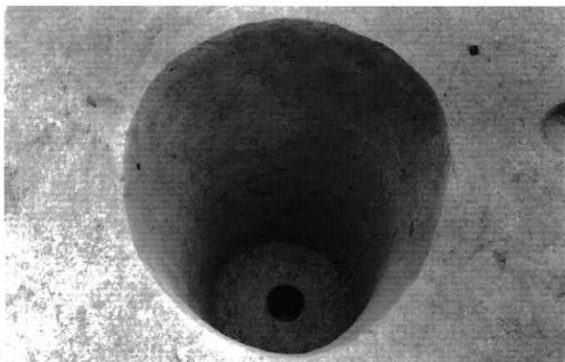




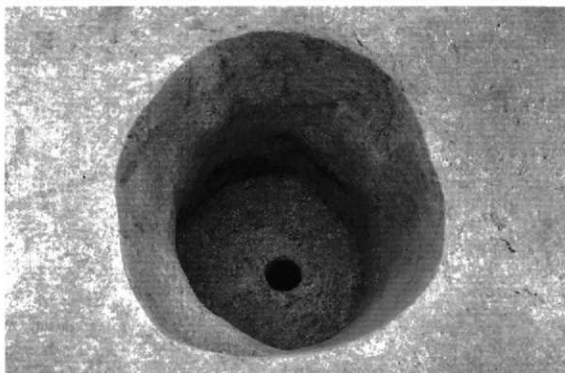
18号墓出土碧玉製管五



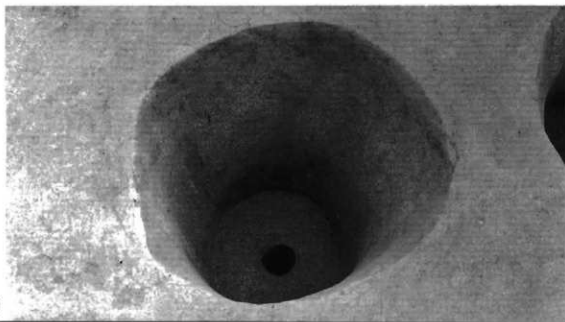
東から



SK03
(北から)



SK05
(北から)



SK06
(北から)

兵庫県文化財調査報告 第241冊

朝来郡和田山町

梅田東古墳群

播但連絡通路（5期事業）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

平成14年3月29日 発行
（2002年）

編 集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5

発 行 兵庫県教育委員会

〒650-0011 神戸市中央区下山手通5丁目10-1

印 刷 株式会社 廣濟堂 神戸営業所

〒657-0834 神戸市灘区泉通6丁目2-15
